

東京大学構内遺跡調査研究年報 7

2007・2008 年度

東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学構内遺跡調査研究年報 7

2007・2008 年度

東京大学埋蔵文化財調査室

例 言

1. 本書は、2007年4月1日から2009年3月31日までに東京大学埋蔵文化財調査室が実施した埋蔵文化財発掘調査およびそれに関わる研究、教育、普及などの諸活動の記録（第1部・第2部）、東京大学構内遺跡発掘調査報告（第3部）、東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要（第4部）で構成されている。
2. 上記期間に行った発掘調査のうち、埋蔵文化財が確認できたものについてその略報を第1部に掲載した。
3. 「東京大学構内遺跡調査一覧表」および報告内で使用されている調査地点名に続く（ ）内の記載内容は、当該地点の略称である。
4. 遺構の略号は独立行政法人奈良文化財研究所で採用している方式を参照し、前に遺構の性格、後ろに各調査地点ごとに1から通し番号を付与した。前に付した遺構の性格の略称は個々の報告の凡例を参考にされたい。
5. 本文の執筆者は、第1部は文頭の調査担当者欄、第3部は例言、第4部は文頭に記した。
6. 本書の作成は室員があたり、堀内秀樹、成瀬晃司、小林照子が編集を行った。
7. 本書に添付したCD-ROMには、印刷本と同内容の電子版（pdf形式）に加え、「第3部東京大学構内遺跡発掘調査報告」では、内容に関わる遺構、遺物の写真データ（jpeg形式）、観察表（xls形式）を収録している。
8. 本書掲載・収録の諸データは、営利を伴わない学術目的の個人論文などを除いて無断転載を禁止する。
9. 発掘調査に伴う出土遺物等は、東京大学埋蔵文化財調査室が、本学駒場リサーチキャンパス（東京都目黒区駒場4-6-1）および同工学系研究科附属柿岡教育研究施設（茨城県石岡市柿岡414）において運用、保管を行っている。

目 次

例 言 目 次

第1部 東京大学構内遺跡発掘調査略報

東京大学構内遺跡調査一覧	7
耐震対策事業（ライフライン再生）ガス管改修工事地点	15
弥生地区屋外ガス配管改修工事地点	21
新タンDEM棟地点	32
向ヶ丘ファカルティハウス地点	35
医学部創設150周年記念（小石川養生所復元）建物地点（BGY07）	43
経済学研究科学術交流棟地点（HEA07）	50
懐徳門地点（HKM07）	60
東京都下水道工事地点（HTG08）	68
追分国際学生宿舎地点（OKS07）	78

第2部 東京大学埋蔵文化財調査室要項

第1章 2007・2008年度調査室事業概要

第1節 発掘調査（試掘、立会を含む）	99
第2節 教育・普及	100
第3節 資料の活用	101
第II章 2007・2008年度室員活動内容	102
第III章 東京大学埋蔵文化財運営委員会規則	106
第IV章 東京大学埋蔵文化財調査室規則	107
第V章 東京大学埋蔵文化財調査室組織表（2007・2008年度）	108

第3部 東京大学構内遺跡発掘調査報告

農学部生命科学総合研究棟（NSK01）地点	109
駒場図書館（KL）地点	173

第4部 東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要7

東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（2）	223
------------------------	-----

第1部 東京大学構内遺跡発掘調査略報

東京大学構内遺跡調査一覧

耐震対策事業（ライフライン再生）ガス管改修工事地点

弥生地区屋外ガス配管改修工事地点

新タンDEM棟地点

向ヶ丘ファカルティハウス地点

医学部創設150周年記念（小石川養生所復元）建物地点（BGY07）

経済学研究科学術交流棟地点（HEA07）

懐徳門地点（HKM07）

東京都下水道工事地点（HTG08）

追分国際学生宿舎地点（OKS07）

東京大学構内遺跡調査一覧

表1 本郷地区

番号	年度	遺跡名・調査地点名(略称)*1	調査種別	日付	面積(m ²)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
1	1984	山上会館(U)	事前	1984.4.1 ~ 85.6.30	1500	西田・谷大貫	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4 山上会館・御殿下記念館地点』
2	1984	法学部4号館(法)・文学部3号館(文)	事前	1984.4.1 ~ 85.3.31	2500	大塚	『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書2 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』
3	1985	御殿下記念館(G)	事前	1985.7.29 ~ 87.6.30	6000	寺島・大貫倉林	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4 山上会館・御殿下記念館地点』
4	1984	医学部附属病院中央診療棟(病中)・設備管理棟(エネセン)・給水設備棟(給水)・共同溝(共同溝)	事前	1984.10.1 ~ 87.3.31	7700	藤本・小川	『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3 医学部附属病院地点』
5	1984	理学部7号館(理D)	事前	1985.2.1 ~ 10.8	750	羽生	『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書1 理学部7号館地点』
6	1986	バス通り上水(上水)	立会	1986.5.12 ~ 7.20	-	寺島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
7	1987	タンデム棟(タンデム)	試掘	1988.2.15 ~ 17	28	成瀬・武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
8	1987	弥生門脇変電施設	立会	1987.12.15 ~ 16	-	武藤	江戸
9	1989	農学部家畜病院(VMC)	事前	1990.1.31 ~ 3.14	1040	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
10	1990	医学部附属病院外来診療棟(HG)	事前	1990.6.27 ~ 91.2.21	5500	成瀬・堀内武藤	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書5 医学部附属病院外来診療棟地点』
11	1991	農学部ガラス室	試掘	1991.8.12 ~ 13	7	堀内	遺構・遺物なし
12	1992	農学部図書館(FAL)	事前	1993.3.9 ~ 3.25	408	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
13	1992	農学部7号館A棟I期(FA792)	事前	1992.10.6 ~ 11.16	1170	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
14	1992	工学部14号館(工14)	事前	1992.11.26 ~ 93.2.23	1785	成瀬・堀内	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書7 工学部14号館地点』
15	1992	薬学部新館(YS)	事前	1992.10.21 ~ 12.18	1300	堀内・寺島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
16	1993	農学部7号館A棟II期(FA793)	事前	1993.11.3 ~ 26	1000	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
17	1993	工学部1号館(FE1)	事前	1993.12.6 ~ 94.2.10	616	武藤	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書6 工学部1号館地点』
18	1993	教育学部総合研究棟(SK)	事前	1993.11.18 ~ 12.28	1007	堀内	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書10 教育学部総合研究棟地点・IML地点』
19	1993	医学部附属病院看護師宿舎(HN)	事前	1993.8.4 ~ 94.1.17	746	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
20	1993	総合研究資料館(TUM)	事前	1994.2.14 ~ 4.8	600	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
21	1993	医学部附属病院MRI-CT棟(MRI)	事前	1994.1.18 ~ 3.12	400	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
22	1994	山上会館龍岡門別館(HF)	事前	1994.8.17 ~ 10.17	593	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
23	1994	医学部附属病院病棟(HW)	事前	1994.4.21 ~ 11.16 1995.1.31 ~ 96.5.31	6096	成瀬・原 鮫島・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
24	1994	医学部教育研究棟(医研)	事前	1994.11.17 ~ 95.4.28 1997.3.10 ~ 4.25 1998.11.2 ~ 12.25 2002.9.3 ~ 12.25	2415	堀内・鮫島 大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
25	1994	医学部附属病院看護師宿舎ゴミ置き場(HND)	事前	1995.1.30 ~ 3.3	45	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
26	1994	法文十字路外灯	立会	1994.9.5	-	成瀬・鮫島	江戸
27	1994	理学部1号館	立会	1994.10.3 ~ 18	-	寺島	遺構・遺物なし
28	1995	薬学部資料館(FPS)	事前	1995.7.24 ~ 9.1	600	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
29	1995	情報基盤センター変電室1(ACC)	事前	1995.7.18 ~ 31	78	鮫島	近代・江戸
30	1995	工学部風工学実験室支障ケーブル地点(AFC)	事前	1995.8.22 ~ 9.22	63	鮫島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
31	1995	ATMネットワーク施設整備	立会	1995.11.20 ~ 24	-	武藤・堀内 鮫島・原	江戸
32	1994	医学部附属病院看護師宿舎電気ケーブル埋設	立会	1995.3.2	-	原	遺構・遺物なし
33	1996	地震研テレメタリング地震観測施設(EQL)	事前	1996.4.15 ~ 5.2	360	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
34	1996	野球グラウンド	立会	1996	-	寺島	遺構・遺物なし
35	1993	経済学部前路面陥没	立会	1993.9.28	-	成瀬	江戸
35	1994	経済学部前路面陥没	立会	1994.5.14	-	成瀬	江戸

第1部 東京大学構内遺跡発掘調査略報

番号	年度	遺跡名・調査地点名(略称)*1	調査種別	日付	面積(m ²)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
36	1993	農学部ガス管理設	立会	1993.10.15	-	成瀬	江戸
37	1994	屋外環境整備等工事龍岡門~附属病院	立会	1994.10.13	-	成瀬・原	江戸
38	1994	医学部附属病院内エアタンク設置	立会	1994.12.18	-	成瀬	遺構・遺物なし
39	1994	史料編纂所前埋設	立会	1995.3.10	-	成瀬	江戸
40	1996	工学部風工学実験室(AFL)	事前	1996.1.22~3.7	252	鮫島	近代・弥生・縄文
41	1996	インテリジェント・モデリング・ラボラトリー(IML)	事前	1996.4.15~6.20	626	堀内	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書10 教育学部総合研究棟地点・IML 地点』
42	1996	医学部附属病院基幹整備に伴う樹木移植	立会	1996.4	-	成瀬	江戸
43	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等(HWK1)	事前	1996.5.12~5.18	20	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
44	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等(HWK2)	事前	1996.5.20~6.28	102	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
45	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等(HWK3)	事前	1996.5.20~6.28	179	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
46	1994	龍岡門門衛所移築	立会	1994.8.24	-	成瀬	江戸
47	1996	医学部附属病院基幹整備共同溝等(HWK4)	事前	1996.5.20~6.28	3	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
48	1996	医学部附属病院看護師宿舎Ⅱ期(HNⅡ)	事前	1996.11.5~97.1.31	525	原・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
49	1997	外灯整備工事1	立会	1997.4.13~30	-	原	江戸
50	1997	外灯整備工事2	立会	1997.4.13~30	-	原	江戸
51	1997	外灯整備工事3	立会	1997.4.13~30	-	原	江戸
52	1997	農学部(21世紀館)木質ホール	試掘	1997.7.14~18	50	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
53	1998	工学部風環境シミュレーション風洞実験室(AFⅣ)	事前	1999.1.7~25	300	原	江戸
54	1999	総合研究棟(文・経・教・社研)(HES99)	事前	1999.5.24~11.2	1000	堀内・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』3所収
55	1999	医学部附属病院第2中央診療棟(2中)	事前	1999.10.12~00.2.25 2001.7.23~02.12.19	4017	成瀬・原 追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
56	1999	文系4研究所等暫定建物	試掘	1999.12.16~17	16	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』3所収
57	1999	環境安全センター	立会	2000.1.17	-	成瀬	遺構・遺物なし
58	1999	医学部附属病院受変電設備棟Ⅱ期(YM)	事前	2000.2.5~3.31	300	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』3所収
59	2000	共同溝(KK)	事前	2000.7.3~7.12	900	原	江戸
60	2000	医学部附属病院基幹整備外構施設等(HWK6)	事前	2000.9.21~11.14	200	成瀬・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
61	2001	工学部武田先端知ビル(TS)	事前	2001.6.4~8.7 2001.11.28~12.28	740	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
62	2001	農学部生命科学総合研究棟(NSK01)	事前	2001.9.21~10.19	1800	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
63	2002	薬学部暫定建物	立会	2002.2.5~6	-	成瀬	遺構・遺物なし
64	2002	情報学環暫定建物	立会	2002.2.7	-	成瀬	江戸
65	2002	法学系総合研究棟(LS03)	試掘	2002.3.18~20	136	大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
66	2002	薬学系総合研究棟1期(YGS01)	事前	2002.8.1~03.2.28	1260	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
66	2004	薬学系総合研究棟2期(YGS04)	事前	2004.7.26~8.4	540	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
67	2002	地震研究所総合研究棟	試掘	2002.5.9~17	32	堀内	近代・江戸・古墳・弥生・縄文
68	2002	インキュベーション施設(INC)	事前	2003.3.6~6.7	1051	堀内・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
69	2002	地震研仮設建物	立会	2002.5.14~16	-	堀内	遺構・遺物なし
70	2003	工学系総合研究棟	立会	2003.2.28	-	堀内	遺構・遺物なし
71	2004	地震研究所総合研究棟(HEQ04)	事前	2004.8.30~05.2.28	1474	追川・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
72	2004	理学部1号館前(SC1)	事前	2004.11.29~12.3	32	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
73	2004	医学部附属病院総合研究棟・疾患生命工学センター	試掘	2004.11.29~12.1	24	成瀬	江戸・古墳
74	2008	医学部附属病院看護師宿舎Ⅲ期(HHN308)	事前	2008.4.1~8.1	550	堀内	近代・江戸・古墳・縄文・旧石器
75	2005	工学系総合研究棟立坑(KOS05)	事前	2005.9.13~14	17	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
76	2005	ベンチャープラザ(HVP06)	事前	2006.3.6~5.16	760	追川・堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
77	2005	農学部弥生講堂アネックス	立会	2006.1.12	5.3	大成	江戸
78	2006	情報学環・福武ホール(HJF06)	事前	2006.6.5~12.8 2007.2.5~23	1766	大成・成瀬 追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
79	2006	農学部コイトロン温室	立会	2007.1.16	-	成瀬	遺構・遺物なし
80	2006	工学部もの作り実験工房	立会	2007.2.22	-	成瀬	遺構・遺物なし
81	2007	経済学研究科学術交流棟(HEA07)	事前	2008.3.17~7.11, 9.11~ 24, 2009.2.2~10	433	成瀬	近代・江戸

東京大学構内遺跡調査一覧

番号	年度	遺跡名・調査地点名(略称)*1	調査種別	日付	面積(m ²)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
82	2007	懐徳門(HKMO7)	事前	2007.6.20～7.20	34	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
83	2007	向ヶ丘ファカルティハウス	試掘	2007.10.22～25	50	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
84	1984	農学部共同溝(NK84)	事前	1984.7.9～23	50	今村	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
85	2008	薬学部東法面階段設置	立会	2008.3.14	-	成瀬	遺構・遺物なし
86	2008	雨水管改修工事	立会	2009.2.2～16	-	成瀬	遺構・遺物なし
87	2008	東京都下水道工事(HTG08)	事前	2008.12.7～12.25	33.6	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
88	2008	耐震対策事業ガス管改修工事	立会	2008.11.19、11.20	-	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
89	2008	弥生地区屋外ガス配管改修工事	立会	2008.11.25～12.17	-	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収

表2 駒場Ⅰ地区

番号	年度	遺跡名・調査地点名(略称)	調査種別	日付	面積(m ²)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
1	1992	教養学部保健センター	試掘	1992.3.19	28	武藤	遺構・遺物なし
2	1993	教養学部情報教育棟(FGE)	事前	1993.8.10～10.20	940	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
3	1993	数理科学研究棟	試掘	1993.5.8～15	350	堀内	縄文
4	1994	数理科学研究棟擁壁工事	立会	1995.1.20～27	-	武藤	近代
5	1994	数理科学研究棟関連東電マンホール増設・管路新設工事	立会	1995.1.24～4.12	-	武藤	平安・縄文
6	1995	教養学部伝統文化活動施設	試掘	1995.9.11	8	武藤	遺構・遺物なし
7	1995	教養学部学生用浴室・シャワー施設	試掘	1995.9.11	8	武藤	遺構・遺物なし
8	1995	数理科学研究棟ガス埋設工事	立会	1995.5.17～18	-	武藤	遺構・遺物なし
8	1995	数理科学研究所水道埋設工事	立会	1995.6.27～28	-	武藤	遺構・遺物なし
9	1996	数理学研究科Ⅱ期棟(数理)	事前	1996.12.12～97.2.6	1160	堀内	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収
10	1997	教養学部キャンパス・プラザ	試掘	1997.4.24	41	武藤	遺構・遺物なし
11	1999	教養学部総合研究棟	試掘	1999.7.26～8.3	130	原	遺構・遺物なし
12	2000	駒場図書館(KL)	事前	2000.7.27～8.30	1778	大成・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
13	2001	教養学部総合研究棟	試掘	2001.10.24～25	60	堀内	遺物・遺構なし
14	2002	教養学部総合研究棟	試掘	2002.3.25～26	53.4	大成	遺物・遺構なし
15	2002	駒場コミュニケーションプラザ和館	試掘	2004.12.6～7	80	成瀬	遺構・遺物なし
15	2005	駒場コミュニケーションプラザ(KCP)	事前	2005.4.22～7.21	4327	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
16	2003	国際学術交流棟(KGK)	事前	2003.5.16～7.9	620	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
17	2005	教養学部5号館他改修工事	立会	2005.8.10・17・19	300	大成	遺構・遺物なし
18	2006	教養学部8号館エレベーター敷設工事	立会	2006.10.20	-	堀内	遺構・遺物なし
19	2006	教養学部ロッカー棟	試掘	2006.11.13～16	21	堀内	遺構・遺物なし
20	2007	初年次活動センター新築工事	立会	2007.12.20	85.39	追川	遺構・遺物なし

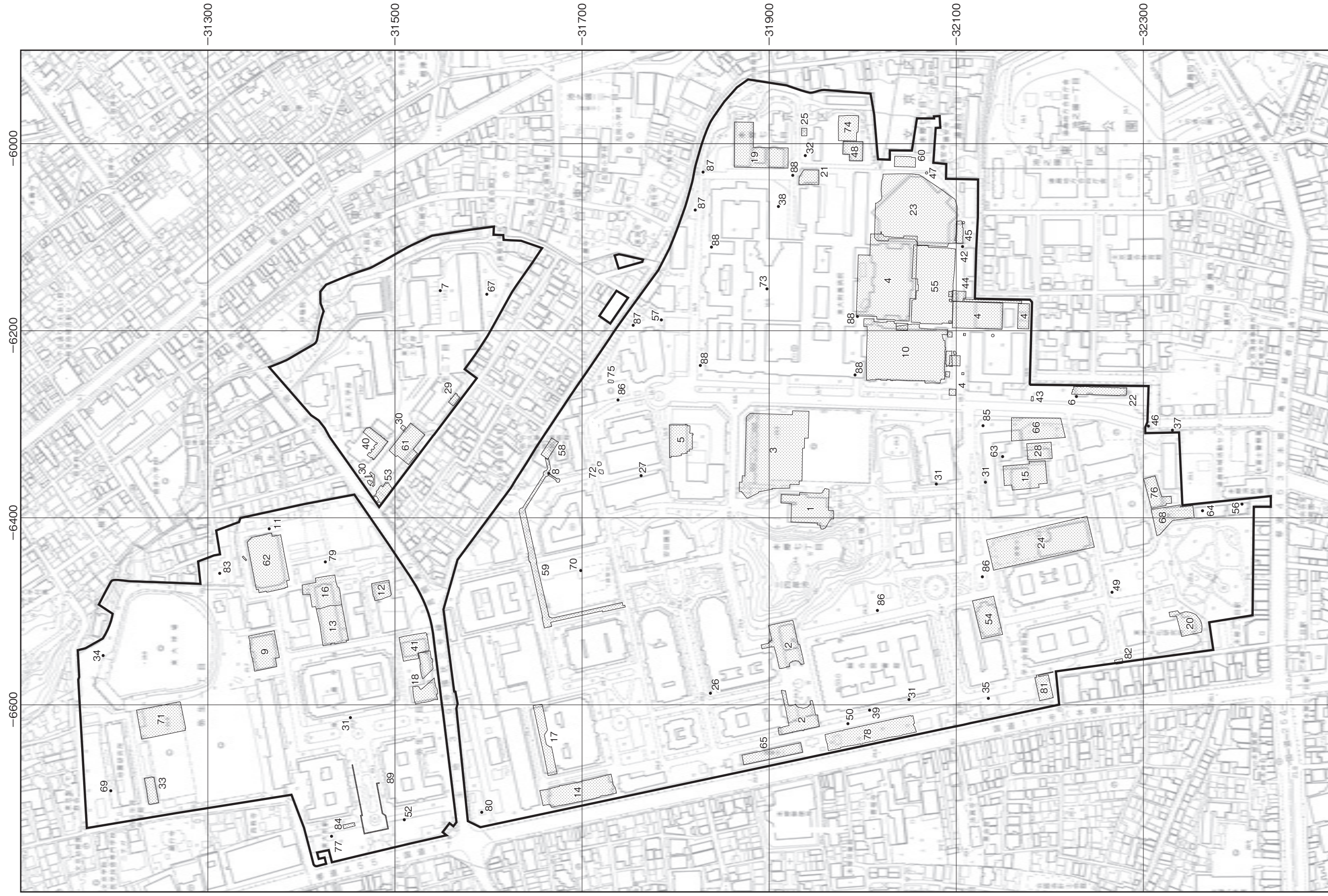
表3 駒場Ⅱ地区

番号	年度	遺跡名・調査地点名(略称)	調査種別	日付	面積(m ²)	担当者	遺構・遺物の年代
1	1996	生産技術研究所校舎	試掘	1996.5.14	25	武藤	遺構・遺物なし
2	1996	先端科学技術研究センター校舎4号館	試掘	1996.5.15～17	92	武藤	遺構・遺物なし
3	1996	生産技術研究所校舎	試掘	1996.10.24～25	20	武藤	遺構・遺物なし
4	1998	設備センター	試掘	1998.4.27	13	武藤	遺構・遺物なし
5	1998	国際・産学共同研究センター	試掘	1998.8.5	90	原	縄文
6	1998	生産技術研究所事務図書棟暫定施設	試掘	1998.12.13～15	50	大成	遺構・遺物なし
7	2002	駒場オープンラボラトリー	試掘	2002.12.5	55	成瀬	縄文土器(阿玉台)
8	2003	総合研究実験棟	試掘	2003.8.6	34	追川	遺構・遺物なし
9	2008	保育施設	立会	2008.7.9～14	-	大成	遺構・遺物なし

第1部 東京大学構内遺跡発掘調査略報

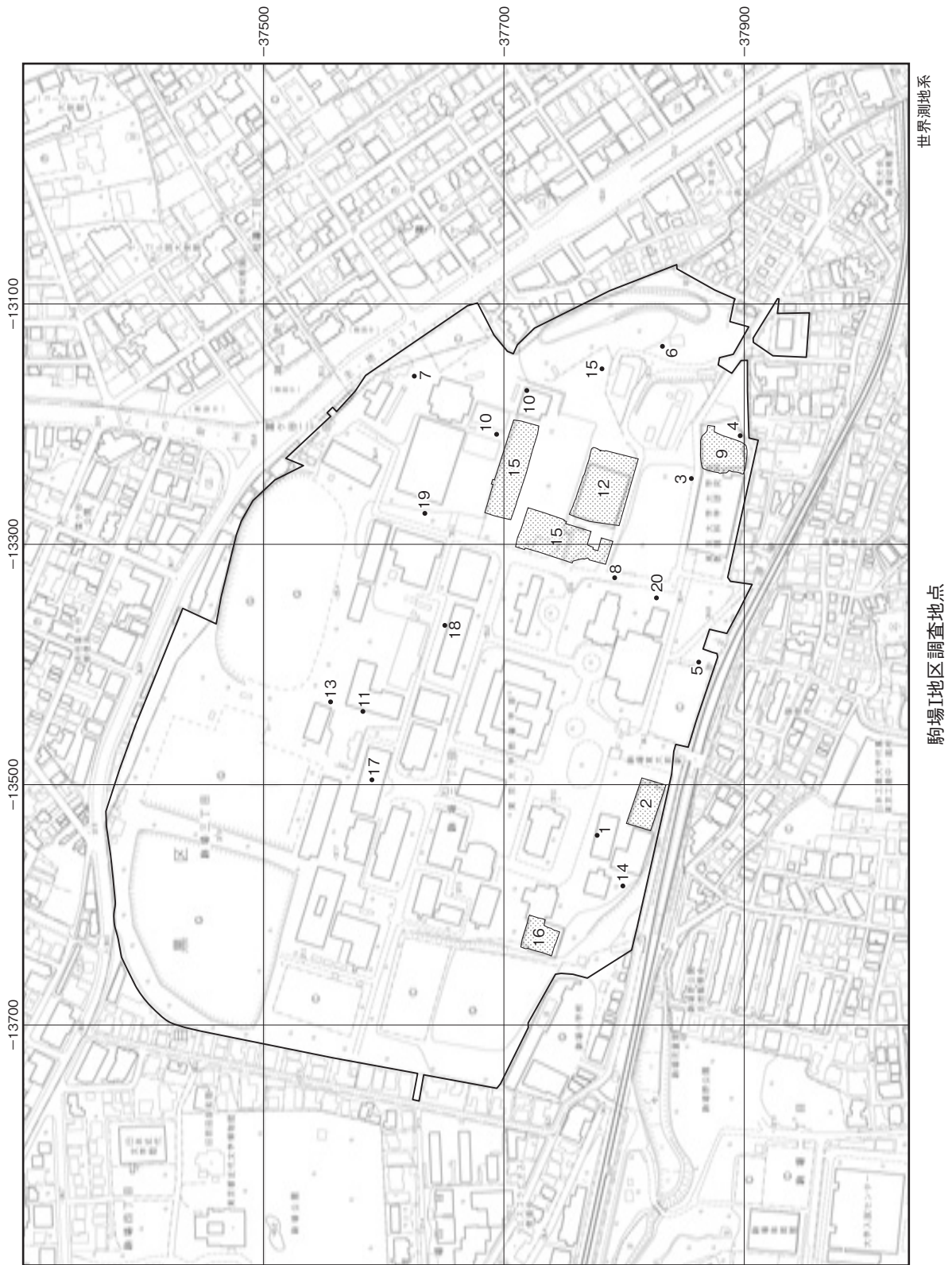
表4 その他の地区

行政区	年度	遺跡名・調査地点名(略称)	調査種別	日付	面積(m ²)	担当者	掲載書名 遺構・遺物の年代
文京区	1991	理学部附属植物園研究温室Ⅰ期〔原町遺跡〕(BG)	試掘	1991.7.24～25	5	武藤	縄文
文京区	1991	追分学寮	試掘	1991.8.23～24	16	成瀬	江戸
豊島区	1991	豊島学寮	試掘	1991.8.26～30	29	武藤	遺構・遺物なし
三鷹市	1991	井の頭学寮	試掘	1991.9.30～10.15	20	成瀬	遺構・遺物なし
港区	1991	白金学寮	試掘	1991.11.25～26	10	武藤	江戸
文京区	1992	理学部附属植物園研究温室Ⅱ期〔原町遺跡〕(KO)	事前	1992.5.25～6.6	200	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』5所収
三鷹市	1992	三鷹国際交流会館〔長嶋遺跡〕Ⅰ期(三广1)	事前	1992.6.29～9.19	2100	堀内・成瀬	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書8長嶋遺跡』
港区	1992	医科学研究所看護師宿舎	試掘	1992.7.1	8	武藤	遺構・遺物なし
三浦市	1992	理学部附属臨海実験所新研究棟〔新井城〕(MMBS)	事前	1992.7.20～9.25	1700	武藤・寺島	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
三浦市	1993	理学部附属臨海実験所新研究棟関連電機・水道管路新設工事	立会	1993.4.20～23	-	武藤	中世
三浦市	1993	理学部附属臨海実験所新研究棟関連海水循環水路新築工事	立会	1993.5.7～8	-	武藤	中世
三鷹市	1993	三鷹国際交流会館〔長嶋遺跡〕Ⅱ期(三广2)	事前	1993.5.28～11.8	3280	堀内	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書8長嶋遺跡』
三鷹市	1994	三鷹国際交流会館〔長嶋遺跡〕Ⅱ期(三广3)	事前	1994.5.13～8.17	1950	堀内・鮫島	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書8長嶋遺跡』
千葉県	1994	検見川運動場体育セミナーハウス〔玄藩所遺跡〕(GMB)	事前	1994.7.19～8.21	496	武藤	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収
港区	1994	医科学研究所MRI-CT棟装置棟	試掘	1995.3.9	8	武藤	遺構・遺物なし
港区	1995	医科学研究所ヒトゲノム解析センター棟	試掘	1995.7.11	8	武藤	遺構・遺物なし
柏市	1996	柏キャンパス校舎	試掘	1996.10.28～29	125	武藤	遺構・遺物なし
港区	2000	医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟(SBS00)	事前	2000.10.27～01.3.9	4280	堀内・大成	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
文京区	2000	総合研究博物館小石川分館増築(KI)	事前	2000.11.27～12.4	70	成瀬・追川	『東京大学構内遺跡調査研究年報』6所収
文京区	2002	農学部生命科学研究所樹木実験圃場・根圏観察室(KNK)	事前	2002.9.24～10.7	91	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収
文京区	2007	理学系研究科附属植物園・医学部創設150周年記念(小石川養生所復元)建物(BGY07)	試掘	2007.9.3～4	43	成瀬	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収
文京区	2007	追分国際学生宿舎	事前	2007.12.3～2008.3.25	776	原	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7所収



世界測地系

本郷地区調査地点





駒場II地区調査地点

世界測地系

本郷 88

耐震対策事業（ライフライン再生）ガス管改修工事地点

所在地 東京都文京区本郷7-3-1

調査期間 2008年11月19日～20日

調査面積 26㎡

調査担当 原 祐一

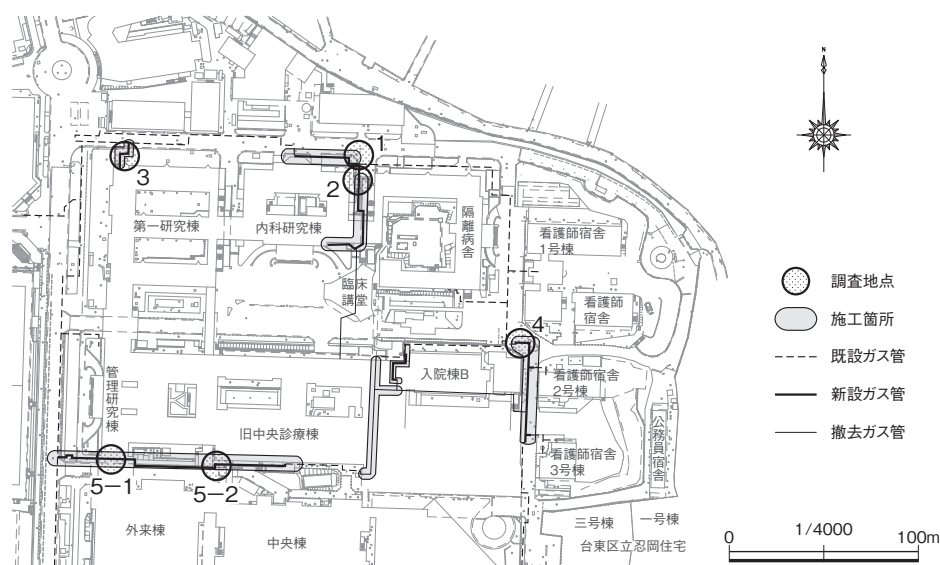
1. 調査の経緯と経過

東京大学は耐震対策事業に伴い、ガス管理設工事を計画した。工事に伴う立会調査はトレンチ1、2、4を11月19日、トレンチ3、5-1、5-2を11月20日に行った（1図）。

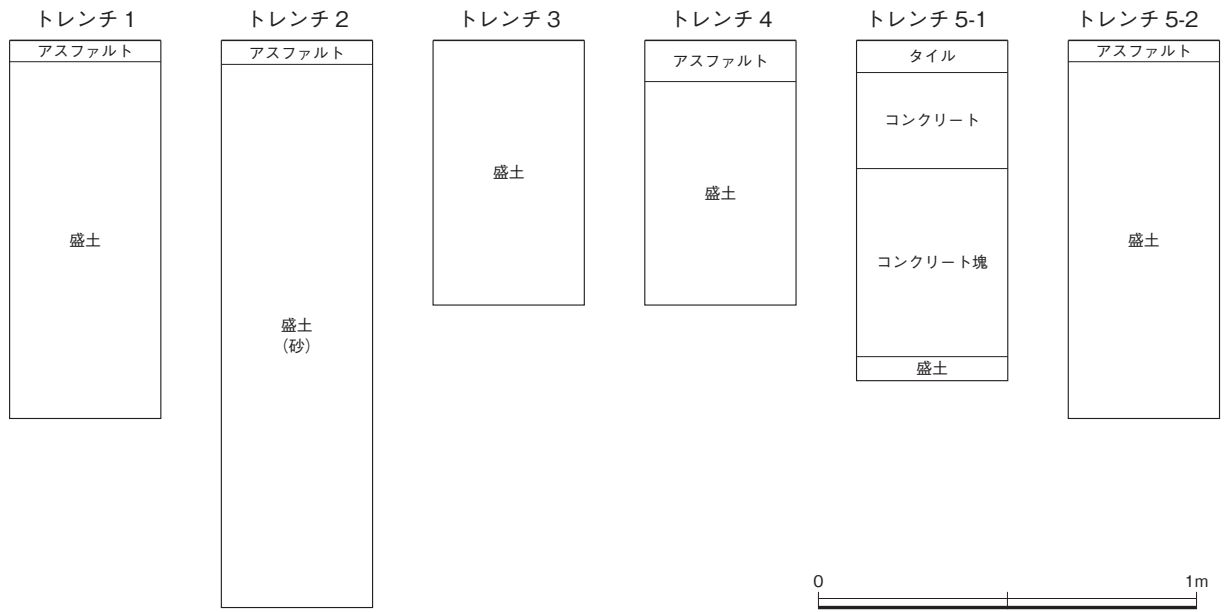
2. 調査の概要

トレンチ1～4、トレンチ5-2地点は、既存ガス管の埋設により遺跡は破壊されていた。

トレンチ5-1地点は、医学部附属病院管理研究棟アーケード下に位置する。調査地点はアーケード下の道路で、コンクリートやアスファルトによる舗装でなくタイルと切り石がはめ込まれている。調査は、タイルを取り除いた後掘削を行ったが、タイルは産業廃棄物として取り扱い、タイルによる舗装は復旧しないとのことである。当建物は、文化財に指定されていないが、東京大学を象徴する建物であり、東京大学史の観点から最低限の記録と遺物採集を行った。タイルの厚みは7cm、タイルの下には厚さ25cmのコンクリートが打たれ、底の部分には12mm径の鉄筋が埋め込まれていた。鉄



1図 調査地点の位置（1）



2 図 調査地点断面柱状図



3 図 出土タイル



4 図 出土鉄筋 (φ 12mm)

筋はほとんど腐食していなかった。コンクリート下にはコンクリート塊が50cmの厚さで敷き詰められていた(2、6図)。タイル1点と鉄筋を採集した(3、4図)。

3. 調査の成果と課題

(1) 調査地点周辺の地歴と富山藩邸内の位置

調査地点は、湯島から駒込に至る台地上に位置する。地質学的には本郷台地と呼ばれるが、江戸時代は、「神田台」と呼ばれていた。明暦3(1657)年の大火で水戸藩上屋敷(小石川邸)を焼け出され水戸藩中屋敷(駒込邸 現在の本郷地区北側の一部と弥生地区、浅野地区と住宅地に該当する)に避難した徳川光圀の記録には、この台地を「神田台」と記述している。

トレンチ1、2、4地点の位置する台地上では、埋蔵文化財調査室が看護師宿舎建設に伴う発掘調査を継続的に行っている。調査の結果、旧石器時代の遺物、縄文、古墳時代の遺構・遺物を確認している。また、看護師宿舎は、江戸時代の富山藩邸の殿舎のあった場所である。東京大学構内の「御殿下グラウンド」の「御殿」は、富山藩の御殿（明治時代、別科教場として利用）が現在のグラウンド西側に移築されたことから付けられた名称である。今回の調査地点トレンチ1、2、4地点は富山藩邸に該当する。今回の調査では、遺跡を確認することができなかったが、事前に富山藩邸のどの部分に該当するかを確認した。



建設省国土地理院所蔵、(財)日本地図センター複製1984「明治16年第一測期第二測図 参謀本部陸軍部測量五千分之一ノ尺東京府武蔵国本郷區本郷本富士町近傍」『参謀本部陸軍部測量局五千分之一東京図測量原図』、本報告図4等より原祐一作成

5図 調査地点の位置（2）

（2）トレンチ1、2、4地点の富山藩邸内の位置

「明治16年陸軍参謀本部測量原図」から作成した5図によると、トレンチ1、2地点は、富山藩の裏門をくぐってスロープを登りきった東側の空地に位置する。トレンチ4地点は、殿舎（御殿）後の別科教場裏に位置する。池之端門を入り、南側に曲がると看護師宿舎の建物の間に東西に延びる坂がある。この坂部分に明治16年の等高線が重なることが分かる。また、江戸時代は稲荷に至る石垣が描かれていることから、石垣等の施設は破壊されているが旧地形を残している可能性がある。トレンチ4地点はこの坂を登りきった場所に位置するが、江戸時代は稲荷の区域と明確に区画されている。

(3) 「土木工事に伴う緊急調査」の意義

今回の調査地点に近接する東京大学工学系総合研究棟新営工事立坑工地点（2005年度）は、加賀藩邸の「御徒町」長屋に該当する区域に該当する。この調査は、立坑工事に伴う調査で、調査面積、調査期間に制約があった。しかし、加賀藩邸の土地利用状況の一端を示すことができた（原 2008）。工事と同時並行で行われる緊急の立会調査で得られるデータは軽視されがちであるが、上記調査では、確認された盛土の状況と加賀藩邸の絵図、「明治16年陸軍参謀本部測量原図」（（財）日本地図センター 1984）とを比較検討することによって、「点の調査」を「面の調査」に高めることができた。東京大学において江戸時代以降の造成がどのように行われ現在に至るのかを、地質学的、工学的に検討し、これらの視点に考古学的視点を加えることで、年代観が明確になり造成の年代、規模の検討が可能であると考えている。今回の調査では遺跡を確認することができなかったが、東京大学構内では「緊急工事に伴う調査」が予定されていることから、データの蓄積と比較検討を行っていきたい。

(4) 医学部附属病院管理研究棟アーケード下の舗装について

トレンチ 5-1 地点は、医学部附属病院管理研究棟アーケード下に位置する。この建物は、内田祥三が設計、昭和6（1931）年3月着工、同13（1938）年竣工した建物である。アーケード入り口上部には「医学の診断、治療、予防」（北側）、「長崎時代」（南側、調査地点上部）を主題とするテラコッタ製のレリーフが埋め込まれている（東京大学総合研究資料館 1988）。

アーケード下の道路の舗装に使用されたタイルの表面の色調は、単一ではなく黒色、灰色、茶色、乳白色、黄褐色、オレンジ等の色調で、色調が異なるタイルがモザイク状に配されている（9図）。タイル表面の発色は、管理研究棟の外壁に使用されているスクラッチタイルの発色によく似ている（11図）。戦前のスクラッチタイルには、微妙に色合いの違うものが混在し、当時はタイルの焼成温度管理が今ほど厳密でなかったため色むらがあったが、キャンパス復興に当たった内田祥三はそうした不良品も色合いの変化としてとらえ凹凸のある建築の表現として用いた。後に土の配合を変えて発色の調整を変えていったとされる（岸田 2005）。しかし、舗装に使用されたタイルについては明確にされていない。今後管理研究棟の工事関係文書の調査を行い、タイルがどのように発注、製造されたか、窯業技術史の観点から検討を行っていきたい。

現在、南側アーケードの調査箇所はアスファルト舗装されている（10図）。北側アーケード下の舗装は数回にわたり工事が行われていた。路面の復旧方法は、除去したタイルとほぼ同じ大きさの黄褐色のタイルが舗装された部分（12図）、コンクリートによって舗装された部分がある（14図）。北側アーケードは自動車の通行量が多く、タイルの表面が磨滅し文様が失われている箇所もあった（13図）。また、交通整理の表示が黒色ペンキで書かれている部分があった（15図）。トレンチ 5-1 部分のタイルは産業廃棄物として取り扱い、タイルによる舗装は復旧しないとのことである。当建物は、文化財に指定されていないが、東京大学を象徴する建物であることから、タイルの採集と工法を記録した。当資料は、法律上は埋蔵文化財ではないが、東京大学史の観点から工事後の復旧を行うのが好ましいと考える。建築史の研究者をまじえて、本工事の方法と復旧方法を議論してはどうだろうか。今回の立会調査を保存修復の際のデータとして活用していただければ幸いである。

【引用・参考文献】

- 岸田省吾 2005 「スクラッチタイルの過去と現在」『東京大学 本郷キャンパス案内』 pp.90-91、財団法人東京大学出版会
- 東京大学総合研究資料館 1988 「40- 附属医院外来患者診療棟」『東京大学本郷キャンパスの百年』 p.117
- 原 祐一 2008 「IV. 成果と課題－調査地点と「御徒町」長屋、位置関係、地形の検討」『東京大学本郷構内遺跡調査研究年報』 6 pp.25-31
- (財) 日本地図センター複製 1984 「明治16年第一測期第二測図 参謀本部陸軍部測量五千分之一ノ尺東京府武蔵国本郷區本郷本富士町近傍」『参謀本部陸軍部測量局五千分一東京図測量原図』 建設省国土地理院所蔵



6 図 トレンチ 5-1 完掘



7 図 トレンチ 5-1 調査地点遠景



8 図 南側アーケード



9 図 南側アーケード舗装



10 図 トレンチ 5-1 復旧状況



11 図 医学部附属病院管理研究棟外壁スクラッチタイル



12 図 北側アーケード舗装復旧状況 (1)



13 図 北側アーケード舗装復旧状況 (2)



14 図 北側アーケード舗装復旧状況 (3)



15 図 北側アーケード舗装ペンキによる表示

本郷 89

弥生地区屋外ガス配管改修工事地点

所在地 東京都文京区弥生町1-1-1
調査期間 2008年11月25日～12月17日
調査面積 192.973㎡（工事面積）
調査担当 原 祐一

1. 調査の経緯と経過

東京大学は弥生地区屋外ガス配管の改修工事を計画した。埋蔵文化財立会調査は屋外ガス配管改修工事と並行して行った（1図）。

2. 調査の概要

調査対象は江戸時代以前の遺跡だけでなく、レンガ基礎や埋設された土管等、明治時代以降の施設、遺物も東京大学史の観点から調査対象とした。

また、今回の調査成果は農学部、総務・広報情報担当と協議し発掘調査の成果の公開を行った。

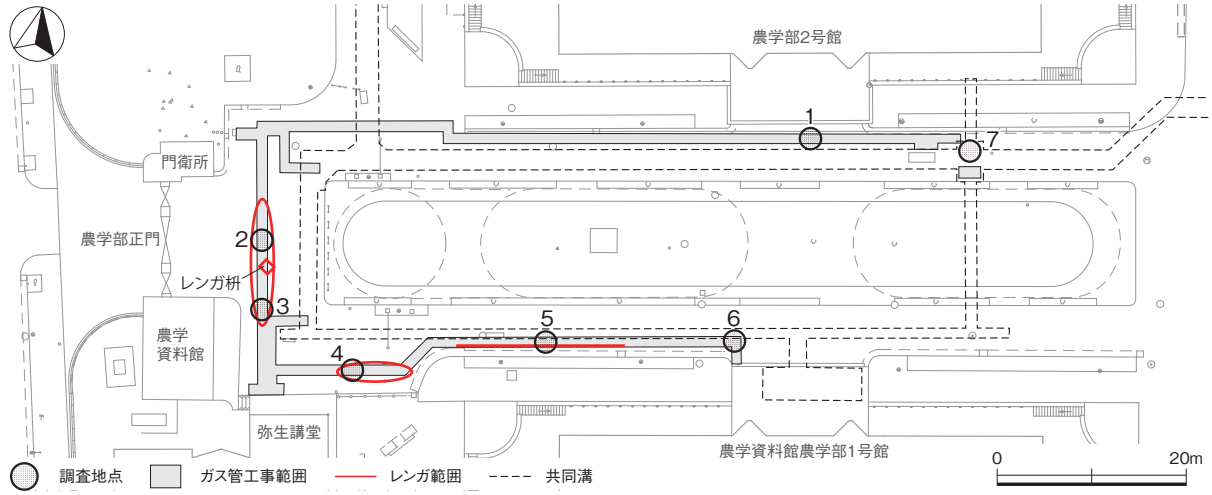
3. 調査の成果

(1) トレンチ1

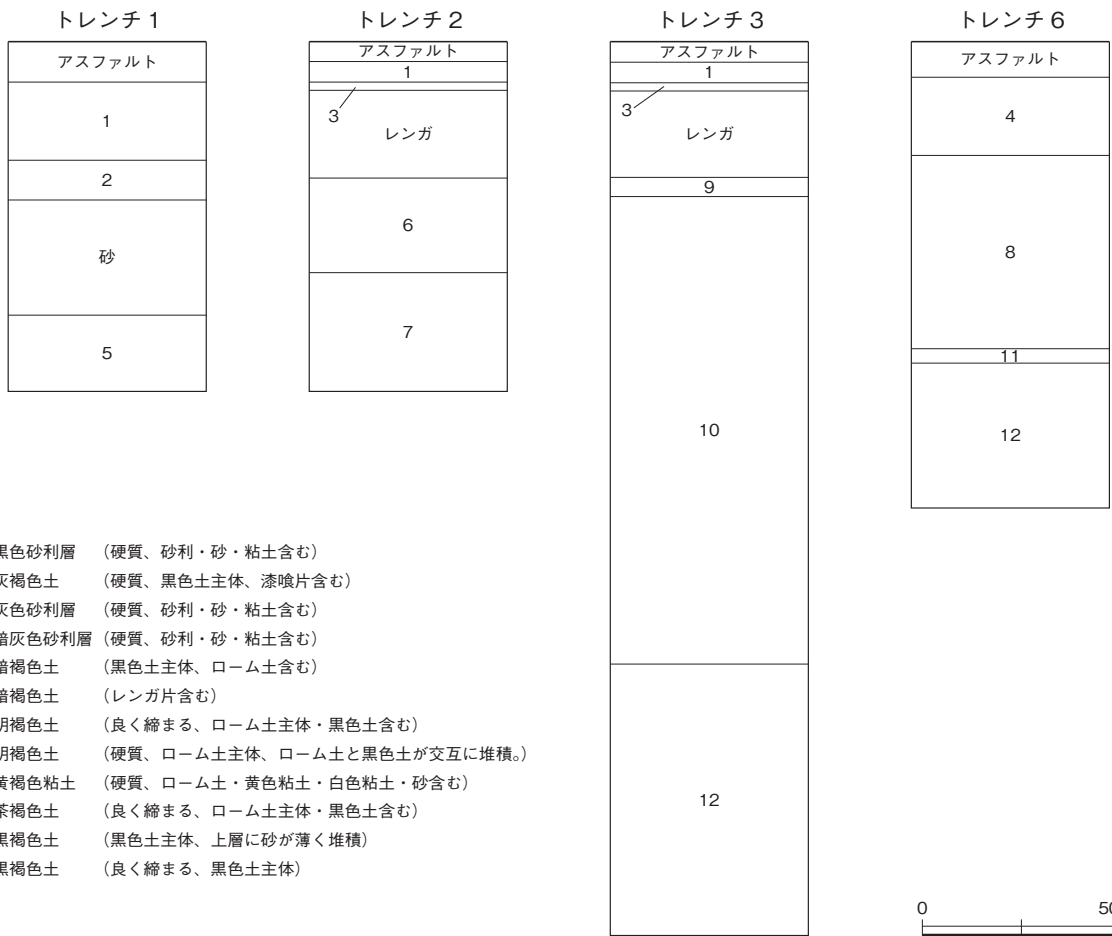
農学部2号館南に位置する(1図)。地表から90cm掘削を行った。アスファルト舗装を除去すると、灰色の砂と粘土、破碎した砂利を混ぜて突き固めた層を検出した。アスファルト舗装から30cmの深さで漆喰と暗灰色土、砂利を混ぜて固く突き固めた層を検出した。この層の下層は厚さ30cmを測る灰色砂層が堆積し、砂層下は暗褐色土の盛土であった(2、3図)。トレンチ7の調査で、この盛土は共同溝の埋土であることが確認できた。

(2) トレンチ2・トレンチ3

農学部正門東に位置する(1図)。アスファルト舗装下層から、レンガを用いた舗装道路を検出した。農学部正門門衛所付近の舗装は、アスファルト舗装工事によって破壊されていたが、正門裏の舗装は良好な遺存状況であった。レンガ上層は道路面と考えられ、灰色の砂と粘土、破碎した砂利を混ぜて突き固めた生活面であった(2、4、10図)。レンガは型枠に粘土を入れ叩き込んで成形する「手抜きレンガ」で「機械成形レンガ」の平面に特徴的に見られる縮緬状の皺はない(11図)。レンガの寸法は22cm×10.8cm×6cmで、農学資料館前では「ホ」刻印のレンガが出土している。レンガは縦に並べられコンクリートで固定されていた。レンガの下層は比較的粘性が強い暗褐色土で隙間なく突き固められていた(7図)。陶磁器類の他、舗装のレンガより固く焼かれた「手抜きレンガ」(長さ不明×9.9cm×5.7cm)が出土した(8、9、12図)。明治時代の盛土下層は、黒色土を主体とする覆土で



1図 弥生地区屋外ガス配管改修工事に伴う試掘坑



2図 土層柱状図



3図 トレンチ1土層断面



4図 トレンチ2土層断面



5図 トレンチ2掘削状況



6図 トレンチ2南レンガ柁検出状況5



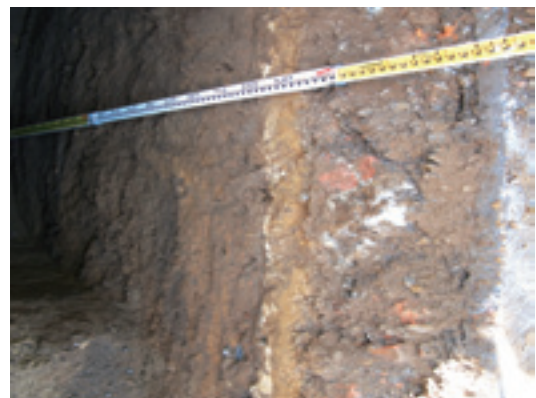
7図 トレンチ2レンガ舗装検出状況



8図 トレンチ2出土遺物(1)



9図 トレンチ2出土遺物(2)



10図 トレンチ3土層断面



11 図 トレンチ3出土「手抜きレンガ」



12 図 トレンチ3明治時代盛土出土レンガ

遺物は出土していない。

(3) トレンチ4

弥生講堂北に位置する(1図)。アスファルト舗装下層はレンガ廃棄層である(13図)。レンガは「手抜きレンガ」と「機械成形レンガ」が出土した(15、16図)。「手抜きレンガ」には、桜の刻印があり「小菅収治監製」と考えられる。

本郷地区薬学部総合研究棟(2002年度)の調査で検出した医学部薬局(明治45年完成)の基礎は、桜の刻印のレンガを使用していた(原2008a)。この基礎は現在、東京大学総合研究博物館前で展示されている。「機械成形レンガ」は平面に粘土切断時に生じる縮緬状の皺がある。寸法は23cm



13 図 トレンチ4レンガ検出状況



14 図 トレンチ4出土陶磁器類



15 図 トレンチ4出土「機械成形レンガ」



16 図 トレンチ4出土「手抜きレンガ」-桜刻印

× 10.8cm × 6cm である。

(4) トレンチ5・トレンチ6

農学部1号館北に位置する(1図)。農学部1号館と共同溝の間でレンガ基礎を検出した(18～20図)。レンガ基礎は東西に延びており、凸状の出っ張りが約150cm間隔で確認された。明治30(1897)



17図 トレンチ6土層断面



18図 基礎検出状況



19図 第一高等学校基礎直線部分



20図 第一高等学校基礎凸部分



21図 トレンチ7土層断面



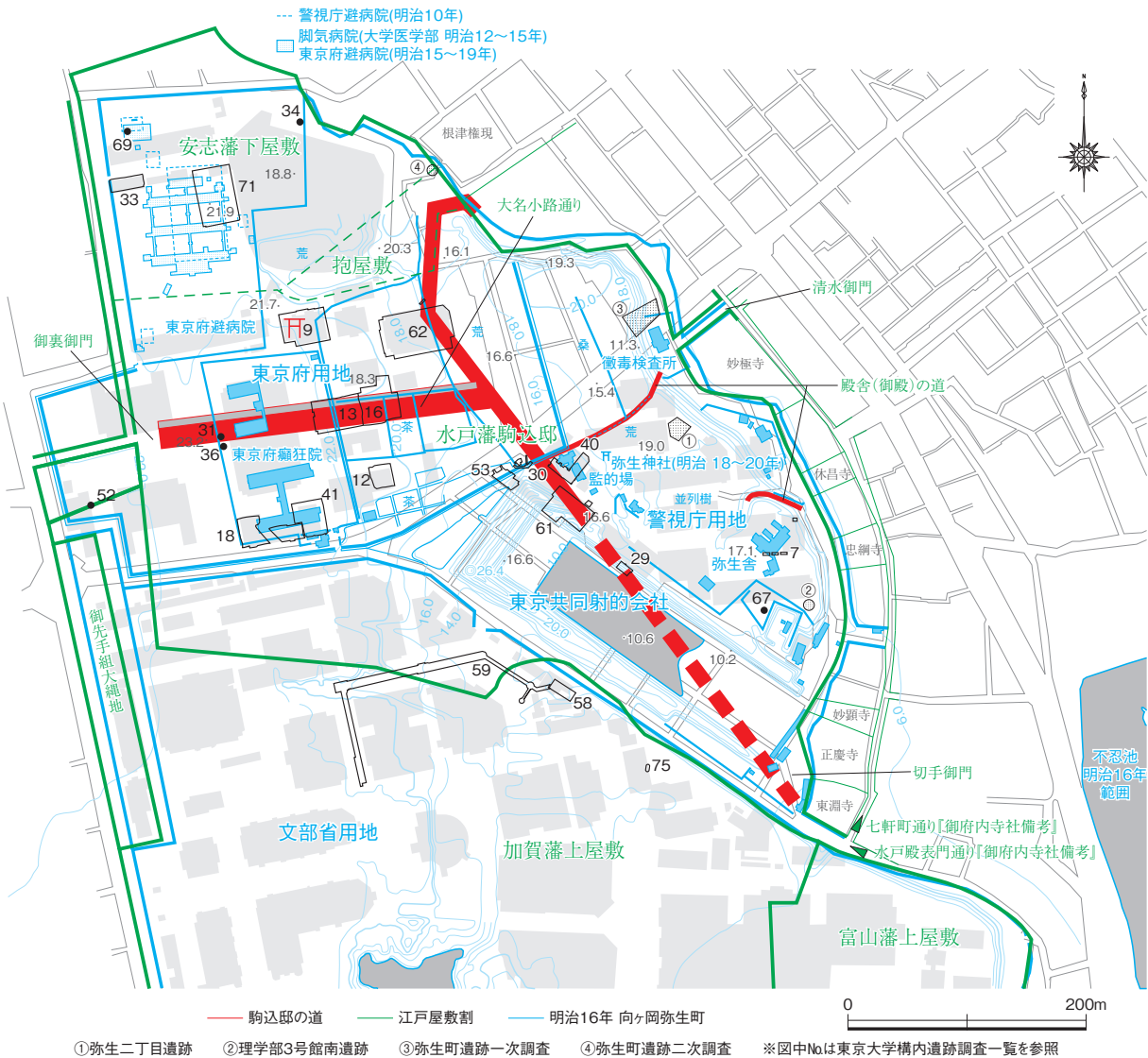
22図 夜間立会

年ごろの第一高等学校の建物配置図（「第一高等学校一覧」明治33～34（1900～1901）年、清水謙多郎氏作成「弥生キャンパスの変遷について」より）によれば、この基礎は、第一高等学校の本館基礎である。使用されていたレンガは「手抜きレンガ」である。寸法は、22.5cm × 10.5cm × 5.7cmである。積み方は、レンガの長手だけの段、小口だけの段と一段おきに積む「イギリス積み」で積まれていた。レンガ基礎の北側は共同溝、南側は暗渠によって破壊されていた。

(5) トレンチ7

共同溝とガス管の接合部分で農学部2号館南に位置する（1図）。地表から300cm掘削を行った。共同溝の北側は、共同溝設置により削平されていた（21図）。

4. 考察－東京大学における「緊急工事に伴う調査」の意義及び江戸時代と明治時代以降の弥生地区・浅野地区の歴史と調査地点の検討



23 図 明治16（1883）年の向ヶ岡弥生町と文政9（1826）年の駒込邸復元図



24 図 『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』(原祐一蔵)

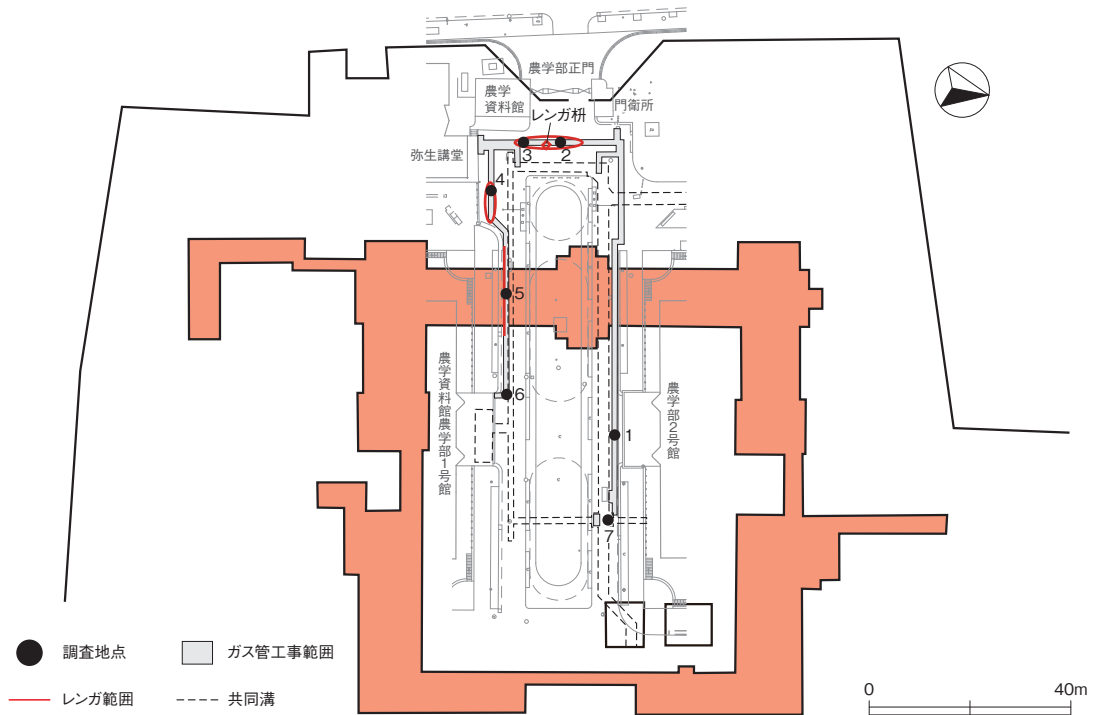
はじめに

本郷区向ヶ岡弥生町は、明治17(1884)年、有坂鋁三、白井光太郎、坪井正五郎が、後に「弥生式土器」と呼ばれるようになる土器を発見した町で、「弥生時代の発祥地」として全国に知られている。現在、弥生町は文京区弥生となり、東京大学弥生地区・浅野地区、住宅地となっている。現在も、

弥生時代の遺跡が残っており、文学部考古学研究室と理学部人類学教室が調査を行った浅野地区「弥生二丁目遺跡」は土器発見地と推定されたことから、昭和58（1983）年、国指定史跡に指定された。また、埋蔵文化財調査室が調査を行った方形周溝墓は、現地保存と剥ぎ取り保存が行われた。これまで、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、中世、江戸時代、明治時代の遺構・遺物が東京大学、文京区教育委員会の調査で確認されており向ヶ丘弥生町は、旧石器時代から近現代の複合遺跡といえる。今回の調査は、「土木工事に伴う緊急調査」で調査面積、調査期間に制約があったが、江戸時代の土地利用状況、明治時代以降の開発に関するデータを得ることができた。

（1）江戸時代（23～25図）

江戸時代の弥生地区・浅野地区・本郷地区の一部と周辺の住宅地は、駒込邸（水戸藩中屋敷）、安志藩小笠原家の下屋敷（地震研究所とグラウンド 後に駒込邸）、武家地（森川氏、御小人）等、寺社地、町屋であった。農学部正門門衛所の辺りに、江戸時代の日光御成街道（本郷通り）から東へ直角に折れ、農学部2号館前で北へ直角に折れ曲がる路地があった。街道から東に伸びる路地の両側は武家地であった。駒込邸部分は文政9（1826）年『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』（原祐一蔵）によれば、農学部2号館前の路地の角に「御裏御門」があった。門を潜ると、藩邸を東西に縦断する「大名小路通り」が現在の農学部7号館辺りまで延びていた。駒込邸内の土地利用状況は、農学部が長屋、役所の区域、浅野地区と北側と西側の住宅地が殿舎（御殿）の区域であった。この地に水戸藩が屋敷を拝領したのは、元和8（1622）年で、「元和八年壬戌 八月四日 台徳公別荘ヲ駒籠ニ賜フ其地五萬四千二百歩」（茨城県 1970）と記述されている。加賀藩邸跡地として知られる本郷地区は、赤門、三四郎池（心字池）など江戸時代の史跡が残されている。一方、弥生地区、浅野地区で駒込邸の石垣や庭園等の痕跡を見つけることはできないが、2008年8月8日、浅野地区情報基盤センター横に保存処理を施された石碑が設置された。この碑は、徳川斉昭が文政11（1828）年に駒込邸に建立した



25図 調査地点と第一高等学校（明治30年頃）の位置

碑で、この地が駒込邸であったことを物語る唯一の文化財として残っている。

今回の調査では、日光御成街道から駒込邸に至る路地と路地の両側の武家地関連遺構、駒込邸の「大名小路通り」「御裏御門」の検出が予想された。路地は第一高等学校のレンガ舗装工事によって破壊されたため確認できなかった。路地両側の武家地部分では、トレンチ6（農学部1号館側）で生活面と考えられる硬化面を確認したが、農学部2号館側は共同溝設置工事に伴い「大名小路通り」の痕跡は破壊されていた。駒込邸の「御裏御門」の痕跡も共同溝設置工事によって破壊されていた。

（2）明治時代（23・25図）

明治時代、弥生地区・浅野地区と周辺住宅地は、明治6（1873）年（同年『沽券図』東京都公文書館蔵）、陸軍省鎮台兵営建築町、文部省用地、徳川昭武（水戸藩11代藩主、現地震研究所北側住宅地）敷地の後、警視局（庁）射的場、病院が建設された。

a. 警視庁射的場

射的場は浅野地区、浅野地区北側と西側の住宅地で、警視局（庁）関係者が「小銃の狙撃」演習を行った施設である。場内には射場、火薬の保管施設、監的場、食堂等の施設が建設された。「銃術演習」は、警視庁構内を含めた府内6か所の練兵場で行われた（警視庁1877）。弥生地区と本郷地区に挟まれた住宅地、300m×50mの範囲が射場で、発射場は南端にあり掘削土をコの字形に盛土、防護壁としていた。弥生町の射的場は明治7（1874）年、上野の岡に建設された射的場の代替施設であった。上野の射的場は、当時の不平士族の動向を含めた社会状況、ヨーロッパの警察制度を視察した初代警視總監川路利良の意向から、明治7（1874）年に設置された「警備編制所」（警視庁1893）の施設として建設される。しかし、演習開始当初から周辺住宅地への被弾被害があったこと、すでに公園となっていたこと、明治10（1877）年、上野公園で勸業博覧会開催が決定したことから、明治9（1876）年弥生町へ移転が決定した。同年の上野での演習を中止、弥生町で射的場の建設を開始し12月までに完成した。明治10（1877）年1月15日、開場式が行われ演習が開始される。同年2月の西南戦争では、上野の射的場、弥生町の射的場、「銃術演習」場で演習を行った巡査が九州等へ派遣されたと考えられる。

b. 病院

弥生地区では現在の地震研究所に、明治10（1877）年、コレラ発生により警視庁避病院が建設された。同年、コレラ収束に伴い避病院は廃止され建物は殺菌のため焼かれた。その後、明治12（1879）年、大学医学部の脚気病院が建設されるが、本郷の大学医学部へ脚気病院の機能が移り、明治15（1882）年、建物はそのまま東京府避病院となった（～明治19（1886）年）。現在の農学部3号館から言問通りの間に建設された東京府癲狂院（精神病院）は、明治12（1879）年7月上野の養育院内に設置された、（仮設）東京府癲狂院が明治14（1881）年8月、弥生町に移転したものである。当時、東京府避病院、東京府癲狂院には、射的場からの被弾・騒音被害があり、射的場移転の要望が出されている。農学部7号館の調査では射的場で発射されたと考えられる弾丸が出土している。明治19（1886）年6月、東京府癲狂院は小石川区巢鴨駕籠町に移転、明治22（1889）年東京府巢鴨病院と改称、大正8（1919）年荏原郡松沢村に移転、東京府立松沢病院（現、東京都立松沢病院）となる。

c. 第一高等学校のレンガ舗装と本館基礎

東京府癡狂院跡地に、明治22(1889)年3月、第一高等中学校(第一高等学校)が落成、大正13(1924)年9月26日、東京帝國大學と第一高等学校との間で敷地交換が調印され、現在の農学部圃場部分を除く部分が大学敷地となり、昭和10(1935)年7月17日、農学部が現在の敷地に移転した(清水謙多郎氏作成「弥生キャンパスの変遷について」)。

トレンチ2・3地点で第一高等学校のレンガ舗装を検出した。舗装には「手抜きレンガ」が用いられ、レンガ舗装の上面に砂利が突き固められていた。第一高等学校正門の写真にレンガが見えないのは、この砂利のためである。

トレンチ5地点で第一高等学校本館のレンガ基礎を検出した。基礎は「手抜きレンガ」を用い、積み方は長手の段と小口の段を一段おきに積む「イギリス積み」であった。レンガ舗装下層は明治時代の盛土で、1997年に行われた木質ホール建設予定地(現、弥生講堂一条ホール)の試掘調査でも確認されている。弥生講堂北側、農学部1号館前、弥生講堂を含めた広範囲で盛土が行われたことが明らかになった。盛土造成が行われた年代については今後の課題としたい。

(3) 東京大学における「土木工事に伴う緊急調査」の意義

今回の調査は、「土木工事に伴う緊急調査」であった。調査面積、調査期間に制約があったが、以下の成果を得ることができた。

1. 農学部1号館前から弥生講堂に至る道路、共同溝南側に江戸時代の遺跡が残されていた。
2. 現在の道路下に第一高等学校の道路、本館基礎が残されていた。
3. 第一高等学校の道路、本館基礎には、「手抜きレンガ」が使用されていた。
4. 第一高等学校の舗装はレンガ舗装であった。
5. 農学部正門裏、農学部1号館、弥生講堂(1997年調査)前で明治時代の盛土を確認した。
6. 農学部正門前では、明治時代の盛土の下に江戸時代の盛土もしくは自然堆積層を確認した。関東ローム層は現在の地表面より230cm以下の深い位置にあり今回の調査では確認することができなかった。

今回の調査同様、調査面積、調査期間に制約があった「東京大学工学系総合研究棟新営工事立坑工地点(2005年度)」の調査では、加賀藩邸の長屋「御徒町」に該当する区域を調査し、加賀藩邸の土地利用状況の一端を明らかにすることができた(原2008b)。また富山藩邸と加賀藩邸該当地点の調査を行った結果、加賀藩邸を調査したA区では「坊主小屋」東端、土手際の土地利用状況が明らかになった。富山藩邸を調査したB区・C区では、富山藩邸北側の土手が、明治時代と昭和2年(1990)以降の大規模工事より改変され現在の地形となったことが明らかになった。

工事と同時並行で行われる緊急の立会調査で得られるデータは軽視されがちであるが、上記調査では、加賀藩邸・富山藩邸の絵図、「明治16年陸軍参謀本部測量原図」((財)日本地図センター1984)、東京大学の建築計画図と明治時代以降の土木工事を考古学的に検討することによって、「点の調査」を「面の調査」に高めることができた。上記制約の調査ではないが、弥生地区、浅野地区の調査で確認した遺跡検出面の関東ローム層の土質を検討、遺跡検出標高と、陸軍参謀本部測量原図の標高を比較検討した上で土地利用状況を検討し、江戸時代の駒込邸の地形が明治16年陸軍参謀本部測量原図に残っていること、明治時代の開発と都市化の過程を検討することができた(原2007)。東京

大学において、明治時代以降の造成年代、規模を工学的、地質学的に検討し、これらの視点に考古学的視点、歴史的視点から得られる年代観を加えることにより、江戸時代の藩邸がどのように改変されたかを検討できると考えている。

東京大学構内では今後も「緊急工事に伴う調査」が予定されている。これらの工事に立ち会い、データの蓄積と比較検討を行っていきたい。駒込邸に関する発掘調査のデータは少ないこともあり、小規模の立ち会い調査であっても調査地点の土地利用状況を明らかにした上で立会調査を行えば、駒込邸の土地利用状況解明につながるものとする。

【引用・参考文献】

- 茨城県 1970「水戸紀年一威公」『茨城県史料近世政治編Ⅰ』 p.441 茨城県史編さん近世史第1部会
- 警視庁 1877『警視庁一覽概表 明治9年12月調』（明治十年八月十四日出版届）
- 警視庁 1893『警視廳史稿下巻 警視庁史卷十五』 pp.1-3
- (財)日本地図センター複製 1984「明治16年第一測期第二測図 参謀本部陸軍部測量五千分之一ノ尺東京府武蔵国本郷區本郷本富士町近傍」『参謀本部陸軍部測量局五千分一東京図測量原図』建設省国土地理院所蔵
- 東京大学大学院農学生命科学研究科広報室編 2009「農正門前のガス管工事でレンガ基礎見つかる」『弥生』48 弥生
- 原 祐一 2007「弥生時代名称由来土器発見場所の推定 - 明治17年本郷区向ヶ岡弥生町の土地利用状況 -」『國學院大學考古学資料館紀要』23輯 pp.125-142
- 原 祐一 2008a「東京大学本郷構内の遺跡 薬学系総合研究棟（2002年度）で検出した医学部薬局の基礎 SB01 についての考察」『東京大学本郷構内遺跡調査研究年報』6 pp.209-212
- 原 祐一 2008b「Ⅳ. 成果と課題—調査地点と「御徒町」長屋、位置関係、地形の検討」東京大学埋蔵文化財調査室『東京大学本郷構内遺跡調査研究年報』6 pp.25-31

本郷7

新タンDEM棟地点

所在地 東京都文京区弥生町2-11-16

調査期間 昭和63年2月15日～17日

調査面積 28㎡

調査担当 成瀬 晃司

1. 調査の経緯と経過

東京大学原子力研究総合センターは、工学部12号館に隣接するタンDEM棟（バンデグラフ）増築を計画しており、新タンDEM棟建設予定地の埋蔵文化財の有無について確認調査を依頼された。当該地は本郷台遺跡群（文京区No.47）および弥生町遺跡群（文京区No.28）の範囲内にあることから、遺跡調査室（現、埋蔵文化財調査室）はこれを受けて、当該地の遺構・遺物の遺存状況を確認するため試掘調査を実施した。

2. 調査の概要

東京大学浅野地区は武蔵野台地の東端、本郷台の東縁に派生した小さな舌状台地上に立地しており、本調査地点はこの小台地の東端、標高約17mに立地し、その北西には向ヶ岡貝塚第1次調査地点、南には第2次調査地点が隣接している。なお浅野地区の歴史・地理的環境の詳細については『浅野地区I』（東京大学埋蔵文化財調査室2009）を参照されたい。

3. 調査の成果と課題

調査は昭和63年2月15日から17日にかけて、新タンDEM棟用地として候補にあがっている現タンDEM棟の西側と北側の2箇所について行った。西側のトレンチは、東西4m、南北2mのトレンチを4m間隔で3箇所設置し、東側を第1トレンチ、中央を第2トレンチ、西側を第3トレンチとした。北側に関しては、近代以降に大規模な削平を受けており、遺跡の存在する可能性は極めて低いことが想定されたので、1辺2mの正方形トレンチ1箇所に止めた（1図）。

基本層序（2図）

基本土層は江戸時代以前の自然堆積層と、それ以降の人為的堆積層に大別される。後者のうち第1層は煉瓦片、コンクリート片を含む近・現代の盛土であり、第2a、2b層が江戸時代に帰属する盛土層である。第3a～3c層は江戸以前の沖積層で、その下に立川ローム層が続く。江戸期の盛土層の厚さは約70cm、江戸以前の沖積層は約130cmを測り、比較的良好な遺存状態を示していた。

検出された遺構（2図）

今回の調査では、江戸時代の土坑1基、弥生時代終末から古墳時代初頭に帰属すると推定される住居址1基が確認された。前者は、第1トレンチの第2b層上面より検出された。形態、規模ともに不明だが、覆土中に陶磁器片、土器片、炭化物、動物遺体などを多量に含んでいることより廃棄遺構と考えられる。後者は、第2トレンチより検出された。第2トレンチはその大部分を近・現代の攪乱により破壊されていたため、遺存状況は悪いが、第3c層上面に住居址の貼床と考えられる硬化面が確認された。第3b層は土器片を含み覆土と思われるが、トレンチ内で壁が確認されなかったため、遺構切り込み面は不明である。

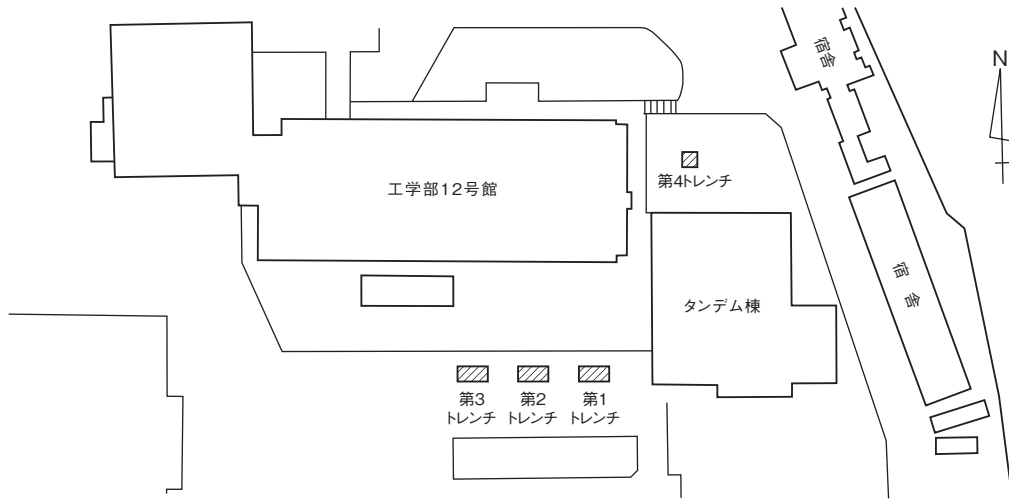
なお、第4トレンチは大規模な削平のため、現地表下約1mで本郷砂層に達する。

出土した遺物

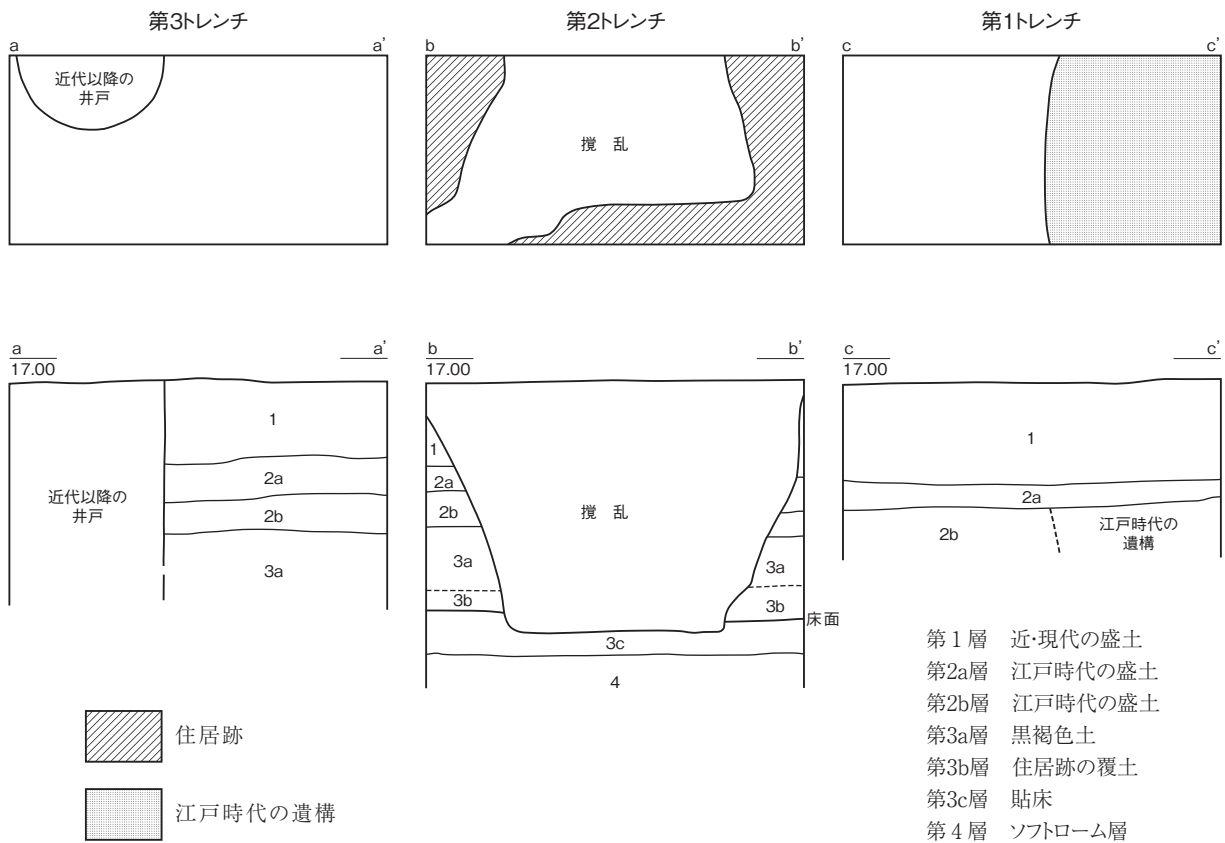
第1トレンチの江戸時代の遺構からは18世紀前半を中心とする陶磁器類が出土、第2トレンチ3層からは古墳時代初頭に比定される壺胴部片、器台脚部片、刷毛目が施された台付甕胴部片などが出土しているが、いずれも小片のため図示するにいたらなかった。

4. まとめ

第1～3トレンチは、一部で近代以降の攪乱を受けてはいるものの第2層以下が比較的良好な状態で遺存し、江戸時代、弥生時代末～古墳時代初頭の遺構の存在が確認された。一方、第4トレンチは大規模な造成により立川ロームまでも削平されており、遺跡の遺存は認められなかった。この削平は現タンDEM棟北側用地一帯に拡がっていることから、工学部では遺跡が遺存しない北側用地に新タンDEM棟の建設を決定し、西側の包蔵地は現状保存されることになった。



1図 トレンチ配置図(1/1000)



2図 第1～3トレンチ平面図・断面図(1/80)

本郷 83

向ヶ丘ファカルティハウス地点

所在地 東京都文京区弥生1-1-1 東京大学本郷構内 文京区遺跡番号 47 本郷台遺跡群、
遺跡番号 28 弥生町遺跡群範囲内

調査期間 2007年10月22日～25日

調査面積 50㎡

調査担当 堀内 秀樹

1. 調査の経緯と経過

東京大学は、旧向ヶ岡学寮跡地に外国人研究者などの短期滞在施設としてファカルティハウスの建築を予定している(7図)。建設予定地点は文京区 47 本郷台遺跡群および文京区 28 弥生町遺跡群として周知の遺跡の範囲内であり、発掘調査にあたって埋蔵文化財の遺存状況を確認する必要があった。試掘調査は、埋蔵文化財調査室により2007年10月22日から25日まで、建築予定地内約50㎡に対して行った。試掘調査は、同室員堀内秀樹が担当した。

試掘調査は7図のように建物建設予定地内に3本の試掘トレンチを設定し、埋蔵文化財の有無、遺存状況を確認した。トレンチ1と2は、学寮解体後に更地であったため重機によって遺構確認面まで機械掘削を行ったが、トレンチ3は、周囲に繁茂する樹木の存在や極端な傾斜地であったため重機掘削が行えず、人力による狭い面積での調査にせざるを得なかった。

2. 調査の概要

(1) トレンチ1の状況(1～4、8、11図)

トレンチ1は、東半を中心に近代以降に大きく攪乱されている状況が伺えた(1図)。攪乱は現表から相当深度の深さを有するため、その西側立ち上がり付近の一部しか坑底が確認できていない。確認された坑底は、現表下約3.5mの深度であった。攪乱より西側では古代以降の自然堆積層が、現表下70cm付近以下に良好な状態で遺存していることが確認された(2図)。トレンチ西側において確認された自然堆積層上面で、中世～江戸時代の遺構確認を行ったが、トレンチ西端に南東から北西にかけて緩やかに下がっていく落ち込みが確認された。これは覆土や位置から推定して、2001年度に調査を行った隣接する農学部生命科学総合研究棟地点から続く江戸時代の切り通し様の大型遺構であろうと思われる。その他にはトレンチ西側に4基の近代以降の落ち込みが確認された(4図、8図トレンチ部分)のみであった。

自然堆積層(8図セクション図2層以下)は上層から2層暗茶褐色土、3層黒褐色土、4層黒色土、5層暗茶褐色土、6層茶褐色土、7層ローム相当層の順で堆積していることが確認できた。このうち2層と3層の間、3層と4層の間付近から縄文時代晩期を中心とした土器が合計30点程度確認された(3、11図)。また、ローム相当層はトレンチ西端から徐々に東側に傾斜を有するが(8図セクション図太線)、西側から約3m付近で急に落ち込んでいる状況が看取され、トレンチを南北に横断する当該期に埋没

した支谷の存在が推定された。

(2) トレンチ2の状況 (5、9図)

トレンチ2は近代以降の盛土が現表下約120cmまで堆積しており、それ以下には江戸時代の遺構と考えられる落ち込みが確認された。この遺構は先述のように2001年度に調査を行った隣接する農学部生命科学総合研究棟地点から続く切り通し様の大型遺構であろうと思われる。トレンチ内では現表下220cm付近まで掘り下げたが、坑底は確認できなかった。

(3) トレンチ3の状況 (6、10図)

トレンチ3付近は、約30°の傾斜を持つ斜面地であった。人力による調査で表土下約250cmまで掘削を行ったが、自然堆積層は確認できなかった。認められた盛土はいずれもレンガ片などを含むローム土を主体にするもので、西側から東に向かって現表土と同程度の傾斜を有する堆積を示していた。おそらく台地上にある大学グラウンド等の整備の際に斜面に排土を行ったものと思われる。

3. 調査の結果

試掘調査の結果、近代以降の攪乱によって壊されている部分は存在するものの建築予定地域内には江戸時代の遺構および縄文時代晩期を中心とした遺物を包含する埋没谷が遺存することが確認できた。



1図 トレンチ1 東端土層堆積状況



2図 トレンチ1 自然堆積層



3図 トレンチ1 縄文土器出土状況



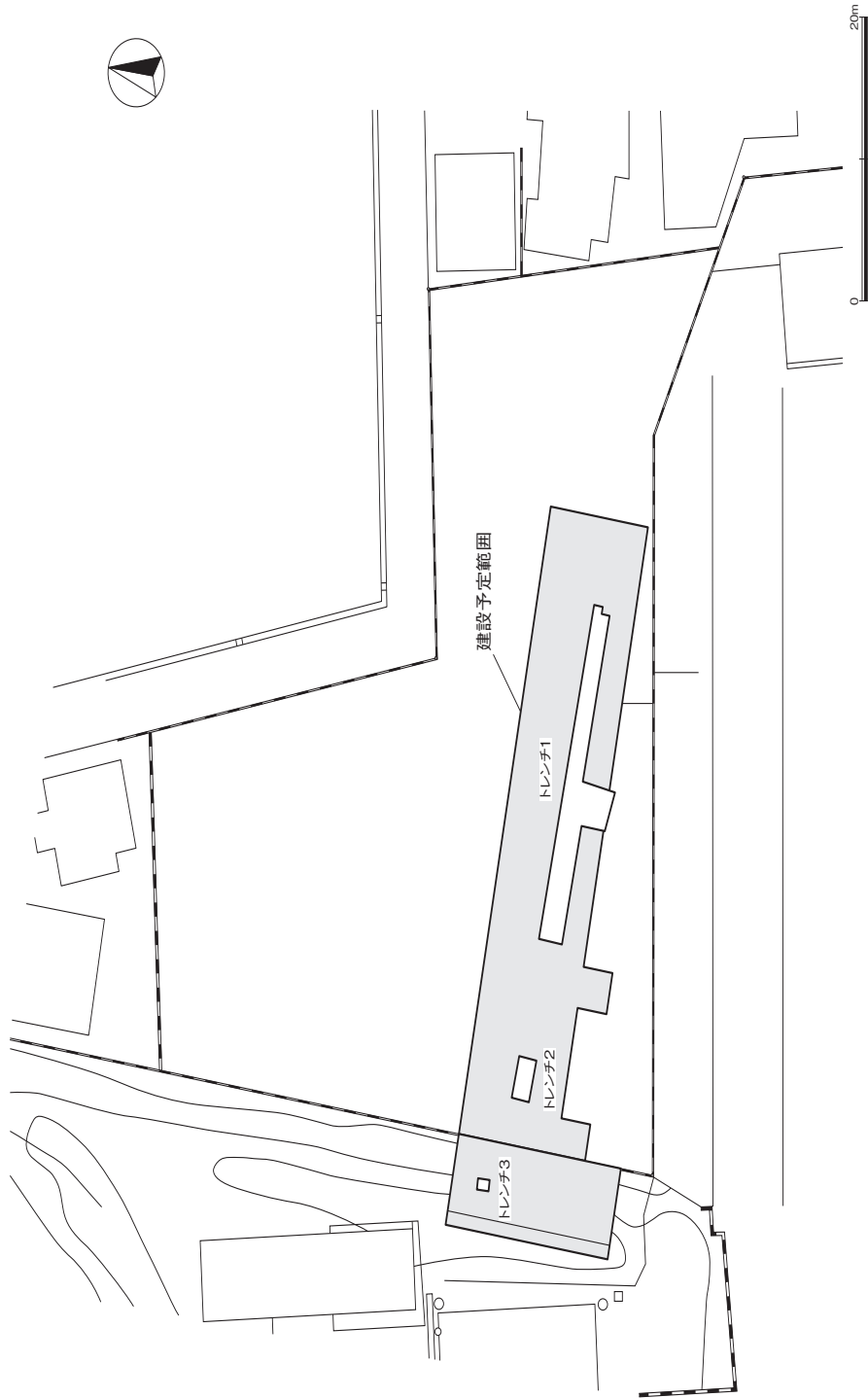
4図 トレンチ1 遺構確認状況



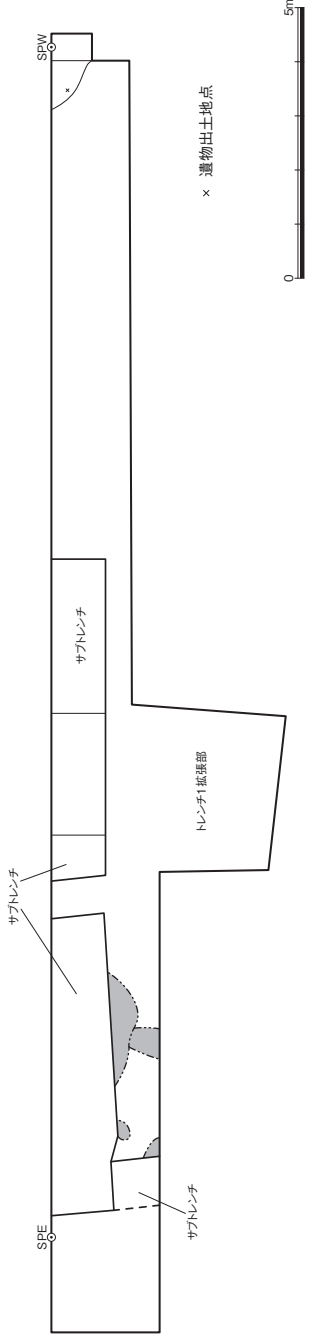
5 図 トレンチ 2 土層堆積状況



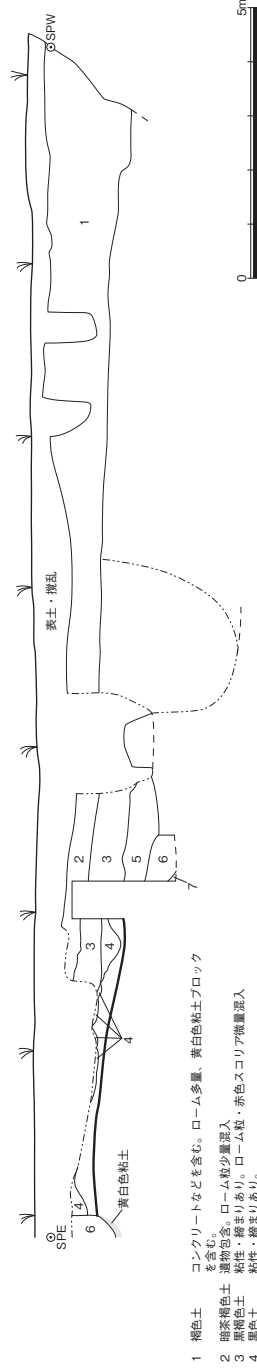
6 図 トレンチ 3 土層堆積状況



7 図 トレンチ配置図



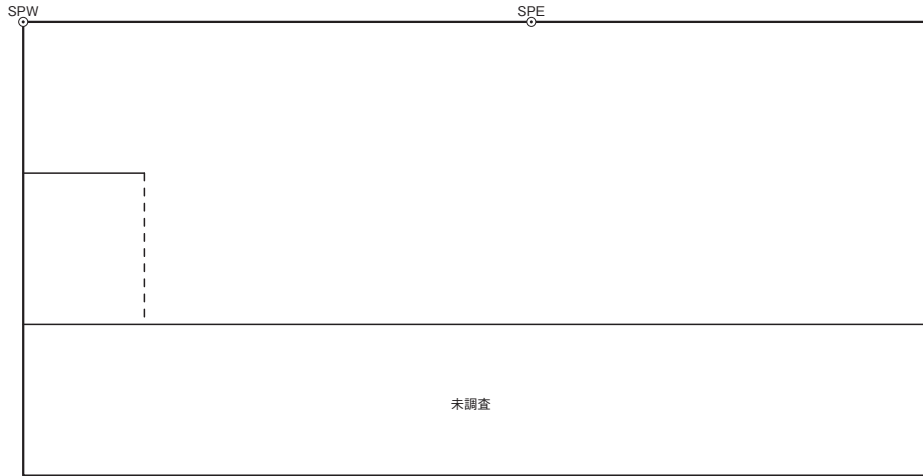
トレンチ1



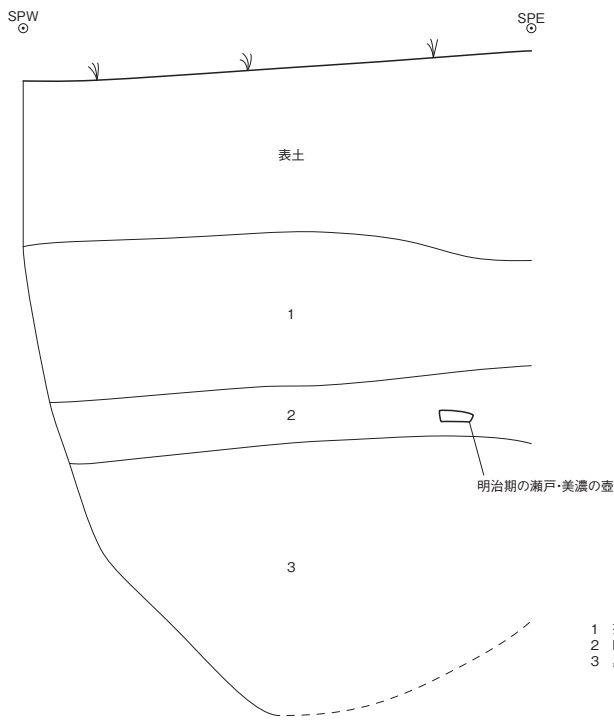
トレンチ1 北壁セクション

- 1 褐色土 コンクリートなどを含む。ローム多量、黄色粘土ブロックを含む。
- 2 暗茶褐色土 粘質。ローム粒少量混入。
- 3 黒褐色土 粘質。粘まりあり。ローム粒、赤色スコリア微量混入。
- 4 黒色土 粘質。粘まりあり。ローム粒、赤色スコリア微量混入。
- 5 暗茶褐色土 粘質。粘まりあり。粘質。粘まりあり。粘質。粘まりあり。
- 6 茶褐色土 粘質。粘まりあり。
- 7 黄褐色土 粘質。粘まりあり。

8 図 トレンチ 1 遺構検出状況および土層堆積状況



トレンチ2

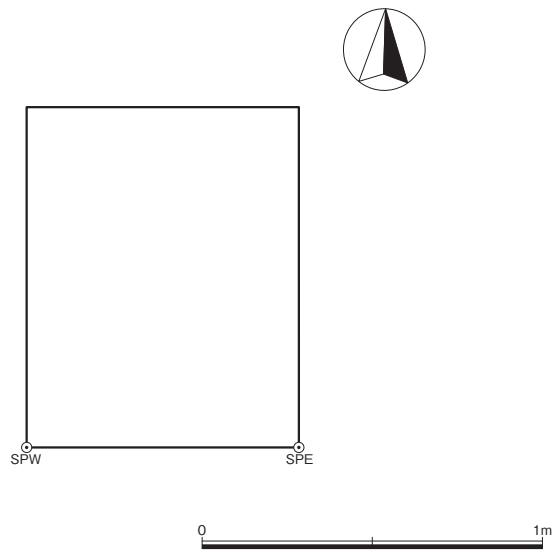


- 1 茶褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 黒褐色土 黄白色粘土など多く含む。

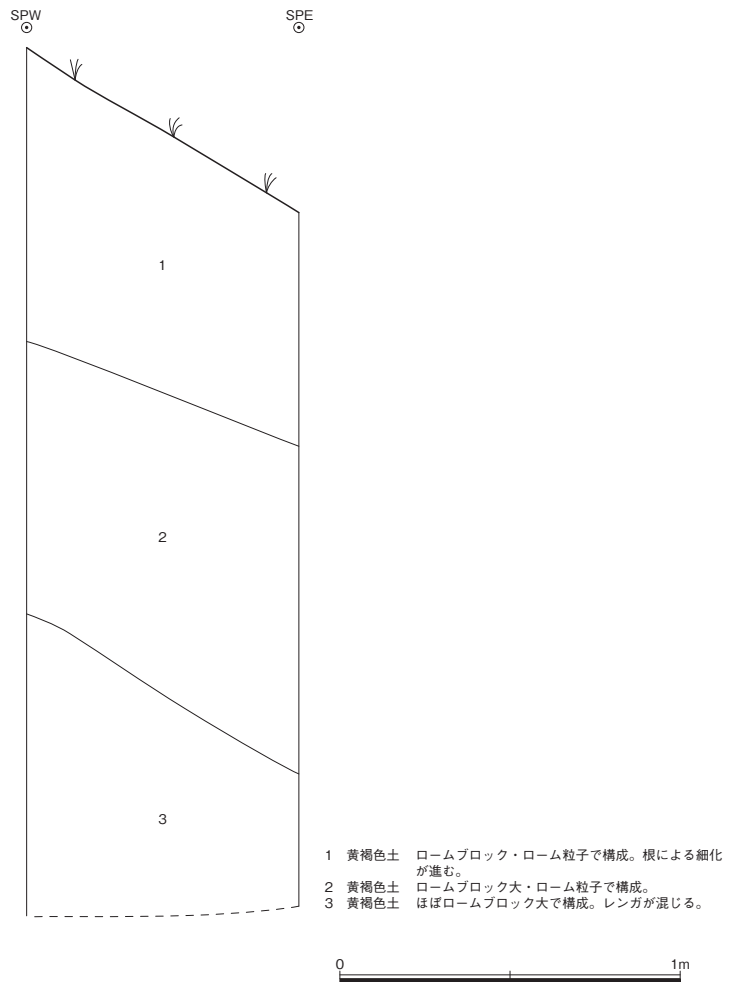


トレンチ2 北壁南側セクション図

9 図 トレンチ2 遺構検出状況および土層堆積状況



トレンチ3



トレンチ3 北壁南側セクション図

10 図 トレンチ 3 遺構検出状況および土層堆積状況



11 図 トレンチ1 遺物集中部平面図

文京区

東京大学白山構内の遺跡
医学部創設 150 周年記念（小石川養生所復元）建物地点

所在地 東京都文京区白山 3 - 7 - 1

調査期間 平成 19 年 9 月 3・4 日

調査面積 49.6㎡

調査担当 成瀬 晃司

1. 調査の経緯と経過

医学部では、当学部の創設 150 周年記念事業の一環として、文京区白山の理学系研究科附属植物園（通称、小石川植物園）内に残る小石川養生所井戸跡の南側に、小石川養生所建物の部分復元を計画した。当地は、縄文時代の小石川植物園内貝塚、江戸時代の「白山御殿」（館林藩江戸屋敷）、施薬園（小石川養生所）の存在が知られており、文京区によって「小石川植物園内貝塚・原町遺跡（遺跡番号：文京区No.21）」「小石川御薬園跡（遺跡番号：文京区No.81）」と命名され、周知の遺跡として登録されている場所で、該期の遺構・遺物の存在が予想された（1 図）。そのため、医学部から照会を受けた埋蔵文化財調査室は、上記の日程で埋蔵文化財の遺存状況を確認するために、試掘調査を行った。

2. 調査の方法と結果

小石川養生所復元建物の建築は、おおむね長方形を呈する約 150㎡の範囲で計画されている。当地の現況は、建設予定地の大半がツツジ園にかかっているため、それを避けて、建設範囲内を中心に逆「コ」の字状に 3 本のトレンチを設定した。トレンチは北側で北西から南東方向に延びるトレンチ 1、中央で北東から南西に延びるトレンチ 2、南側で北西から南東に延びるトレンチ 3 とした（2 図）。以下に各々のトレンチでの調査結果を概略する。

(1) トレンチ 1

北西から南東方向に延びるトレンチで、2 × 7 m で設定した（3・6 図）。基本土層は表土が 10cm、その下に煉瓦、ガラス瓶を含む近現代の整地層が 10 ~ 15cm 続く。その整地層下はローム層になり、沖積層は存在しない。またローム層表面はすでにハードロームに達している。トレンチ中央部ではローム層上に砂粒を含む暗褐色土が敲き締められた硬化面が存在する。遺構はローム面上においてピット、土坑などが検出されたが、そのうちトレンチ東部より検出されたコの字状の遺構には二次的焼成を受けた砂岩質の破碎礫が数点含まれている。トレンチ北西部より検出された長方形の遺構は覆土中に炭化物、灰層を含み、最上面は敲き締められていた。両遺構ともに火に関する遺構と考えられる。コの字状遺構の西側でトレンチ壁面にかかって検出されたピットには 1 辺 9 cm の柱痕が存在し、その脇には支えとなる破碎礫が 1 点埋設されていた。

(2) トレンチ2

北東から南西方向に延びるトレンチで、2×10mで設定した(5・7図)。基本土層はトレンチ1同様厚さ約10cmの表土があり、続いてローム粒を含む暗褐色土が10～15cmの厚さで堆積している。暗褐色土下はトレンチ1同様ハードロームである。トレンチ内からは土坑、ピットなど多数の遺構が検出された。トレンチ中央部西壁際でピット覆土上から1辺約20cmの扁平川原石が1点ほぼ水平に検出されたが、河原石下には根石はなく、その規模からも礎石かどうか疑わしい。

(3) トレンチ3

北西から南東方向に延びるトレンチで、栽培植物との位置関係から1.6×7.5mで設定した(4・8図)。基本土層はトレンチ2と同様であったが、遺構確認面においてピット、土坑など検出された全ての遺構に切られる粘土塊を含むローム主体覆土の拡がりが見出された(4図、鋼掛部分)。地山との境、その覆土の拡がりを確認するために、トレンチ2の西壁側に沿って幅1mのサブトレンチを設定し、本トレンチまで延長した。その拡張部を含めさらに再精査した結果、粘土混じりのローム土を覆土に持つ幅約1.5mを測る溝であることが確認された。主軸方向は設定したトレンチよりもやや南へ傾いている。

検出されたピットの中には柱の支えとした破碎礫が埋め込まれたもの、トレンチ方向とほぼ平行に約1間隔で並ぶものが存在した。

3. 調査の成果

前述した通り、小石川養生所復元建物建設予定地点から、江戸時代の遺構、遺物が検出された。遺構面はローム面での1面のみであったが、全てのトレンチにおいて、ソフトローム層の削平が確認され、江戸時代に大規模な造成工事が行われ一帯が平準化された結果が確認された。そしてトレンチ1にて検出された硬化面は、絵図面との比較から養生所台所の土間に該当する硬化面と推定される。

また、絵図面を念頭に置いて、現存する井戸(9図)との位置関係からトレンチを設定したが、絵図面の柱位置に該当する礎石、ピットは検出されなかった。

遺物は各トレンチから各々数十点出土したが、その内訳は瓦、陶磁器片が半々くらいである。瓦は約半数が丸瓦、平瓦を含む本瓦、残りが棧瓦であった。家紋瓦は検出されなかったが、調査区周辺の履歴から、正徳3年に廃絶された白山御殿に葺かれていた瓦の可能性が高いと考える。陶磁器類は19世紀代の製品が主体で、そのほとんどが陶器片で、磁器片は全体で10点未満である。いずれも特に養生所と関連付けられるものはない。動物遺体では、トレンチ3より、カキ3点、サザエの蓋1点が出土したが、蛎殻葺きとの関連は不明である。

全体として養生所と関連付けられる遺構、遺物はトレンチ1の硬化面程度しか認められなかったが、近代以降一貫して植物園として利用されてきた経緯から、遺構の遺存状況は良好で、また白山台の台地上に位置することから遺構確認面は現表下約20cmと非常に浅い状態に存在することが判明した。

4. 試掘調査から観た留意点と建設方法に関する協議結果

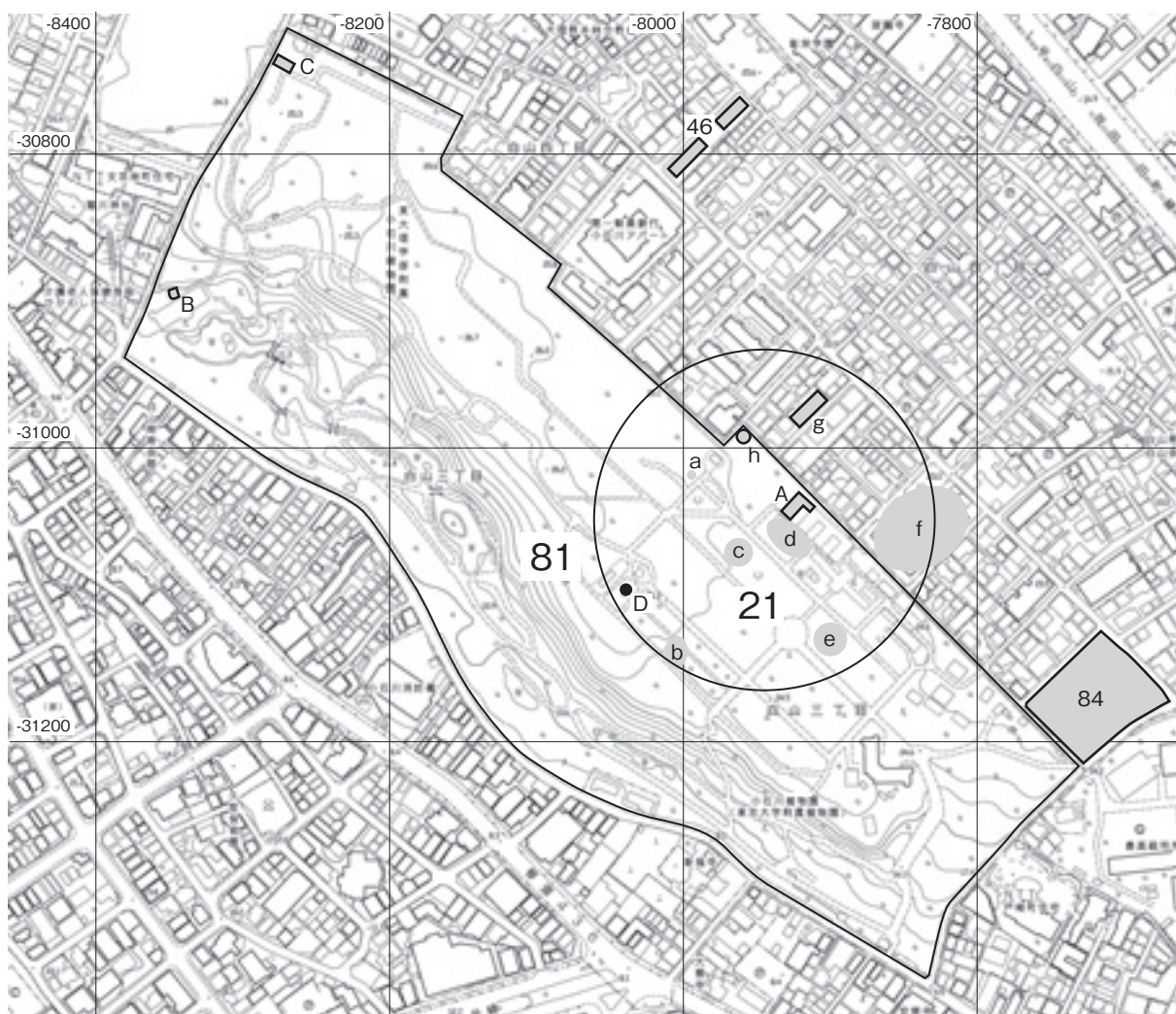
上記の試掘調査成果を踏まえ、建築に伴う基礎工事における留意点を以下に列記する。

今回の試掘調査における各トレンチは、本文中でも述べているとおり、現状の栽培植物、柵などを

避けて設定した。そのため2図に示したように、トレンチ1は建設予定区域の北端、トレンチ2は西端にかろうじてかかる範囲に、トレンチ3に関しては建設予定区域外にならざるを得なかった。よって、今回の調査によって確認された遺構遺存状況などの成果をもとに、十分に留意して建築工事にあたる必要がある。

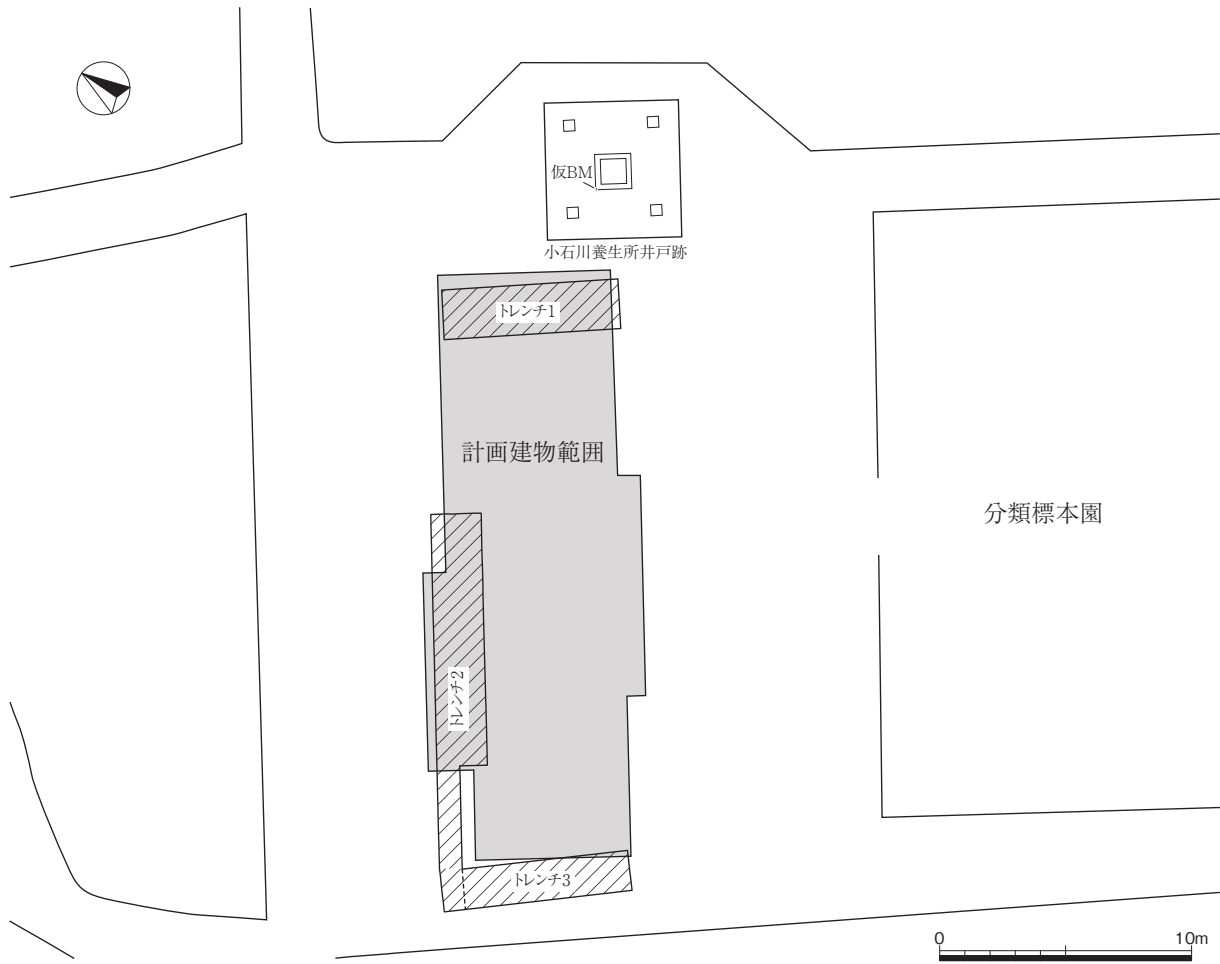
建設予定地点の現況は一見して平坦地に見て取れる。しかし5図のトレンチ2セクション図から、現表は、傾斜変換点に近い南方から北方向に向けて緩やかに傾斜していることが確認された。遺構確認面であるローム層上面レベルも同様の結果となっている。トレンチ1、3に関しては現表、ローム層上面レベルともほぼ平坦である。この結果、最も標高の高い部分で、仮BM（ベンチマーク＝0基準）とした現存井戸切石枠西角上レベル（2図）より、-43cmで遺構面に達することが確認された。よって、計画建物の根切り基準とするGL（現表）レベル設定において仮BMを反映した設計を行い、遺構を損傷しないよう十分に留意して基礎工事における根切り深度の設定を行う必要がある。

試掘調査結果と上記の留意事項所見をもとに、文京区と医学部、施設部による協議・検討の結果、現状保存を前提に、建設地に盛り土をして、埋蔵文化財を破壊しない方法をとることで一致した。

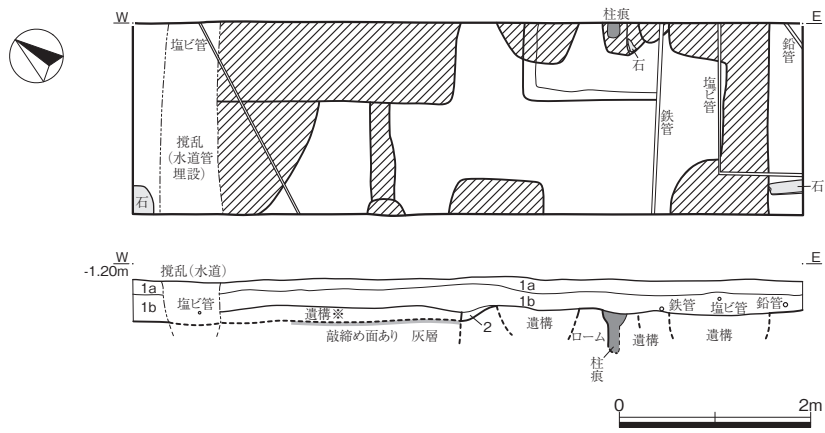


1 図 調査地点位置図 1/5000

D：本試掘調査地点 A：理学系研究科附属植物園研究温室地点、B：総合研究博物館小石川分館地点、C：農学生命科学研究科小石川樹木園根圏観察温室地点 21：小石川植物園内貝塚・原町（a～f：貝類等散布地点、g：第Ⅰ地点、h：第Ⅱ地点）、46：白山四丁目、81：小石川御薬園跡、84：白山御殿跡
※英大文字は、白山構内での事前調査地点



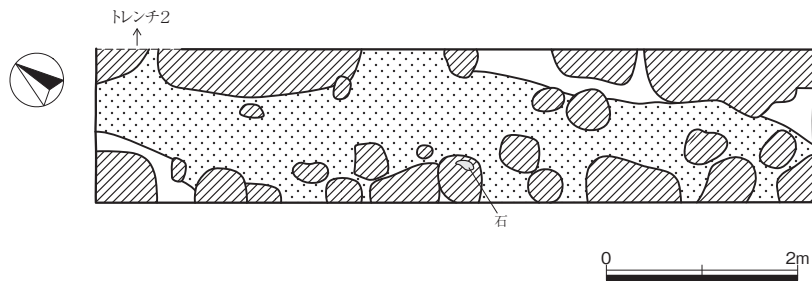
2図 トレンチ3 遺構検出状況および土層堆積状況



- 1a層 表土
- 1b層 近現代の整地層(煉瓦・緑石含)
- 2層 褐色土(ローム粒含 しまりやや強)
- 遺構 ※暗灰褐色土(ローム粒・炭化物粒・被熱灰層含む 粘性やや強 しまりやや強)

※レベル値は、眼高(仮BM+100.0cm)からの比高差

3 図 トレンチ 1



4 図 トレンチ 3



6 図 トレンチ 1



7 図 トレンチ 2



8 図 トレンチ 3



9 図 小石川養生所井戸
(写真井戸奥が調査地点)



10 図 調査風景

本郷 81

経済学研究科学術交流棟地点 (HEA07)

所在地 東京都文京区本郷7-3-1

調査期間 2008年3月17日～7月11日、9月11日～24日、2009年2月2日～10日

調査面積 451㎡

調査担当 成瀬 晃司

1. 調査の経緯と経過

東京大学は、赤門南側に位置する学生会館分館中庭内に、経済学研究科学術交流棟の新営を計画した。建設予定地点は、「文京区遺跡No.37 椿山古墳」として周知の遺跡に該当するため、文化財保護法第93条に基づく事前発掘調査の必要があった。そのため本学施設・資産系との協議の結果、平成20年3月17日から7月11日にかけて1次調査を9月11日から24日にかけて2次調査を翌平成21年2月2日から13日にかけて3次調査を実施した。

2. 調査の概要

本地点の調査では、近代前田邸に関する2枚の遺構面(1、2面)、近世加賀藩本郷邸に関する遺構面(3面)および町屋跡に関する2枚の遺構面(4、5面)が確認され、各々に伴う遺構・遺物が検出された。検出遺構の総数は718基、出土遺物の総量はコンテナ230箱を数える。それら検出遺構、出土遺物の大半は町屋跡に帰属するものである。以下に時代、土地利用に沿って概要を記す。

(1) 町屋段階

2枚の生活面が検出された。下面(5面)はローム層直上にある(3図)。東西方向に並ぶ柱穴列が4群検出された。柱穴には10cm程度の柱痕が認められること、柱穴を跨いで構築された遺構がほとんどないこと、列間で各ピットに対応関係が認められないことなどから、掘立柱の地境塀と考えられる。また各列において柱穴の重複が著しく、何度か塀の建て替えが行われていたことが認められる。柱穴列間は約360cmを測り、間口2間の地割りであったことが想定される。

柱穴列以外で検出された遺構には、井戸、土坑などがある。井戸は直径1m未満の足掛けを伴うタイプで、17世紀代に比定される(SE558、SE717)。土坑は不定形なタイプが多い。出土遺物には手づくねカワラケ、織部向付(1図)など17世紀前葉に比定される製品が認められ、町屋の形成期を知る手掛かりとなる(SK226、SK430、SP674、SK707)。また遺構覆土中に多量の貝類や、マグロの頭部が複数個体廃棄された遺構があり(SK231、SK593)、情報学環・福武ホール地点(本郷78)同様、魚介類を扱った生業をしていたことが推定される(2図)(東京大学埋蔵文化財調査室2006)。

町屋に帰属する遺構の主体は上面(4面)にある。上面からは、地下式麴室(SU62)、地下室(SU534、SU142、SU557、SU61、SU510、SU584)、カマドもしくは炉跡と推定される灰・焼土堆積遺構、土坑など多数の遺構が検出された(4～9図)。

地下式麹室 (SU62) は、調査区南端付近からほぼ正方形を呈する竪坑が検出された。入口部にあたる竪坑は1辺約2mで、当時の地表面下約4mに床面がある。床面には梯子受けの小穴が2基存在する。竪坑床面から各壁面に1箇所横坑が穿たれる。横坑は平面台形状の室部に繋がり、総じて羽子板状の平面形を呈す。室部の横断面は天井部がアーチ形に湾曲する蒲鉾形をしている。室部には床面上約50cmに前壁と奥壁に対になる小穴が穿たれてる。またそれとほぼ同レベルの側壁上に竹杭痕が並ぶ。床面中央部は踏み固められ、表面に作業道具を引きずった痕跡と推定される多数の線条痕が認められる。側壁寄りには竹杭痕が並ぶ。前・奥壁の小穴の位置と側壁、床面の竹杭痕の位置関係から、丸太もしくは竹材を前・奥壁の小穴に差し掛渡し、その補強として竹杭を縦、横に打ち込み棚を設置したものと推定される。この棚の上に麹蓋と呼ばれる低い箱を並べ、麹を培養したのだろう。2室の大部分は調査区域外へ広がっているが、床面には排水溝と推定される断面V字形の溝が蛇行して竪坑方向に延びている。3室は北西角、南東角の床面上に直径約20cmを測る坑が水平方向に穿たれている。坑内には瓦片、礫片が詰められており、何らかを差し込んだことが窺える。室部中央付近の床面直上には、藁状の繊維が観察される炭化物が広がっている。但しその直下の床面には被熱痕は認められない。4室奥壁付近でも、3室同様の炭化物が確認された。また4室は、1次調査でSU177とした地下室竪坑と室内で接続しており、床面及び壁面の状況から、逆L字状を呈する単一遺構で室奥部に地上へ繋がる竪坑を有する形態であることが明らかになった。

調査区北東部に位置するSF187、SF205はカマドと推定される。SF187は袖部に切石を積み重ねた芯を有している。SF205は4箇所の焼土集中箇所があるが、覆土の堆積状況から作り替えが考えられ、同時期には最大2基の使用が推定される。ともに加賀藩邸外周地境石組溝であるSD15に切られていることからカマド本体の遺存状況は悪く、袖と推定される粘土塊が部分的に残存しているにすぎない。よって形態の詳細は認識しがたいが、火床土面は4面遺構確認面より約40～50cm深く、かなり掘り込まれた構造であったことが推定される。

調査区中央部R67グリッド付近に位置するSF73、SF165、SF201などは炉跡と考えられる。SF165は長方形の掘り方の壁面と坑底に粘土枠を貼り、そのなかに灰を充填している。SF73は掘り方内に播鉢を埋設し、そのなかに灰を充填する形態である。またSF165の南側に位置するSX102は不整長方形を呈する浅い遺構で、覆土中には細かく砕かれた瓦片が多量に含まれている。その様相から土間などの硬化面を構築するために瓦片を充填したことが推定され、隣接するSF165との関連から台所跡の可能性も考えられる。

本遺構面は調査区東南部において、2枚の生活面を確認することができる。その下面(4-2面)は遺構面が被熱し、直上に焼土層の拡がり認められることから、火災に遭った結果と考えられる。文政9年とする町屋の下限から、目黒行人坂の火事による被災の可能性が推定される。

(2) 加賀藩邸前火除け地・御拝借地段階

3面からは、調査区一帯に広がる硬化面と、調査区北端を東西に延び東側拡張部で約90°南に折れ南北方向に延びる石組溝SD15が検出された(10～13図)。硬化面はロームをつき固めて構築されている。SD15は間知石積みの石組溝であるが、東西部分の北側石積は近代に取り壊されほとんど残存していない。ごくわずか残存している部分では、幅80～90cmの長方形切石で構築されている。また、南側においても南北方向に屈曲するコーナー部分に関して同規模の切石が使用されている。溝幅は溝底部で約110cmを測り、溝底には漆喰が貼られている。

ところで、加賀藩では文政10(1827)年に13代藩主前田斉泰のもとへ徳川将軍家から浴姫が入興



1 図 SK707 出土織部向付

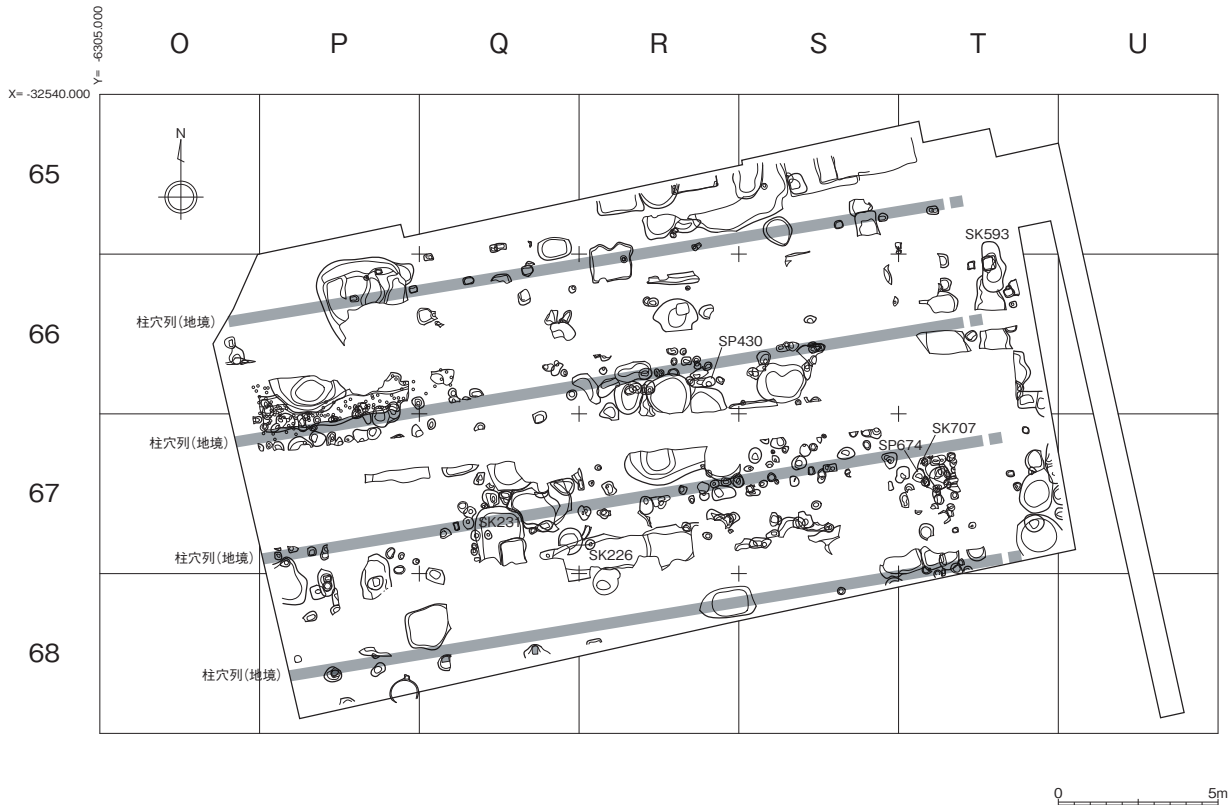


2 図 SK231 動物遺体検出状況

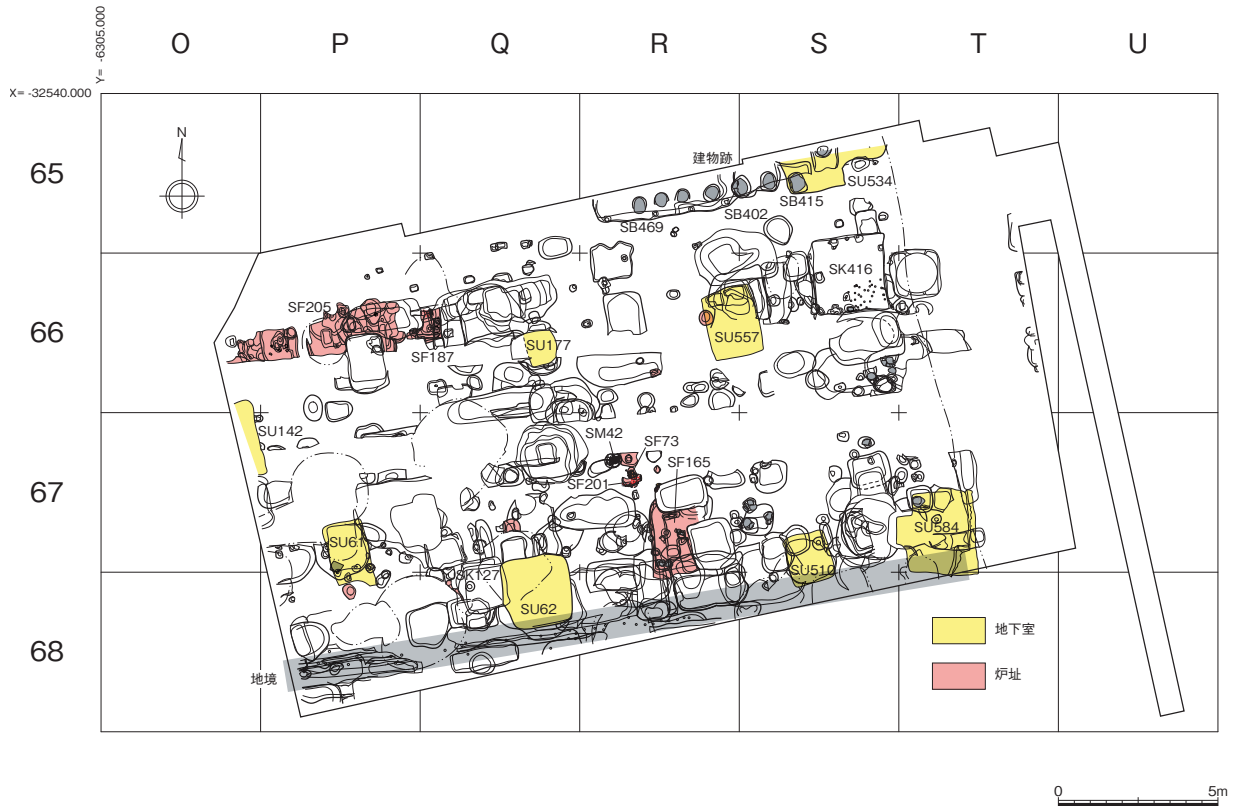
している。輿入にともなって、表門北側の町屋は撤去させられ、御住居門（後に御守殿門）を造営するために屋敷を拡張し、前面は火除け地となった。この屋敷拡張に伴う地境溝が現赤門北側で調査を行った情報学環・福武ホール地点でも検出されている。溝底に漆喰を貼る構造は情報学環・福武ホール地点検出の地境溝でも認められ、文政10年の屋敷地拡張によって構築された藩邸外周溝の特徴といえる。

（3）近代前田邸段階

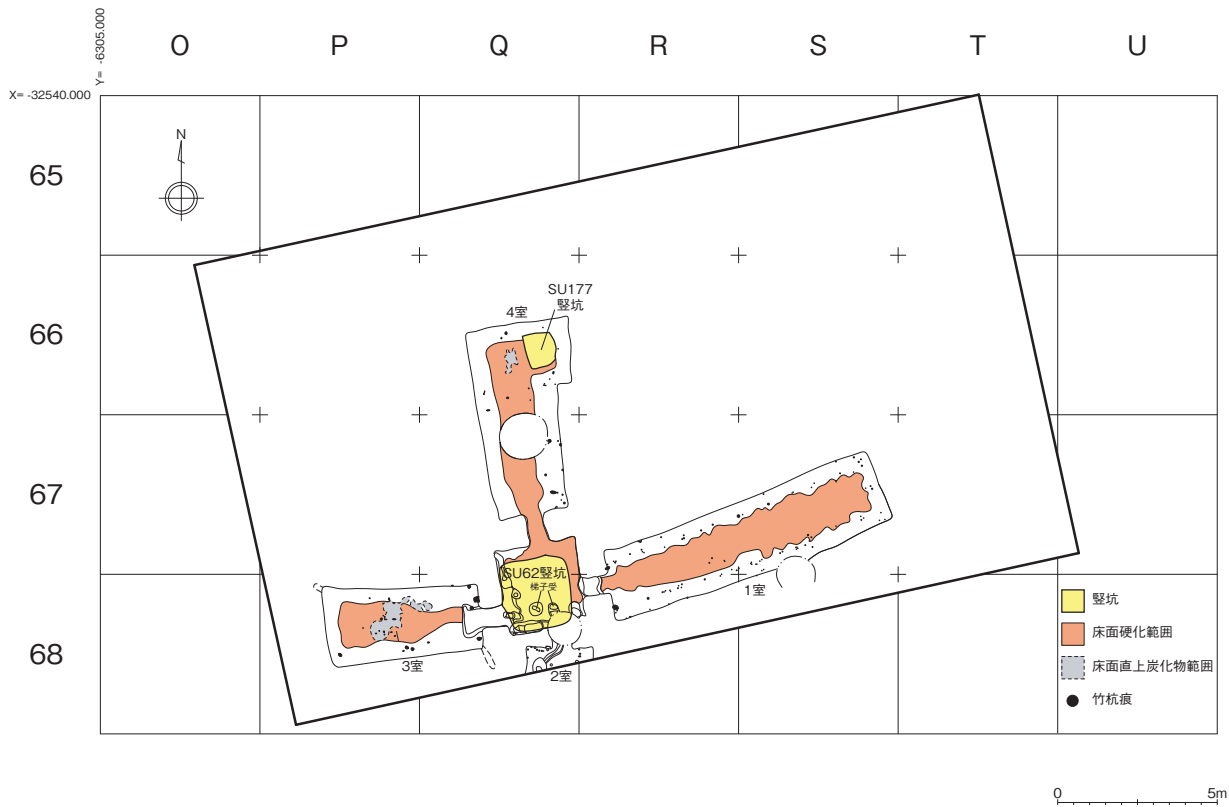
2面では、中山道から近代前田邸表門に通じるアプローチと近世から踏襲された境界施設が検出さ



3 図 近世の遺構 (1)



4 図 近世の遺構 (2)



5 図 SU62 全体図 (2 次調査)



6図 SU62 (2次調査)



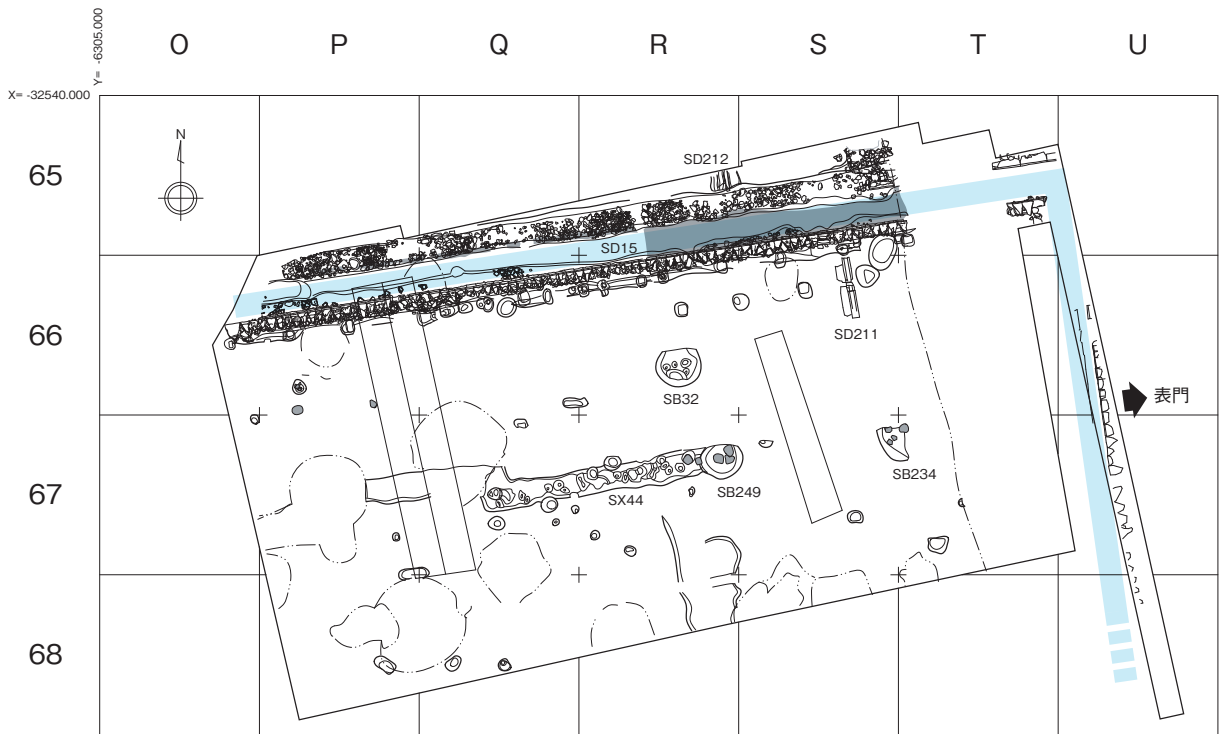
7図 SF187 袖切石検出状況



8図 SF205 検出状況



9図 SF73 検出状況



10図 近世の遺構 (3)
(SD内、グレーの網掛けは漆喰貼床残存範囲)



11 図 SD15 漆喰貼床面検出状況



12 図 SD15 石積状況



13 図 SD15 コーナー切石検出状況

れた (14・15 図)。SD27 (15 図) は東西方向に延びる断面長方形の溝で、溝底直上には木樋が敷設されており、上水施設と考えられる (17・18 図)。近世段階も合わせて邸内に導水された上水施設に、情報学環・福武ホール地点で検出され、出土遺物の年代観から千川上水の導水施設と判断された木樋埋設溝がある。千川上水が飲料用水として利用されたのは元禄 9 (1696) 年～享保 7 (1722) 年、天明元 (1781) 年～天明 6 (1786) 年 (享保 7 年～天明元年間は、上水機能が停止され、農業用水として機能した) といわれているが、本遺構の覆土には近代遺物が含まれていたことからそれには該当せず、明治 13 年に岩崎弥太郎らによって再興され、明治 40 年まで運用された千川水道株式会社時代の上水道と考えられる。SD29 (15 図) は SD27 と平行して東西方向に延びる断面長方形の溝である (17・19 図)。調査区東側で煉瓦柵に接続し、それを介して屈曲し南進する。煉瓦柵の西壁、南壁には、溝に対応する位置に、鉄管を埋設した痕跡が認められる。溝内からは鉄管は検出されなかったが、覆土にそれを抜き取った痕跡が観察されたことから、本溝は鉄管埋設溝と推定される。埋設鉄管の用途に関しては、近代前田邸遺構が検出された医学部教育研究棟地点 (本郷 24) で、同施設の鉄管内から電線が検出されたことより電気線埋設施設と判断される。SR8 は破碎礫敷設遺構で、SD27、SD29 埋設後に構築されている (16 図)。本遺構は SD13、SD14 の鉄管埋設溝を含む SD15 南側エリア一面を整地した砂利層で覆われており、道路基礎遺構と考えられ、馬車などの重量車輛通行に対応するための補強構造と推定される。使用された破碎礫のなかには加工位置を示す朱線が引かれたものがあり、これらが建築廃材をリサイクルしたことを窺わせている。SD15 は前節で述べた近世本郷邸地境溝で、近代以降も機能し続けている。但し北側の石積は解体され長方形の切石を主体とした基礎石が組み

(15 図)、その上にコンクリートによる基礎が構築されている (14 図)。コンクリート基礎の断面形は中央部が一段高い凸形を呈しており、高い部分に煉瓦の剥離痕が認められることと、約 180cm 間隔で円形の浅い凹みが並ぶことから、180cm 間隔の柱を持つ煉瓦塀の基礎遺構と推定され、明治 40 年の前田侯爵邸屋敷図の表門北側地境塀に該当するものと考えられる。

3. 調査の成果と課題

本地点の調査では、前節で述べたように文政 9 年を下限とした町屋に関する資料と、文政 10 年～大正 15 年までの前田邸表門前に関する資料が検出された。

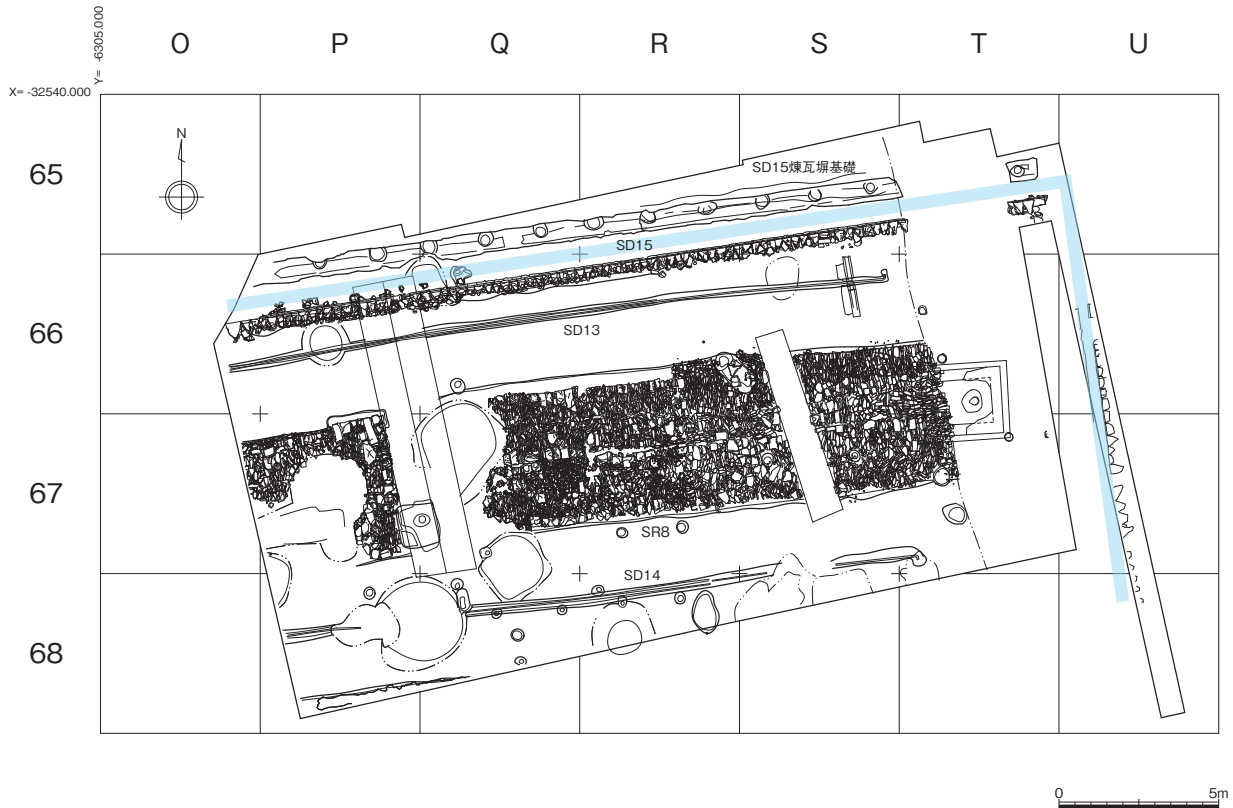
町屋に関しては、土地利用と生業がテーマとなる。土地利用に関しては、5 面から約 2 間間隔の地割りが確認され、町屋形成期には間口二間の地割りを想定することができた。それに対して 4 面では調査区南端で地割りと推定される境界施設が検出されたものの、北側の境界は不明である。同街区を調査した情報学環・福武ホール地点でも明確な居住区境界施設が検出されなかった。今後、両地点の遺構配置およびその変遷などの分析から 18 世紀代の町割復元が課題となる。生業に関する遺構では地下式麴室、カマド跡が、遺物では魚介類を主体とした多量の動物遺体が検出された。カマド跡は、その規模から麴米生産をはじめ味噌生産が行われていた可能性も指摘できる。動物遺体がまとまって出土する遺構が 4、5 面双方に認められるのに対し、カマド跡、地下式麴室は 4 面に帰属することから、居住者の生業が水産（加工）販売業から醸造業へと変化していく過程が推定される。土地利用ともに情報学環・福武ホール地点での分析も合わせ、さらに詳細な検討を加えていきたい。

前田邸に関しては、SD15 によって表門周辺の位置関係が把握でき、やはり情報学環・福武ホール地点で検出された文政 10 年以降の本郷邸地境溝と合わせ、周辺の調査地点を含む本郷邸西部域に関して、本郷邸絵図との詳細な位置検討が可能になり、検出遺構と絵図面との対比において期待がかかる。近代では、上水、電気の前田邸導入年代に関し、SR8 やその他関連遺構の分析からの解明が期待される。また、本地点以外に先述した医学部教育研究棟地点のほか、総合研究博物館地点などで該期の遺構、遺物が調査されており、それらとの比較から近代技術の復元（特に前田侯爵邸関連施設）の検討も課題である。

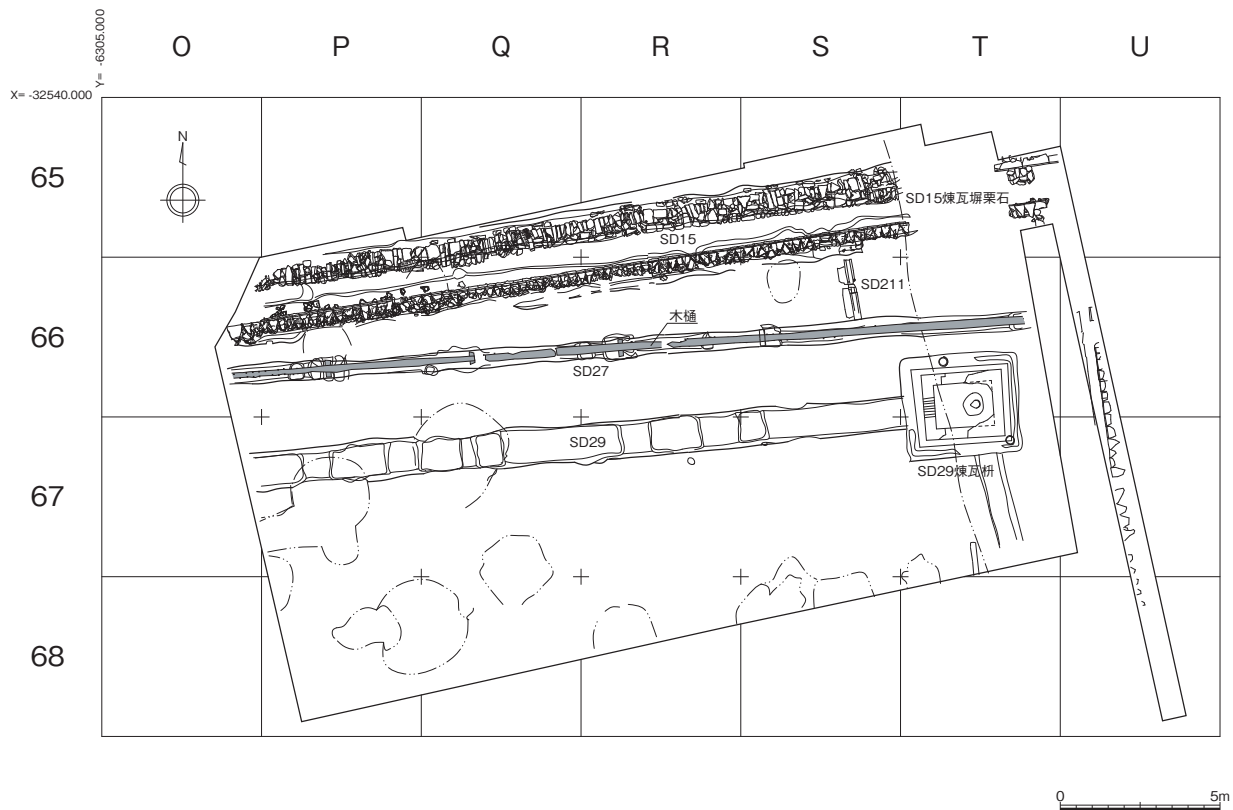
4. 調査地点と「文京区遺跡No.37 椿山古墳」の位置

本地点の登録遺跡名称は、冒頭に記したように「文京区遺跡No.37 椿山古墳」である。周知の遺跡とされたのは、墳丘状の微高地の存在が認識されたからに違いないが、本地点の近世以降の土地利用は、町屋→加賀藩本郷邸表門前火除地・拝借地→近代前田邸表門前アプローチ→東京大学（植樹帯＋散策路→中庭）の変遷を辿っている。近世段階からすでに平坦地であったことが容易に想像でき、微高地が存在した可能性は極めて低い。

ところで、加賀藩邸を描いた数々の絵図には、表門の北側かつ赤門の東側に「富士山」と記された築山が描かれている (20 図 -a)。この富士山は文献資料から、駒込に移された富士権現であったことが通説となっている。本郷キャンパスの建物変遷を記録した本郷建物配置図では、赤門の東側に昭和 40 年度までその存在が確認できるが、経済学部研究室（現在の赤門総合研究棟）の建設によって消滅したことが判る (20 図 -b)。昭和 42 年刊行の文京区史では、江戸時代から加賀藩邸と本郷四・五丁目町屋を区画する通称日影通りと呼ばれる路地の北側にあり、加賀藩邸絵図や、本郷建物配置図に



14図 近代の遺構 (1)



15図 近代の遺構 (2)



16図 SR8 破碎礫・SD15 コンクリート基礎



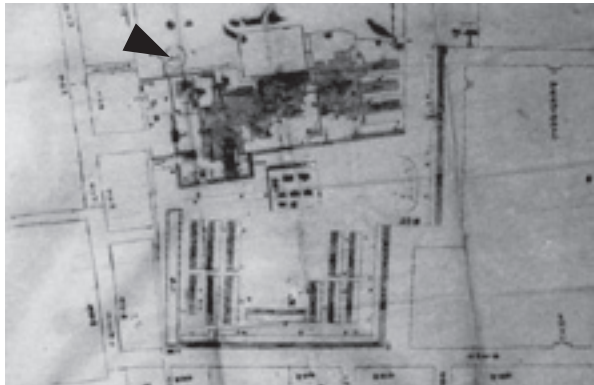
17図 SD27・SD29



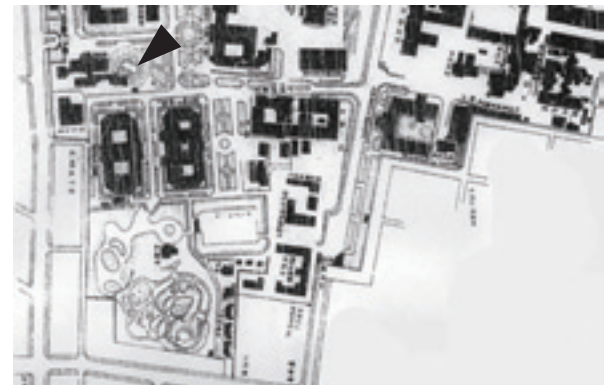
18図 SD27 木桶検出状況



19図 SD29 煉瓦基礎内配管孔検出状況



a 上屋敷総絵図（18世紀後葉）より抜粋



b 本郷建物配置図（昭和39年度）より抜粋



c 文京区史（1967年刊行）より抜粋



d 東京都遺跡地図（1996年刊行）より抜粋

20図 絵図・地形図にみられる富士山（椿山古墳？）の位置（▲は筆者加筆）

示されたマウントの位置に対応している（20 図 - c）。以上から、現在、本地点に登録されている「文京区No.37 椿山古墳」は（20 図 - d）、昭和 40 年まで赤門東側に存在した加賀藩邸内の富士山に該当し、遺跡地図の表記位置がいつの間にかずれてしまったことは明らかであり、遺跡地図の早急な訂正を願うものである。

【参考文献】

- 東京大学埋蔵文化財調査室 2006 「情報学環・福武ホール地点発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』6
東京都教育委員会 1996 『東京都遺跡地図』
練馬区郷土資料室 2006 『仙川上水展～上水の流れと人々の暮らし～』
文京区役所 1967 『文京区史』巻一

本郷 82

懐徳門地点 (HKM07)

所在地 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学本郷構内 文京区遺跡番号 47 本郷台遺跡群範囲内

調査期間 2007年6月20日～7月20日

調査面積 39㎡

調査担当 堀内 秀樹

1. 調査の経緯と経過

東京大学は、博物館の入口付近に新たに通用門の建築を計画した(1-1 図上)。建設予定地点は文京区 47 本郷台遺跡群として周知の遺跡の範囲内であり、発掘調査の必要があった。発掘調査は2007年6月20日から開始され、7月20日に全ての調査が終了した。

2. 調査の概要

発掘調査の結果、確認された遺構は、江戸時代の生活面が4面とそれに伴う藩邸境、溝、土坑、ピット、門跡など70基、縄文時代の土坑1基の合計71基が確認された。遺物は、江戸時代陶磁器・土器、金属製品、瓦、自然遺物などコンテナ箱に10箱、縄文時代土器1点が出土した。

江戸時代の生活面は、上からA面(18世紀後半～幕末)、B面(18世紀中葉)、C面(17世紀末～18世紀前葉)、D面(ローム面、江戸時代は17世紀前半)の4面が確認され、加賀藩邸に属する生活面(A～C面)と明暦の大火以前の御家人屋敷時代に属する生活面(D面)に分けられた。遺構はそれぞれに複数基確認され、当該地の土地利用は江戸時代を通して活発であったことが窺えた。

(1) D面の状況 (1-1 図)

D面確認の遺構は、粒子の細かい黒褐色の覆土を有する遺構群がその中心で、小ピット、壁や坑底などに凹凸を持つ不連続な畝状遺構(SK66)が確認された。この特徴的な覆土はこれまでの調査でINC地点(本郷68)、医学部教育研究棟地点(本郷24)、経済学部総合研究棟地点(本郷54)、薬学部新館地点(本郷15)などの該期の遺構から確認されている。また、屋敷境と推定できる遺構(SK35、SK36、SK37)は約1間間隔で確認され(4図)、このうちSK35から初期伊万里を含む17世紀前半の遺物が出土した。これらから当該地は17世紀前半から屋敷と道の境界域であったことが確認され、その構造は2図の様であったことが確認できた。

(2) C面の状況 (1-2 図)

C面の遺構は、調査区の北端、中央、南端に位置する大形柱穴遺構(SK26、SK27、SK16)を中心に展開していた(5図)。3遺構は形態、構造、覆土の状況などに類似点が多く、一連の構造物であったことが推定できる。中央のSK27の平面形は隅丸方形ないしは楕円形を呈し、漏斗状にすぼまりながら坑底に達する。壁面には明瞭な工具痕が残されていた。確認面での規模は、東西170cm、南

北 200cm、深さは最大 200cm を計測する。中央には坑底からやや浮いて平石が配されており、それを根石に使用した状態で、一辺 8 寸の角柱の痕跡が上部まで貫いていた (6 図)。この角柱の痕跡は SK26 にも確認された。また、SK27 には梅鉢の軒丸瓦が出土しており、本遺構群が加賀藩邸に伴うものと推定できた。角柱の間隔は約 2 間で、構造や寸法から門などの大型の構造物であろうと思われる。

(3) B 面の状況 (1-3 図)

A 面の約 10cm 下に硬化面 B 面が確認された。B 面では遺物が比較的多く出土した遺構が多かった。工学部 1 号館地点 (本郷 17) SK01 や INC 地点 (本郷 68) SK1 など藩邸内における最終廃棄土坑とは異なり、屋敷縁辺部に小規模廃棄されたものと考えることができよう。SK22、SK23 などが該当する (7 図)。屋敷境周辺では境に沿って、坑底付近に槌状の木杵を持つ溝 (SD14) が確認された (8 図)。また、土層の観察から B 面使用時の境は A 面使用時の石畳状の石組みは存在しておらず、少なくとも石積みが一段低かったと推定された。

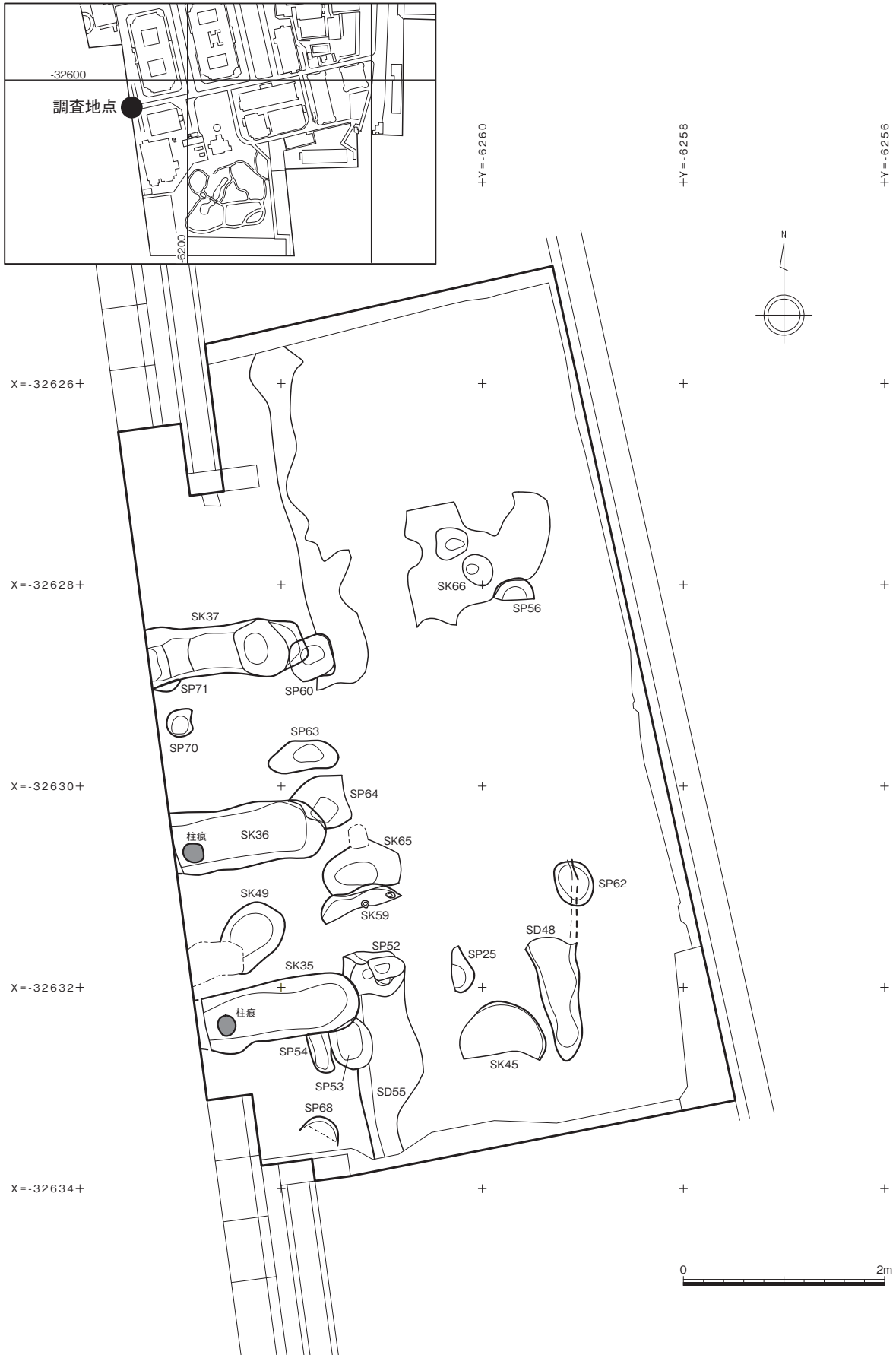
(4) A 面の状況 (1-4 図)

A 面は藩邸側全域で確認された硬化面である。砂質土を用いて非常に硬化され、やや東側に向かって傾斜を持って確認された。土層の観察からこの面と同時存在したと考えられる境の石組塀 (SA01、9 図) は、現在も東京大学の境界として利用されている。道路側の石積みは下部二段が現代の道路によって埋まっている。また、藩邸側には間知石が一段もしくは二段分ラフに積まれており (10 図)、藩邸境の塀はこの石畳の上に構築されていたと判断された (3 図)。この石畳の裏込めから 18 世紀後半の陶磁器類が出土している。一方、藩邸の外側は、約 40cm の溝を隔てて一段の間知石が向かい合っただけで確認されたことから、藩邸の塀と道路の境には側溝が巡っていたことが確認できた。この道路側の側溝は、藩邸側の SA01 とは異なる工程で構築されており、SA01 最下段から道路側に掘方が掘られ、間知石を配していた (11 図)。掘方からは 19 世紀前半の青土瓶や瀬戸・美濃系磁器などが出土しており、SA01 と年代差が認められる。この他十数基の土坑、ピット、溝などが確認された。

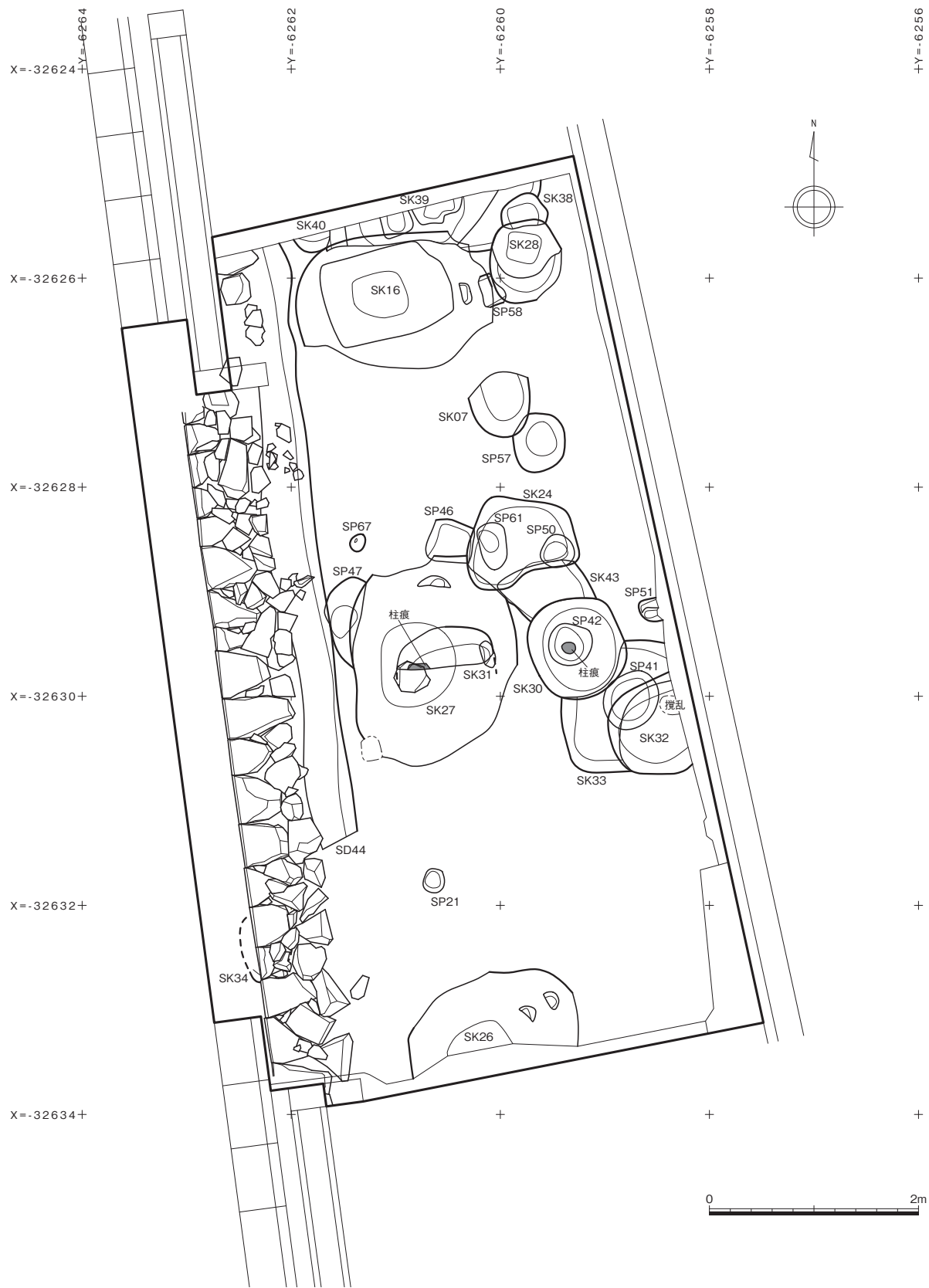
3. 調査の成果と課題

本調査は、面積も小さく期間も短かったが、藩邸南西側における 17 世紀前半～幕末期までの境と生活面の変遷が明らかになったことで、収穫は大きかった。現在の東京大学の境を見ると学士会分館の角、本郷五丁目町屋から南に向かって傾斜を有し、大学の南西角では十段階になる石段が積まれている。また、総合研究博物館付近には藩邸内から外へ向かっての排水口が二箇所確認される。これらから当時の日影通り道路面より藩邸内の生活面がかなり高いことが想定されたが、実際には調査区付近では間知石一段分の比高差しか認められなかった。また、排水が注ぐ藩邸を巡る側溝は、1792～96 年頃の状況を描いたとされる「加藩本郷屋敷絵図」(石川県立歴史博物館蔵)に初めて記載されるが、流路幅約 40cm で敷石も認められなかった。

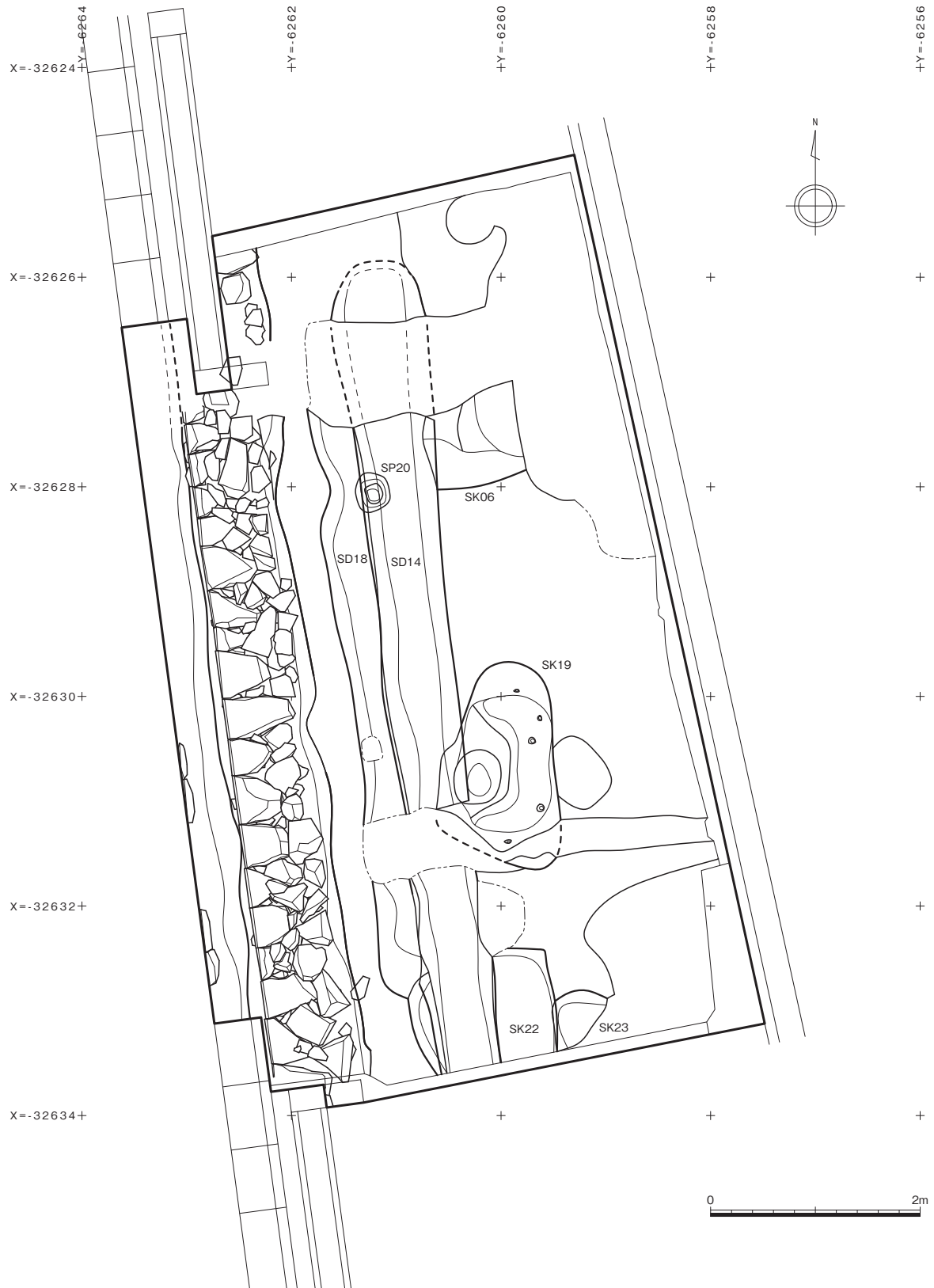
調査区内は現存する絵図面では「南之馬場」あるいは馬場と藩邸境の間になると考えられる。調査では馬場と思われる痕跡は確認できなかったが、あるいは A 面上面に薄く存在した砂層がこれにあたる可能性もある。また、17 世紀後半の建築物と考えられる 3 基の大型柱穴はこれまでの本郷構内の調査では類例が見つけられない。



1-1 図 D面遺構配置図

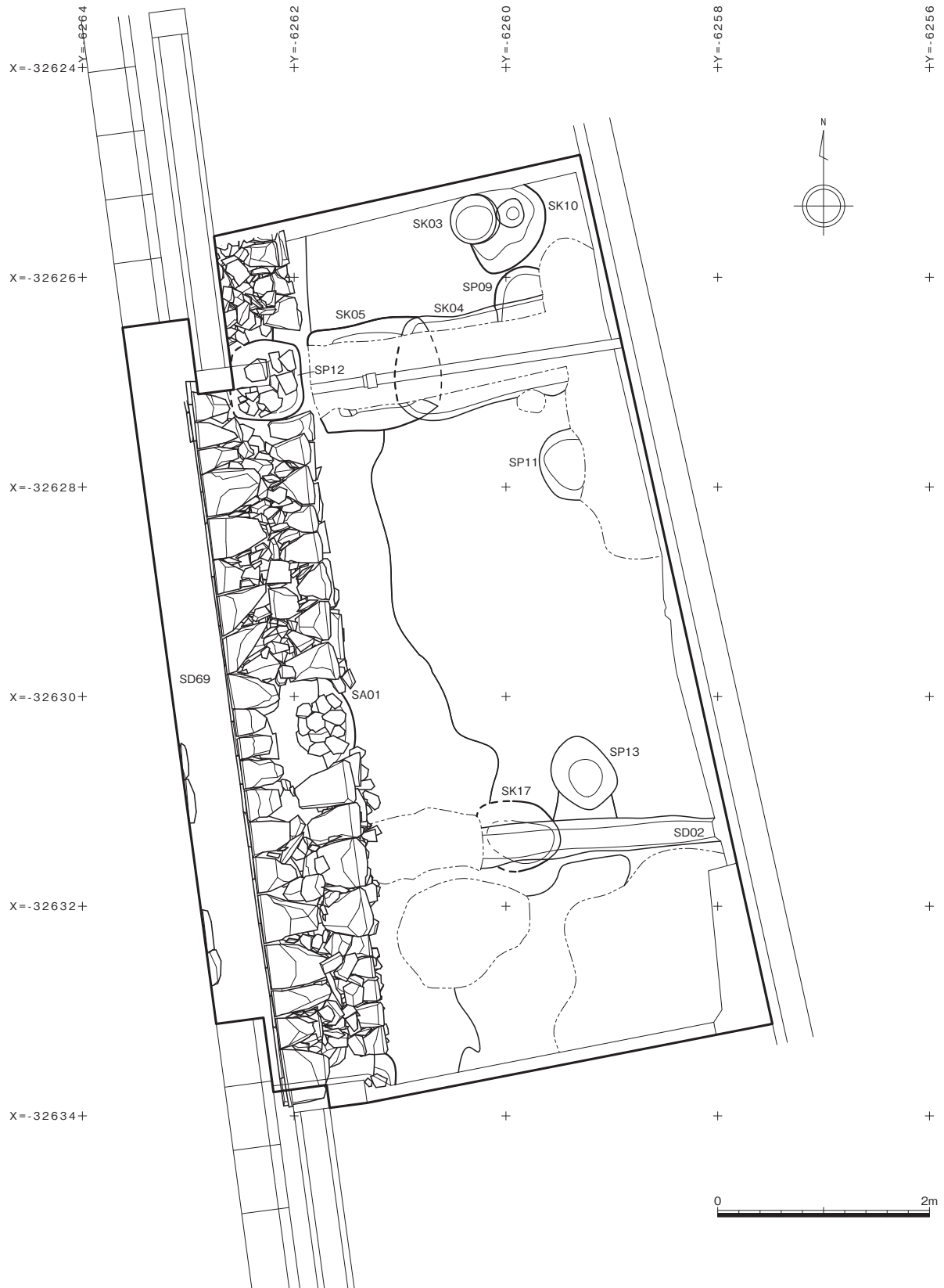


1-2 図 C 面遺構配置図

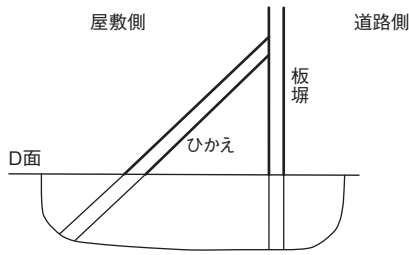


1-3 図 B面遺構配置図

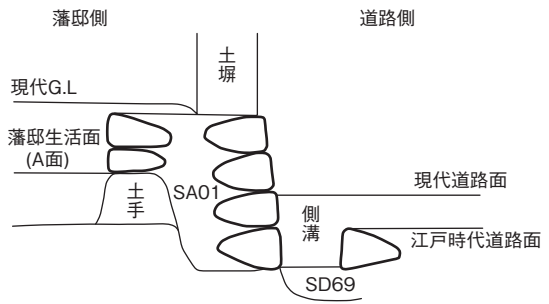
懷德門地点 (HKM07)



1-4 図 A面遺構配置図



2 図 江戸時代前期（17世紀中頃以前）の境



3 図 江戸時代後期（18世紀後半以降）の藩邸境



4 図 D面の遺構



5 図 C面の遺構



6 図 SK27 断面図



7 図 SK23 断面



8 図 SD14 断面



9 図 SA01 石積み状況



10 図 SA01 藩邸側石積



11 図 SD69 道路側石積

本郷87

東京都下水道工事地点 (HTG08)

所在地 東京都文京区本郷7-3-1

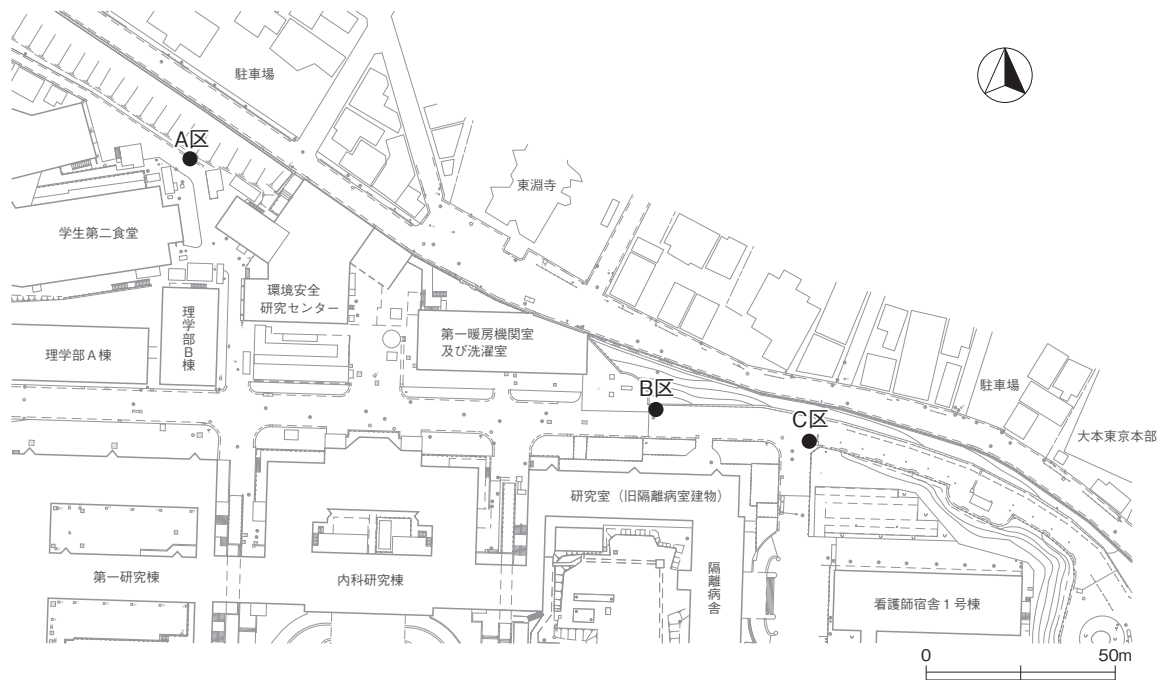
調査期間 2008年12月7日～25日

調査面積 33.6㎡

調査担当 成瀬 晃司・原 祐一

1. 調査の経緯と経過

本調査は、東京都下水道局北部第一下水道事務所の事業工事に伴うもので、遺跡調査は東京大学埋蔵文化財調査室が行った。成瀬晃司が行った立会調査に続いて、原祐一が事前調査を担当した。調査は3地点、調査面積はA区(15.6㎡)、B区(9㎡)、C区(9㎡)で、それぞれ現地表面から150cmまでの試掘調査を行った後、ライナープレート設置工事と同時並行で調査を行った(1図)。掘削は重機で生活面もしくは遺構を確認するまで掘削、確認後は人力掘削を行った。



1図 調査地点位置図

2. 調査の概要

(1) A区

試掘調査では、L字形のトレンチを設定。南北を1トレンチ、東西を2トレンチとし、1トレンチの掘削、遺構確認を行った。北側で江戸時代の盛土を確認した。本調査では地表面から75cmでSK1・SB2・SB3を検出した(2、18図)。

SK1

東側で遺構の立ち上がりを確認した。遺構の規模は不明である。瀬戸・美濃系磁器の碗、瀬戸・美濃系陶器の徳利の他、甕、土瓶、瓦、動物遺体等が出土した(23図)。ごみ穴と考えられる。

SB2

平面形は方形で、長軸46cm、短軸44cm、深さ44cmを測る。覆土は固く突き固められていた。遺構内に杭(柱)穴を確認した。

SB3

平面形は方形で、長軸18cm、短軸15cm、深さ28cmを測る。杭(柱)穴である。

(2) B区

前回立ち会いでは東壁部分で現地表面から80cmで江戸時代の盛土を検出した。盛土の厚みは20cmであった。本調査ではこの盛土を確認することができなかったが東側で関東ローム層を確認した。調査地点東側に関東ローム層が残っていたことから周辺に遺跡が残されていることを確認できた(2、19図)。

(3) C区

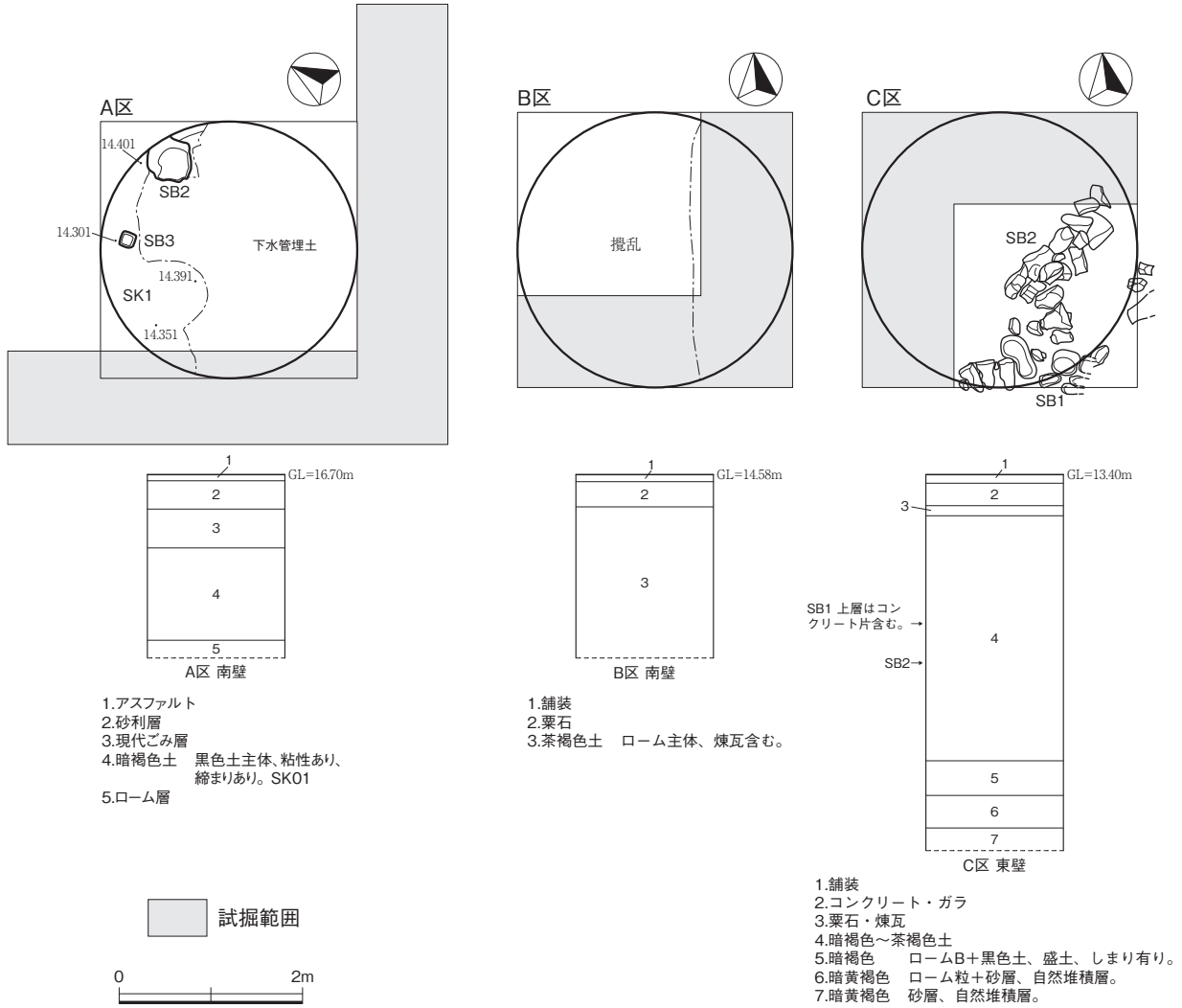
SB1・SB2を検出した(2図)。調査時この遺構は江戸時代の遺構と考えていた。昭和2(1927)年とされる「池之端七軒町通り裏門附属門衛所及構内土留擁壁其他新営工事」図面に現在の看護師宿舍東側擁壁の図面が掲載されている。この図面によれば、SB1・SB2の検出高と擁壁の下に敷き詰められた擁壁の栗石の標高がほぼ一致していた。擁壁工事に使用された石材と考えられるが、敷き詰められた状態での検出ではない。現在、調査地点南側の擁壁は一部撤去されており、この撤去工事に伴い発生した石材を積み直したものと考えられる。

SB1 (21図)

現地表面から約400cm下から石組SB1を検出した。上段の石は隅丸方形の自然石で寸法は一辺50cmであった。この他間知石3石を確認した。間知石前面の盛土にはコンクリート片が含まれていたが、間知石裏側の覆土は前面の盛土より締まりがある。

SB2 (22図)

現地表面から約450cm下から石組SB2を検出した。遺構上層で土管の埋設に用いられた砂を確認しており、SB2はこの工事によって北側が破壊されていた。SB2上層の埋土には、コンクリート片が含まれていたが、下層の土には含まれず締まりがある。遺構の東側は自然石と加工された石が乱雑に積み重なっているのに対し、西側には間知石3石が並ぶ。間知石の並びの軸は、SB1と異なる軸で東南方向に並ぶ。



2図 A・B・C区 平面及び土層断面柱状図

3. 考察 富山藩邸・加賀藩邸の旧地形の検討 東京大学における土木工事に伴う緊急調査の意義

(1) 調査地点周辺の地歴

調査地点は、湯島から駒込に至る台地上に位置する。明暦3(1657)年の大火で水戸藩上屋敷(小石川邸)を焼け出され水戸藩下屋敷(駒込邸 現在の本郷地区北側の一部と弥生地区、浅野地区と住宅地に該当する。元禄6(1693)年に中屋敷となる。)に避難した徳川光圀の記録には「神田台」とある。また、この地は「忍ヶ岡」(しのぶがおか)の向かい側の岡という立地から「向ヶ岡」(むかひがおか)とも呼ばれた。

調査地点南側の台地上では、埋蔵文化財調査室が看護師宿舎建設に伴う発掘調査を継続的に行っている。調査の結果、旧石器時代の遺物、縄文、古墳時代の遺構・遺物を確認している。また、看護師宿舎は江戸時代、富山藩邸殿舎のあった場所である。東京大学構内の「御殿下グラウンド」の「御殿」は、富山藩の御殿(明治時代、別科教場として利用)が現在のグラウンド西側に移築されたことから名付けられた。

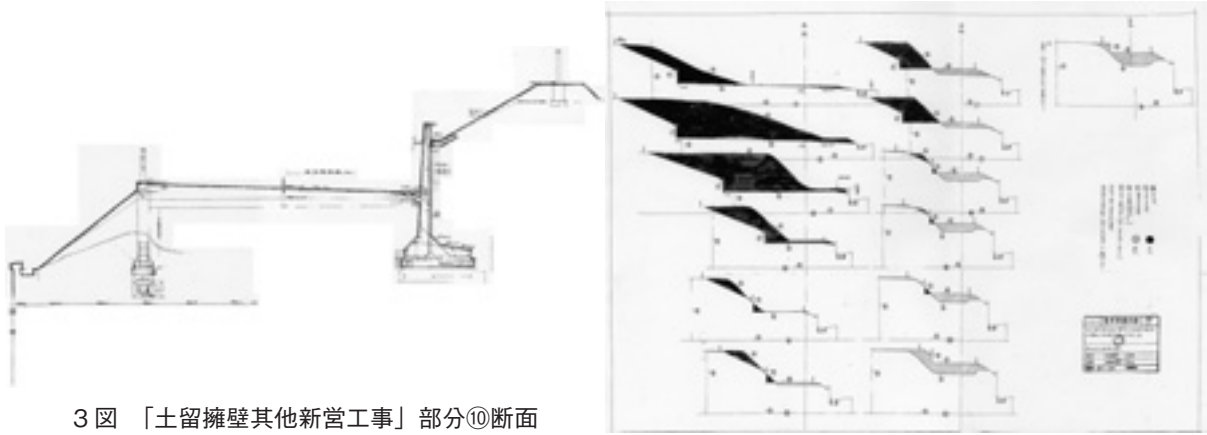
今回の調査地点A区は加賀藩邸、B区、C区は富山藩邸に該当する。本文では、東京帝国大学時代の工事図面、「明治16年陸軍参謀本部測量原図」と調査結果によって旧地形の改変の規模、変遷を検討する。

(2) 「池之端七軒町通り裏門附属門衛所及構内土留擁壁其他新営工事」図面と『明治16年陸軍参謀本部測量原図』による旧地形の検討

a. 「土留擁壁其他新営工事」と旧地形の改変

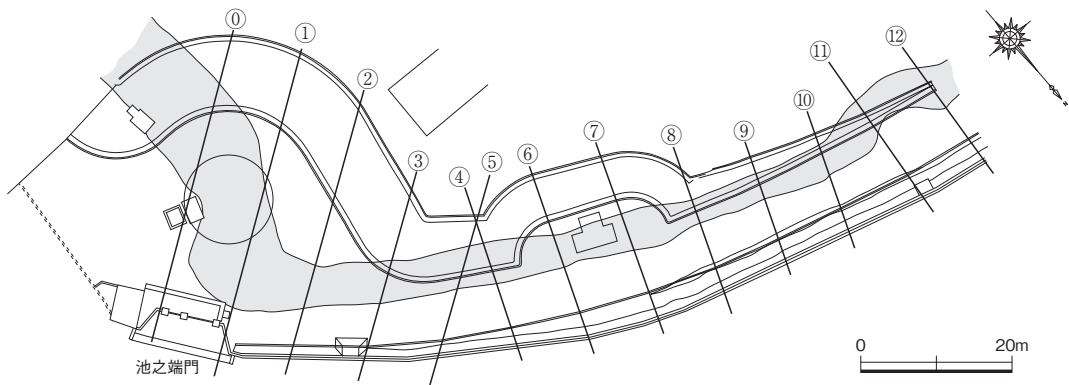
東京帝国大学作成「池之端七軒町通り裏門附属門衛所及構内土留擁壁其他新営工事」図面(以下、「土留擁壁其他新営工事図面」)は、昭和2(1927)年に作成されたとされる(3~5図)。本図は、現在の看護師宿舎の土留擁壁の工事図面で、「1-1池之端七軒町通り裏門附属門衛所及構内土留擁壁其他新営工事設計変更図」、「池之端七軒町通り裏門附属門衛所及構内土留擁壁其他新営工事6-1平面図。秤量場各部詳細図。建図」、「同6-4敷地各部横断面図」、「同6-5敷地平面図。秤量場詳細図。縦断面図」、「同6-6擁壁之図」からなる。これらの図面の寸法は寸、尺、間で表示される。縮尺は1/20、1/100、1/200で図の性格により使い分けられている。平面図には断面図位置①~⑫の番号が付され、対応する断面図には、造成前の断面図が重ねられている。「同6-4敷地各部横断面図」と明治16年陸軍参謀本部測量原図を比較すると、⑨~⑫の断面に旧地形を示すと考えられる土手の断面が記載されていることから、これらの図面と『明治16年陸軍参謀本部測量原図』((財)日本地図センター1984)と富山藩邸の絵図を比較することによって、江戸時代の地形と景観を検討できると考えた。

6図は、3~5図と明治16(1883)年の等高線から作成した断面を重ねた図である。①では現在の池之端門の裏まで盛土が行われた後、切土と「土留擁壁其他新営工事」が行われている。いつの段階かは不明だが、看護師宿舎のある高台に2mの盛土が行なわれている。①はC区近くの断面で、七軒町側に擁壁が設置された後、擁壁の裏込めによって土手が埋められ看護師宿舎北側に新たな道が造成されている。①では、盛土と「土留擁壁其他新営工事」が行われている。①でも看護師宿舎のある

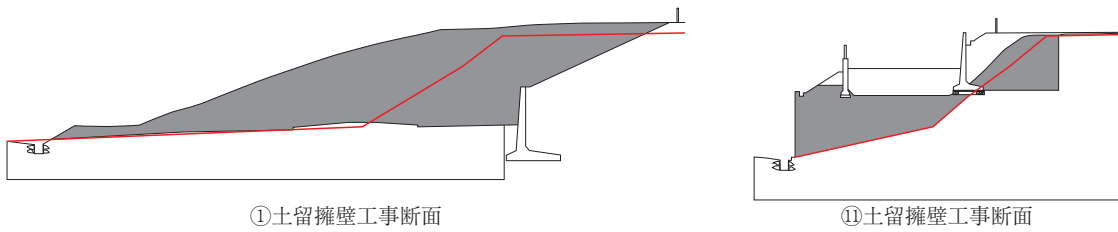


3図 「土留擁壁其他新営工事」部分⑩断面

4図 「6 - 4敷地各部横断面図」



5図 旧地形と横断面位置
「6-5敷地平面図 評量場詳細図 縦断面図」部分を改変



6図 旧地形の断面図



7図 ⑫擁壁撤去部分 (手前はC区)



8図 ⑪⑫の堺



9 図 明治 13 (1880) 年



10 図 明治 19 (1886) 年



11 図 明治 32 ~ 33 (1899 ~ 1900) 年



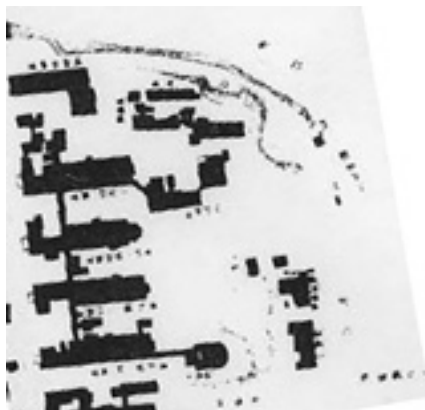
12 図 明治 40 ~ 41 (1907 ~ 1908) 年



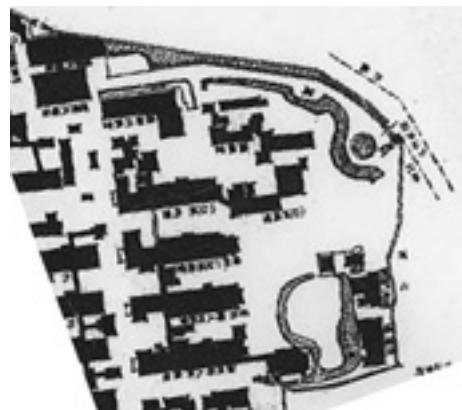
13 図 大正 2 ~ 3 (1913 ~ 1914) 年



14 図 大正 15 年 ~ 昭和 2 (1926 ~ 1927) 年



15 図 昭和 3 ~ 4 (1928 ~ 1929) 年



16 図 昭和 5 (1930) 年

高台に2mの盛土が行われている。今回の調査では、⑫の擁壁除去工事と人孔の工事による掘削が行われたため(7図)、富山藩邸当時の土手は確認できなかったが明治16(1883)年の土手は、富山藩邸の土手に重なる可能性が高く、C区では確認できなかったが、現在の道路の地下と看護師宿舍側に富山藩邸の土手が残っている可能性が高い。

b. 「土留擁壁其他新営工事」以前の旧地形改変

富山藩邸御殿東側と北側の土手下、建物があった区域、現在の看護師宿舍東側と北側の土手部分の地形の改変を東京大学が所蔵する大学平面図を用いて検討する。「明治16年陸軍参謀本部測量原図」と9図「東京大學醫學部平面圖」(明治13(1880)年)では、この部分の地形はよく似ており、現在の池之端門付近に出入り口がある。10図「帝國大學平面圖」(明治19(1886)年)では、江戸時代土手下の建物があった区域は埋め立てられ、現池之端門部分にあった出入口が無くなっている。11図「東京帝國大學平面圖」(明治32～32(1899～1900)年)では、土手が切土されている。12図「東京帝國大學平面圖」(明治40～41(1907～1908)年)では、「裏門附属門衛所」(現、池之端門)が建設されている。北側の土手が埋立てられ台地上の区画が改変されている。13図「東京帝國大學平面圖」(大正2～3(1913～1914)年)では、北側の土手下のスペースが門の北側まで埋てられている。14図「東京帝國大學本部構内其他建物配置圖 昭和二年三月三十一日現在」(1927年)では、土手は前年のままである。15図「東京帝國大學本部構内其他建物配置圖」(1928～1929年)では、「土留擁壁其他新営工事」が開始され、16図「東京帝國大學本部構内其他建物配置圖 昭和五年三月三十日現在」(1930年)では、「土留擁壁其他新営工事」は終了している。

(3) 調査地点の土地利用状況と旧地形の改変

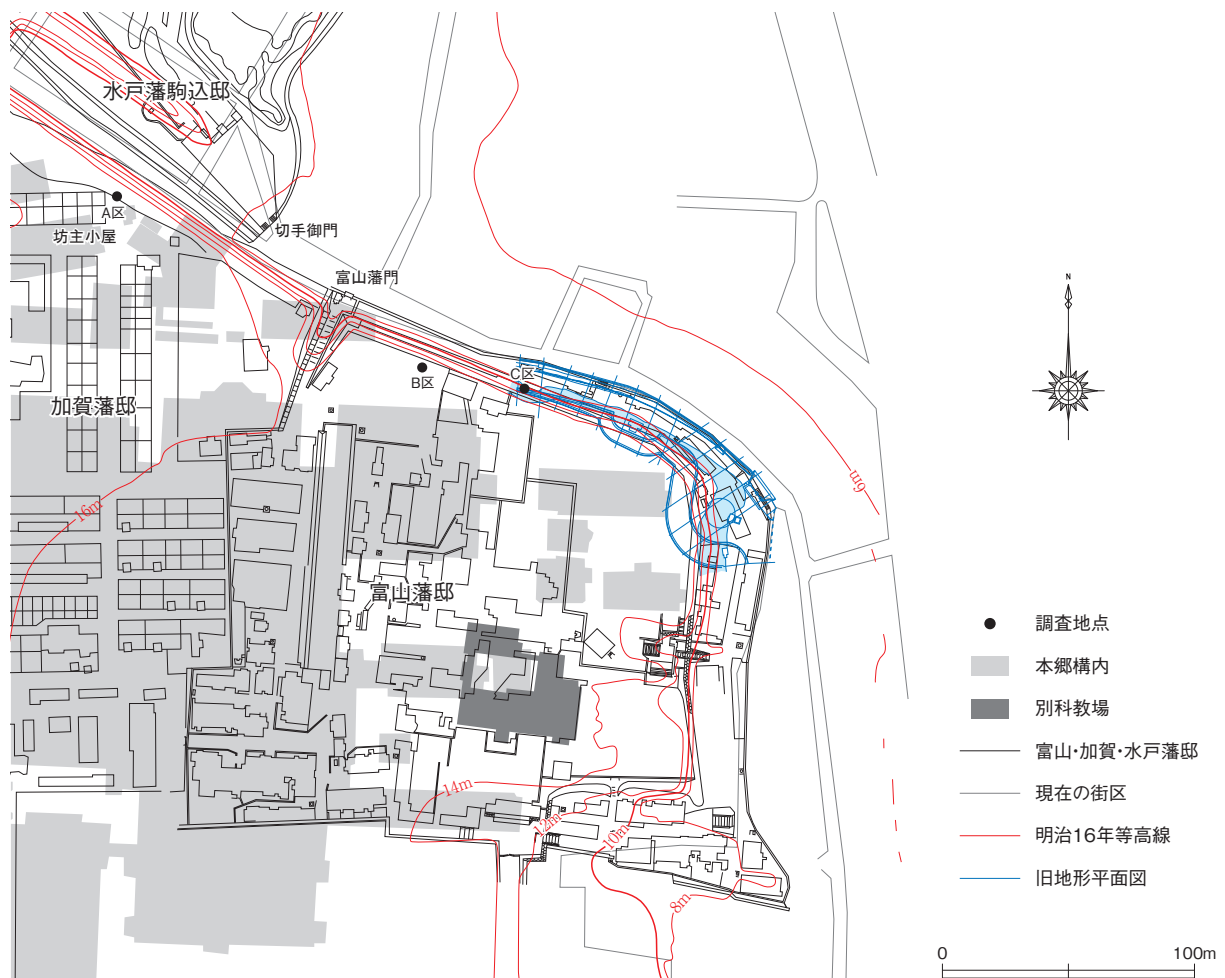
a. 富山藩邸 B区・C区

今回の調査では、藩邸に関する遺構の検出が予想されたが、調査の結果、C区では江戸時代以降の造成によって遺跡は破壊されていたことが確認された。しかし、「池之端七軒町通り裏門附属門衛所及構内土留擁壁其他新営工事」の図面に、富山藩邸の北側の土手と考えられる断面図が記載されていたことから、この図面と調査結果を基に、旧地形の改変の検討を行った。

原が作成した復元図にA区、B区、C区と富山藩邸の絵図を重ねた図を作成した(17図)。駒込邸の検討でも同様の復元図を作製したが、富山藩邸の範囲に間違いがあった。そこで、本図では七軒町側の境と富山藩邸の裏門、表門と無縁坂から表門に至る道、明治16(1883)年の「別科教場」と表御殿の位置を基準に『明治16年陸軍参謀本部測量原図』との重ね合わせを行った。絵図によれば、B区は水戸藩駒込邸の「切手御門」手前にあった富山藩邸北側の門を潜り、坂を登った東側の空き地、C区は稲荷が置かれた空き地の北端に位置する。この絵図では調査地点に建物は存在しない。『明治16年陸軍参謀本部測量原図』の等高線によるとB区周辺の標高は14m、C区周辺の標高は10～12mである。B区で確認された江戸時代の整地層上面の標高は、14.15m、明治16(1883)年の標高に近い。江戸時代の整地層と関東ローム層の堆積が残っていたことから、明治時代以降の削平はあまり行われておらず、B区周辺に遺跡が残されている可能性がある。C区では、土留擁壁其他新営工事と擁壁の撤去工事が行われたため江戸時代の遺跡は失われていた。

b. 加賀藩邸 A区

A区は東京大学と弥生2丁目の境の土手際に位置する。『明治16年陸軍参謀本部測量原図』の等高



17 図 調査地点の位置

線によると A 区周辺の標高は 16 m、現代の削平とごみの廃棄により生活面を確認することができなかったが、SK1 の検出標高は 15.9 m で明治 16 (1883) 年の標高に近い。調査地点では、柱 (杭) 穴列、ごみ穴を検出した。加賀藩邸の絵図によれば、「坊主小屋」の東側に位置し土手の下が水戸藩駒込邸との地境となっている。今回、屋敷の端も土地利用されていることが明らかになった。現在の土手は道に沿っている。『明治 16 年陸軍参謀本部測量原図』の土手と重なる。加賀藩邸絵図との比較から、明治 16 (1883) 年以前に行われた道の造営に伴い、土手が直線になるよう削平されており、江戸時代は現在の土手より東側に膨らんでいたと考えられる。また、A 区からテニスコートに至る道路に、遺跡が残されている可能性が高いことが確認できた。また、地下室の天井崩落に伴い生じた亀裂を確認したことから、調査地点周辺に地下室がある可能性がある。

(4) まとめ 「土木工事に伴う緊急調査」の意義

今回の調査は、調査期間、調査面積に制約があったが、A 区では、加賀藩邸の土手際の土地利用状況が明らかになった。B 区では、周辺に遺跡が残っていることを確認できた。C 区では、富山藩邸の土手が明治時代以降どのような過程で削平、盛土され現在に至るかを検討することができた。A 区に近接する東京大学工学系総合研究棟新営工事立坑工地点 (2005 年度) の調査では、今回の調査

同様、調査面積、調査期間に制約があったが、加賀藩邸の長屋「御徒町」に該当する区域の土地利用状況の一端を示すことができた(原2008)。工事と同時並行で行われる緊急の立会調査で得られるデータは軽視されがちであるが、確認された盛土の状況と加賀藩邸の絵図、『明治16年陸軍参謀本部測量原図』とを比較検討することによって、「点の調査」を「面の調査」に高めることができた。江戸時代と江戸時代以降の造成がどのように行われ現在に至るのかを、地質学的、土木工学的に検討し、これらの視点に考古学的視点を加えることで、年代観が明確になり造成の年代、規模の検討が可能である。また、遺跡が確認されない場合も、土地利用が積極的に行われなかったのか、それとも明治時代以降に破壊されたのかを判断することも非常に重要であり、明治時代以降の遺跡の破壊は、東京大学の建設や土地改編の歴史であり「東京大学史」として調査する必要がある。

今後もこういった「点の調査」が予定されていることから、調査地点外も含めた広範囲な土地利用状況の復元を行った上でデータの蓄積と比較検討を行っていきたい。

【引用・参考文献】

- (財)日本地図センター複製 1984「明治16年第一測期第二測図 参謀本部陸軍部測量五千分之一ノ尺東京府武蔵国本郷區本郷本富士町近傍」『参謀本部陸軍部測量局五千分一東京図測量原図』建設省国土地理院所蔵
- 原 祐一 2008「IV. 成果と課題－調査地点と「御徒町」長屋、位置関係、地形の検討－」『東京大学本郷構内遺跡調査研究年報』6 pp.25-31



18 図 A 区全景



19 図 B 区ローム検出状況



20 図 C 区全景



21 図 C 区 SB1 検出状況



22 図 C 区 SB2 検出状況



23 図 A 区 SK1 出土遺物



24 図 C 区出土遺物



25 図 医科大学医院「つばはき」容器

文京区 本郷追分町遺跡

追分国際学生宿舎地点 (OKS07)

所在地 東京都文京区向ヶ丘1-12-7
 調査期間 2007年12月3日～2008年3月25日
 調査面積 776.11㎡
 調査担当 原 祐一

1. 調査の経緯と経過

2007年、追分国際学生宿舎予定地試掘調査の依頼が埋蔵文化財調査室にあった。埋蔵文化財調査室は、1991年8月23・24日、試掘調査を実施したが、追分学寮建物のため、遺跡の規模を把握するのに十分な面積を調査できなかった。そのため、2007年8月27・31日に試掘調査を行った。調査の結果、江戸時代の遺構を確認した。建設予定地周辺の遺跡名は、『東京都遺跡地図』では「本郷追分町」で、駒込鰻縄手 御先手組屋敷一都立向ヶ丘高校地点（都内遺跡調査会1997）、駒込鰻縄手遺跡第Ⅱ地点（文京区遺跡調査会他2004）2地点で調査が行われていることから、御先手組に関連する遺跡の検出が予想された。文京区教育委員会、本部プロジェクトグループと協議した結果、事前調査を行うことになった。

2. 調査の概要

調査対象は近世以前、近世、明治時代を対象とし、西からA・B・Cの3区に分けて行った。検出遺構の総数は829基、出土遺物の総量はコンテナ134箱、瓦破片総重量は454kgである。

(1) A区 (7区)

a. 江戸時代の調査地点と御先手組

現在の本郷通りの西側、当地点周辺は、天和3（1683）年以降、御先手組同心の大縄拝領武家屋敷（組屋敷）で、「駒込鰻縄手御先手組屋敷」と呼ばれていた。また、「小苗木なわて」「うえ苗なわて」等と記載されることもあり、植木屋の存在を伺わせる。御先手組同心は、戦時には先陣、先方を務め、平時は江戸城城門の警備を担当した（宮崎1997）。

b. 遺構検出面と遺構の時期

調査区内は、ほぼ全域が約1m掘削され、レンガや瓦などが混入した土で盛土が行われていた。また、攪乱4箇所には瓦礫が廃棄されていた。当地点とは全く関係ない、加賀藩の「梅鉢文瓦」が含まれていたことから、本郷地区の土木工事で発生した瓦礫が、追分学寮敷地に持ち込まれ、廃棄されたものと考えられる。A区の北西部の一角で、ロームブロックと黒ボク土を硬く突き固めた生活面を検出した。この遺構検出面をA面とした。A面下層では明確な生活面を確認できなかったが、A面以下の生活面を、B面、C面、D面とした。

c. A面とD面

A面では、貝を廃棄した小形の土坑 SK150、151、152 を検出した。D面の遺構は、ローム面で検出した遺構である。以下にD面の遺構について述べる。

SU11 (1 図)

地下室である。調査区外の南側に遺構が広がっている。

SU26 (1、3 図)

階段のある地下室である。壁面には仕上げた際の工具痕が認められた。幅 12cm (四寸) の工具を使用したと考えられる。遺物はコンテナ 20 箱を数え、陶磁器類のほか、土製人形・玩具、金属製品、火縄銃の弾丸、ガラス製品、骨角製品、食物残渣が出土している。遺物は完形が多く地下室の廃絶時、生活用具を一括廃棄したと考えられる。

SU43 (1、4 図)

階段のある地下室である。遺物量はコンテナ 6 箱を数える。遺物の生産年代は、18 世紀末が中心であった。瀬戸・美濃系の半胴甕等の底部に穴を穿った、植木鉢 40 個体が出土した。「小苗木なわて」「うえ苗木なわて」の記述との関連が予想される。地下室の埋土には焼土が含まれている。都立向丘高校地点で、「駒込縄手御先手組屋敷」文献調査を詳細に行った宮崎博氏は、「江戸時代災害年表」を作成し、御先手組屋敷の火災記録を検討している (宮崎 1997)。

SX41 (1、5 図)

畑の畝跡と考えられる。幅約 0.5 m の溝状遺構が東西に並んで検出された。埋土はローム土などの混入が少ない暗褐色土で、遺物はほとんど出土していない。

SK1、SK10 (1 図)

ごみ穴と考えられる。調査区西側の調査対象外に遺構が広がっている。

SK95 (1 図)

ごみ穴と考えられる。調査区西側の調査対象外に遺構が広がっている。遺構の規模については、B 区、C 区終了後、トレンチ調査を行い確認する。陶磁器類のほか、貝などの食物残渣が出土している。また、林縁系の環境に生息する陸産微小貝類「オカチヨウジガイ」が出土している。

SB51、SB67、SB68、SB91、SB92、SB124 (1 図)

柱穴列で東西に並ぶ。

SP30 (1、6 図)

カワラケ 2 枚を口縁で重ね埋納したカワラケ埋納遺構で、胞衣 (えな) の埋納や地鎮に関連する遺構と考えられる。今後、カワラケの中の内容物を分析、検討し遺構の性格を確定したい。

d. 遺構の分布と土地利用状況

SB51、SB67、SB68、SB91、SB92、SB124 のラインをまたがる遺構は、A 区では確認されていないこと、SU11、SU43 はこのラインに沿って構築されていることから、東西の杭穴列は地境と考えられる (25、30 図)。都内遺跡調査会が作成した復元図によれば、東大敷地と西側の住宅の間に地境がある。仮に、東西の地境の北側を北区域、南側を南区域とする。それぞれの区域が一屋敷地とすると、A 区は旧日光御成街道側からみると屋敷の奥にあたる。北区域は屋敷の奥の地境に沿ってごみ穴、ごみ穴の東側に、胞衣もしくは地鎮に関連するカワラケ埋納遺構、地下室、植栽痕が分布する。南区域は屋敷の奥の地境に沿ってごみ穴があり、地下室、畑が東西に並ぶ。遺構の分布は、北区域、南区域ともに、屋敷奥の土地利用状況を示している。

(2) B区 (7図)

a. 生活面と遺構の時期

調査は、A→D面の順に行ったが、東大敷地になってから行われた削平のため、生活面を確認することが出来なかった。特にC・D面の遺構を明確にすることが出来なかった。

b. A～C面の盛土状況

北側と南側では、盛土の状況が異なっていた。南側は盛土、掘削が繰り返され複数の硬化面を確認した。小さな土坑が構築されており、主に貝が廃棄されていた。北側は、A区で考察した通りでローム土を主体とし、「梅鉢」紋の瓦が出土した。

A面 (追分学寮跡)

追分学寮には、学生宿舎(第1～3棟、新館)、学生食堂、管理人棟宿舎の6棟の建物があった。A面で、追分学寮(第1棟)の注穴列を検出した(SB180～198、8図)。第1棟とした根拠は、B区北西で1991年埋蔵文化財調査室が行った試掘坑を確認したため、当時の試掘坑と当時現存していた追分学寮(第1棟)の位置関係から、第1棟の柱穴と判断した。近隣住民の方や、当時(昭和26年から6年間)寮で生活していた方のお話では、本郷通り沿いの建物は二階建てで、その他の建物は平屋だったとの証言を得た。

SE228、SE229、SE323、SE359、SE403、SE404 (1図)

井戸の廃棄年代は、江戸時代から近現代と年代幅があるが、B区に分布していた。

SB230、SB232 (1, 9図)

2棟の建物を検出した。SB232は、礎石を据えるために碎石等を方形に並べた遺構と考えられる。北側の石が無い部分が入り口と考えられる。

SK249

土坑SK249は、平面形が円形を呈する土坑ある。剪定鋏が出土した(20図)。

SU325、SU380

SU325、SU380は、壁面の掘削によって室が拡張されていた。階段は上段と下段が斜めに削られ、階段の機能を失っていた。壁面を調整し平坦に仕上げた面と、拡張事の工具痕が残る面が確認された。SU325拡張部では、5cm幅で先端部が角張った工具、14cm幅で先端部が角張った工具。6cm幅で先端部がU字形の工具、底面ピット1は15cm幅で先端部がU字形の工具、以上、4種類の工具が使用されていた。SU380では入口部分の天井が削られ、上方向にも拡張されている。地下室の拡張は、入口と階段の状況から、組み上げた棚を搬入し、設置するために行われたと考えられる。SU380からは火縄銃の弾丸が出土している。

(3) C区 (11図)

C区は「日光御成街道」に面する屋敷の間口にあたることから、建物跡の検出が予想されたが、建物を明確に示す遺構は確認できなかった。検出遺構は、追分学寮関連遺構、江戸時代の畑、井戸、植栽痕、杭穴、土坑他である。調査区北東部の拡張区では、「組屋敷道」と屋敷境に関連する遺構を検出した。A区では、背中合わせとなる屋敷の地境の遺構を検出しており、部分的ではあるが屋敷の間口から、奥の境まで調査を行ったことになる。

a. 遺構検出面と遺構の年代

A面は追分学寮時代の生活面で、上層にはしまりが無く、粘性の強い灰色土が堆積していた。A面下層（A層）・B面下層（B層）から加賀藩の梅鉢文の瓦が出土した。C面の下層のごみが廃棄されたSK532では、江戸時代と明治時代の陶磁器類が出土していることから、A～C面は、近代から現代と考えられる（18図）。生活面が確認されたものの、A・B区同様、C区でも東京大学（東京帝国大学）敷地になってから行われたと考えられる削平のため、どの生活面に該当する遺構が明確でない遺構が多いため、今後、整理作業の段階で遺物の年代、遺構の軸等を考慮し、江戸時代から現在までの当地点における遺跡の変遷を明確にしていきたい。

A面（追分学寮跡）

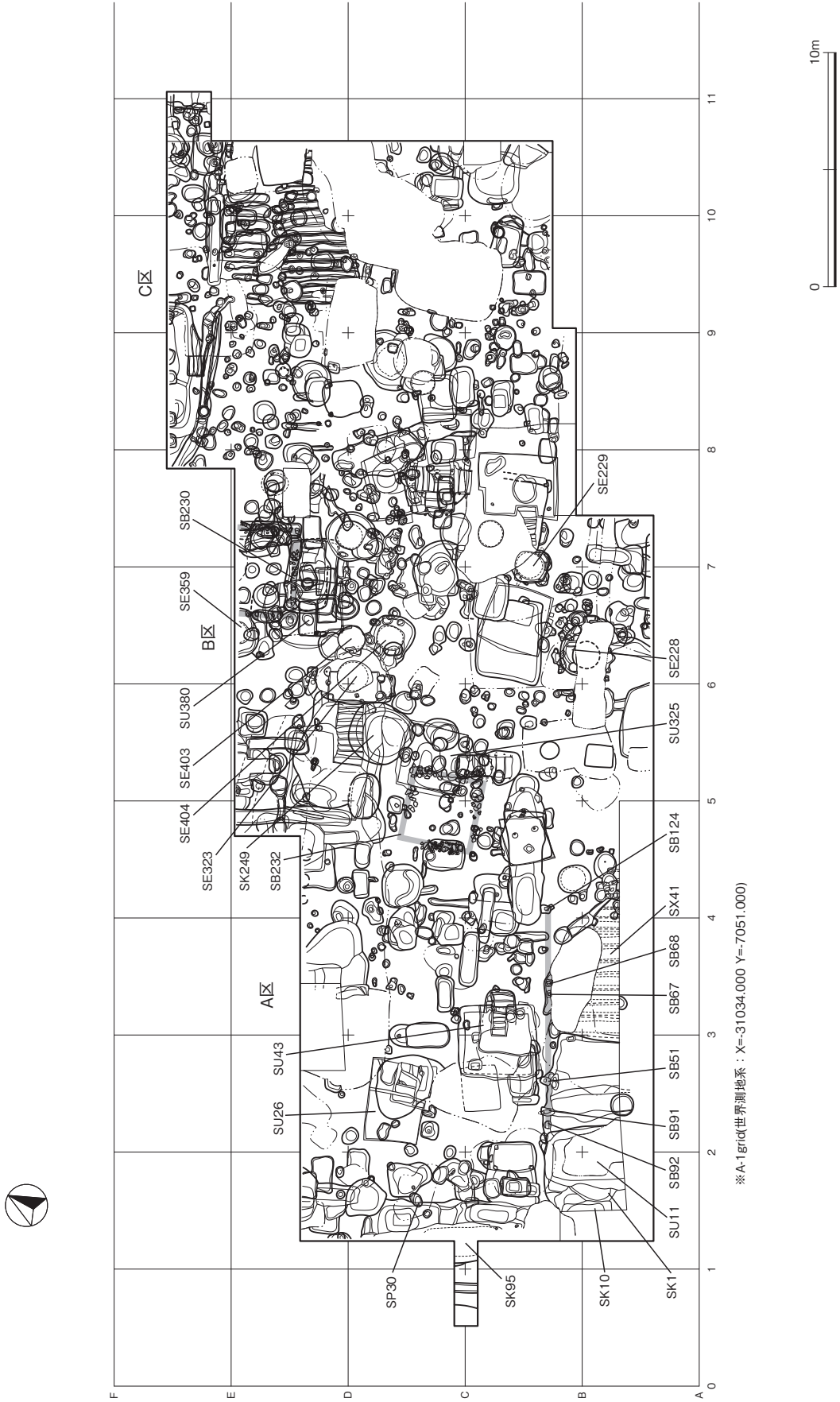
追分学寮には、学生宿舎（第1～3棟、新館（12図））、学生食堂、管理人棟宿舎の6棟が建設されていた。B区で検出した追分学寮（第1棟）の柱穴列の続きと、本郷通り沿いに配置されていた新館の基礎を検出した。

17～18世紀前半の遺構分布（1図）

SU391（15図）、SU256、SE536（16図）、SK498、SK544、SK568、SK648からは、17～18世紀前半の遺物が出土している。B区、SU256は、宝永3（1707）年の宝永火山灰が埋土に使用されていた（10図）。17～18世紀前半の遺構は、屋敷の間口近くに分布していた。

b. 拡張区の調査で検出した「組屋敷道」と屋敷境

A区では、調査区西側の屋敷境部分のトレンチ調査を行い、背中合わせとなる屋敷との屋敷境と考えられる溝SD79、SD101を検出した。C区では、間口付近の遺構を確認するため、調査区北東側でトレンチ調査（2m×2m拡張）を行った。調査の結果、南北、東に広がる硬化面を検出した。硬化面の西側には南北に並ぶ方形の柱穴列2基SB819、SB821を検出した。硬化面SX822は、黒色土、ローム土等を交互に版築した土層で、土層の違いが年代差なのか、造成工程を示すのかは明確ではない。宮崎博氏の文献研究成果（宮崎1997）によれば、『屋敷渡預絵図証文』に「日光御成街道」の西側に沿って、「組屋敷道」と記載された細い帯が描かれている。検出した硬化面SX822は、検出状況から「組屋敷道」、柱穴列が「組屋敷道」と屋敷を区画した屋敷境の遺構と考えられる。「組屋敷道」は、畑関連遺構SX524、と畑SX648（17図）上層に造成されている。天和3（1683）年頃、「御先手組」がこの地に屋敷を拝領したとされる。造成年代について、他の遺構との切り合い関係、遺物年代をもとに明らかにしたい。畑については「御先手組」拝領以前の「下駒込村」に関連する遺構である可能性を含めて検討を行いたい。『屋敷渡預絵図証文』に「組屋敷道」の道幅と屋敷の奥行き、間口の間数記載がある。今後、遺構分布と絵図の検討を行い屋敷割の復元を行い、遺跡の変遷を明らかにしていきたい。



※A-1 grid(世界測地系 : X=-31034.000 Y=-7051.000)

1 図 遺構配置図 (S=1/250)



2 図 A 区全景



3 図 SU26



4 図 SU43



5 図 SX41



6 図 SP30 地鎮もしくは枹衣関連遺構



7 図 B 区全景



8 図 SB180 ~ 198 (追分学寮第1棟基礎)



9 図 SB232



10 図 SU279



11 図 C区全景



12 図 追分学寮新棟基礎



13 図 C区拡張区硬化面 (組屋敷道)



14 図 関東ローム層の堆積状況



15 図 SU391



16 図 SE536



17 図 SX684



18 図 C区北壁生活面検出状況

3. 考察

原 祐一（東京大学埋蔵文化財調査室）、高崎 修吾（加藤建設株式会社）

はじめに

江戸時代、調査地点と周辺は「駒込鰻縄手」と呼ばれた。「鰻縄手」とは、本郷追分から土物店までの「日光御成街道」（現本郷通り）の通り沿いの俗称で、御用植木屋がいたことから「小苗木縄手」、御先手組の元地に芋の苗が多く生えたことから「芋苗木縄手」、「御苗縄手」とも呼ばれ、これらの呼び名が「鰻縄手」に転じたとする説がある。「日光御成街道」沿いには、「御先手組」の屋敷、寺院、町屋があったが、調査地点と周辺は、『御府内沿革図書 延宝年中之形』に、「下駒込村」。『同 天和三年亥之形』に、「御先手同心大縄地」「御先手与力同心大縄地」と記載されている。天和3（1683）年頃、この地に屋敷を拝領したとされる「御先手組」は、戦時、先陣・先鋒を務め、平時は江戸城城門の警備を担当した。当地点は天和3（1683）年頃以前の「下駒込村」、「御先手同心大縄地」に該当する。「御先手同心大縄地」の調査は、東京都と文京区の調査に次いで3例目である。

(1) 追分学寮跡の調査

当地点は昭和 23 (1948) 年開設、平成 16 (2004) 年 3 月に閉鎖された追分学寮の、第 1 棟と新棟の基礎を検出した (註 1)。学会では戦中戦後遺跡の調査の意義が問われているが、東京大学史の観点から調査対象とした。

(2) 遺構検出面、出土遺物

地下室、半地下室、井戸、畑、土坑、小穴等を 829 基検出した。遺構検出面は、A 面 (追分学寮跡検出面)、B 面、C 面、D 面を確認した。東京大学がこの地を敷地とした年代は現在調査中である。A 面、B 面下層の盛土 (A 層、B 層) は、主にロームブロックを主体とする盛土で、レンガと当地点とは係わりがない加賀藩の梅鉢紋の瓦が出土したことから、当地点を削平し土を搬出した後、本郷構内の建物解体に伴い発生した瓦礫を持ち込み、埋め戻したと考えられる。C 面、D 面の遺構は、上記の削平のため生活面として明確にとらえることができなかった。両面の遺構には、17 世紀代から幕末以降の遺構が存在することから、出土遺物の生産年代、切合い関係を加味し、遺構廃絶年代の検討を行う。

コンテナ 134 箱分の遺物が出土した。遺物は、陶磁器類、瓦、土製品、金属製品、ガラス製品、木製品等である。遺物の生産年代は、17 世紀から現代で 18 世紀後葉から幕末、明治の日常生活用具が中心である。SU43 から植木鉢 40 個体 (19 図)、SK249 から剪定鋏 (20 図)、SU26、SU380 から火縄銃の弾丸が出土した。



19 図 SU43 出土植木鉢



20 図 SK249 出土剪定鋏

(3) 地下室の拡張工事

SU325、SU380 は、壁面の掘削によって室が拡張されていた (21 図)。階段は上段と下段が斜めに削られ、階段の機能を失っていた (22 図)。壁面を調整し平坦に仕上げた面と、拡張事の工具痕が残る面が確認された。SU325 拡張部では、5 cm 幅で先端部が角張った工具、14 cm 幅で先端部が角張った工具。6 cm 幅で先端部が U 字形の工具、底面ピット 1 は 15 cm 幅で先端部が U 字形の工具、以上、4 種類の工具が使用されていた。SU380 では入口部分の天井が削られ、上方向にも拡張されている。地下室の拡張は入口と階段の状況から、組み上げた棚を搬入し設置するために行われたと考えられる。

(4) SE403 の掘削行程

SE403は、掘削を開始したものの掘削を中断しており、底面と壁面に掘削行程を示す工具痕が残されていた。井戸の下にSU380があり、掘削時の安全、井戸の水質を考慮したためと考えられる。坑底の工具痕は、13cm幅で先端部が角張った工具が用いられていた。壁面上部は丁寧に調整されていたが、壁面下部には工具痕が残っていた(23図)。坑底の工具痕から、反時計回りに後ずさりしながら掘削が進められたと考えられる。掘削行程は、

- 1 井戸の外周を粗掘し内側を掘削
- ↓
- 2 壁面を粗く調整
- ↓
- 3 仕上げ

を繰り返して掘削が進められたと考えられる(24図)。井戸の直径は1.14mと狭いこと、作業効率を考えると工具の柄はそれほど長くはなかったと考えられる。今後、井戸職人に関する民俗事例から、使用工具や掘削行程の検討を行う。

(5) 屋敷割の復元(25図)

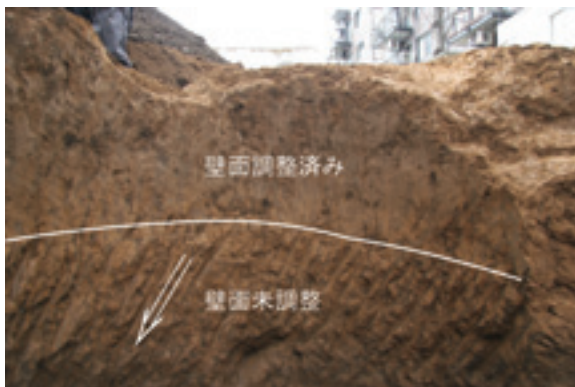
「日光御成街道」に直行する短冊形の屋敷跡を確認した。柱穴列SB51、67、68、90、91、120、124、142で南北に区画されていた。畑SX41、地下室SU43のほか、柱穴列の南北に位置する遺構は、区画を越えて構築されていないため地境と判断した。屋敷の奥、西側の屋敷と背中合わせになる



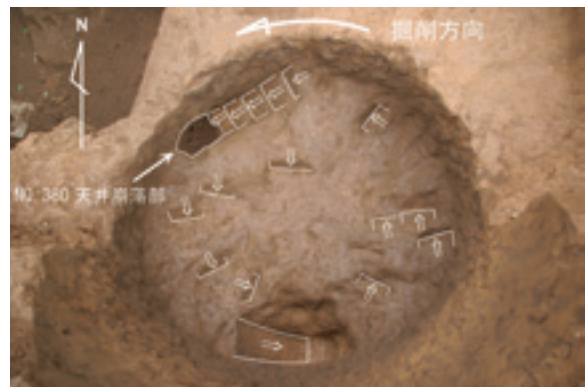
21図 SU325北壁拡張部



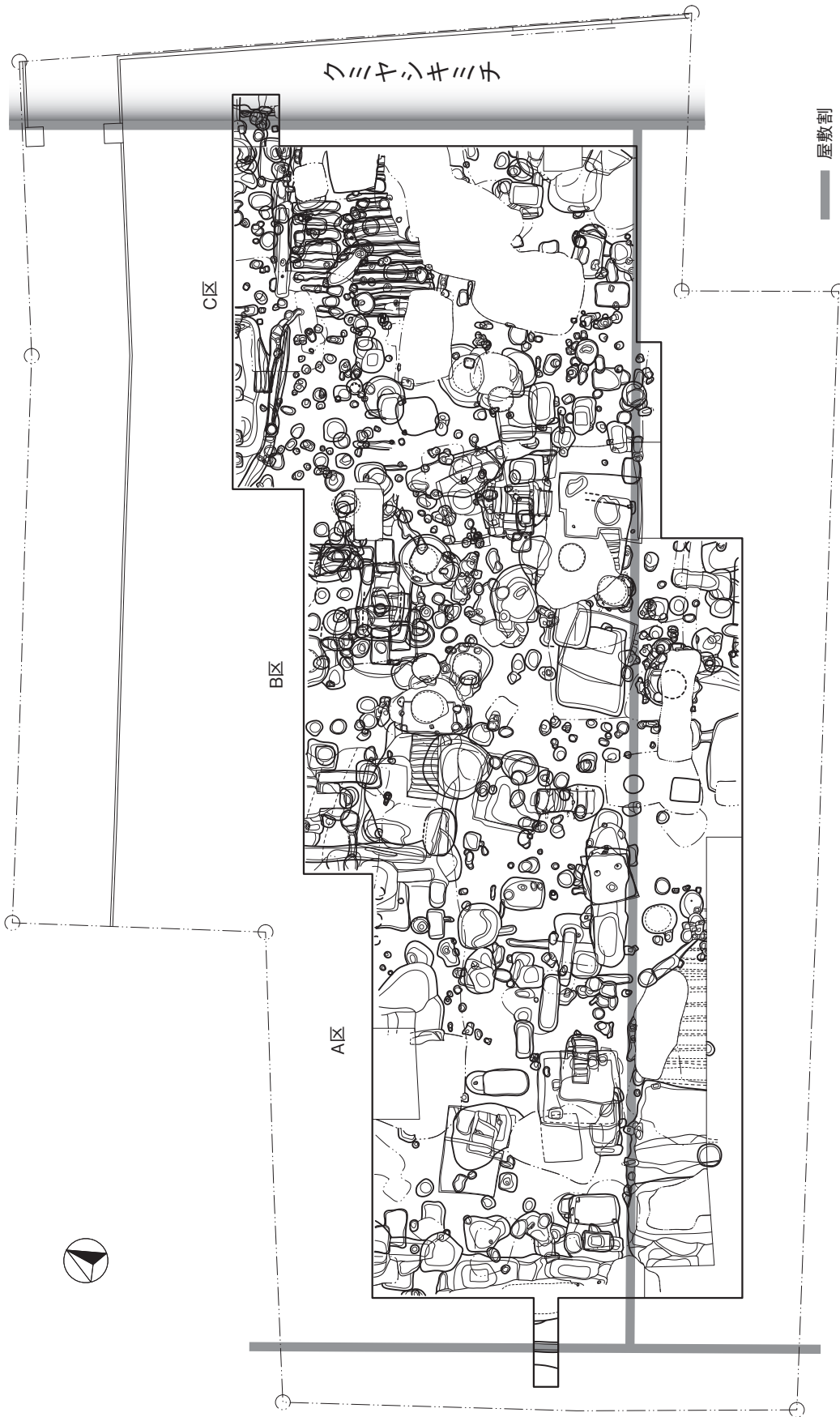
22図 SU380階段削平状況



23図 SE403の壁面



24図 SE403の底面の掘削状況



25 図 屋根割の復元

屋敷境は、ほぼ現在の区画に重なる（東京都復元）。境界部のトレンチ調査の結果、南北に延びる溝SD79、SD101を検出した。間口部分については、『屋敷渡預絵図証文』に、「日光御成街道」の西側に沿って、「組屋敷道」と記載された細い帯が描かれている。間口付近のトレンチ調査の結果、南北、東に広がる硬化面SX822と硬化面の西側に南北に並ぶ、柱穴SB819、SB821を検出した。位置関係から、硬化面が「組屋敷道」、柱穴列が屋敷の境と考えられる。「日光御成街道」と「組屋敷道」の境界を明確にすることができなかったが、街道の性格上、大縄地側を目隠しする塀が街道に沿って設置されていたと考えられる。今後、江戸時代の区画を反映した明治6（1873）年沽券図（東京都蔵）等を検討し、調査地点を含めた周辺地域の屋敷割復元を行いたい。また、17世紀後葉～18世紀前葉の遺物が出土する遺構は、B区からC区、間口に近い区域に分布していた。畑関連遺構SX524と畑SX648は「組屋敷道」下層で検出した。「御先手組」拝領以前の「下駒込村」との関連を考慮して検討を行いたい。

まとめ

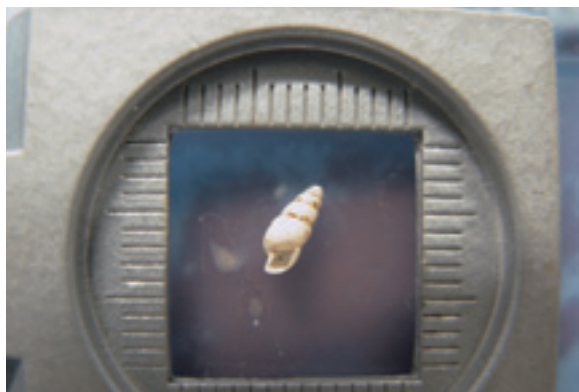
向丘高校地点では、景德鎮等の高級磁器の出土が報告されている。当地点の遺物は日常雑器が主体で遺物の質差を確認できた。大形地下室や、火縄銃弾丸が出土する一方、畑の検出、植木鉢、剪定鋏が出土した。これらは、「御先手組」や植木屋の存在をうかがわせ、幕府が武家屋敷で禁じていた町人などの居住といった、大縄地内の複雑な居住状況、土地利用状況を示すと考えられる。「植木縄手」などの呼び名が、幕府の目を避けるために「鰻縄手」となったとすれば、今回の調査結果は地域史を理解するための良好な資料といえる。また、園芸史から平野恵氏が「本郷通り」と植木屋について考察を行っており（平野2006）、本地点が近世都市江戸の園芸文化を解明する一資料となれば幸いである。

調査地点は、本郷から駒込村の間、近世都市江戸の朱引外に位置する（28図）。朱引外の「御先手組同心大縄地」の発掘調査は3例目で、宮崎博氏の先行研究がある（宮崎1997）。朱引内の大縄地遺跡は、調査室が行った工学部14号館地点、新宿区等の研究蓄積があり、これらとの比較から、朱引外の大縄地のあり方を検討したい。また、当地点を含め、文京区では日光御成街道沿いの発掘調査が継続して行われ（29図）、文献史学による駒込村の歴史的変遷が検討されている（岩淵1996）。街道周辺の景観、文化・経済的役割を、考古学と文献史学により解明することも今後の研究課題としたい。

4. 自然科学分析

A区

SX41は畑、SK95（27図）はごみ穴と推定した。遺構の性格を明確にするため土壌サンプルを採集した。また、土壌サンプルから検出される花粉、種子等の植物遺存体、陸産微小貝類などの動物遺体は屋敷内の景観、都市環境を示す指標となることから、植物遺存体の分析試料はブロックサンプル、動物遺体の分析試料は柱状サンプル、以上の2方法で土壌サンプルを採集した。各遺構のセクション図にサンプル位置を記入した。SX41では、10cm×5cm×10cmのブロックサンプルを8試料採集した。SK95からは林縁系の環境に生息する「オカチョウジガイ」が出土しことから（26図）、ごみ穴が一括廃棄であるか継続的廃棄であるか、屋敷内の住環境がどうであったかを検討するため、20cm×10cm×90cmの柱状サンプルを、上から2cmの厚さで45試料を採集した。柱状サンプルは乾燥後、重量を計測し、動物遺体を摘み、サンプルごとの個体数をカウントする。また、10cm×5cm×10cmのブロックサンプルを8試料採集した（1表）。



26 図 オカチョウジガイ (約 5mm)



27 図 SK95

SK95 の土壌サンプルを篩い、摘み作業を行ったところ、陸産微小貝類の縦方向の分布差が確認できたことから、この遺構におけるごみ処理状況の復元が可能であると考えている。また、陸産微小貝類の幼貝を検出したことから、遺構の季節性の問題も検討可能であると考えている。

C 区

C 区の北西部、間口付近で検出した畑 SX684 は、南北方向の溝が等間隔で並ぶ遺構群で、東西に延びる溝 SD523 の南側に位置する。遺構の軸は本郷通りと平行である。各溝と溝の北側もしくは南側で確認された土坑には、枝番を付した。長さ約 1.8 m、幅約 0.3 m の溝 10 条が並ぶ一群と長さ約 3.5 m、幅約 0.4 m の溝 16 条が南北に並ぶ一群がある。溝の覆土は概ね黒ボク土を主体とする黒色土で、混入物は極めて少ない。坑底直上の覆土はローム土と黒ボク土の混在する土である。溝を掘削し耕作土を溝に入れ畑としたと考えられる。遺構の年代は、東大敷地になってから行われた削平のため、生活面が確認できず、畑という遺構の性格上遺物の出土が少ないため明確に出来ないが、遺構の切り合い関係から、SX684 が一番古い遺構である。

栽培植物を検討するために、堆積状況が良好な遺構の土壌サンプルを採集した。サンプルは 5cm × 10 cm × 10 cm のブロック状で採集、サンプルがアルミホイルで崩れないように包み、天地を記載しユニパックに収めた (1 表)。

他の遺構では食生活の復元等を目的に貝、魚骨、獣骨等の動物遺体の採集を行った。金属製品、ガラス製品については PIXE 分析を行う (註 2)。

5. 地下室内の温度と照度、灯火具の使用実験

箱番号	遺構番号	層位	試料状況
127	41	畝 No.1 ~ 8	10 × 5 × 10cm
127・129	95	ごみ穴 No.1 ~ 8	10 × 5 × 10cm
132	522	最下層	10 × 5 × 10cm
133	536	井戸底土	10 × 5 × 10cm
184	684-4	畝 1 層	10 × 5 × 10cm
184	684-5	畝 1 層	10 × 5 × 10cm
184	684-7	畝 1 層	10 × 5 × 10cm
184	684-11	畝 1 層	10 × 5 × 10cm
184	684-12	畝 1 層	10 × 5 × 10cm

箱番号	遺構番号	層位	試料状況
184	684-18	畝 1 層	10 × 5 × 10cm
184	684-19	畝 1 層	10 × 5 × 10cm
184	684-20	畝 1 層	10 × 5 × 10cm
184	684-21	畝 1 層	10 × 5 × 10cm
184	684-23	畝 1 層	10 × 5 × 10cm
184	684-28	畝 1 層	10 × 5 × 10cm
184	684-29	畝 1 層	10 × 5 × 10cm
184	684-30	畝 1 層	10 × 5 × 10cm

1 表 土壌サンプルリスト

SU325は天井が残っており、室が江戸時代の状態で残っていた。文京区教育委員会の調査では、地下室の中には温室として使用された「はきかけむろ」という室があったとの報告がある（関口2000）。SU325が「はきかけ室」であったかは不明だが、地下構造物という意味では共通していることから、植物の栽培にとって重要な室内外の温度と湿度を計測した。また、室の南壁に灯火具を設置する棚が残っていたことから、灯火具を灯し室内の照度を計測した。この他、SU380、SU401でも計測を行った。

室内外の温度

地下室SU325の室内外の温度、湿度を計測した。2月7日午前9:00の外気温は1℃、湿度70%、室内は7.5℃、湿度75%、室の埋土内温度は11℃であった（2表）。

SU325 2月7日午前9:00 天候快晴、前日降雪		SU380 2月8日午前16:03 天候快晴		SU401 2月18日午前9:30 天候晴	
外気温	1℃	外気温	6℃	外気温	4℃
外気湿度	70%	外気湿度	37%	外気湿度	53%
室内温度	7.5℃	室内温度	13℃	室内温度	10℃
室内湿度	75%	室内湿度	48%	室内湿度	60%
埋土内温度	11℃				

2表 地下室の室内外の温度

室内外の照度と灯火具の使用実験

天井部が残っている地下室を対象に、照度の計測を行った。計測はデジタル照度計LX-10を用いた。灯火具の点灯実験は、SU26出土の油受け皿、油皿を用いた。燃料は菜種油、芯は麻紐を使用した。火を灯すことによって灯火具近くは明らかに照度が上昇した（3表）。灯火による室内の照度上昇は数値上は小さいが、室内が明るくなった印象を受けた。湿気で濡れた地下室の壁面に明かりが反射したためと考えられる。SU325の点灯実験では、入り口を閉め切った状態の照度は1Lux、灯火具点灯後の照度は3Luxに上昇した。現在、建築物内照度は、JIS照明の奨励値基準（JIS Z9110-1970）により規定されている（4表）。JISの照度基準によれば、3Luxは構内広場の照度である。

室温は外気温より6、7℃高かった。また室の入口を塞いで明かりを灯した場合、カンテラ等の灯

SU325の照度 2月15日午前9:30、天候快晴		SU401の照度 2月18日午前9:30、天候快晴	
室外（日陰）	5,600Lux	室外（日陰）	8,570Lux
室の北奥（入り口から日が差し込む）	77lux	室の中心（入り口から日が差し込む）	803Lux
室の階段部下段付近（入り口から日が差し込む）	272Lux	室の西奥	3Lux
室の南壁灯明具の設置棚近く（日はあたらぬ）	3Lux	室の中心（入り口を閉めた状態）	1Lux
室の南壁灯明具の設置棚近く灯明具を点灯、灯明具から10cmの距離	32Lux	室の中心（入り口を閉めた状態で南壁灯明具設置棚で灯明具を点灯）	3Lux
		室の南壁灯明具設置棚近く灯明具を点灯、灯明具から10cmの距離	29Lux

3表 地下室の照度

構内広場	2～5Lux
物置・非常階段・ピロティ・車庫	5～30Lux
浴室・脱衣室・むねの出入口・廊下・階段	75～150Lux
エレベーターホール・エレベーター・洗濯場	100～200Lux
受付・集会室・ロビー	150～300Lux

ティー・オー・シー株式会社 HP より

4表 JIS 証明の奨励値基準

火具を併用すれば、室内での作業は可能と考えられる。

灯火具の実験は遺跡見学会、都立向丘高校の講義でも行った。実験には出土遺物、芯は麻紐、燃料は菜種油を用いた。具体的に江戸の生活を知っていただくには、効果的な出土遺物の活用方法と考えられる。

6. 遺跡公開理念と追分学寮と調査成果展示施設設置の要望

文化財保護法、第1章「総則（この法律の目的）第1条「この法律は、文化財を保存し、且つ、その活用を図り、もつて国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献することを目的とする」この理念に則り遺跡の公開を行った結果、約800名の方々が見学に訪れた。公開により、遺跡調査に対する近隣住民の理解を得られたと考える。調査中、追分学寮OBの方々が遺跡の見学に訪れ、寮開設当時の貴重な話をうかがうことができた。

本部プロジェクトグループでは、追分国際学生宿舎内に近隣住民が利用できる会議室の設置が検討されているという。近隣住民に、東京大学の文化事業として行われた発掘調査の成果を知っていただき、今後も行われる東京大学の事業に対し理解を得ていただくため、研究成果と出土遺物の展示スペース設置を実現できないであろうか。また、寮の歴史をパネルにし、新たな宿舎の住人となる外国人留学生に対して、追分学寮の歴史と「EDO Culture」の一端を知っていただくきっかけとなるのではなかろうか。

【引用・参考文献】

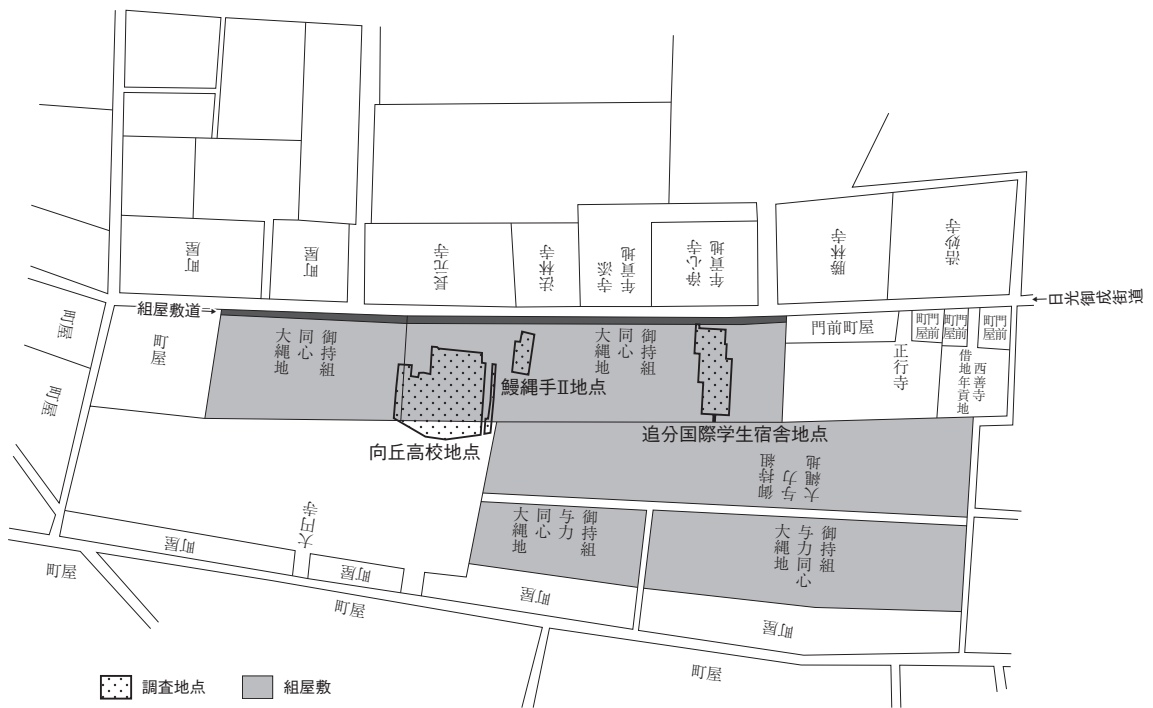
- 岩淵治治 1996「第11章 駒込村の歴史の変遷」『春日町遺跡・菊返下遺跡・駒込追分町遺跡・駒込浅嘉町遺跡・駒込富士前町遺跡』、pp.451-510 地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡調査会
- 関口かをり 2000「第4章 文献調査の結果」『林町遺跡第Ⅱ地点』pp.114-116 文京区遺跡調査会
- 都内遺跡調査会 1997『駒込鰻縄手 御先手組屋敷—都立向丘高校地点における埋蔵文化財発掘調査報告書—』
- 都内遺跡調査会、文京区遺跡調査会 2004『駒込鰻縄手遺跡第Ⅱ地点—集合住宅に伴う発掘調査報告書—』文京区埋蔵文化財発掘調査報告書第32集
- 平野 恵 2006「植木屋はどこから来てどこへ行くか?」『歴史書通信』pp.2-4 歴史書懇話会
- 宮崎 博 1997「3. 文献調査 都立向丘高校地点の文献調査」『駒込鰻縄手 御先手組屋敷—都立向丘高校地点における埋蔵文化財発掘調査報告書—』pp.155-212 都内遺跡調査会

註

1. 1991年次時の試掘調査成果より寮の跡と判断した。
2. 共同利用研究 課題番号 E009 一般プロジェクト MALT-PIXE 東京大学出土考古資料の材質分析 研究代表者 原 祐一 現在継続中



28 図 調査地点の位置と朱引内大縄地の分布



29 図 江戸時代の調査地点周辺



30 図 江戸時代の調査地点周辺

第 2 部 東京大学埋蔵文化財調査室要項

2007・2008 年度調査室事業概要
2007・2008 年度調査室員活動内容
運営委員会規則
調査室規則
調査室組織表（2007・2008 年度）

第 I 章 2007・2008 年度調査室事業概要

2007・2008 年度に行った事業概要は以下の通りである。

第 1 節 発掘調査（試掘、立会を含む）

1-1. 本郷地区

本郷地区においては事前 4 件、試掘 1 件、立会 4 件の調査を行った。

< 事前 >

- ・2007 年 6 月 20 日～7 月 20 日 本郷 82 懐徳門地点（担当 堀内）
- ・2008 年 3 月 17 日～7 月 11 日、9 月 11 日～24 日、2009 年 2 月 2 日～10 日 本郷 81 経済学研究科
学術交流棟地点（担当 成瀬）
- ・2008 年 4 月 1 日～8 月 1 日 本郷 74 医学部附属病院看護師宿舎Ⅲ期地点（担当 堀内）
- ・2008 年 12 月 7 日～25 日、本郷 87 東京都下水道工事地点（担当 原）

< 試掘 >

- ・2007 年 10 月 22 日～25 日 本郷 83 向ヶ丘ファカルティハウス地点（担当 堀内）

< 立会 >

- ・2008 年 3 月 14 日 本郷 85 薬学部東法面階段設置地点（担当 成瀬）
- ・2008 年 11 月 19 日～20 日 本郷 88 耐震対策事業(ライフライン再生)ガス管改修工事地点(担当 原)
- ・2008 年 11 月 25 日～12 月 17 日 本郷 89 弥生地区屋外ガス配管改修工事地点(担当 原)
- ・2009 年 2 月 2 日～16 日 本郷 86 雨水管改修工事地点（担当 原）

1-2. 駒場 I 地区

駒場 I 地区においては立会 1 件の調査を行った。

< 立会 >

- ・2007 年 12 月 20 日 駒場 I 20 初年次活動センター新築工事地点（担当 追川）

1-3. 駒場 II 地区

駒場 II 地区においては立会 1 件の調査を行った。

< 立会 >

- ・2008 年 7 月 9 日～14 日 駒場 II 9 保育施設地点（担当 大成）

1-4. その他の地区

その他の地区においては事前 1 件、試掘 2 件の調査を行った。

< 事前 >

- ・2007 年 12 月 3 日～2008 年 3 月 25 日 文京区 追分国際学生宿舎地点（担当 原）

< 試掘 >

- ・2007 年 8 月 27 日～31 日 文京区 追分国際学生宿舎地点（担当 原・堀内）
- ・2007 年 9 月 3 日～4 日 文京区 理学系研究科附属植物園・医学部創設 150 周年記念（小石川養生所復元）建物地点（担当 成瀬）

第2節 教育・普及

2-1. 発掘調査現地説明会

- ・2008年2月1・2日 追分国際学生宿舎新営地点 400名(担当原)
- ・2008年6月27日 医学部附属病院看護師宿舎Ⅲ期地点 200名(担当堀内)
- ・2008年7月11日 経済学研究科学術交流棟地点1次調査 400名(担当成瀬)
- ・2008年9月24日 経済学研究科学術交流棟地点2次調査(地下式翹室) (担当成瀬)

2-2. 学外授業での利用

- ・2007年12月3日 集落研究会史跡見学会 浅野地区・弥生地区遺跡・史跡見学 13名(担当原)
- ・2008年1月17日 都立向丘高校日本史選択授業 追分国際学生宿舎地点、浅野地区、弥生地区遺跡・史跡見学 30名(担当原)
- ・2008年2月21日 都立向丘高校2年生日本史選択授業「向ヶ岡弥生と幕末維新」 30名(担当原)
- ・2008年2月23日 学習院大学岩淵ゼミ 追分国際学生宿舎地点、浅野地区、弥生地区遺跡・史跡見学 15名(担当原)
- ・2009年2月19日 都立向丘高校2年生日本史選択授業 浅野地区、弥生地区史跡見学 23名(担当原)
- ・2009年3月4日 鹿児島市立龍中学校3年生授業 浅野地区の遺跡・史跡見学 120名(担当原)
- ・2009年3月21日 日本石造文化学会史跡見学会 浅野地区、弥生地区の遺跡・史跡見学 20名(担当原)

第3節 資料の活用

年度	貸出先	貸出・掲載目的	貸出・掲載資料
2007	東京国立博物館	常設展 資料展示	御殿下記念館地点出土「青磁香炉」ほか陶磁器 - 計 69 点
	国立歴史民俗博物館	常設展 資料展示	御殿下記念館地点出土「染付大皿」ほか出土資料 - 計 28 点
	江戸東京博物館	常設展 資料展示	医学部附属病院中央診療棟地点出土「プラ人形」ほか出土資料 - 計 107 点
	飯能市郷土館	常設展 資料展示	医学部研究所附属病院診療棟地点出土「行平鍋」ほか陶器 - 計 2 点
	学校法人香川栄養学園	常設展 資料展示	農学部家畜病院地点出土「播鉢」ほか陶器 - 計 5 点
	兵庫陶芸美術館	企画展『珉平焼』 資料展示	山上会館・御殿下記念館地点出土「陶片」ほか陶片 - 計 3 点
	四国城下町研究会	四国城下町研究会大会 資料展示	工学部 14 号館地点出土「陽刻白色土器皿ほか土器皿 - 計 2 点
2008	東京国立博物館	常設展 資料展示	御殿下記念館地点出土「青磁香炉」ほか陶磁器 - 計 69 点
	国立歴史民俗博物館	常設展 資料展示	御殿下記念館地点出土「染付大皿」ほか出土資料 - 計 28 点
	江戸東京博物館	常設展 資料展示	医学部附属病院中央診療棟地点出土「プラ人形」ほか出土資料 - 計 107 点
	飯能市郷土館	常設展 資料展示	医学部研究所附属病院診療棟地点出土「行平鍋」ほか陶器 - 計 2 点
	学校法人香川栄養学園	常設展 資料展示	農学部家畜病院地点出土「播鉢」ほか陶器 - 計 5 点
	松戸市立博物館	学芸員連続講演会 写真展示・映像上映	追分国際学生宿舎地点「調査風景写真」ほか写真 10 点、映像フィルム 1 点 - 計 11 点
	茨城県立歴史館	特別展『幕末日本と徳川齊昭』 資料展示	教育学部総合研究棟地点出土「仁清銘水指」ほか陶磁器 - 計 3 点
	文京ふるさと歴史館	特別展『ぶんきょう食の文化展-』 写真展示	総合研究棟地点検出「地下室」写真 - 計 1 点
	山川出版社	宮崎勝美『日本史リブレット 87 大名屋敷と江戸屋敷』 写真掲載	医学部教育研究棟地点検出「門遺構」写真、ほか遺物・遺構写真 - 計 13 点
	講談社エディトリアル	『年代別蕎麦猪口文様大辞典』 写真掲載	御殿下記念館地点出土「染付松樹文猪口」写真 - 計 1 点
	學燈社	加納克己「操り人形考古学」『国文学』 写真掲載	医学部附属病院病棟地点出土金平人形かしら写真、ほか人形写真 - 計 2 点
	新泉社	石川日出志『弥生町遺跡』 写真掲載	工学部武田先端知ビル地点検出「方形周溝墓」写真、ほか遺構・遺物写真 - 計 4 点
	九州陶磁文化館	特別企画展『土の美 古唐津』 写真掲載	法学部 4 号館・文学部 3 号館地点出土「陶器碗」ほか陶器碗写真 - 計 2 点
	金沢卯辰山工芸工房	特別展『民山』 写真展示	御殿下記念館地点出土「再興九谷碗」ほか同写真 - 計 2 点
	オメガ社	『やきものの楽しみ方完全ガイド』 写真掲載	医学部附属病院病棟地点出土「色絵亀甲文大皿」写真ほか遺物・遺構写真 - 計 3 点
	九州産業大学	『柿右衛門様式研究』 写真掲載	医学部附属病院中央診療棟地点出土「色絵菊文輪花鉢」写真 - 計 1 点
	メディア総合研究所	TV「クイズにっぽん力」 資料紹介	医学部附属病院外来診療棟地点出土「温石」 - 計 1 点
オールアバウト	『All About』 写真掲載	医学部附属第二中央診療棟地点出土「陶磁器」写真、ほか瓦写真 - 計 2 点	
吉川弘文館	『災害と江戸時代』 写真掲載	医学部附属病院第二中央診療棟地点出土「被熱した瓦写真」、ほか遺物・遺構写真 - 計 3 点	

第Ⅱ章 2007年度・2008年度室員活動内容

成瀬 晃司

【執筆】

2008年

- ・「東京大学白山構内の遺跡 総合研究博物館小石川分館地点発掘調査報告」『東京大学構内遺跡調査研究年報』6（編集）
- ・「白山御殿の惣囲いについて」『東京大学構内遺跡調査研究年報』6、pp.171-184
- ・「2007年の歴史学会－回顧と展望－日本考古 五 歴史時代 中世・近世」『史学雑誌』第117編 第5号、pp.34-37 史学会
- ・「加賀百万石 前田家の至宝」『東京大学創立130周年記念事業 知のプロムナード ナビゲーションブック』p.9

【研究発表】

- ・2007年5月31日
「情報学環・福武ホール地点の調査」（平成19年度 金沢城調査研究関係機関連絡会）

堀内 秀樹

【執筆】

2007年

- ・「江戸大名のたべもの」『食べ物の考古学』p187-217 学生社
- ・「オランダ消費遺跡出土の東洋陶磁器 十七から十九世紀における東洋陶磁器貿易と国内市場」『東洋陶磁』36号、pp.39-59 東洋陶磁学会
- ・「沈船積載資料とオランダ消費遺跡出土の東洋陶磁器」『貿易陶磁研究』27号、pp.53-66 日本貿易陶磁研究会
- ・「2006年の歴史学会－回顧と展望－日本考古 五 歴史時代」『史学雑誌』第116編 第5号、pp.31-35 史学会

2008年

- ・『東京大学三鷹構内の遺跡 長嶋遺跡』東京大学埋蔵文化財調査室（編集）
- ・「江戸の陶磁器消費と柿右衛門」『柿右衛門様式研究－肥前磁器 売立目録と出土資料－』、pp.475-605 九州産業大学 21世紀 COE プログラム柿右衛門様式研究センター（坂野貞子と共著）

2009年

- ・『近世陶磁器の消費に関する考古学的研究』学位論文

【研究発表】

- ・2007年11月1日
「考古学からみた物質文化交流と江戸遺跡出土遺物－出土貿易陶磁器を中心に－」（『十六至十八世紀欧州與東亜、東南亜的文化互動 国際学術研討会』、p.7-1-7-42 台湾中央研究院歴史語言研究所）
- ・2007年12月15日

- 「17世紀の陶磁器からみた江戸社会」(『関西近世考古学研究』15、pp.84-110 関西近世考古学研究会 所収)
- ・2008年7月31日
「文化的行為と道具の使用に関する考古学的研究－遺跡出土の喫茶・喫煙具と江戸時代初期の嗜好品文化の展開の中で－」(『平成19年度 財団法人たばこ総合研究センター 助成研究報告』、pp.69-89 所収)
 - ・2008年9月10日
「都市江戸とやきものの消費」(『備前市歴史民俗資料館紀要 江戸時代の暮らしと備前焼』10、pp.3-11 備前市教育委員会、備前市歴史民俗資料館 所収)
 - ・2008年10月25日
「17～19世紀の陶磁器貿易を検証するの主旨」(『17～19世紀の陶磁器貿易を検証する』、pp.1-6 所収)
 - ・2008年11月23日
「地方窯と消費地遺跡」(『第9回四国城下町研究会 四国・淡路の陶磁器－砥部焼・屋島焼の生産と流通－』 pp.129-141 東洋陶磁学会・四国城下町研究会 所収)

【講演・講座】

- ・2009年2月21日
「発掘から見た江戸の暮らしとやきものの流通」(第3回袋井市浅羽郷土資料館 講座)

原 祐一

【執筆】

2007年

- ・「武田先端知ビル建設に伴う発掘調査で出土した弥生時代のガラスと明治時代の弾丸のPIXE分析 付編 浅野地区の史跡と文京区弥生の歴史」第9回AMSシンポジウムプロシーディング(小泉好延、中野忠一郎、松崎浩之と共著)

2008年

- ・『「向岡記」碑 保存修復報告書 「向岡記」碑の研究』(執筆・発行)
- ・「東京大学埋蔵文化財調査室における遺跡の公開と保存の実践」『東京大学構内遺跡調査研究年報』6、pp.191-197
- ・「東京大学本郷構内の遺跡 薬学系総合研究棟(2002年度)で検出した医学部薬局の基礎SB01についての考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』6、pp.209-212

【研究発表】

- ・2007年6月17日
「ポスターセッション 本郷区向ヶ岡弥生町における発掘調査と文化財保護公開の歴史 そして、弥生時代名称由来土器発見地」(『文化財保存修復学会第29回大会発表要旨』文化財保存修復学会 所収、石原道知、堀江武史と共同研究)
- ・2007年9月12日
「広島城跡から出土した幕末から明治時代の染付及び砥部焼のPIXE分析」(『第24回PIXEシンポジウム発表要旨』PIXE研究会 所収、小泉好延、中野忠一郎、川田秀治と共同研究)

- ・2008年5月25日
「向ヶ岡弥生町の弥生土器発見地と土器の名称由来となった「向岡記」碑の保存修復と公開」（『日本考古学協会第74回（2008年度）総会発表要旨』日本考古学協会 所収、pp.64-65、石原道知、堀江武史、横山淳一、塩原都、清水美知子、森田信博、小林善行と共同研究）
- ・2008年5月18日
「ポスターセッション 徳川斉昭建立「向岡記」碑の保存」（『文化財保存修復学会第30回記念大会発表要旨』 pp.96-97 文化財保存修復学会 所収、石原道知、堀江武史、横山淳一、塩原都、清水美知子、森田信博、小林善行と共同研究）
- ・2008年7月19日
「ポスターセッション 弥生時代の由来となった「向岡記」碑の保存修復」（『武蔵野文化財修復研究所研究会』石原道知、堀江武史、横山淳一、塩原都、清水美知子、森田信博、小林善行と共同研究）
- ・2008年7月19日
「ポスターセッション 東京大学工学部武田先端知ビル方形周溝墓の修復と弥生土器の修復」（『武蔵野文化財修復研究所研究会』石原道知、堀江武史と共同研究）

【その他】

- ・東京大学 130 周年記念事業実施委員会 知のプロムナード小委員会 2007「遺跡と先端知の道」『東京大学 130 周年記念事業 知のプロムナードナビゲーションマップ』
- ・「東京大学浅野地区・弥生地区の歴史 1 弥生町の由来と「向岡記」碑」『工職ニュース』第 122 期 6 号（2008.1.1）
- ・「したまち 地域の情報 東大宿舍予定地 敷地に江戸期の屋敷跡 住環境知る陶器など出土」東京新聞 26 面（2008.1.27）
- ・「東京大学浅野地区・弥生地区の歴史 2 浅野地区に保存されていた弥生時代の遺跡」『工職ニュース』122 期 7 号（2008.2.1）
- ・「記者ノート 徳川斉昭あつての「弥生時代」」読売新聞朝刊 17 面（2008.2.22）
- ・「東京大学浅野地区・弥生地区の歴史 3 浅野地区・弥生地区と明治維新 西南戦争まで」『工職ニュース』122 期 8 号（2008.3.2）
- ・「東京北部 宿舍予定地から江戸武家屋敷跡 東大が見学会」朝日新聞 31 面（2008.2.2）
- ・「東大宿舍予定地に江戸期の屋敷跡」文京ふるさと歴史館友の会事務局『友の会だより』第 49 号（2008.3.31）
- ・「東京大学浅野地区・弥生地区の歴史 4 西南戦争以降に行われた射的会と弥生舎、弥生神社の建設、浅野侯爵邸と浅野地区」『工職ニュース』第 122 期 9 号（2008.4.1）
- ・「本郷キャンパス構内その 9 知のプロムナード（創立 130 周年記念事業）②逍遥 本郷の風景の中に佇みながら 農の道 遺跡と先端知の道」『赤門学友会報 懐徳』No.12、p.11（2008.6.10）
- ・「第十八回 自由書展」向岡記軸の展示と解説（2008.7.30～8.2）
- ・「向岡記」碑の保存修復と展示（2008.8.8）
- ・「東京大学浅野地区・弥生地区の歴史 5 幕末期の幕政改革と安政の大獄 徳川斉昭が愛した駒込邸」『工職ニュース』第 132 期 2 号（2008.9.1）
- ・「「弥生」の言葉生む？徳川斉昭の碑文修復」朝日新聞朝刊 22 面（2008.9.3）
- ・「埋蔵文化財調査室 追分新国際宿舍（仮称）建設予定地の発掘調査」『学内広報』No.1376 東京大

学広報委員会 (2008.8.21)

- ・大洗の歴史と自然を楽しむ会 茨城県立歴史館特別展『幕末日本と徳川齋昭』解説 (2008.10.12)
- ・『コラム 東京大学浅野地区「向岡記」碑(むかいがおかきのひ)保存処理と展示』加藤建設株式会社ホームページ <http://www.katoh-k.co.jp>
- ・「農正門前のガス管工事でレンガ基礎見つかる」『弥生』48、東京大学大学院農学生命科学研究科広報室 (2009.3.31)
- ・「それゆけ！タバちゃん 東京大学追分新国際宿舎建設予定地の発掘調査」東京ケーブルネットワーク制作 (2009.3 放映)

追川 吉生

【執筆】

2007年

- ・『江戸のなりたち (1) 江戸城・大名屋敷』新泉社
- ・『江戸のなりたち (2) 武家地・町屋の暮らし』新泉社

2008年

- ・『江戸のなりたち (3) 江戸のライフライン』新泉社

【講演・講座】

- ・2008年6月10日
「在江戸大使館、大名屋敷の発掘調査」(同志社大学公開講座)
- ・2008年8月23日
「加賀藩前田家から東大黎明期へ」(首都大学東京オープンユニバーシティ)
- ・2009年1月19日
「探訪、内藤家虎御門内屋敷 —発掘でわかった江戸の大名屋敷—」(明治大学リバティーアカデミー)

第Ⅲ章 東京大学埋蔵文化財運営委員会規則

平成元年7月11日

評議会可決

(設置)

第1条 東京大学に東京大学埋蔵文化財運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(任務)

第2条 委員会は、東京大学構内における埋蔵文化財に関する重要事項及び埋蔵文化財調査室の運営等に関し必要な事項を審議することを任務とする。

(組織)

第3条 委員会は、委員長及び委員若干名をもって組織する。

(委員長)

第4条 委員長は、総長特別補佐のうちから総長が指名する。

(委員)

第5条 委員は、次の各号に掲げる者に総長が委嘱する。

- (1) 医学部長、工学部長、文学部長、理学部長、東洋文化研究所長、史料編さん所長及び事務局長
- (2) 埋蔵文化財調査室長
- (3) その他総長が必要と認めた者

2 前項第3号の委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

(幹事)

第6条 委員会に幹事を置く。

2 幹事は、総務部長、経理部長及び施設部長をもってあてる。

(庶務)

第7条 委員会の庶務は、事務局施設部企画課において処理する。

(補則)

第8条 この規則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会の定めるところによる。

附 則

この規則は、平成8年5月21日から施行し、改正後の東京大学埋蔵文化財運営委員会規則の規定は、平成8年5月11日から適用する。

第Ⅳ章 東京大学埋蔵文化財調査室規則

平成元年7月11日

評議会可決

(設置)

第1条 東京大学埋蔵文化財運営委員会の下に埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という）を置く。

(業務)

第2条 調査室は、東京大学構内の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査（以下「遺跡調査」という）に関し、次の各号に掲げる事項を処理する。

- (1) 遺跡調査に対する総括的指導助言
- (2) 文化庁等に提出する報告書の作成、監修及び指導
- (3) 遺物等の保管及び管理
- (4) 遺跡調査の方法に関する調査研究
- (5) 前各号に定めるもののほか、研究報告書の作成等遺跡調査に関し必要と認められる事項

(室長)

第3条 調査室に室長を置く。

2 室長は、東京大学専任の教授又は助教授のうちから総長が委嘱する。

3 室長は、調査室の業務を総括する。

(室員)

第4条 調査室に室員若干名を置く。

2 室員は、室長の指示に従い、調査室の業務に従事する。

(庶務)

第5条 調査室の庶務は、事務局総務部総務課において処理する。

附 則

この規則は、平成8年5月21日から施行し、改正後の埋蔵文化財調査室規則の規定は、平成8年5月11日から適用する。

第V章 東京大学埋蔵文化財調査室組織表（2007・2008年度）

室長（人文社会系研究科教授）	今村 啓爾
室員（人文社会系研究科准教授）	寺島 孝一（～2009年3月）
室員（人文社会系研究科助教）	成頼 晃司
〃	堀内 秀樹
室員（人文社会系研究科助手）	原 祐一
〃	大成 可乃
〃	追川 吉生
事務補佐員	青山 正昭
〃	安芸 毬子（～2008年3月）
〃	阿部 常樹（～2008年3月）
〃	今井 雅子
〃	大貫 浩子
〃	加藤 理香（2008年6月～）
〃	香取 祐一
〃	小林 照子（2008年4月～）
〃	山田 くりか（～2008年6月）
〃	坂野 貞子
〃	田中 美奈子（2006年4月～）

第3部 東京大学構内遺跡発掘調査報告

農学部生命科学総合研究棟（NSK01）地点
駒場図書館（KL）地点

東京大学本郷構内の遺跡

農学部生命科学総合研究棟地点発掘調査報告



口絵 2 農学部生命科学総合研究棟地点 全景



SR1 全景

例 言

1. 本報告は、農学部生命科学総合研究棟新営に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 調査地点は、過去の年報、論文において「農学部総合研究棟 01」(略称「NS01」)としていたが、現在の施設名称である「農学部生命科学総合研究棟地点」(略称「NSK01」)に改称した。
3. 調査地点は東京都文京区弥生 1-1-1 東京大学本郷キャンパス弥生地区内に所在している。
4. 調査地点は、東京都遺跡地図「文京 47 本郷台遺跡群(本郷七丁目・弥生二丁目、台地、集落・貝塚・大名屋敷、[平]住居・[近]礎石・土坑・地下式坑・庭園・井戸・溝・杭・石垣[旧][縄][弥][古][平][近])」内に位置している。
5. 試掘調査面積は 100㎡、調査面積は 1,800㎡である。
6. 調査期間
試掘調査 2001 年 3 月 27 日
本 調 査 2001 年 9 月 21 日～10 月 19 日
整理作業 2008 年 7 月 1 日～2010 年 6 月(この期間に断続して作業を行った。)
報告書編集作業 2010 年 5 月 1 日～10 月 20 日
7. 発掘調査は東京大学埋蔵文化財調査室が行い、原 祐一が担当した。
8. 銭貨の分類・鑑定は、流山市立博物館の川根正教氏にご教示いただいた。
9. 石材鑑定はパリノ・サーヴェイ(株)の石岡智武氏に依頼した。
10. 動物遺体は阿部常樹氏に依頼し玉稿をいただいた。
11. 本報告の編集は原 祐一、小林照子、渡邊法彦が行った。
12. 執筆分担は以下の通りである。
第 I 章、第 II 章、第 III 章第 1 節、第 IV 章 原 祐一
第 III 章第 2 節 大貫浩子(陶磁器類)、安芸毬子(土製品)、石井龍太(瓦)
第 III 章第 3 節 阿部常樹(動物)
13. 本書に添付した CD-ROM には、報告書電子版(pdf 形式)、遺構・遺物写真(jpeg 形式)、遺物観察表(xls 形式)を収録している。
14. 発掘調査に伴う図面、写真、出土遺物は東京大学埋蔵文化財調査室が、本学駒場リサーチキャンパス(東京都目黒区駒場 4-6-1)、同工学系研究科附属柿岡教育研究施設(茨城県石岡市柿岡 414)内において、保管・運用している。
15. 発掘調査・整理作業参加者
青山正昭、今井雅子、大貫浩子、加藤理香、香取祐一、川原良子、北島くりか、小林照子、坂野貞子、田中美奈子、野村 遊、渡邊法彦(埋蔵文化財調査室)、加藤建設(株)
16. 発掘調査および報告書の作成にあたり、以下の方々、機関からご教示を得た。ここに謝意を表する(敬称略、五十音順)。
青木 哲、青木 誠、浅野長孝、池田悦男、石川日出志、石原道知、磯村照明、伊藤博之、今村啓爾、岩淵令治、仰木ひろみ、大竹完治、大塚達朗、岡田靖雄、風祭 元、加藤元信、小泉好延、齊藤洋一、清水謙多郎、小林紘一、春原陽子、谷川章雄、徳川眞木、中野忠一郎、橋本真紀夫、細谷恵子、堀切重明、松岡克治、三村敏征、宮崎勝美、山本 實、梶原慶子、山崎範子、山田しげる、

森まゆみ

加藤建設（株）、（株）パレオ・ラボ、（財）水府明徳会彰考館徳川博物館、アイソトープ総合センター、人文社会系研究科文学部考古学研究室、広報センター、史料編纂所、工学系研究科原子力国際専攻タンデム加速器研究施設、東京都公文書館、パリノ・サーヴェイ（株）、文京区教育委員会、文京ふるさと歴史館、山本書店、茨城県立歴史館、広島県福山誠之館同窓会、広島県立福山誠之館高等学校、谷根千工房、武蔵野文化財修復研究所、向ヶ岡弥生町会、鈴木徽章工業（株）

凡 例

1. 本文中に記載した遺構の略号は、以下の通りである。

SB：建物址 SE：井戸 SK：土坑 SP：小穴 SU：地下室 SX：不明

2. 本報告の実測図の縮尺は、それぞれの図版に記した。遺物図版の縮尺は基本的に1／3である。

3. 出土遺物の写真は、基本的に添付したCD-ROMにjpeg形式に圧縮して記録した。

4. 遺物番号は本文、挿図、観察表、CD-ROMの写真で共通の番号を使用した。

5. 遺物図版に使用している記号は、以下のことを示している。

- ・ ▲は、高台、見込みなどの釉際を表している。
- ・ ━━は、口唇部の口銹を表している。
- ・ 遺物中心線上下の破線は、それぞれ推定口径、推定底径を表している。
- ・ - -は、断面を表している。
- ・ 播鉢の┌─┐は、体部播目の範囲を表している。
- ・ 口唇部の┌─┐は、敲打痕を表している。

6. 本文中に記載した陶磁器・土器の分類は、『東京大学構内遺跡調査研究年報2 別冊 東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(1)』に準拠している。

両地点からは、コンテナ21箱の遺物が出土している。この中には、胎質別に陶磁器・土器類、人形・ミニチュア、瓦、金属製品、石製品、ガラス製品、自然遺物等が含まれ、ここでは自然遺物については人工遺物と分けて記述を行った。人工遺物については遺構別に遺構番号降順に記載した。

実測図は、出土遺物全てを行うことは量的に不可能であり、本報告では出土遺構ごとにその年代や性格などを反映すると考えられる遺物を中心に、完形率、希少性などを含めて図化選択の判断とした。

○胎質

J (磁器) T (陶器) D (土器)

○生産地

A - 輸入陶磁器

A1 景德鎮窯系

A2 漳州窯系

A3 徳化窯系

A4 龍泉窯系

A5 宜興窯系

A6 朝鮮

A7 ベトナム

A8 ヨーロッパ

B - 肥前系

C - 瀬戸・美濃系

D - 京都・信楽系

E - 備前系

F - 志戸呂系

G - 常滑系

H - 萩系

I - 萬古系

J - 大堀・相馬系

K - 丹波系

L - 堺系

M - 益子・笠間系

N - 九谷系

O - 壺屋系

P - 淡路系

Z - 不明

○器種

1. 碗

2. 皿

3. 大皿

4. 爛徳利

5. 鉢

6. 坏

7. 猪口

8. 仏飯器

9. 香炉・火入れ

10. 瓶

11. 御神酒徳利

12. 油壺

13. 蓋物

14. 筆立て

15. 壺・甕

16. 急須

17. 爛鍋

18. 合子

19. 水滴

20. 蓮華

21. 植木鉢

22. 花生

23. 片口鉢

24. 灰落し

25. 鬢水入れ

26. 茶入れ

27. 水注

28. 澁瓶

29. 播鉢

30. 餌入

31. 火鉢

32. 柄杓

33. 鍋

34. 土瓶

35. 戸車

36. ちろり

37. 薬研

38. 手焙り

39. おろし皿

40. 油受け皿

41. 油徳利

42. 行平鍋

43. 十能

44. ひょうそく

45. 瓦燈

46. カンテラ

47. ほうろく

48. 七輪

49. 涼炉

50. 五徳

51. 塩壺

52. 燭台

53. 蒸し器

54. 懐炉

55. 泥面子・芥子面

56. 碁石形製品

57. 玉

58. 鈴

59. 笛

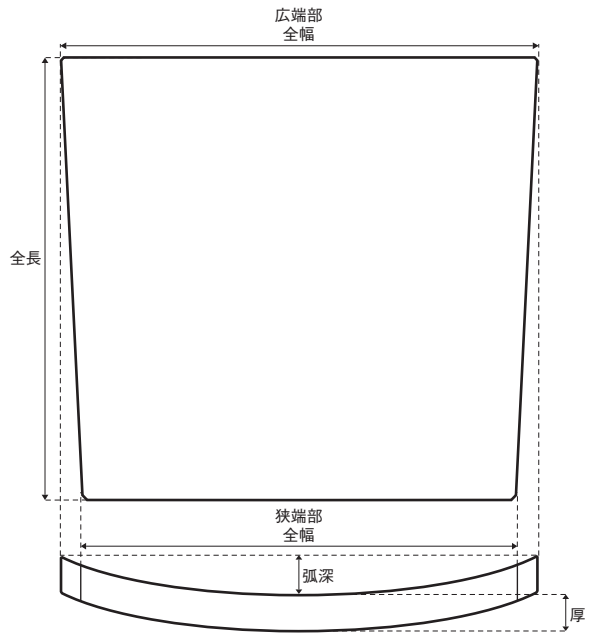
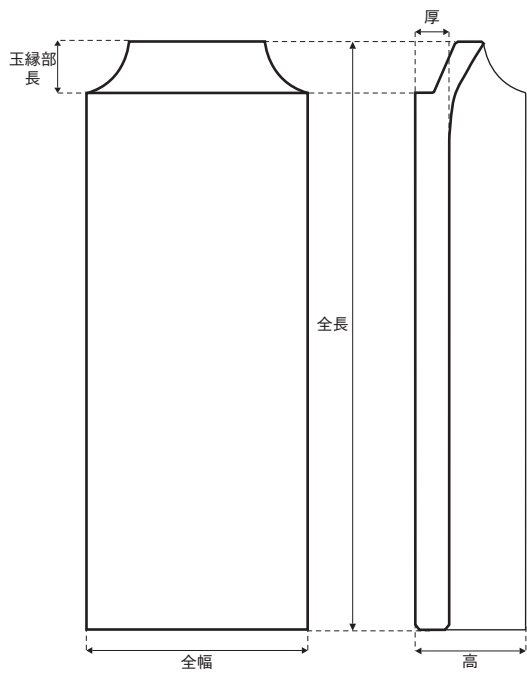
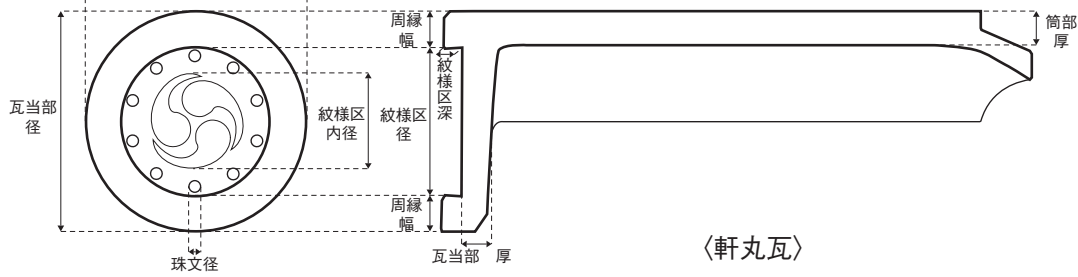
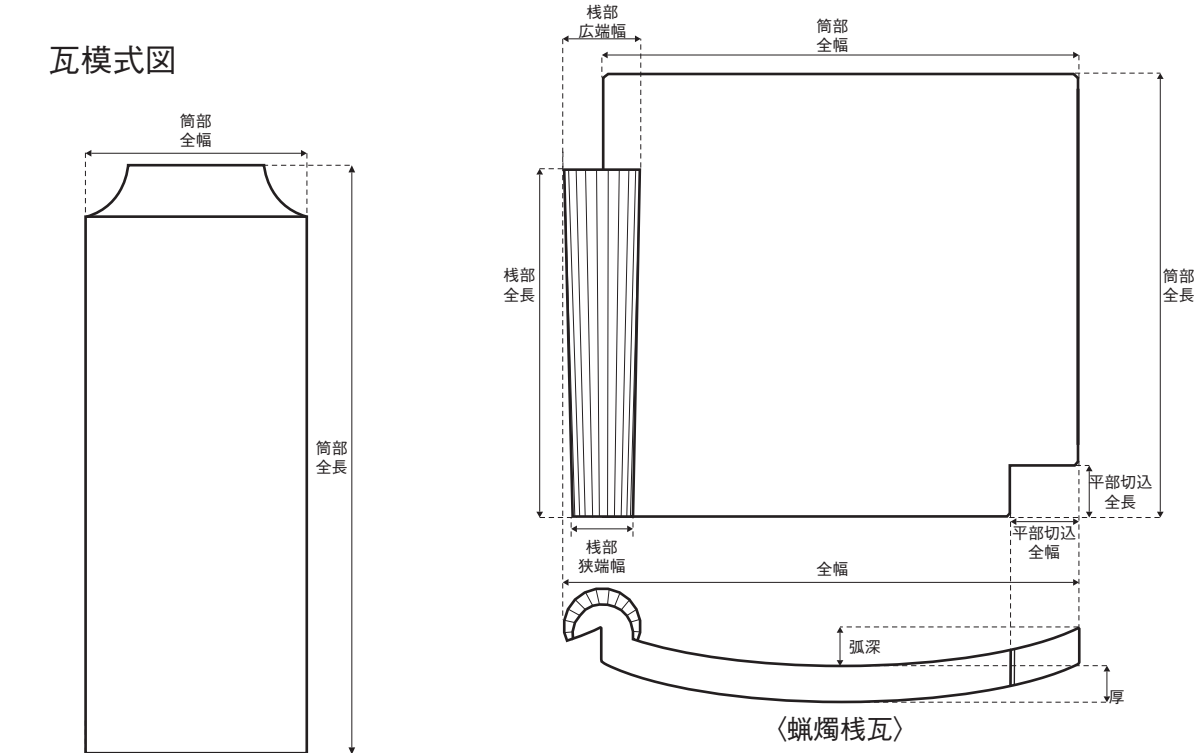
60. 人形

61. ミニチュア

62. 面型

00. 蓋

瓦模式図



東京大学本郷構内の遺跡
農学部生命科学総合研究棟地点発掘調査報告

目 次

例 言	
凡 例	
目 次	
第 I 章 遺跡周辺の諸環境	121
第 1 節 地質と地形の改変	121
第 2 節 歴史的環境	124
第 II 章 調査の概要	130
第 1 節 調査に至る経緯と経過	130
第 2 節 調査の概要	130
第 3 節 遺跡調査の公開	131
第 III 章 遺構と遺物	132
第 1 節 遺構	132
第 2 節 遺物	142
第 3 節 動物遺体	157
第 IV 章 農学部生命科学総合研究棟地点の成果	158
第 1 節 向ヶ岡弥生町の変遷と遺跡	159
第 2 節 SR1・SX2 と SU4・SK7 の年代と位置関係	161
第 3 節 調査地点周辺の立地条件と SR1 の役割	162
第 4 節 明治 21（1888）年以降に行われた向ヶ岡弥生町の造成	164
報告書抄録	

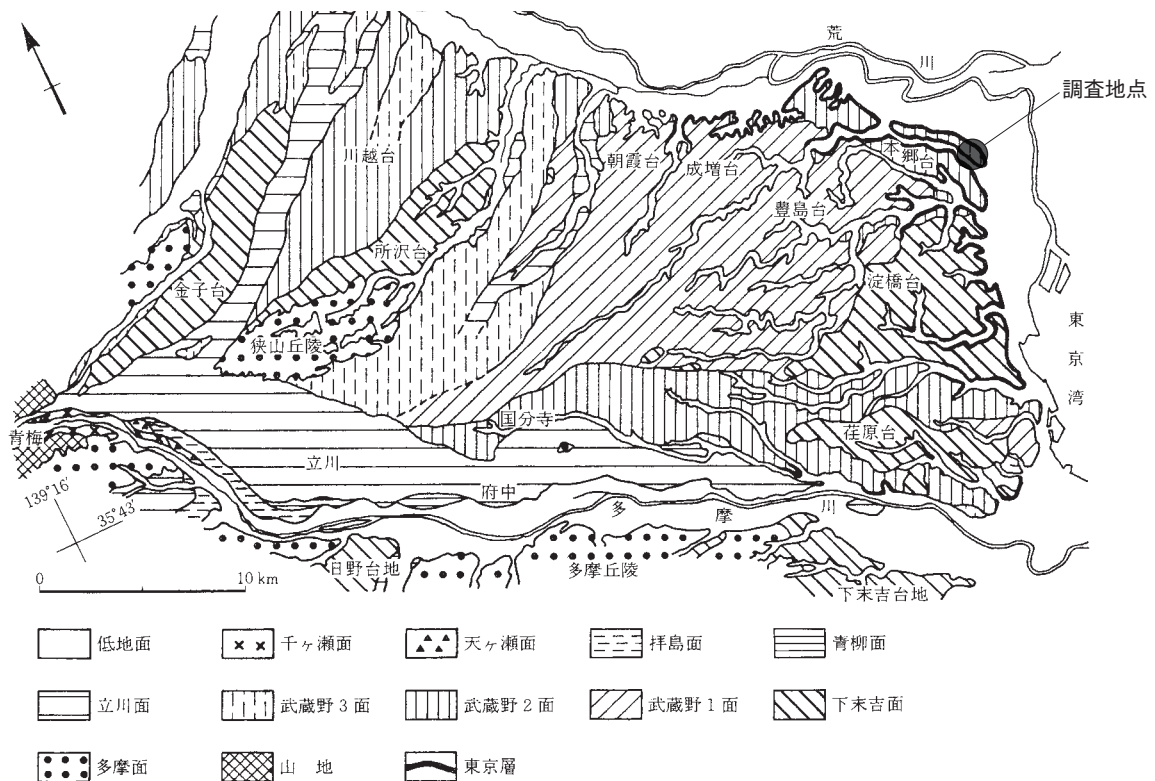
第 I 章 遺跡周辺の諸環境

第 1 節 地質と地形の改変

(1) 地質

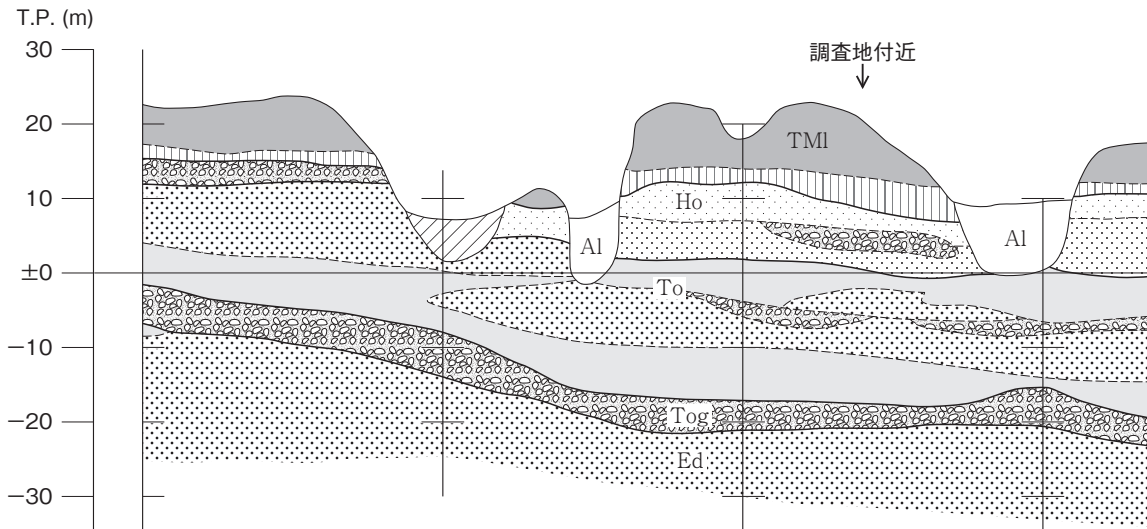
地質的地理的環境は、『東京大学（工）研究・実験棟「武田先端知ビル（仮称）」新営工事に伴う地盤調査報告書平成 12 年 11 月』（註 1）を引用した。浅野地区は武蔵野台地と呼ばれる洪積台地で、調査地点はこの台地の北東縁部に発達する本郷台の端部にあたる（I - 1 図）。本郷台は、藍染川（谷田川）と谷端川により開析された谷（沖積面）に挟まれた幅 1.5 m～4.0 m、北西～南東にかけ長さ 10km 程度に伸びた台地で、この台地の地形面は武蔵野面の中で 2 番目に地質時代の古い武蔵野Ⅱ面（M₂ 面）に区分される（I - 2 図）。

I - 2 図は調査地周辺の模式地層断面図である。本郷台上の地層構成は上位より関東ローム層→本郷層→東京層→東京礫層→江戸川層なる層序である。武田先端知ビルで行われたボーリング調査の結果は、調査地点の地層構成は I - 2 図と等しいものである。ボーリング調査は江戸川層の分布まで確認しており、その地層構成は上位より関東ローム層（ローム→凝灰質粘土）→本郷層（砂質土→砂礫→砂質土）→東京層（粘性土→砂質土→粘性土→砂・粘性土互層）→東京礫層（砂層）→江戸川層（砂質土）となっている。



I - 1 図 地形区分図

大成基礎設計株式会社 2000 『東京大学（工）研究・実験棟「武田先端知ビル（仮称）」新営工事に伴う地盤調査報告書平成 12 年 11 月』 p.11



TMI: 関東ローム層 Al: 沖積層 Ho: 本郷層 To: 東京層 Tog: 東京礫層 Ed: 江戸川層

I-2 図 模式地形断面図
『東京総合地盤図 I』 東京土木技術研究所より引用

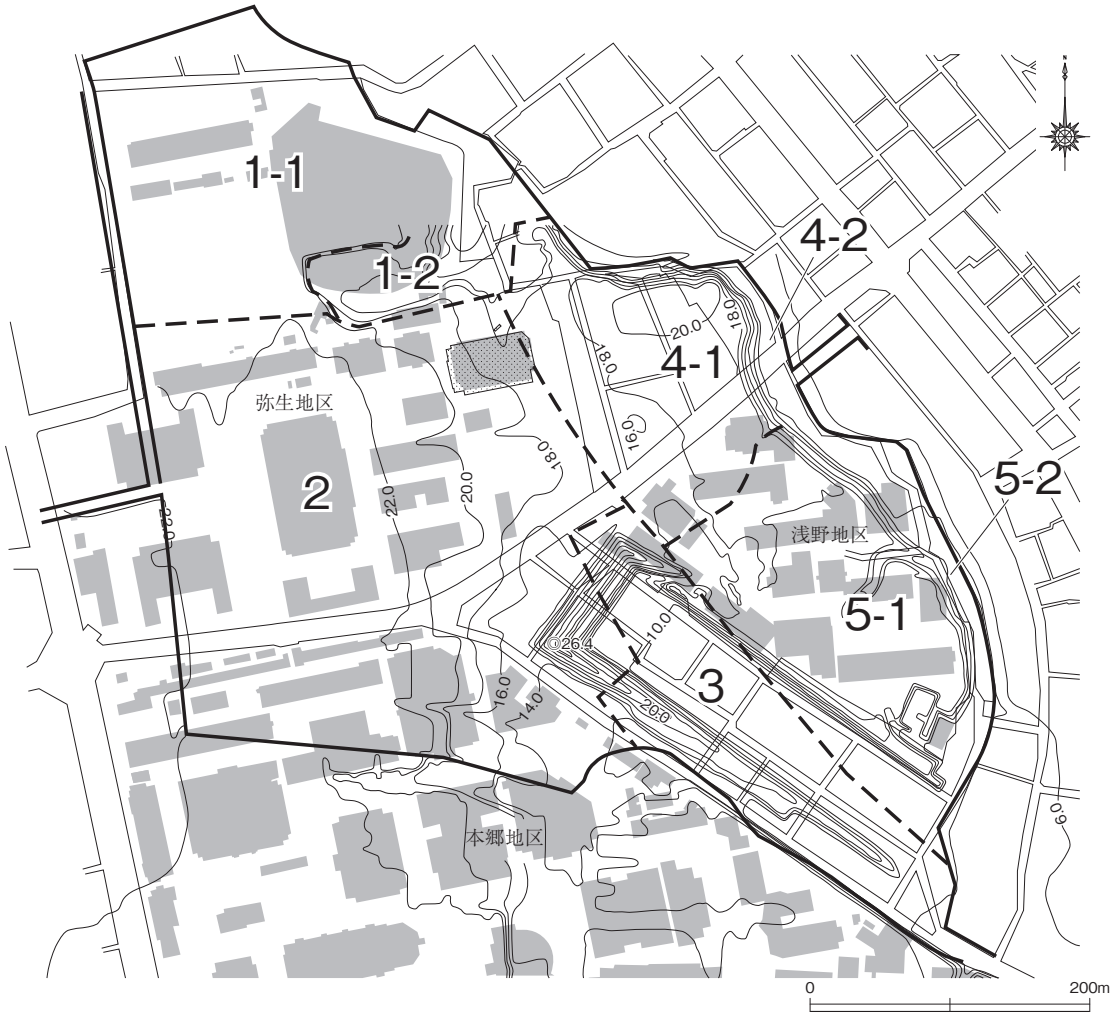
(2) 旧地形の改変

これまで「明治16年陸軍参謀本部測量原図」(註2)に描かれた地形は江戸時代以前と江戸時代の様相を示すと推定していたが(註3)、2001年以降の弥生地区、浅野地区の発掘調査と地形図の検討、駒込邸の史料の検討によって、江戸時代と明治時代以降に大規模な開発が行われた事が明らかになった。

旧地形はこれまでの研究によって、1-1西側台地、1-2谷、2西側台地、3谷、4・5島状台地と東側の低地に区分できる(I-3図)(註4)。この地域のもっとも古い旧地形を知ることができる絵図は寛永末期(寛永19(1642)年11月~20(1643)年9月頃)とされる『寛永江戸図』である(註5)。絵図によれば調査地点が位置する部分に「水戸中納言殿 下屋敷」、北側が「小笠原右近大夫様 下屋敷」、南側が「松平肥前之守」と記されている。3つの屋敷の地境部分、1-2と3に不忍池に繋がる支谷が描かれている。これ以降に作成された水戸藩駒込邸の文政9(1826)年『向陵彌生町舊水戸邸絵図面』では1-2は支谷の北側がせき止められ池が造成されている。3は「御切手御門」から殿舎(御殿)へ至る道で、『寛永江戸図』の支谷の埋め立て範囲は不明であるが、3の両側は現在の浅野地区、本郷地区の台地で谷地形であったことをうかがい知ることができる。1-2で発掘調査を行った農学部生命科学総合研究棟地点と3の発掘調査を行った工学部武田先端知ビル地点他では、『寛永江戸図』の谷の存在を示す埋没谷を確認している。

現在、1-2の池は第一高等学校時代に埋め立てられ、現在は東京大学野球場になっている。3の谷では、明治9(1876)年の警視局(庁)射的場の建設が開始される。射場は南北約300m、東西約50mを掘削、掘削土をコの字状にめぐらすことで防護壁とした。射的場予定地は谷地形で、現在の浅野地区側と本郷地区側が天然の防護壁となり周辺部への被弾被害を防ぐことができたことから、この場所が射的場に選定されたと考えられる。射的場は明治21(1888)年移転、向ヶ岡弥生町の範囲が段階的に浅野家敷地となる。射場は埋め立てられ住宅地となるが、埋土の不足を補うために、現在の弥生地区農学部圃場あたりから浅野地区にかけて削平が行われており、多い所では旧地表面から2m以

上の削平が行われたことが発掘調査で検出した遺跡の標高と「明治16年陸軍参謀本部測量原図」の標高の比較から明らかになった。農学部生命科学総合研究棟地点では暗褐色で水分を多く含み粘性が強い武蔵野ローム層で、上層の立川ローム、黒ボク土が削平されていたことが確認できた。この向ヶ岡弥生町内で行われた造成の様子は、坪井正五郎（註6）、中川平次郎（註7）の論文の中に記されており、中川は4の台地上が削平され2と4の間の低地が埋め立てられたと記している。この造成は明治17（1884）年に発見された弥生土器発見地が分からなくなった要因の一つで、地形の改変が大規模であったことが分かる。また、明治26～27（1893～1894）年には言問通りの切り通し工事が行われている。



I-3 図 旧地形と東京大学、駒込邸の区画

区画	地形	屋敷	施設・機能等
1	1-1 西側台地	安志藩	土手状の施設
	1-2 谷	抱屋敷	池
2	西側台地	駒込邸	駒込邸長屋・役所
3	谷		切手御門から殿舎（御殿）の中門へ至る区域。邸内を東西に区画する道4に接続
4	4-1 東側島状台地北側		馬場？、蔵他
	4-2 同台地東低地		建物
5	5-1 東側島状台地南側		殿舎（御殿）
	5-2 同台地東低地		回遊式庭園

I-1 表 『向陵彌生町舊水戸邸絵図面』の区画と機能、施設、地形

第2節 歴史的環境

調査地点が位置する東京都文京区弥生は、弥生土器、弥生時代の名称由来となった土器が明治17(1884)年に発見された町として知られている。旧町名は「向ヶ岡弥生町」で明治5(1872)年に名付けられる。「向ヶ岡」は不忍池を挟んで対峙する「忍ヶ岡」の「向う側の岡」で位置関係と地形を示しており「弥生」は「向ヶ岡弥生町」に位置した水戸藩駒込邸に文政11(1828)年、徳川齊昭が建立した「向岡記」碑の「弥生(三月)十日」からとられた。実際には碑文は万葉仮名で「夜余秘(やよひ)」と刻まれている。町名の由来は地名辞典等によれば、これまで曖昧にされてきたが2007年に発見された東京府記録係、元水戸藩士小宮山綏介(やそすけ)が手拓した『向岡記』拓本(東京都公文書館蔵)の裏書に、

「右向岡記係水府烈公撰并書今在向岡彌生町御水戸邸址彌生町名所由起也
東京府記録掛 小宮山(朱印)」

と明記されていたことから、駒込邸の範囲が「向ヶ岡弥生町」で町名由来は「向岡記」であることが確認された。調査地点周辺は、江戸時代以降は陸軍省用地、東京府用地、文部省用地、警視庁用地、第一高等学校敷地、浅野侯爵家敷地等を経て、現在は東京大学弥生地区・浅野地区、住宅地となる。I-8図に明治16(1883)年の向ヶ岡弥生町と駒込邸の範囲、I-2表に水戸藩駒込邸の変遷、I-3表に江戸時代から昭和20(1945)年までの歴史をまとめた。水戸藩の江戸藩邸は上屋敷(小石川邸)、中屋敷(駒込邸)、蔵屋敷(小梅邸)が主な屋敷である。調査地点が位置する中屋敷は「駒込の御屋敷」「駒籠ノ別荘」「駒籠邸」「駒籠荘」「駒込別荘」などと記述されるが、本文では「駒込邸」、上屋敷は「小石川邸」、蔵屋敷は「小梅屋敷」と記述する。水戸藩は元和8(1622)年8月、駒込に下屋敷を拝領、元禄6(1693)年10月、下屋敷が中屋敷となる。中屋敷の敷地は宝永3(1706)年10月、駒込邸の東側の一部が上地となり、天保6(1835)年9月北隣りの安志藩小笠原家の下屋敷を相対替により取

年代	江戸水戸藩邸(上屋敷・中屋敷・下屋敷)の変遷
元和6(1616)年閏12月	水戸藩江戸藩邸、江戸城内の松原小路に完成。【史料1】
元和8(1622)年8月	駒込に屋敷を拝領 本郷駒込(神田台)に下屋敷を与えられる。
寛永元(1624)年11月	浅草谷島(矢島)に蔵屋敷を与えられる。浜屋敷、浜町屋敷などと呼ばれる別邸となり、中屋敷なる。
寛永6(1629)年閏2月	小石川にも屋敷を与えられる。
寛永6(1629)年9月	藩邸が竣工し初代藩主頼房が小石川に居を移す。
明暦3(1657)年1月	江戸の大火で江戸城内の屋敷が類焼。幕府はその地を取り上げるかわりに、小石川の屋敷を拡張して与え、上屋敷(はじめ7万6699坪、のち9万9753坪)とした。
元禄6(1693)年10月	浜屋敷を本所小梅屋敷と交換。駒込を中屋敷(5万4200坪)、小梅屋敷を下屋敷(1万8500坪)とした。
宝永3(1706)年10月	駒込邸の東側の一部が上地となる。
天保6(1835)年9月	北隣りの安志藩小笠原家の下屋敷を相対替により取得し、合わせてその地続きの抱屋敷を買得する。【史料2】【史料3】
文政9(1826)年	『向岡彌生町舊水戸邸絵図面』

I-2表 水戸藩江戸藩邸の変遷

鈴木暎一 2006『徳川光圀』人物叢書新装版 日本歴史学会編集 吉川弘文館発行、文京区遺跡調査会 2000「第四章 水戸藩関係文献調査の成果」『春日町遺跡Ⅲ・Ⅳ地点 文京区埋蔵文化財発掘調査報告書第20集』、文京ふるさと歴史館 2006『文京ふるさと歴史館特別展 徳川御三家江戸屋敷水戸黄門邸を探る』から作成した。

得し、合わせてその地続きの抱屋敷を買得し敷地面積が増すが、江戸の初めから継続してこの地に屋敷を構えた。

【史料 1】

「元和八年壬戌 八月四日 台徳公別荘ヲ駒籠ニ賜フ其地五萬四千二百歩」(茨城県史編さん近世史第 1 部会 1970『水戸紀年一 威公』『茨城県史料 近世政治編 I』茨城県発行 p.441)

【史料 2】

「安政三年辰年十月調

御府内場末往還其外沿革圖書 式拾壺 元上

御〇〇〇方

御役所控

延寶年中〇西手水戸殿中屋敷 寶永三年中中屋鋪之内裏之方上地〇〇末ニ出候 (中略)

寶永三年戌年十月 (中略) 水戸殿中屋鋪之内裏之方共上ケ地成 (中略)

天保六未年小笠原信濃守〇〇〇〇下屋鋪相對替ニ而次ニ有之地續水戸殿中屋敷江囲込ニ成同所續小笠原信濃守抱屋敷茂其節 (草冠に郎) 水戸殿被〇請〇〇中屋鋪〇囲込ニ成 同人抱屋鋪前ニ有之下屋敷之〇ニ出候 水戸殿中屋鋪 天保九年九月前ニ有之地續小笠原信濃守 元〇〇〇〇 屋鋪相對替有之同所續同駒込村同人抱屋鋪茂同時ニ被讓請水戸殿中屋鋪江抱込一屋鋪相成 地續ニ有之候処」(国会図書館蔵「安政三辰年十月調 下谷 谷中本村 東叡山 下駒込村 根津 新堀村 谷中 金杉村 一圓之繪圖 式拾壺元」 安政三 (1856)『御府内場末往還其外沿革圖書』21 元上 (旧幕引継書) 〇判読不可)

【史料 3】

「中屋敷 駒込 五万四千式百坪 当時御隱居中納言殿御住居

下屋敷 駒込追分 八千式百坪

抱屋敷 駒込追分 千四百九拾三坪

日本橋迄壺里〇 下屋敷地続ニ付囲」

(安政 3 (1856) 年『諸向地面取調書』第一卷 第一冊 御三家・國持・柳之間・交代寄合 御三家 水戸中納言殿 史籍研究会 1982『諸向地面取調書 (一)』内閣文庫所蔵史籍叢刊第 14 卷 汲古書院 p.9 〇判読不可)

明治 2 (1869) 年、駒込邸は明治政府に公収され、同年東京府が実施した茶桑政策によって駒込邸で水戸藩士による茶桑栽培が行われる。東京府の目論みは空き地になった武家地を耕作地化し、当時の輸入品であった生糸と茶を生産し外貨を得ることであったがほとんどの屋敷で栽培がうまくいかず茶桑政策は失敗する。しかし駒込邸では【史料 4】から明治 6 (1873) 年まで行われていることが認められ、栽培は成功していたと考えられる。

明治 6 (1873) 年、駒込邸跡地は陸軍省用地と文部省用地となる【史料 4】。明治 6 (1873) 年の「沽券図」には陸軍省用地、文部省用地、東京府用地 (無記入部分)、徳川昭武 (水戸藩第 11 代藩主) と記載されている。明治 9 (1876) 年には東京府用地と文部省用地が警視局 (庁) 用地となり射的場が建設される。射的場は明治 7 (1874) 年上野の岡に建設された射的場の代替施設で、明治 10 (1877) 年 1 月 15 日

会場式が行われ小銃射の「狙撃演習」が開始される。実弾を使用した「狙撃演習」はこの射的場に限られ、「銃術演習」は各大区で行われた。2月に開始される西南戦争では上野と向ヶ岡弥生町で「狙撃演習」を行った巡査を含む9,500名が九州等に派遣される。西南戦争終結後、射的場は演習施設から射的会会場へとその性格を徐々に変えてゆく。明治21(1888)年までに明治天皇を招いた天覧射的会が少なくとも6回開催されている。また、毎年11月に劇剣大会が行われた記録がある。明治20(1887)年、警視庁用地に建設された弥生神社が芝公園に移転、射的場は明治21(1888)年に大森へ移転する。

射的場の北側は東京府用地で脚気病院(後の東京府避病院)、東京府癲狂院が建設される。明治19

年月日	土地利用状況
元和 8 (1622) 年	水戸藩駒込邸を拝領。
文政 9 (1826) 年	『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』。
天保 6 (1835) 年	安志藩下屋敷を相対替により取得、地続きの抱屋敷を買得。
明治 2 (1869) 年	明治政府駒込邸を公収。
明治 5 (1872) 年	「向ヶ岡弥生町」命名。
明治 2～6 (1869～1873) 年	茶桑政策による駒込邸の耕作地化、水戸藩士による茶桑栽培。
明治 6 (1873) 年	駒込邸跡の官有地化。【史料4】
明治 9 (1876) 年	警視局(庁)射的場建設。
明治10 (1877) 年	警視局(庁)射的場演習開始、2月西南戦争開始。警視局(庁)避病院建設、11月廃絶。
明治12 (1879) 年	脚気病院建設。
明治13 (1780) 年	警視庁梅毒病院設置。
明治14 (1881) 年	東京府癲狂院建設。
明治15 (1882) 年	脚気病院避病院へ。
明治16 (1883) 年	陸軍参謀本部測量原因。
明治17 (1884) 年	弥生土器の発見。
明治19 (1886) 年	東京府避病院廃止東京府癲狂院移転。
明治21 (1887) 年	射的場移転(射場及び関連施設の埋め立て開始)。
明治22 (1889) 年	第一高等中学校竣工(後に第一高等学校)。
昭和 3 (1928) 年	7月26日 本郷区向ヶ岡弥生町の民有地(旧堀田家所有地)4,013坪余を農学部敷地として購入
昭和 5 (1928) 年	2月 農学部1号館竣工(大正15年8月着工)内田祥三による関東大震災後の本郷キャンパス復興計画に従って、農学部1号館、2号館、3号館設計。
昭和 9 (1934) 年	12月4日 農学部移転にかかわる本郷拡張復旧計画定。
昭和10 (1935) 年	7月17日 農学部の位置を向ヶ岡弥生町に変更、駒場から本郷に正式に移転。
	9月14日 第一高等学校が駒場移転式を挙行。
	11月30日 農学温室、農芸化学硝子室、植物学温室、作物実験室新築。
昭和11 (1936) 年	2月10日 農学部2号館竣工(昭和7年8月着工)、1号館増築。
	9月17日 本郷区向ヶ岡弥生町の民有地(石川邸)414坪を購入し農学部の敷地に加える
昭和13 (1938) 年	8月1日 農学部の旧敷地6万9813坪1合4勺9才(約23ヘクタール)と第一高等学校の旧敷地3万714坪3合1勺5才約10ヘクタールと所属交換。
昭和16 (1941) 年	5月31日 農学部3号館竣工(昭和12(1937)年9月着工)。
昭和20 (1945) 年	3月10日 3月の空襲により農学部木造建物の大部分(農学部分館、解剖学教室、獣医学教室、家畜病院、踏鉄工場、森林化学教室等旧一高校舍)を焼失。図書や研究用の家畜も失う。この空襲が契機となって、農学部では学科ごとに重要な研究教育用資材の疎開が始められ、顕微鏡などの資材を各地の疎開先に移す。農学部1号館、2号館、3号館は戦災を免れる。

I-3表 江戸時代から明治時代、東京大学弥生地区の土地買収、研究棟建設

江戸時代から明治22(1889)年は東京大学埋蔵文化財調査室2009『浅野地区I』より作成。昭和3(1928)年以降は、東京大学農学部ホームページ「東大農学部の歴史」より研究棟建設、土地買収に関する部分を抜粋(<http://www.a.u-tokyo.ac.jp/history/>)、昭和3(1928)年、昭和11(1936)年の購入部分加筆。

(1886)年、東京府避病院が廃止され、東京府癲狂院が小石川加賀町に移転、跡地が第一高等学校と住宅地となる。この住宅地と警視庁用地跡地、射的場跡地は段階的に芸州浅野家の敷地となり貸家が建設され、現在の浅野地区に浅野侯爵邸、浅野侯爵別邸が建設される。

昭和 10 (1935) 年、駒場にあった農学部の位置を向ヶ岡弥生町に変更、駒場から第一高等学校との敷地交換で農学部が本郷に正式に移転する。現在の弥生地区農学部圃場は千葉県佐倉の堀田家敷地と石川邸敷地で、昭和 3 (1928) 年に堀田邸敷地、昭和 11 (1936) 年に石川邸敷地購入によって現在の弥生地区の範囲になる。堀田邸は現在世田谷区豪徳寺に移築されており、裏門跡が現在の弥生地区と住宅地の地境に残っている (I - 6・7 図)。

【史料 4】

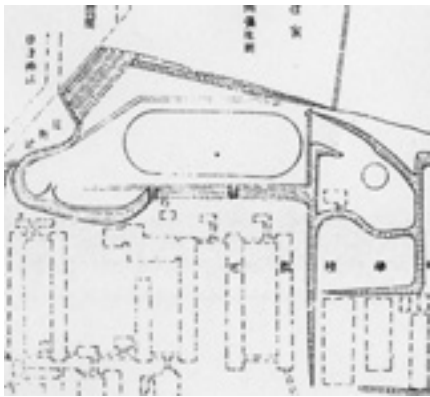
[[附記、一] 駒込水戸邸文部省用地

東京府

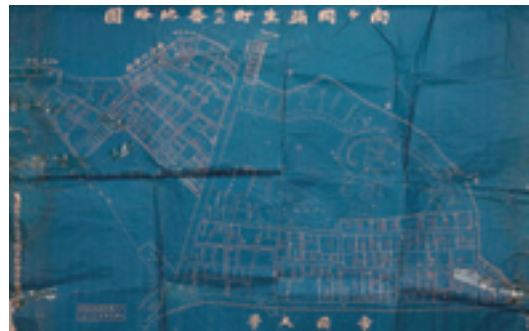
駒込元水戸邸地之内茨城県貫属士族増田数之助外二人拝借開墾地三万式千八百三拾坪余、上地申付文部省へ引渡可レ申。尤開墾費用桑茶其外代価金四千六百円余ハ同省ヨリ請取開墾人へ可二下渡一旦又右地所ノ儀、式万五千坪ハ陸軍省官廳地残七千八百坪余ハ文部省官用地トシテ相渡候条、此旨可二相心得一事。

明治六年十二月五日 右大臣 岩倉具視

一法令類纂卷之四十六」(東京都 1964 『東京市史稿 市外編第五十五』 p.747)



I - 4 図 昭和 8 (1933) 年東京大学施設部資料



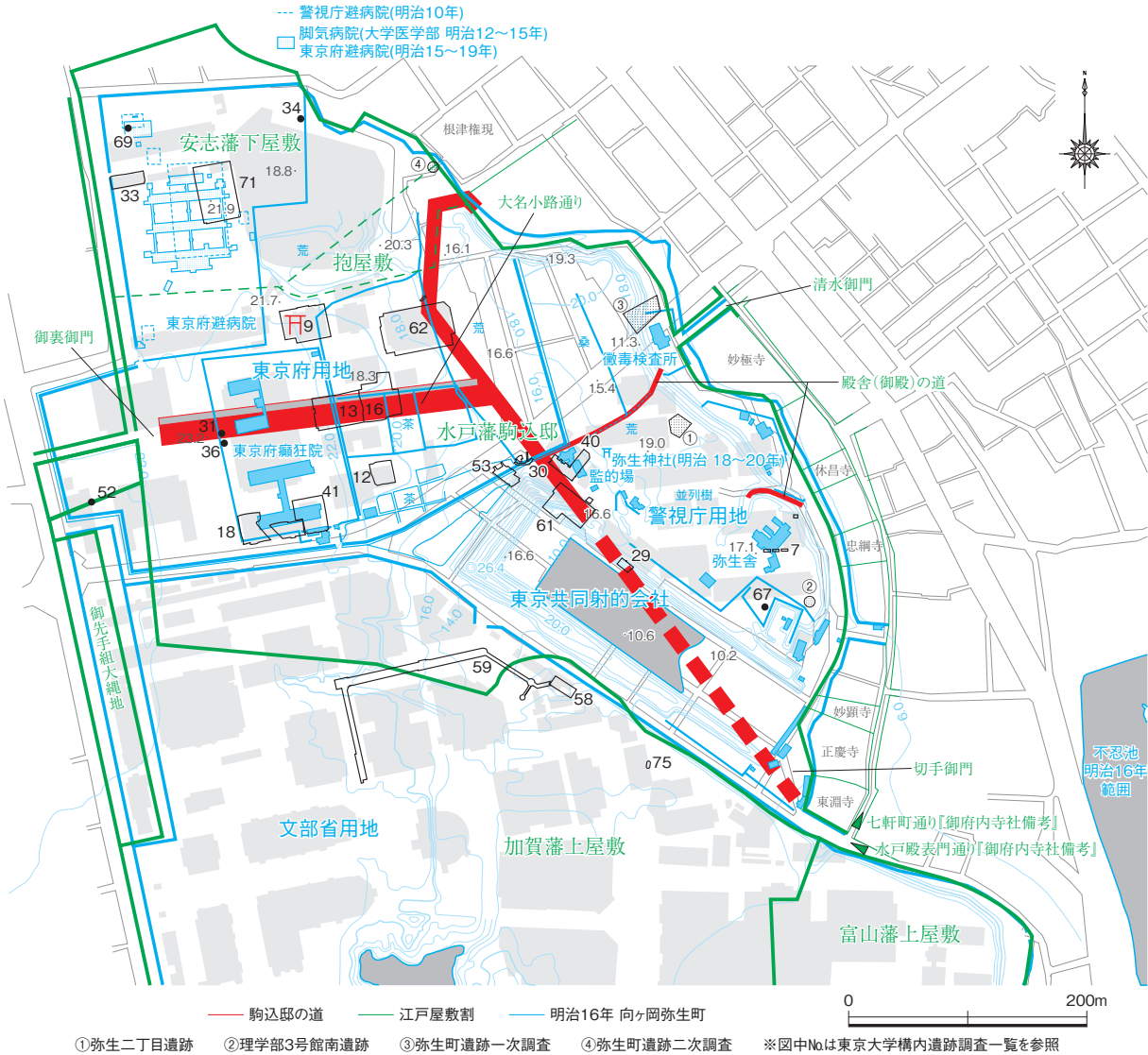
I - 5 図 昭和 11 (1936) 年青木家文書



I - 6 図 堀田邸裏門跡南側 7



I - 7 図 旧堀田邸 - 世田谷区豪徳寺 (2009 年 5 月)



I-8 図 明治16(1883)年の向ヶ岡弥生町と水戸藩駒込邸、現在の文京区弥生

【註】

1. 大成基礎設計株式会社 2000『東京大学(工)研究・実験棟「武田先端知ビル(仮称)」新営工事に伴う地盤調査報告書平成12年11月』
2. 建設省国土地理院所蔵、(財)日本地図センター複製 1984「明治16年第一測期第二測図 参謀本部陸軍部測量五千分之一ノ尺東京府武蔵国本郷區本郷本富士町近傍」『参謀本部陸軍部測量局五千分一東京図測量原図』
3. 原 祐一、堀内秀樹 2006「水戸藩駒込邸の土地利用状況-発掘調査の成果と文献史料の検討-」『文京ふるさと歴史館特別展徳川御三家江戸屋敷水戸黄門邸を探る』pp.32-41
4. 東京大学埋蔵文化財調査室 2009『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9 東京大学本郷構内の遺跡浅野地区I 情報基盤センター変電室1地点 工学部風工学実験室地点 工学部風工学実験室支障ケーブル地点 工学部風環境シミュレーション風洞実験室地点 工学部武田先端知ビル地点』
5. 之潮編集部編 2007『寛永江戸全図 仮撮影版(之潮編集部編・全2葉)』、金行信輔 2007『寛永江戸図解説之潮編集部編 寛永江戸全図仮撮影版(之潮編集部編・全2葉)別冊』

6. 坪井正五郎 1889「帝国大學の隣地に貝塚の痕跡有り」『東洋学芸雑誌』No.91 pp.195-201
7. 中山平次郎 1930「近畿縄文土器、関東弥生式土器、向ヶ岡貝塚の土器竝に所謂諸磯式土器に就て」『考古学雑誌』第 20 卷 2 号 pp.42-48

第II章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯と経過

(1) 調査の経緯

平成13(2001)年度、東京大学施設部から同埋蔵文化財調査室に弥生地区に予定された農学部総合研究棟新営に伴う埋蔵文化財存否に関する照会があった。建設予定地は、弥生土器が発見された旧本郷区向ヶ岡弥生町内で、東京都遺跡地図によると、文京47 本郷台遺跡群(本郷七丁目・弥生二丁目、台地、集落・貝塚・大名屋敷、[平]住居・[近]礎石・土坑・地下式坑・庭園・井戸・溝・杭・石垣[旧Ⅱ縄Ⅱ弥Ⅱ古Ⅱ平Ⅱ近])内、周知の遺跡内に位置していることから、遺跡の存否確認を行う必要があると回答した。

試掘調査は平成13(2001)年3月27日2箇所のトレンチ(総面積100㎡)を設定し調査を行った。調査の結果、上層で農学部圃場の耕作土と近代以降の盛土、江戸時代の陶磁器を含む盛土(「明治16年陸軍参謀部測量原図」によれば調査地点北側に谷があることから、谷の埋土と推定していたが、調査の結果SR1の覆土であった)、現地表面から1.5mの深さで地山を確認した。調査結果と建設予定地に隣接する農学部校舎(7号館)Ⅰ・Ⅱ期地点では水戸藩駒込邸に関する遺構の検出があり、弥生時代の遺構の確認も予想されたことから、文京区教育委員会、東京大学施設部、埋蔵文化財調査室で協議を行った結果、建設予定地で埋蔵文化財調査を行うことが確認された。調査は平成13(2001)年9月21日から10月19日まで行った。調査面積は1800㎡である。

(2) 調査対象と方法

調査を行う対象の遺跡は江戸時代以前、江戸時代はもちろんであるが、東京大学史の観点から近現代も調査対象とした。調査は加藤建設株式会社と協議し発掘作業は安全を最優先して行った。調査は西側をA区、東側をB区としてA区、B区の順で調査を行った。A区では遺跡がRI施設によって破壊されていたことが確認されたことから、B区の調査を行った。地山まで重機掘削を行った後、遺構確認、人力掘削による遺跡調査を行った。

第2節 調査の概要

調査の結果、江戸時代の水戸藩駒込邸関連遺構と千葉県佐倉の堀田邸に関連する遺構を検出した。江戸時代の遺構4基。明治時代以降は、調査区全域で行われた削平後に帰属する柱穴列、土管埋設溝、土坑などを検出した。遺構総数は27基、遺物量は収納箱で21箱が出土した(出土時の収納箱数)。

『浅野地区Ⅰ』で明らかになった明治21(1888)年以降に行われた射的場の埋め立てに伴う削平が当地点でも確認された。現地表面標高は17.30m、道SR1の東側の遺構検出標高は15.84m、「明治16年陸軍参謀本部測量原図」の調査地点周辺の標高は18m、遺構検出面と明治16(1888)年の標高差は2.16mで射的場埋め立てに伴う削平が調査地点まで及んでいたことが確認できた。この削平によって建物の基礎など浅く掘削された遺構は失われた。地下室は半地下室状の浅い遺構となっている。地質的にはSR1の底部でM₂砂礫層の最上部を示す白色砂層を確認した。M₂砂礫層の標高から推定される、黒ボク土、立川ローム層、武蔵野ローム層の堆積していた標高を推定すると、旧地表面の標

高は明治16（1883）年の標高より高かったと推定される（註1）。

第3節 遺跡調査の公開

文化財保護法、第1章に「総則（この法律の目的）第1条「この法律は、文化財を保存し、且つ、その活用を図り、もつて国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献することを目的とする」と明記されている。この理念に基づき遺跡調査の公開を行った。2010年に行った工学部武田先端知ビル地点の遺跡公開では、常時調査を公開し遺跡見学会を3回開催、400名の参加があった。この地域では近隣住民の歴史に対する関心が高く、町会から遺跡公開の希望もあり遺跡調査の公開を行った。遺跡を常時公開し調査速報を20号まで発行掲示した。2001年10月16日に開催した遺跡見学会では学内外から80名の参加があった。また、遺跡の公開とあわせて「日本における真鍮製造」をテーマに講演を行った。

【註】

1. 橋本真紀夫 2001「東京大学弥生構内の方形周溝墓における土壌分析」『第3回考古科学シンポジウム発表要旨』pp.71-79

第Ⅲ章 遺構と遺物

第1節 遺構

調査の結果、江戸時代の水戸藩駒込邸関連遺構と千葉県佐倉の堀田邸に関連する遺構、農学部になってからの遺構を検出した。堀田邸、農学部の遺構の区別は遺物の生産年代を判断材料にしたがすべてを明確にすることができなかった。

調査当時、駒込邸の文献調査と明治時代以降の文献調査を行っていなかったため、遺構の評価、調査地点の土地利用状況を検討することができなかった。その後の文献調査で茨城県史料に駒込邸の記述があり、他の水戸藩関係の史料の中にもあることが判明したことから、駒込邸と明治時代以降の文献史料を分類し年代順に並べ江戸時代から明治時代の土地利用状況について検討した。明治時代は絵図、地図が多く存在していたことから土地利用状況の検討ができたが、駒込邸は絵図が存在しなかったため、文献史料によって検討した土地利用状況を検証することができなかった。しかし、2007年11月、文政9(1826)年『向陵彌生町舊水戸邸絵図面』の発見によって検証が可能になり、これまで検討してきた土地利用状況に間違いがないことが確認された。この絵図によってSR1は藩邸を西側の「長屋と役所の区域」、東側の「殿舎(御殿)の区域」に区画する道であることが明らかになった。この他、東京大学(本郷)弥生地区分生研・農学部総合研究棟地点(2009年1月25日～2010年3月31日調査未報告、2009年度の調査室紀要で報告予定、以下略号「HNS09」を用いる)の成果を用いる。この調査成果を引用するのは、遺構の軸と土地利用状況、江戸時代から明治時代の造成がこの調査によって明確になり、当地点を評価することができるようになったためである。

遺構の軸は、「本郷通りの軸」と「埋没谷の軸」に分かれる。「本郷通りの軸」は本郷通りに平行もしくは直行する軸で北方向から西に約10°傾く。「埋没谷の軸」は分生研・農学部総合研究棟地点(以下、「HNS09」と略す)で検出した埋没谷の軸で遺構は谷に平行もしくは直行、北方向から約50°西に傾く。谷は「HNS09」から浅野地区工学部武田先端知ビル地点まで延びている。谷は当地点北側で北方向に延びる谷を確認していることから、当地点と「HNS09」の辺りが分水嶺であったことが確認された。「HNS09」の方形周溝墓も「埋没谷の軸」である。E面とD面の年代は文政9(1826)年『向陵彌生町舊水戸邸絵図面』によって区別した。

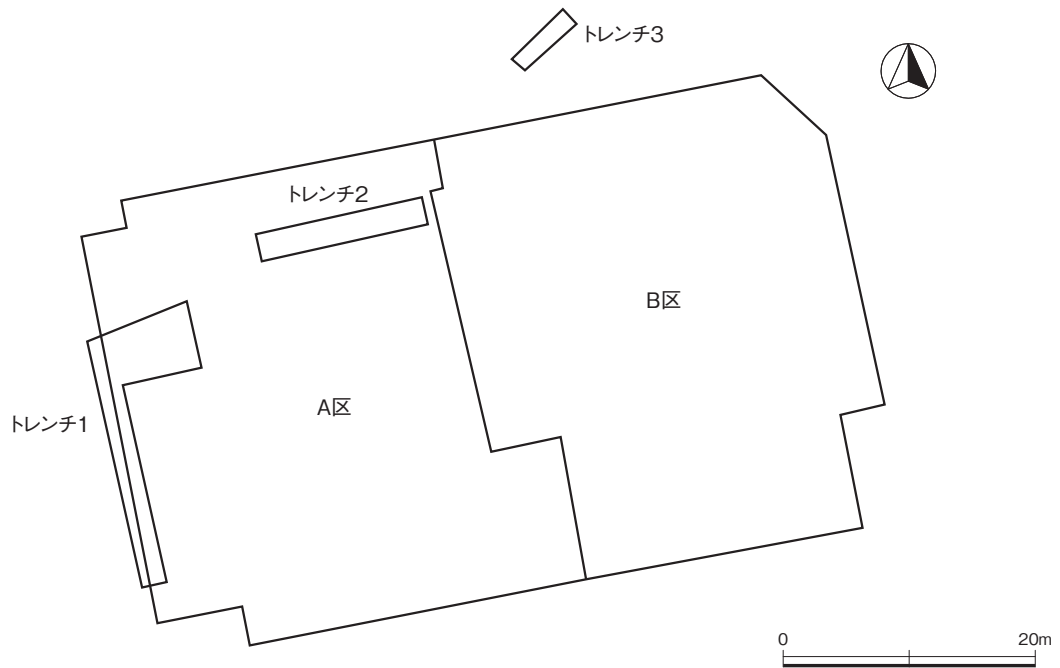
当地点と「HNS09」の文政9(1826)年以前の遺構は「HNS09」で確認された「埋没谷の軸」で、当地点でも文政9(1826)年以降の遺構はSR1、SX2の例外を除き「本郷通りの軸」であった。以下に遺構の事実記載を記す。

確認面		軸	遺構
A面	明治時代～現在	本郷通りの軸	堀田邸関連遺構 SK17
B・C面	明治時代～明治21(1887)年頃	本郷通りの軸	台地の削平工事
D面	水戸藩駒込邸 文政9(1826)年以降	本郷通りの軸	SR1、SX2(軸は例外)
E面	水戸藩駒込邸 文政9(1826)年以前	埋没谷の軸	SU4、SK7
F面	江戸時代以前	埋没谷の軸	

Ⅲ-1表 遺構確認面



Ⅲ-1 図 弥生地区周辺の調査地点



Ⅲ-2 図 調査地点

遺構 No.	遺構性格	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	備考
SR1	道	10.9 (開口部幅)	5.5 (坑底幅)	4.54	藩邸を東西に区画する道
SX2	長方形施設			2.2	SR1 東側の長方形施設
SU4	地下室	1.96	2.04	0.71	
SD5	溝状遺構	(4.2)	0.25	0.15	
SK6	土坑	1.0	(0.65)	0.77	
SK7	土坑	2.12	1.86	0.78	「享保」銘墨書土器
SB8	基礎	(1.06)	(0.96)	0.28	
SK9	土坑	1.05	1	0.46	
SD11	溝状遺構	(3.83)	1.11	0.45	
SK12	土坑	2	1.5	0.48	
SK13	土坑	0.6	0.48	0.17	
SK14	土坑	0.94	0.65	0.18	
SK16	土坑	(1.84)	1.23	0.12	
SK17	土坑	3.74	(2.6)	0.41	
SK18	土坑		0.6	0.3	
SK19	土坑	0.99	0.62	0.32	
SD20	溝状遺構		0.34 ~ 0.61	0.2 ~ 3.7	
SD22	溝状遺構	(2.11)	0.6	0.07	
SD23	溝状遺構	(10.3)	2.06	0.58	
SK24	土坑	(2.8)	(1.57)	0.28	
SK25	土坑	0.8	0.3	0.16	
SB26-1	小穴	0.64	0.3	0.51	
SB26-2	小穴	0.42	0.35	0.52	
SB26-3	小穴	0.44	0.28	0.54	
SB26-4	小穴	0.37	0.25	0.43	
SB26-5	小穴	0.56	0.5	0.28	
SB26-6	小穴	0.7	0.3	0.13	
SP26-7	小穴	0.32	0.25	0.33	
SP26-8	小穴	0.5	0.42	0.24	
SP26-9	小穴	0.77	0.4	0.16	
SK29	土坑	2.38	0.83	0.61	
SK30	土坑	(1.6)	0.97	0.72	

Ⅲ-2 表 遺構一覧

SR1 (Ⅲ-4 図)

SR1は調査区を北西から南東へ縦断する道である。断面形は逆台形で、確認面で幅10.9m、坑底幅5.5m、深さ4.54m、路面の幅は1.8m(1間)を測る。壁面の傾斜角度は38°である。遺構の壁面で検出面から2.6mで砂層の堆積が確認されている。武蔵野ローム層部分に盛土は施されていないことから、壁面に施された盛土は砂層の崩落を防ぐために施されたと考えられる。底面は硬く突き固められた路面で、盛土を除去すると造営時にできたと考えられる轍を確認した。轍は砂層に掘削されており10月10日の大雨による遺構の水没によって崩れたため、残った部分を測量した。道の覆土は黒ボク土、砂、白色粘土、ロームブロック等が用いられており、堆積状況から道の西側から土を入れ短期間で埋められたと考えられる。

SR1は文政9(1826)年『向陵彌生町舊水戸邸絵図面』に描かれている藩邸を東西に区画する道である。工学部武田先端知ビルで検出したSR1と工学部風光学実験室の道は、明治時代に掘削され形状が変えられているがこの道と繋がる。遺物量が少なく遺構の廃絶年代を出土遺物によって明確にすることができない。しかし「明治16年陸軍参謀本部測量原図」の現在の浅野地区と北側住宅地がある島状の台地と農学部の研究棟がある西側の台地の間の低地にSR1が造成されたと考えられるが、この地図では埋め立てられている。以上から少なくとも明治16(1883)年までに廃絶されたと考えられる。

SR1の造成年代は廃絶年代同様、出土遺物によって明確にできない。少なくとも文政9(1826)年の絵図の段階では存在していることからこの絵図までさかのぼることができる。

SR1の西側に位置するSK7から「享保十」「甲」「吉日」墨書のカワラケが出土している。一般に大名屋敷の長屋では地下室が位置するのは建物の裏でSR1とSK7の位置関係から両遺構が同時に存在するとは考えられない。『向陵彌生町舊水戸邸絵図面』では、調査地点に該当する部分に建物は確認できない。徳川光圀と徳川齊昭の殿舎（御殿）からの不忍池と忍ヶ岡の景観の記録から、西側の「長屋と役所の区域」、東側の「殿舎（御殿）の区域」の位置は変わっていないと推定した。埋没谷のある低地で区画が行われた結果、文政9（1826）年以前の遺構は、「埋没谷の軸」となっている。文政9（1826）年の絵図に描かれているSR1は埋没谷に沿って造成されていることから、古い段階の区画を継承して造成されたために、文政9（1826）年以前の遺構軸となったと考えられる。SR1以外の遺構が「本郷通りの軸」であることから、文政9（1826）年以降では邸内の建築が変更されたと考えられる。

10月10日の集中豪雨（総雨量185mm）では調査区が水没水浸しになった。下水道が完備され雨水対策がなされているにも関わらず水没したのは、調査当時雨水が下水道の許容量を超えたためと考えられる。現在は弥生地区西側の雨水のみが圃場に集まるが、江戸時代は藩邸西側と東側台地に降った雨水がすべて集まったと考えられる。排水溝が邸内に完備されたと仮定し、雨水が自然に地下に浸透した量は現在より多かったとしても集中豪雨があった場合、邸内では2001年10月10日の水没以上の被害があったと考えられる。SR1には「大名小路通り」「片岡稲荷の参道」などの道が接続されており雨水がSR1に流れ込んだと考えられる。SR1は水没したものの砂層まで掘削されていたことからSR1水没後の水捌けは良かったことから、旧地形と遺構の状況からSR1は邸内の区画と道路という機能だけでなく、邸内に集まった雨水を浸透させ排水する機能を有していたと考えられる。

SX2（Ⅲ-4図）

SX2はSR1に近接した遺構である。調査区北東隅で検出したため遺構の範囲、深さを明らかにすることができなかったが、確認面下2.6mまで掘削を行った。遺構壁面の傾斜角度は48°でSR1より急傾斜である。遺構性格は不明であるがSR1との位置関係から『向陵彌生町舊水戸邸絵図面』に描かれているSR1東側の施設と考えられることから、この施設はSR1に沿って造成された細長い帯状の扇形の施設で主要部分は水色に彩色されている。水色彩色部分北側に墨書で建物が書き加えられており「三間五間 ○（朱書き）柿 拾五間」と記されている。北側にはSR1に接続する道が描かれている。南側には黄色で建物が描かれている。施設の性格は明記されていないが、絵図の施設がSR1同様深く掘削された施設であることが調査から明らかになった。この遺構の構築年代、廃絶年代は不明であるが、遺構軸は「埋没谷の軸」で、SX2の造成はSR1のようにE面（水戸藩駒込邸 文政9（1826）年以前）の土地利用状況の影響を受けたと考えられる。

SU4（Ⅲ-5図）

SU4は平面形が正方形を呈する地下室で断面形は長方形、南北1.96m、東西2.04m、深さ0.6mを測る。当初遺構が浅いことから半地下室と考えていたが、明治21（1888）年以降に調査区周辺が削平された事が明らかになったことから、本来の室の深さではない。遺物量は他の遺構に比べて多く、収納箱11箱（分類接合作業後）で、遺物には碗、皿、徳利、搦鉢、土製品等がある。陶磁器類の生産年代は18世紀中葉である。遺構軸は「埋没谷の軸」で遺物の年代からSU4はE面（水戸藩駒込邸 文政9（1826）年以前）の遺構である。

SK7 (Ⅲ - 5 図)

SK7は平面形が方形を呈する土坑で断面形は逆台形、東西2.12m、南北1.86m、深さ0.78mを測る。遺物は碗、徳利、カワラケ、油受け皿等が出土した。この中に底部に墨書の記されたカワラケがある。破損のため文字の一部が失われているが「享保十」「甲」の墨書が確認された。享保年間で「甲」が付くのは「享保九甲辰年」、「享保十九甲寅年」で「享保十」「甲」の墨書から、記された年号は「享保十九甲寅」である。他の陶磁器類の生産年代は18世紀中葉であることから、このカワラケがたまたま混入したものではなく、遺構廃絶年代を反映していると考えられる。遺構軸は「埋没谷の軸」で遺物の年代からSK7はE面(水戸藩駒込邸 文政9(1826)年以前)の遺構である。

SK17 (Ⅲ - 5 図)

SK17は長方形を呈する土坑で断面形は不整逆台形、南北3.74m、東西現存長2.6m、深さ0.3mを測る。遺物の年代は明治時代以降で、その年代観から堀田邸に関連するごみを廃棄した遺構と考えられる。A面の遺構である。

SK18、SK19 (Ⅲ - 5 図)

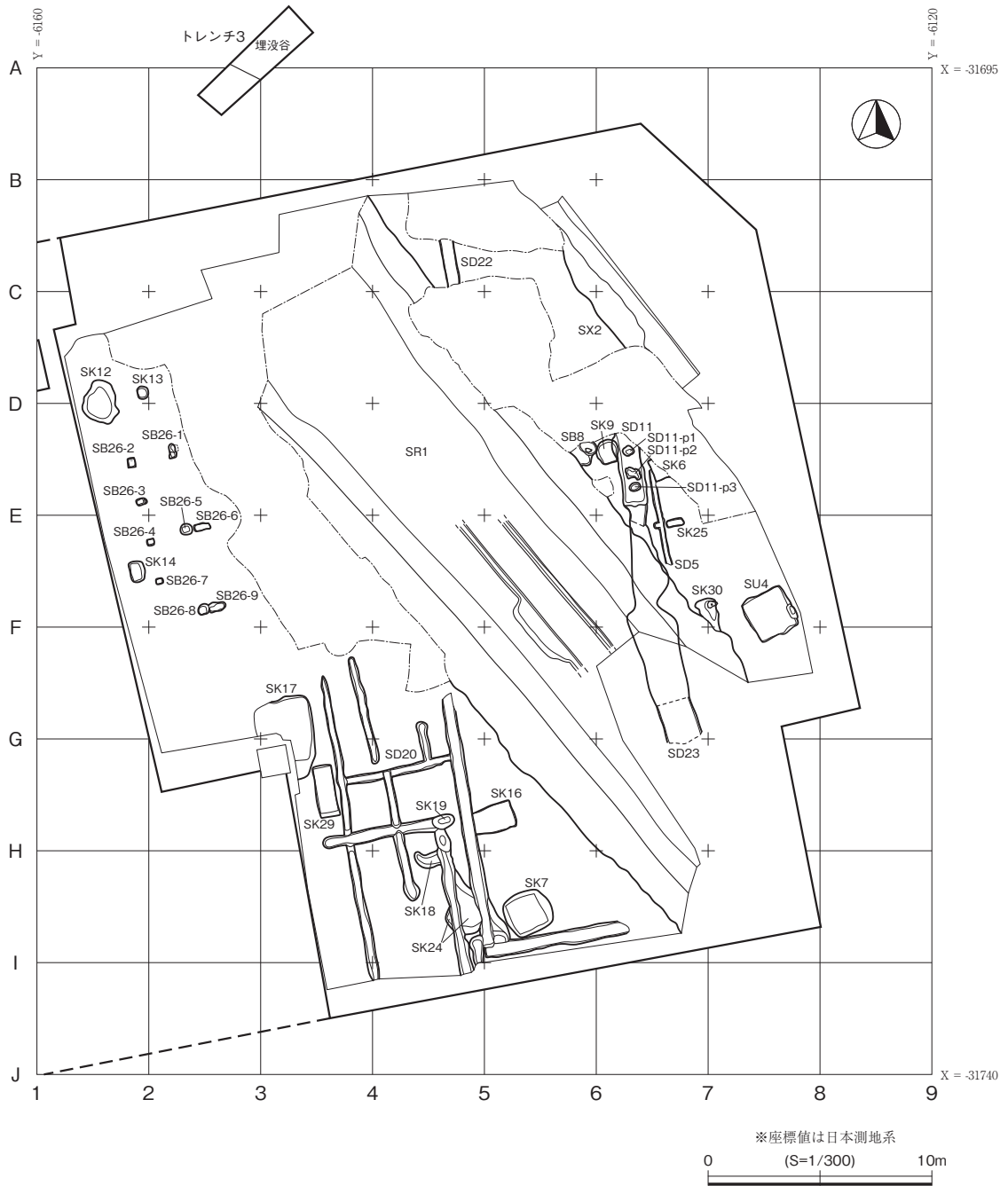
SK18、19は不整形の土坑である。断面形は不整逆台形である。SD20に切られる。調査では遺構の形状を明確にすることができなかった。A面の遺構である。

SD20 (Ⅲ - 6 図)

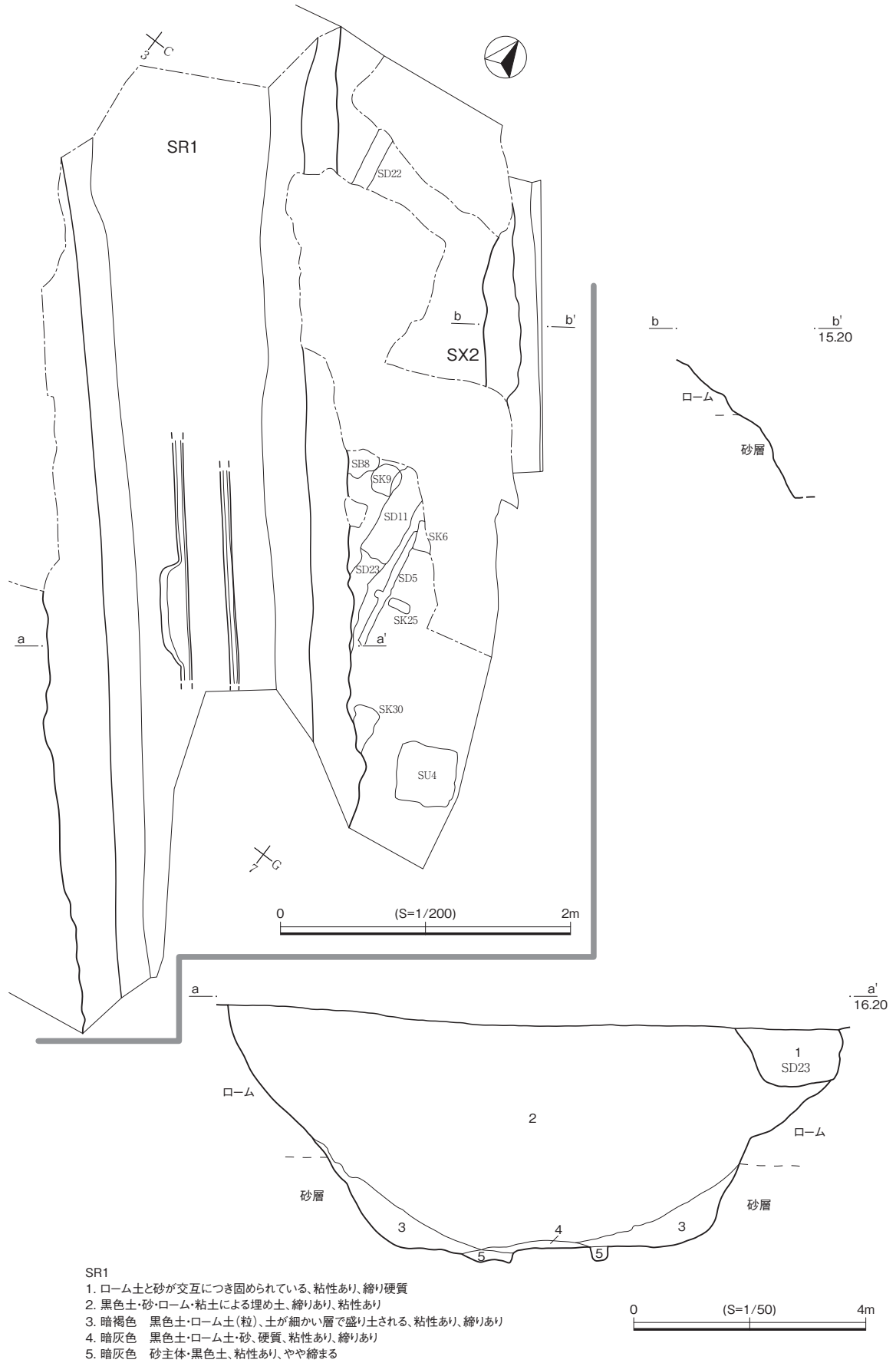
SD20は土管埋設のための溝である。遺構の断面は方形もしくは長方形で、深さは0.2～3.7m程度である。溝はF4～5、G4～5、H4～5、I4～7グリッドの範囲で検出されている。この他SD5がD7、E7グリッドの範囲で検出されている。A面の遺構である。

SB26 (1～9) (Ⅲ - 7 図)

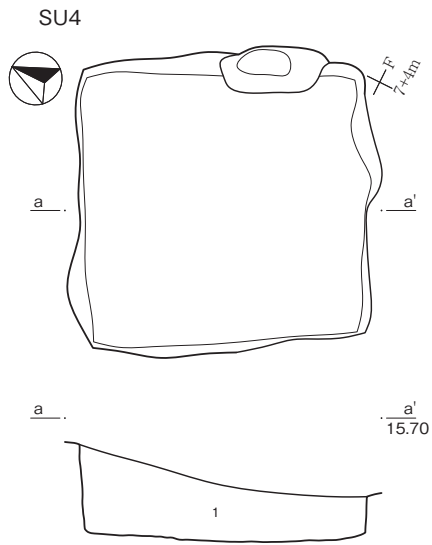
杭穴列である。SB26-2、3、4、7の断面を図化した。各柱穴の平面形は方形もしくは長方形で長軸は0.32m～0.77m、深さ0.13～0.54mである。遺構の間隔は1間(約1.8m)である。SB26-2では坑底に直径0.1mの杭穴を確認している。SB26-1、5、8と6、9は南北に約3.6m間隔で並ぶ。SB26-1はSB26-2、SB26-5、6はSB26-4と1間(約1.8m)間隔で並ぶ。



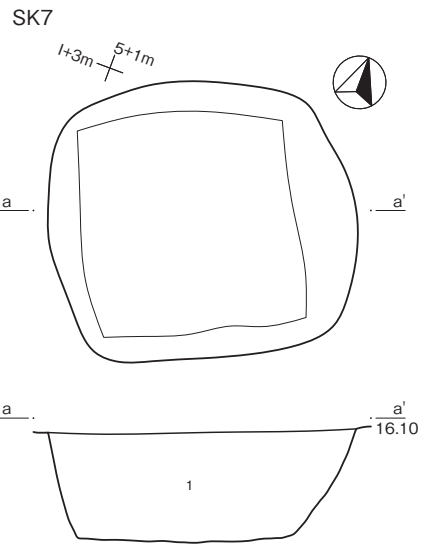
III-3 図 農学部生命科学総合研究棟地点 全体図



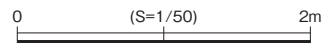
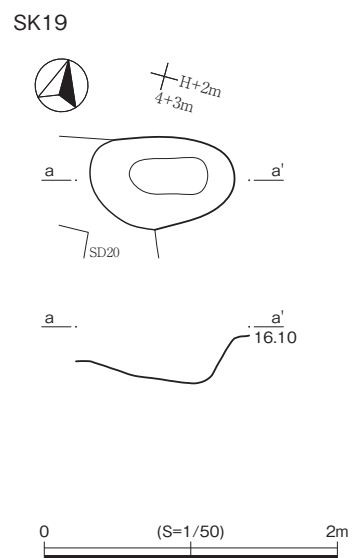
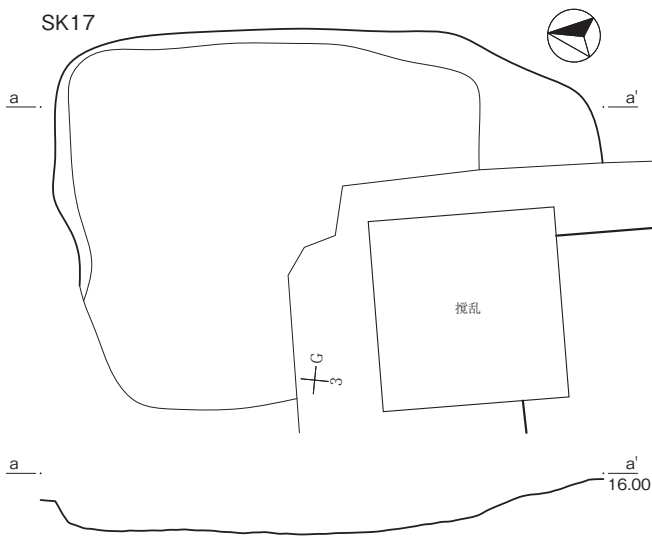
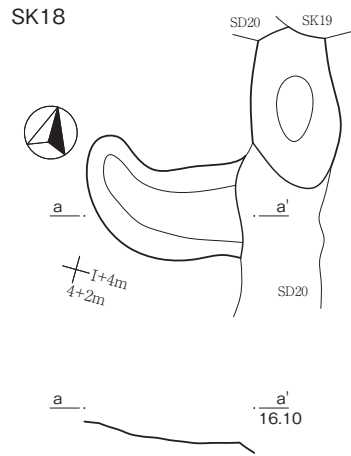
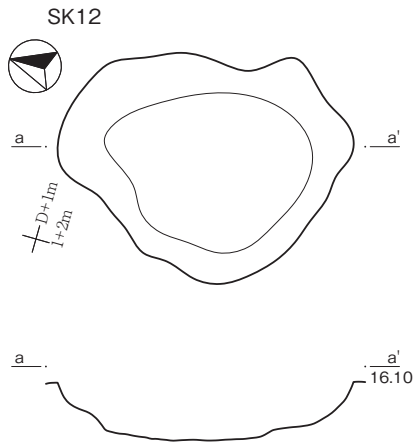
III-4 図 SR1、SX2



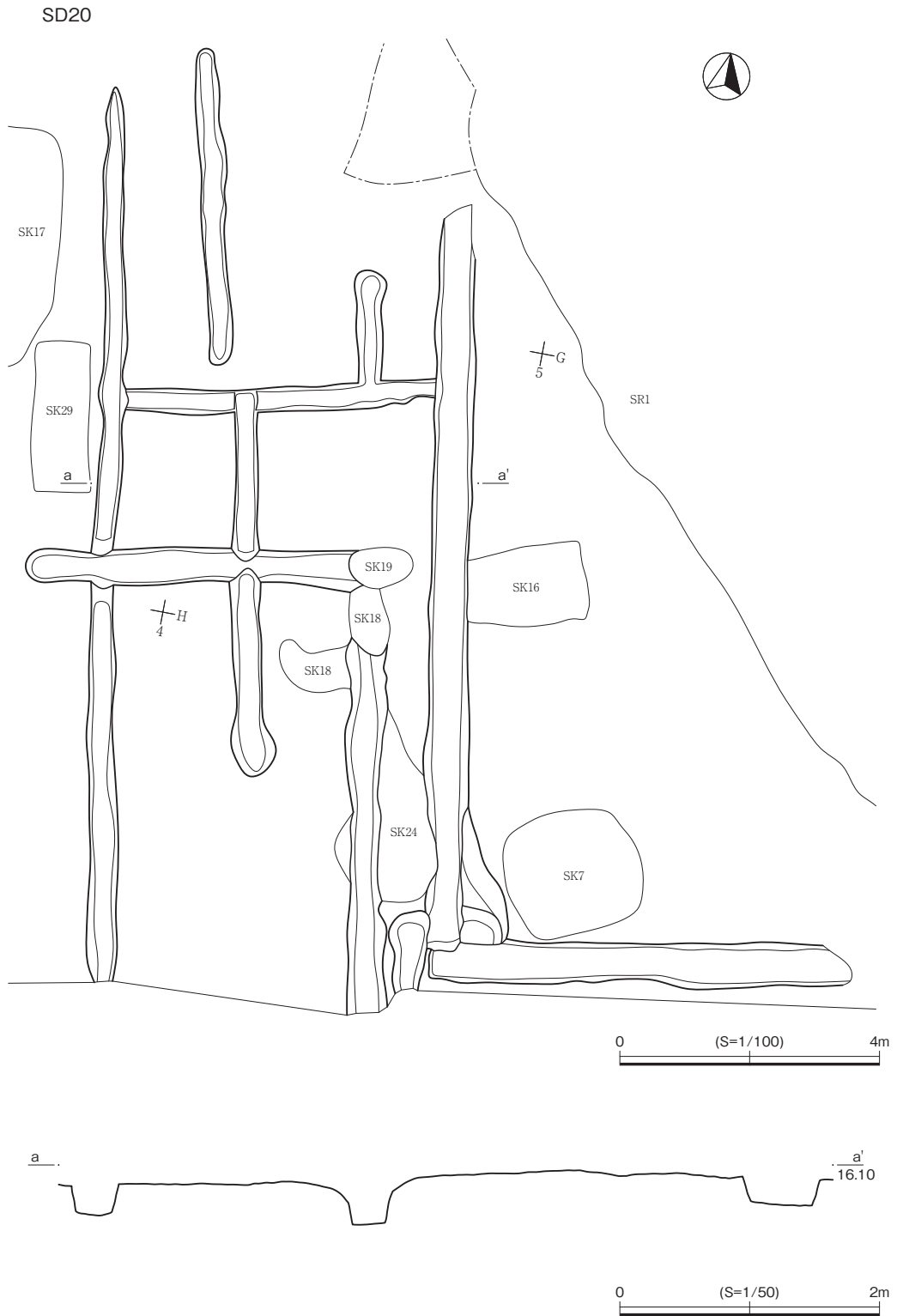
1.暗褐色 黒色土主体・ローム土、粘性あり、締めあり



1.暗褐色 黒色土主体・ローム土、粘性あり、締めあり

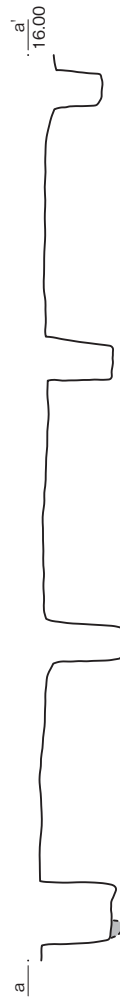
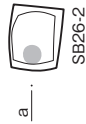
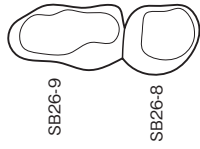
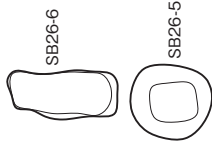


Ⅲ-5 図 SU4、SK7、SK12、SK17、SK18、SK19



Ⅲ-6 Ⅹ SD20

SB26



III-7 Ⅷ SB26

第2節 遺物

(1) 陶磁器類

本地点からはコンテナ総数、21箱の遺物（磁器・陶器・土器・その他）が出土している。磁器・陶器・土器の分類基準は「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）」（東京大学埋蔵文化財調査室1999）を参照している。遺跡における分類は数量分析により様々な文化・時代の様相を浮かび上がらせる手段である。そのためにはある一定以上の数量（便宜的に推定個体数100個体以上）を必要とするが、本地点においては全体的に遺物量が少なかったため、推定個体数100個体以上の遺物量を有する遺構が無く分析することができなかつた。数量分析ができなかつたため、大まかな年代観を出し検証した。

本地点は水戸藩駒込邸（中屋敷）内の北側に位置する。その後、軍省官庁地や堀田正倫邸となり、昭和10年以降東京大学敷地となる。遺物がまとまって検出されている遺構はSU4とSK17である。SU4とSK7は東京大学編年Ⅵ期、東京大学編年Ⅵa期に比呈されており近い時期の遺構であろう。その後SR1の道が造られたのであろう。SK17は明治期の遺構であり堀田正倫邸内と推定されている。

SR1（Ⅲ-8図）

1～3は磁器である。1は瀬戸・美濃系端反碗。JC-1-dに分類される。線書きの上にダミが施され丁寧に作られている。2は瀬戸・美濃系端反碗の蓋で、JC-00-bに分類される。焼成不良で胎土はほそぼそである。3は肥前系蓋物の蓋で、JB-00-fに分類される。丸文。焼成は良好ではなく呉須の発色も悪い。

4,5は土器で塩壺である。4は板作り成形で大枠に「泉州麻生」の刻印あり。DZ-51-iに分類される。他の遺物に比べ年代的には古い。5はロクロ成形、筒形で、DZ-51-wに分類される。底部のみ。遺物量が非常に少ないが4以外の遺物は東大編年Ⅷ期（1800年代～）に該当している。本遺構は文政9年（1826）の『向陵彌生町舊水戸邸繪図面』に描かれている、水戸藩駒込邸（中屋敷）の殿舎・庭園の区域と長屋・建物のある区域の間にある道に想定できるのではないかとされており、遺物の年代とも合致する。

SU4（Ⅲ-8～12図）

1～23は肥前系磁器である。1～4は染付碗。1は高台径が小さい半球形の薄手碗。JB-1-fに分類される。2は絵付け、作りの粗雑な碗でJB-1-gに分類される。銘有り。3は高台径が小さく腰の張る碗。小丸碗。JB-1-jに分類される。4は筒形碗で、JB-1-iに分類される。口縁に掛けてやや内傾している。高台脇に文様は見られない。見込み手描き五弁花。これらの特徴から筒形碗の中ではやや新しい段階のものと考えられる。5～11,13は染付の皿、12は青磁の皿。5はやや深く腰の張る皿。JB-2-fに分類される。口唇部が僅かに端反っている。口縁部の残存が少ないため復元できなかったが、輪花に形成されているものが多い。見込みはコンニャク印判五弁花。底部に銘「太明年□」、目痕あり。唐草文に線描き以外に濃みが使われており、比較的品質の高い製品であろう。6～8は絵付け、作りが粗雑な皿で、JB-2-gに分類される。6は口唇部口銹。扇が簡略化されていない、やや古い様相を持つ扇面文。7は簡略化された扇面文。9は見込み蛇ノ目釉はぎで高台径が大きい皿。梅花繫ぎ文

が多い。JB-2-m に分類される。10 は器高が低く腰の張る碗で、JB-2-o に分類される。内外面共にコンニャク印判が押されている。焼成不良で透明釉が部分的に白濁している。11 は蛇ノ目凹形高台の高台高が低い皿で JB-2-j に分類される。見込み文様は一枚の絵のように描かれている。外面唐草文。線書きの上にダミが施され丁寧な作りである。12、13 は糸切り細工の貼り付け高台による変形皿で、JB-2-r に分類される。12 は青磁で口銹が施されている。14 は鉢である。JB-5 に分類される。梅樹文が描かれ、厚手で絵付け、作りの粗雑な鉢である。高台内に銘有り。15、16 は丸碗形の小平で、JB-6-a に分類される。15 は厚手で絵付け、作りの粗雑な染付坏。16 は白磁。17～19 は脚部のえぐりが浅く、畳付けの外周に面取りが施されている仏飯器で高台内内面無釉。JB-8-c に分類される。17 は染付で口縁部に向けて開いていく坏部の浅いもの、19 は染付で口縁部が垂直に立ち上がる坏部の深いもの、18 は白磁でおそらく坏部の深いものであろう。20 は内面無釉。染付瓶。JB-10 に分類される。蛇ノ目凹形高台で高台高が低い。21 は蓋物、丸碗形。JB-13-a に分類される。22、23 はミニチュア。JB-61 に分類される。22 は白磁碗。23 は染付碗。

24～38 は陶器である。24、26～32、34～38 は瀬戸・美濃系、25 は肥前系。24 は灰釉薄掛け丸碗で TC-1-c に分類される。25 は陶胎染付の腰の張った大振りの碗で、TB-1-f に分類される。口銹あり。二次焼成を受けている。26 は笠原鉢。鉄絵、緑釉流し、口縁部外反。TC-5-a に分類される。釉調はやや黄色み掛かっている。見込み、底部ともに焼成時の溶着痕が残る。27 は鏝付きの灰釉鉢で、TC-5 に分類される。28～30 は二合半灰釉徳利で釘書きが線のようにになっている。28 は底部釉が拭き取られ TC-10-a に分類される。なで肩。口縁部折り返し。29、30 は底部はないが、釘書が 28 と同様に線書きになっており TC-10-a に分類されると考えられる。なで肩。31、32 は五合徳利で TC-10-d に分類される。なで肩で釘書は線書きになっている。33 は志戸呂系の瓶で TF-10 に分類される。胴部上半欠損。34 は口部が欠損しているが片口と思われ TC-23-b に分類される。腰がやや張っており、新しい段階のものである。36 は錆釉が施された挿鉢で TC-29 に分類される。挿目は 12 条 1 単位である。底部には糸切り痕が残る。37 は堺系挿鉢で TL-29 に分類される。挿目は 8 条 1 単位である。38 は京都・信楽系で人形 (TD-60)。水滴の可能性もある。象の上に唐子が乗っている。型押し成形 (前後合わせ) で底部は塞がれて中空になっている。唐子の背中に焼成前に穿たれた幅 6mm の孔の一部が残存している。灰釉、鉄釉。象の目、唐子の足は鉄釉で表現されている。上絵付け (白、乳白色、赤、緑)。底部は上絵付けの段階で塗られている。

39～49 は土器である。39～41 は底裏に左回転糸切り痕がある皿で DZ-2-b に分類される。ススが付着しており灯火皿として使われた物であろう。42、43 は底部欠損のため糸切りの回転は不明。39～42 は内面立ち上がり際に窪みがみられ、江戸在地系と思われる。44 は丸底のほうろくで DZ-47-a に分類される。45 は脚付きの油受け皿で全面にススが付着している。DZ-40-c に分類される。皿部の縁よりも受け部がかなり高い。46 は DZ-40-f に分類される。ドーナツ形で中心部が開いている。性格は不明。47 はロクロ成形、筒形、無印の塩壺で DZ-51-w に分類される。48 は凹型、無印の塩壺の蓋である。DZ-00-c に分類される。47 より径が大きく 47 の蓋ではない。49 は掘炬燵用の鏝付角火鉢で DZ-31-c に分類される。

50～54 はミニチュア、玩具、人形である。50 はミニチュアの瓶で DZ-61 に分類される。ロクロ成形、透明釉。胴部に 3 箇所、指頭大のへこみがある。51 は土鈴で DZ-58 に分類される。胎土は白色系。孔の向きと開口部の向きが異なる。摘み部は捻り作りだし、開口部はヘラで切り取られている。52 は天神で DZ-60-b に分類される。胎土は白色系。型押し成形 (前後合わせ) で中実。底部穿孔有り。烏帽子、尺の縁部分に赤色、耳に白色が残る。全面に型取りをする際、型離れをよくするために付

けられたと思われる雲母が見られる。東大構内遺跡工学部14号館地点SK330からは類似している天神が出土している。53は手に小槌と大きな袋を持つ大黒でDZ-60-cに分類される。胎土は橙色系。型押成形(前後合わせ)で中実。底部穿孔有り。54は座西行でDZ-60-aに分類される。胎土は橙色系。成形方法は2枚の型による型押成形(前後合わせ)で底部開口型。貼り合わせたのち内部を工具でナデ調整している。傘の部分のみ赤色が残る。頭部は、はめ込み式で欠損。

55～59は瓦である。55は軒丸瓦。紋様は巴紋で、尾が反時計回りに流れる左巴紋である。尾は長く表現される点で特徴的である。巴紋の周りには圏線が一重巡り、さらにその周りに珠紋が巡る。破損しているため14個しか確認されないが、珠紋は16個前後あったものと推察される。筒部は欠損し全長、製作技法等は不明である。胎土は灰色、表面は黒灰色を呈し、黒色、茶色の混和物が多く混じる。また混和物が脱落した痕跡と思しき小さな空隙が多く確認される。56は軒平瓦、ないし軒棧瓦の軒平部。瓦当紋様の中央付近のみの資料で、紋様はいわゆる「江戸式」に分類される。加藤氏の設定した基準に拠れば、中心飾りがI、唐草がFに分類されよう(加藤1989:44-45)。瓦当裏面には横ナデ調整が施され、さらに等間隔に指頭押捺痕と推察される浅いくぼみが三箇所確認される。筒部凹面も横ナデ調整される。胎土は灰色、表面は黒灰色を呈し、茶色の混和物が多く混じる。57は軒平瓦、ないし軒棧瓦の軒平部。瓦当紋様の中央付近から右側のみの資料で、紋様はいわゆる「江戸式」に分類される。加藤氏の設定した基準に拠れば、中心飾りがI、唐草がAに分類されよう。瓦当裏面には横ナデ調整が施される。筒部は欠損し全長、製作技法等は不明である。胎土は灰色、芯が黒灰色で、表面は黒灰色を呈する。茶色の混和物が多く混じる。また混和物が脱落した痕跡と思しき小さな空隙が多く確認される。58は平瓦ないし棧瓦の端部破片。刻印が確認されることから、下端小口部の可能性が高いといえよう。刻印は「やまに本」。同様の刻印が確認される瓦資料は、江戸遺跡出土資料に多く確認されるが、同じ文字でも刻印の種類はかなりの種類に及ぶと推察される。なおより大きな「やまに本」は幕末から明治期の都内近郊の遺跡出土瓦にも確認される。特に近代の愛知県における瓦屋で、屋号として多用されたことが確認される(井上1927)。胎土は白灰色、表面は光沢のある黒灰色を呈し、他の瓦資料とは異なった特徴を示す。江戸へ持ち込まれた瓦の可能性もあるといえよう。59は平瓦ないし棧瓦の端部破片である。刻印が確認されることから、下端小口部の可能性が高いといえよう。刻印は三角形を二つ組み合わせた幾何学紋。類例は江戸遺跡出土の近世瓦に多く確認される。胎土は灰色、表面は黒灰色を呈する。茶色の混和物が多く混じる。また混和物が脱落した痕跡と思しき小さな空隙が多く確認される。

60、61は石製品である。60は砥石。頁岩。61は硯。粘板岩。海部欠損。砥石などの石を利用して作られたもの。外面黒色塗布。硯用の石ではなく軟質のため、陸部が大きく摩滅している。

丸碗(JB-1-g)、半球碗(JB-1-f)、筒形碗(JB-1-l)などが出土しているが、焙烙や塩壺などやや新しい時期の特徴を持つ物も出土しており、陶磁器の年代に幅を持つ。東京大学編年VI期(1750年代～1770年代)に相当する遺物群であると考えられる。

SK7(Ⅲ-13図)

1、2は肥前系染付磁器。1は碗。高台径が小さい半球形の薄手碗で、JB-1-fに分類される。2は丸碗形の小平でJB-6-aに分類される。コンニャク印判。口径が大きく器高が低い。

3、4は瀬戸・美濃系陶器。3は5合徳利でTC-10-dに分類される。底部釉拭き取り。なで肩。釘書有り。「佐」。線状につながっている。4は鉄釉の香炉・火入れでTC-9-bに分類される。底部、内面無釉。三脚。

5～8は土器である。5は底裏に右回転糸切り痕がある皿で、DZ-2-aに分類される。見込みからな

めらかに立ち上がる。口縁部にススが多量に付着している。6は底裏に左回転糸切り痕がある皿でDZ-2-bに分類される。内面立ち上がり際に窪みがみられ、江戸在地系と思われる。墨書有り。「享保十」「甲」「吉日」とあるので、おそらく享保甲寅の1734年を示しているのであろう。7は油受け皿。脚付き無釉でDZ-40-cに分類される。スス付着。皿部の縁よりも受け部がかなり高い。受けの開口部は大きく長方形である。8は油受け皿、脚無しで無釉。DZ-40-dに分類される。皿部の縁よりも受け部がかなり高い。

9は粘板石。粘土岩。片端が折れている。

数量は少ないが瀬戸・美濃系陶器徳利などから東京大学編年VI a期（1750年代～1760年代）に相当する遺物群と推定される。

SK17（Ⅲ-13～16図）

1～40は磁器である。1～7は碗。1は染付赤絵金襷手。染付の上に赤で彩色し、その上から銀彩で文様を付けている。見込み手描き五弁花。内面口縁部四方襷文。底部中央に赤の上絵で「永楽」の銘有り。他の遺物の年代や金襷手などの作風から一二代和全か。和全は明治29（1896）年没。京都で焼かれた物か。2は型紙刷りの碗。3分割されている。3は湯呑碗。桃色。手描き。高台内銘有り「大日本柏山製」。4は湯呑碗。吹き絵。金、赤、紫。5～7は白磁湯呑碗。8～15は小坏。8～10は丸碗形。9は鉄絵。畳付け際削り有り。高台内銘有り。10は色絵銅版転写。高台内銘有り。「源平精製」。桃色、緑色。11～13は端反形。11は染付、手描き口鏽。底部銘有り。12は銅版転写。腰張り。13は銅版転写。腰張り。14、15はハの字に開く。薄手。14は内面に上絵、赤により「清川」。15は白磁。高台内は無釉で渦巻き状になっており、中心部が盛り上がっている。16～19は皿。16、17は瀬戸・美濃系の皿。木型打ち込みの寿文皿で、JC-2-dに分類される。18、19はクロム青磁。20は鉢。内外面型紙刷り。21は爛徳利。手描き。22は土瓶。薄手。手描き。漉し穴は7ヶ。23は壺。内面にも釉が掛けられている口唇部、底部無釉。24蓮華。JA-20に分類される。内面は粉彩（黒、桃、緑）で花が描かれている。釉薬はかなり青味がかっている。畳付けはきれいに成形されておらず粗い作りである。25は二重になっており、性格不明。「伴徳政發朋製煉・・・・」の文字が書かれている。26は合子の身。銅版転写。27は合子の蓋。銅版転写。28～39は煉歯磨入れ。28～33は資生堂から発売された歯磨石鹸の容器。明治21（1888）年発売。28、30は大型容器の身。29は蓋。「福原衛生歯磨石鹸 本舗東京資生堂謹製」「SANITARY TOOTH PASTE FUKUHARA」「PREPARED BY SHISEIDO」「登録商標 TRADE MARK」。31、33はやや小振りの身。32は蓋。29に同じ。34～36、39は花王「鹿印煉歯磨」の容器。34、35は合子形の身と蓋。36は卵形の合子の身。底部には「發賣元 東京馬喰町二丁目 花王石鹸本舗 長瀬富郎」と銅版転写で書かれている。同様の器形で底部に「鹿印煉歯磨」と書かれているものがある。1893年10銭で発売。おそらく蓋外面中央に縦に「鹿印煉歯磨」と書かれているもの身であろう。39は壺の蓋。37は合子の蓋。38は合子の蓋「登録商標」「煉歯磨 大（樽?）」。40は壺の蓋。

41～48は陶器である。41は坏。灰釉。高台内も釉が掛けられている。器高が低く、口径が大きい坏。42は猪口。灰釉。底部無釉。畳付け脇を削りだしている。43は土瓶。伊賀焼。白土、酸化コバルトによる施文。注口の裏に「いが」の銘あり。漉し穴は7ヶ。内面釉。44は行平鍋。灰釉。イッチン掛け。45～48は蓋。45は全面に型押し模様が付いている。46、47は灰釉。48は三彩土瓶の蓋。TZ-00-cに分類される。

49～51は土器である。49は植木鉢。50は皿。見込み刻印有り。口縁部は輪花に成形されている。

51は碁石形土製品。DZ-56に分類される。成形時の指紋が僅かに残されている。

52は軒棧瓦である。紋様はいわゆる「江戸式」の瓦で加藤氏の分類によれば中心飾りはI、唐草はLに分類される。

53は銅製品。金具。二つのパーツが組み合わさってできている。54、55は銭。54は「文久永宝」。四文銭。十一波。鑄造期間は文久3（1863）年～明治2（1869）年。大別して三種類の字体がある。この字体のみ「寶」の字が略字になっており、他と区別が付きやすい。55は「寛永通寶」新寛永。

56は砥石。頁岩。片側が折れている。3面を砥石として使用している。57は硯。粘板岩。長さ二寸半、幅一寸半。表面は平らであり摩滅は見られない。朱書き用。58は石英（水晶）の結晶。

59～64はガラスである。59は上から見ると対角線上に成形の型痕が観られる。型痕は胴部から口縁部までで、色調は透明でやや緑がかっており細かい気泡が観られる。底部中央には丸い窪みが観られる。インク瓶。60、61は上から見ると対角線上に成形の型痕が観られる。型痕は胴部から肩までみられ、色調は透明でやや緑がかっており細かい気泡が観られる。底部中央には四角い窪みが観られる。62は左右に成形の型痕が観られる。型痕は胴部から肩部までである。色調は透明でやや緑がかっており細かい気泡が僅かに観られる。底部中央には丸い窪みが観られる。陽刻（エンボス）で目盛りが付いており、薬瓶であろう。63は蓋か。色調は無色透明。内面中央部まで擦痕が観られる。64は栓。色調は無色透明。下半分は擦痕が観られる。

寿文皿から吹き絵まで検出されており、明治期全般に及ぶやや時期幅のある遺物群である。

SK18、SK19（Ⅲ-17図）

1～7は磁器である。1～4は内外面型紙刷りのコバルト碗である。3分割されている。5、6は瀬戸・美濃系の皿。5は木型打ち込みの寿文皿。JC-2-dに分類される。6はクロム青磁。JC-2に分類される。口唇部折り返し。7は銅版転写コバルト皿である。2分割されている。

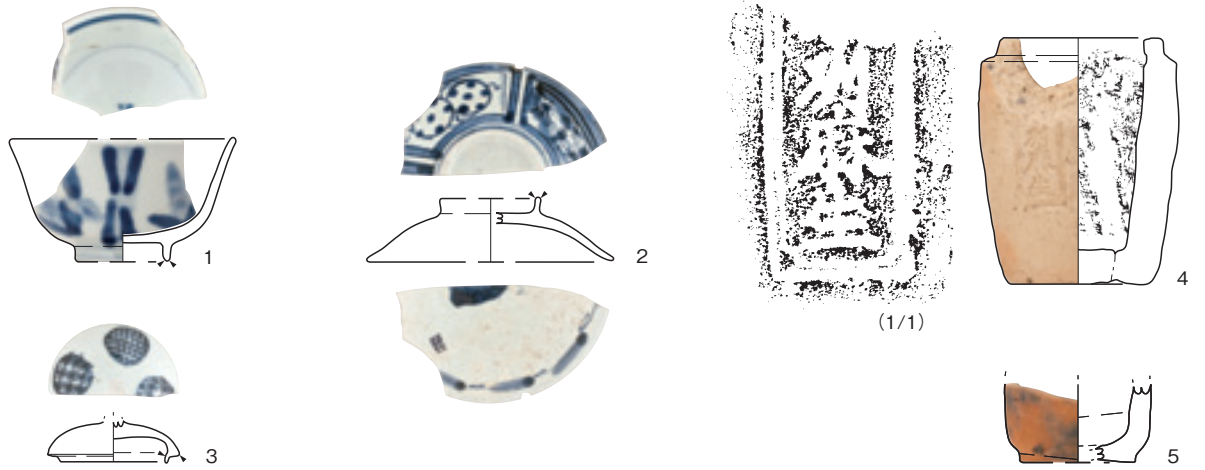
寿文皿から銅版転写まで検出されており、明治20年代頃までの遺物群であろう。

遺構外（Ⅲ-17図）

1～5は磁器である。1、2は型紙刷りの碗である。1は文様が3分割されている。3、4は内外面型紙刷りコバルト皿である。5は瓶の栓。機械栓。銅版転写。コバルト。「義」の文字が入っている。機械栓は明治17（1884）年以降、昭和初期頃まで主に清酒瓶や牛乳瓶に使われていた。

6～8は陶器である。6、7は土瓶。6は高台内に「北」の墨書有り。8は備前系献上手、薄作り、鶴首の瓶でTE-10に分類される。底部に刻印有り。

9は土器の蓋。ミニチュアで、DZ-61に分類される。

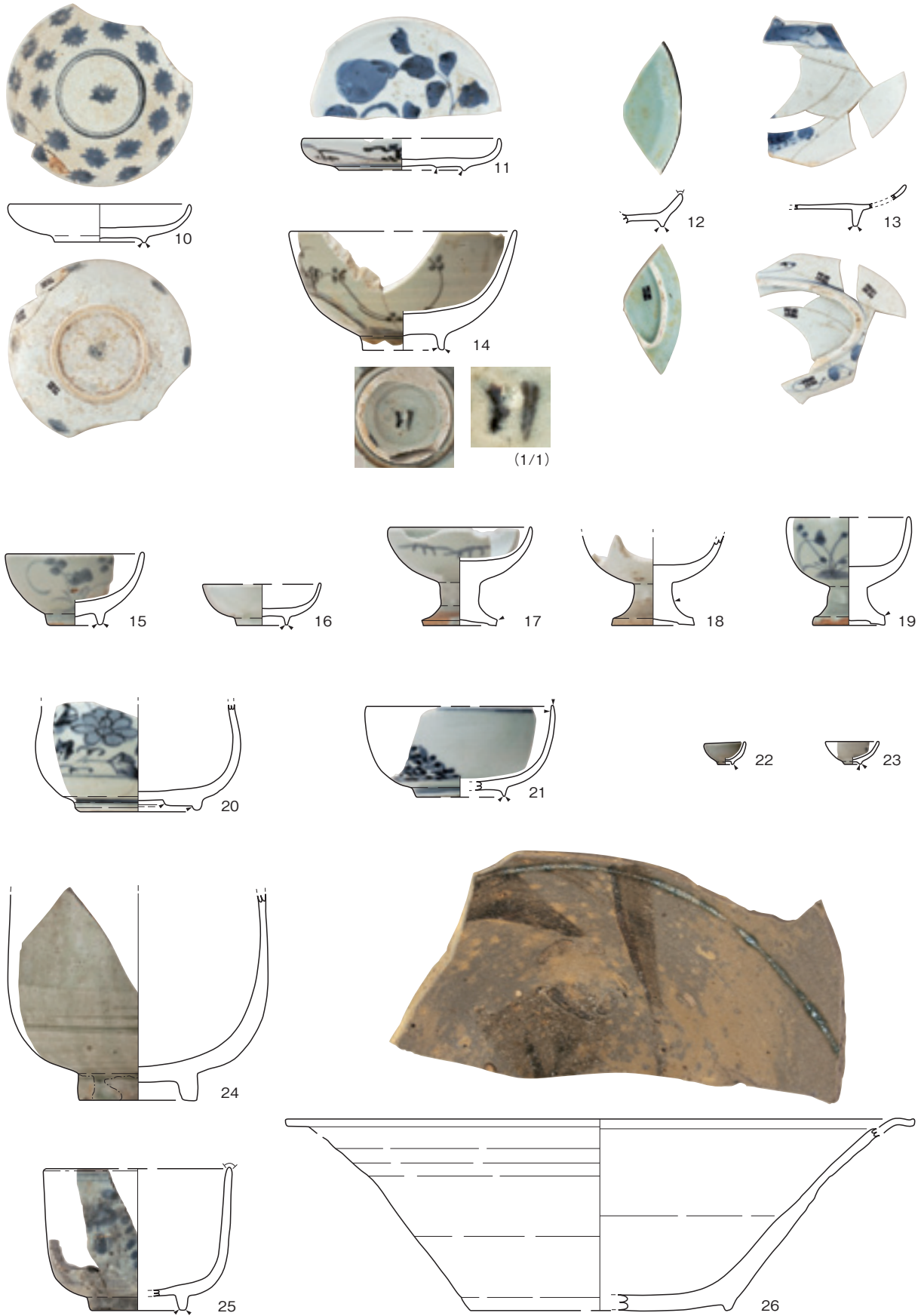


SR1

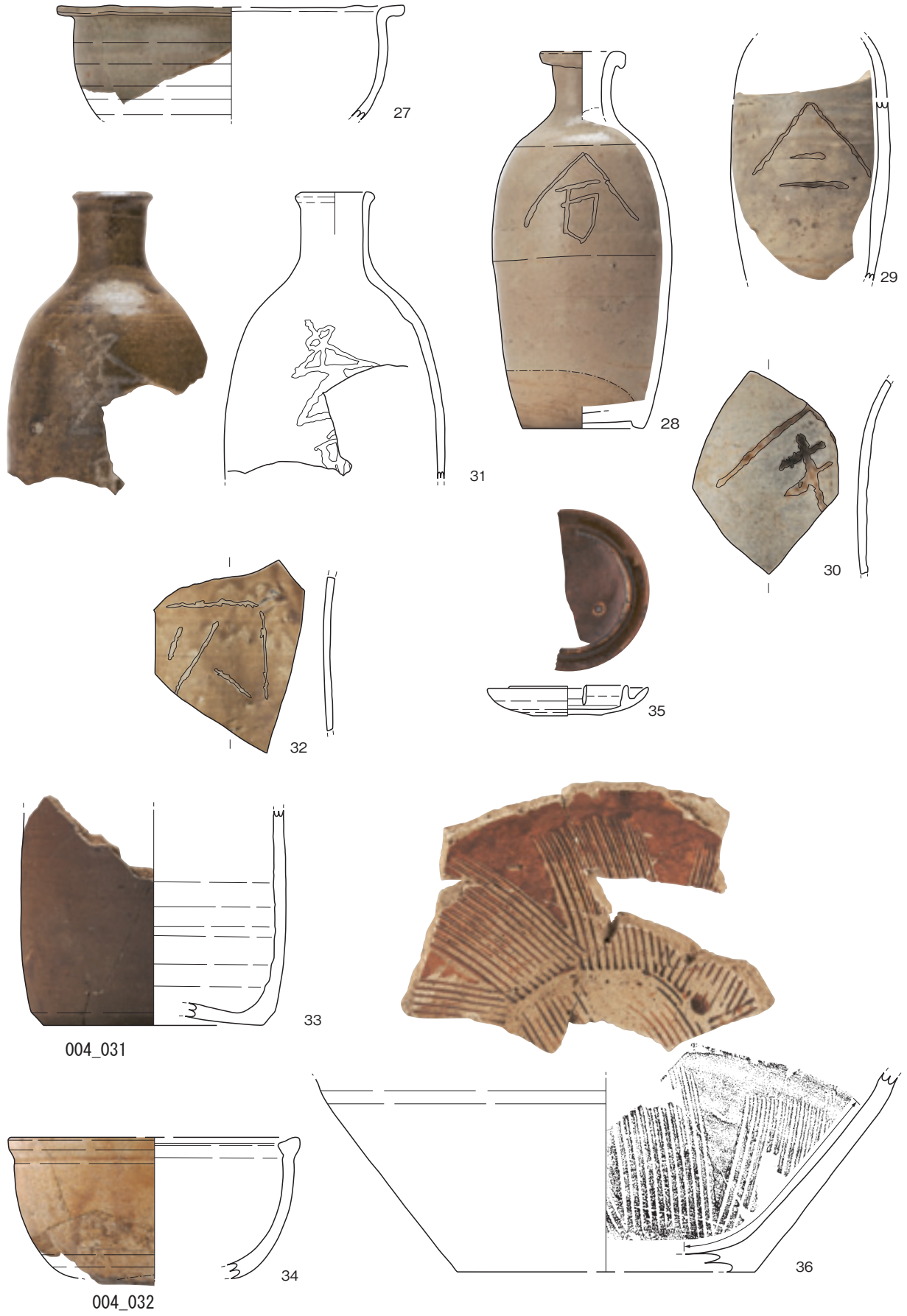


SU4 (1)

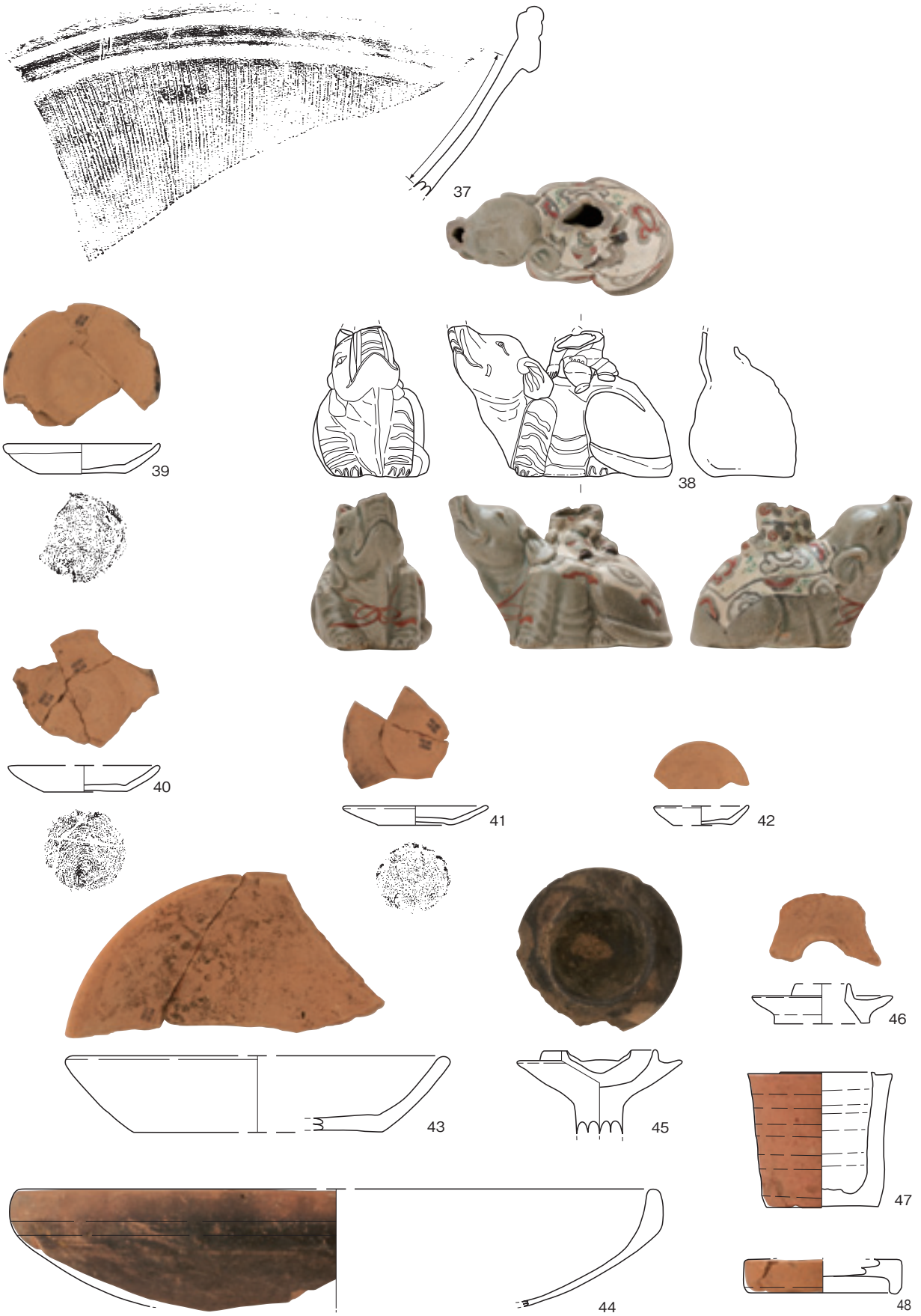
Ⅲ - 8図 SR1、SU4(1) 出土遺物



III - 9図 SU4(2) 出土遺物



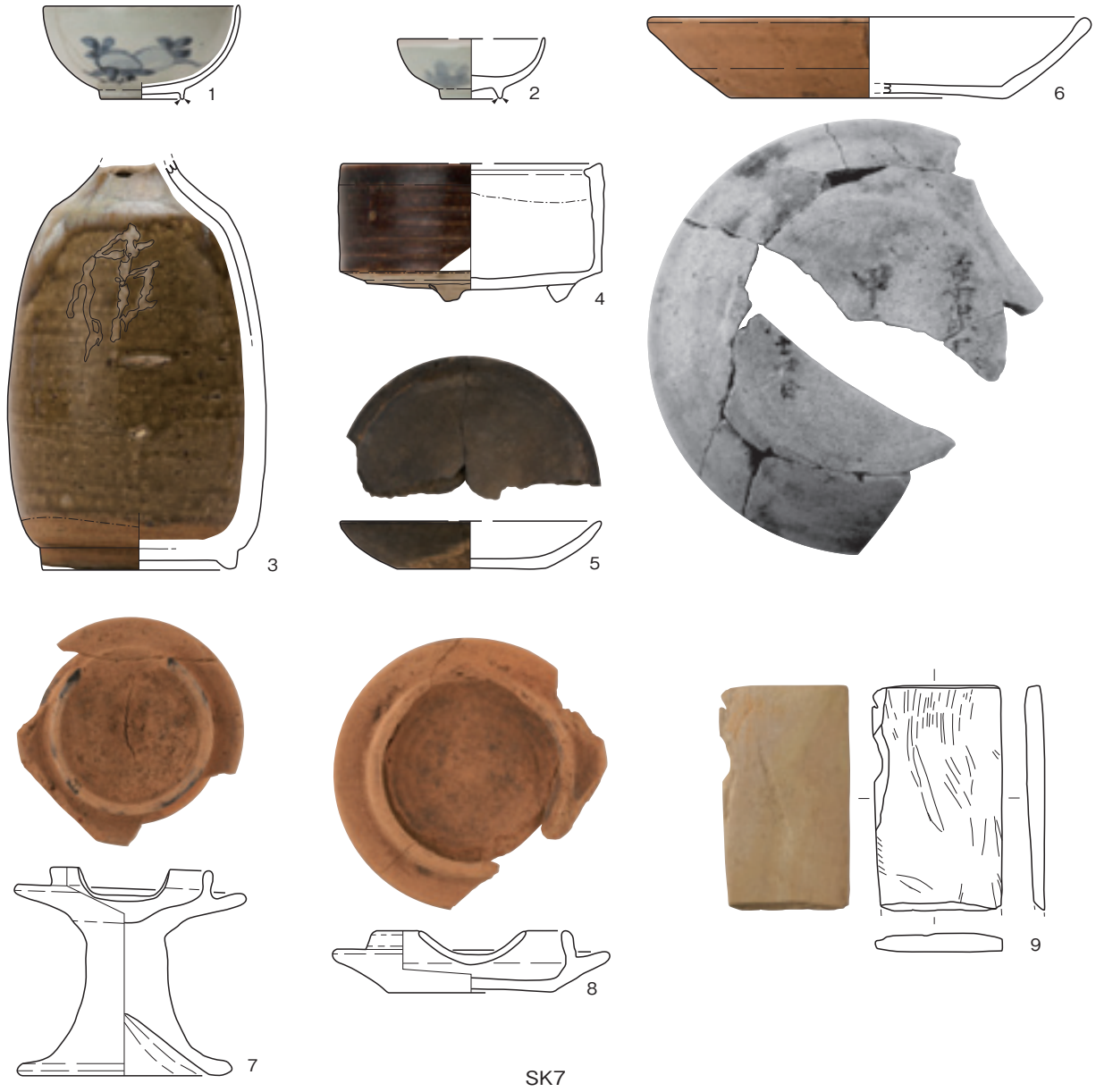
III - 10図 SU4 (3) 出土遺物



Ⅲ - 11図 SU 4(4) 出土遺物



III - 12図 SU4(5) 出土遺物



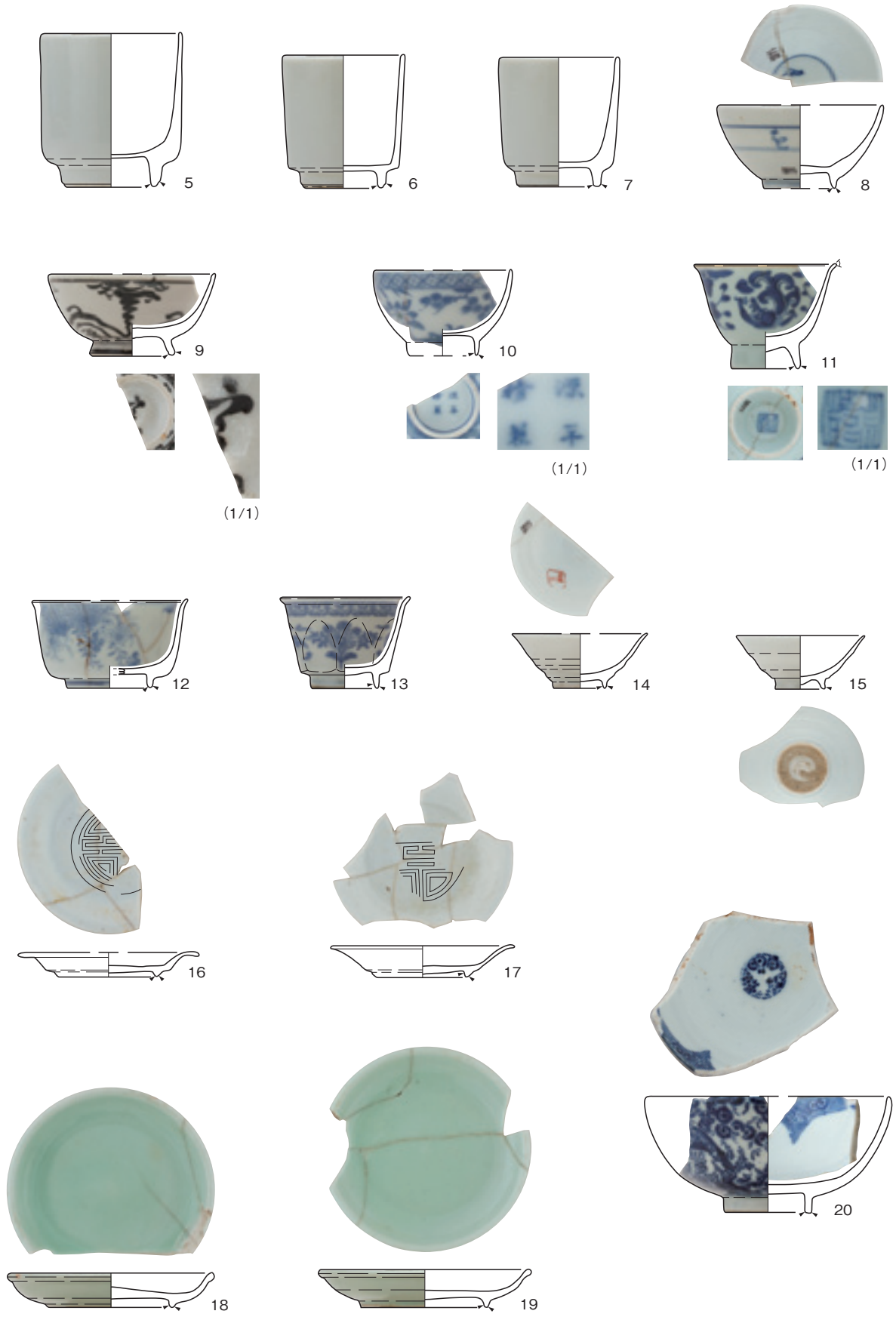
SK7



SK17(1)

(1/1)

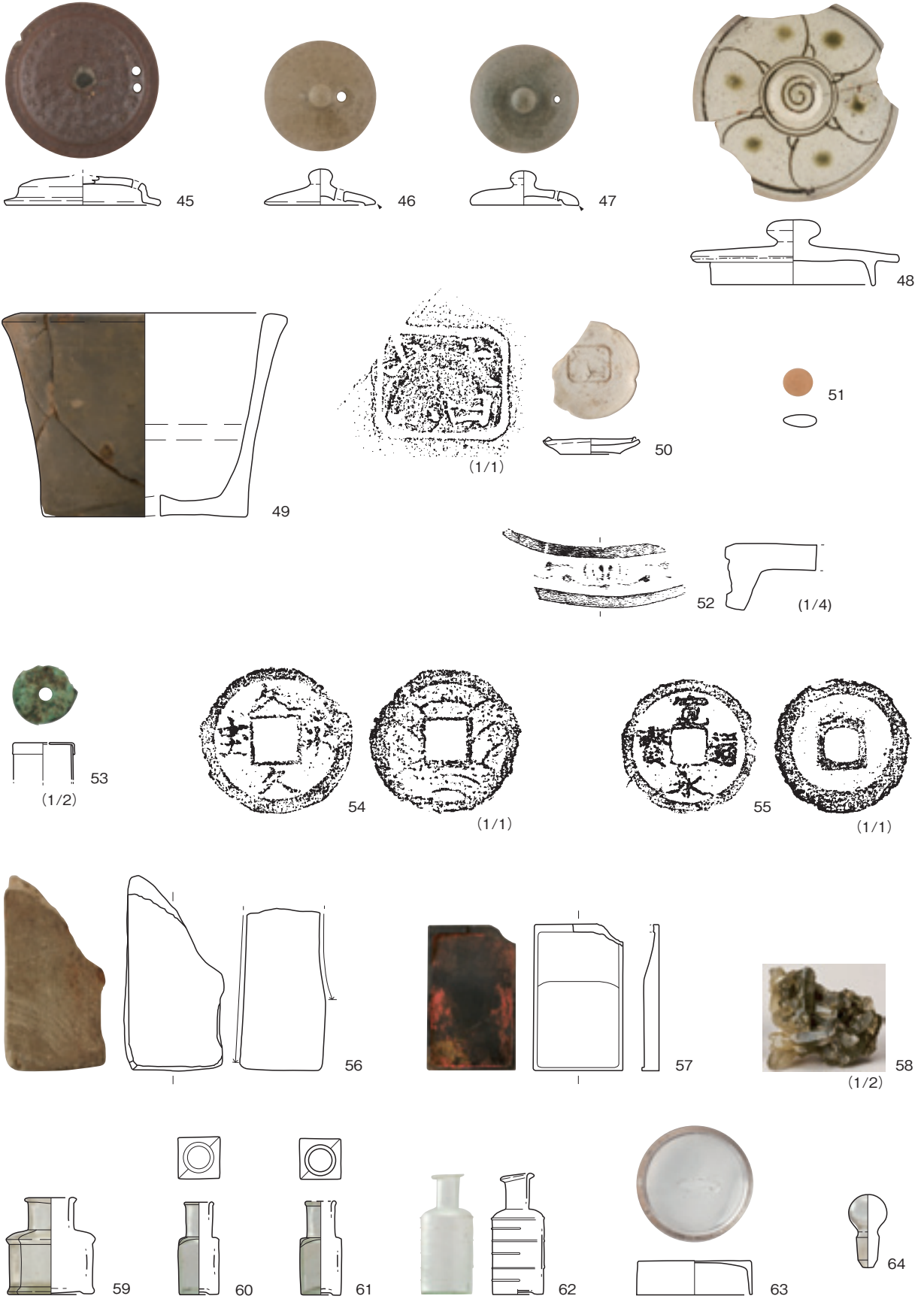
Ⅲ - 13図 SK7、SK17(1) 出土遺物



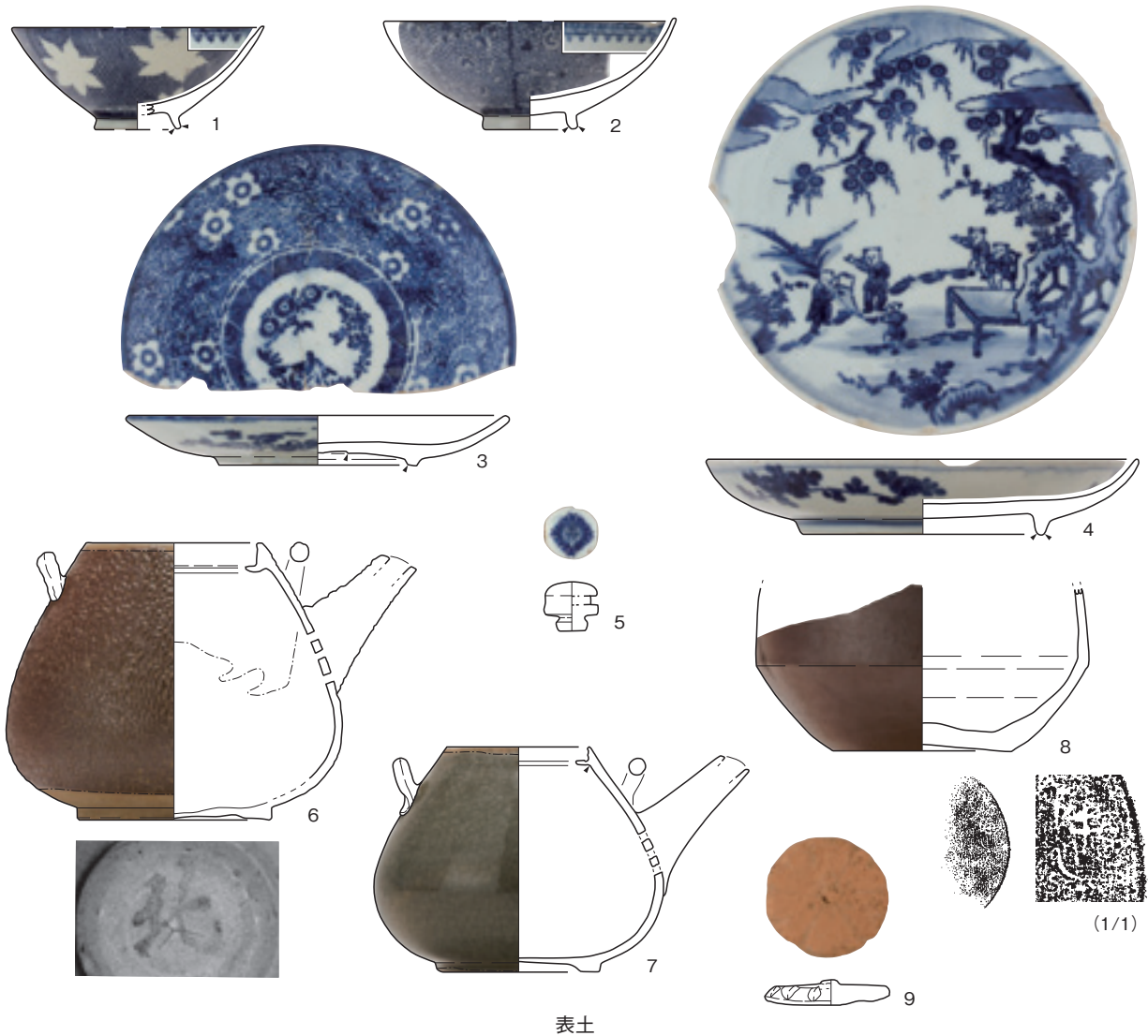
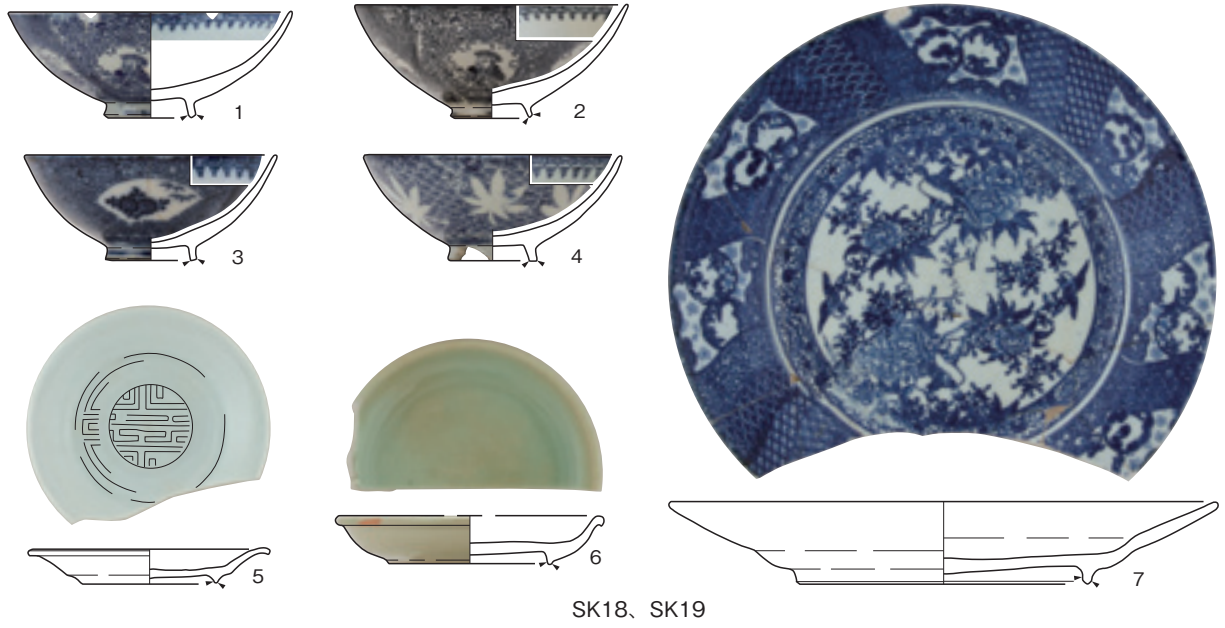
Ⅲ・14図 SK17(2) 出土遺物



Ⅲ - 15図 SK17(3) 出土遺物



III - 16図 SK17(4) 出土遺物



Ⅲ - 17図 SK18, SK19、遺構外 出土遺物

第3節 動物遺体

本地点からは、6種の動物遺体が出土している。これらは、表土からサザエの蓋が1点採集されたほかはすべてSU4から出土している。なお、ヒトの上顎第二大臼歯1点のほかは貝類遺体である。

SU4から貝類遺体は最小で21個体出土している。もっとも多いのがアサリで12個体が出土し、全体の57.1%を占める。その他に、ハマグリ（4個体・19.0%）、ヤマトシジミ（3個体・14.3%）、サザエ（1個体・4.8%）、アカガイ（破片・4.8%）が出土している。なお、ハマグリは、殻長45mm前後の中型の汁物にも焼き物にも使えるサイズのもののみである。

遺構	数／％	サザエ		アカガイ		ヤマトシジミ		ハマグリ		アサリ		合計(MNI)
		殻	蓋	左	右	左	右	左	右	左	右	
		SU4	数	1			○	2	3	2	4	
	%	4.8%			4.8%	14.3%		19.0%		57.1%		
表土	数		1									

遺構	分類群	部位	左右	数
SU4	ヒト	上顎第二大臼歯	左	1
備考	咬合面が遠心方向に傾斜するように激しく磨耗している。咬合面の1/8のほど、象牙質が露出している。			

SU4出土のヒトの上顎第二大臼歯に関する観察

出土貝種組成表



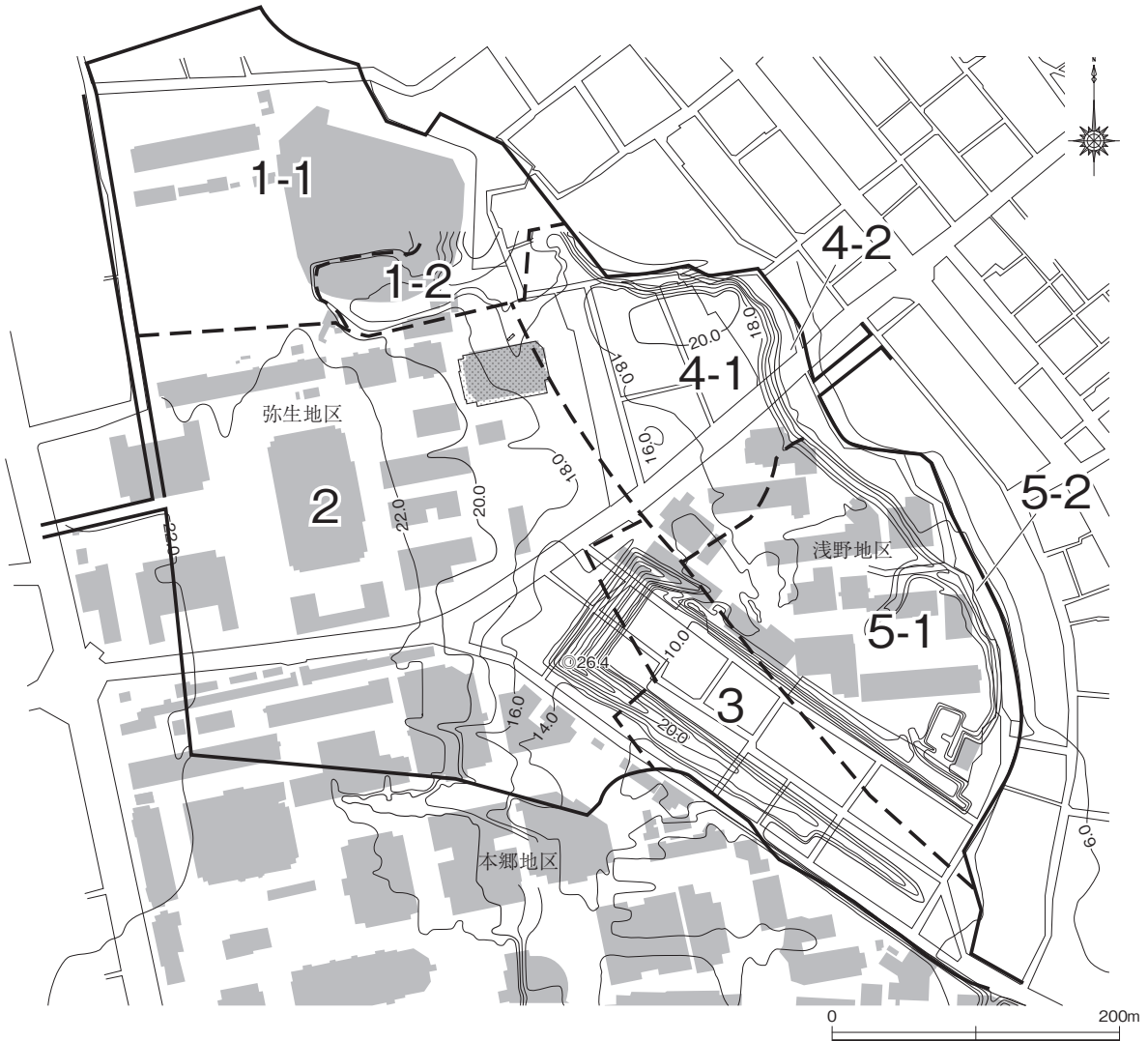
Ⅲ-18 図 SU4 出土動物遺体

1. サザエ 2. アカガイ (片) 3. ヤマトシジミ (右) 4. アサリ (左) 5. ハマグリ (左) 6. ヒト 左上顎第2大臼歯

第IV章 農学部生命科学総合研究棟地点の成果

はじめに

昨年度刊行した報告書『浅野地区I』では、向ヶ岡弥生町の歴史と東京大学浅野地区の遺跡について検討を行った。江戸時代、旧向ヶ岡弥生町（現文京区弥生、町域は一部変更されている）に位置した水戸藩駒込邸の絵図『向陵彌生町舊水戸邸絵図面』と「明治16年陸軍参謀本部測量原図」、発掘調査の結果等から、旧地形は、西側台地（1-1、1-2支谷、2）、支谷（3）、東側台地（4、5）に分かれる（IV-1図）。水戸藩駒込邸の区画は旧地形が反映されており、文政9（1926）年以前は、西側台地（1安志藩下屋敷・抱屋敷、2～4殿舎（御殿）、史館、長屋、役所、朱舜水の屋敷・祠他）東側台地（5殿舎（御殿））、『向陵彌生町舊水戸邸絵図面』の文政9（1926）年以降は、西側台地（1安志藩下屋敷・



IV-1 図 旧地形と東京大学、駒込邸の区画

抱屋敷、2長屋・役所)、西側台地と東側台地の間(3切手御門から殿舎(御殿)へ至る道と庭園を兼ねた区域)、東側台地(4殿舎(御殿)北側敷地、5殿舎(御殿))に土地利用されていた。向ヶ岡弥生町は明治時代から大正時代、昭和を経て、現在、住宅地と東京大学浅野地区、弥生地区となり駒込邸の痕跡はわかりづらいが、町の外周は旧地形と江戸時代の土地利用状況を踏襲していることが明らかになった(註1)。駒込邸については『向陵彌生町舊水戸邸絵図面』の分析と駒込邸関連史料の分析から、「5殿舎(御殿)」の土地利用状況を中心に検討した。明治時代以降は警視局(庁)射的場の造成と射的場移転に伴う造成と宅地化、向ヶ岡弥生町にあった東京府癲狂院、脚気病院について検討を行った。また、明治17(1884)年に発見された弥生時代の名称由来土器の発見場所について、発見当時の土地利用状況をもとに検討を行った。

当地点では、明治時代以降に当地に屋敷を構える堀田家の屋敷に関連する遺物、明治21(1888)年以降の射的場埋め立て造成の痕跡、水戸藩駒込邸関連遺構等を検出した。本論では明治21(1888)年以降に行われた射的場埋め立てに伴う造成、検出した水戸藩駒込邸関連遺構SR1・SX2、SU4・SK7の造成と立地を中心に検討を行う。また、本論では2009年度に調査を行った東京大学(本郷)弥生地区分生研・農学部総合研究棟地点(2010年1月25日～2010年3月31日調査、年報2009年度で報告予定、以下略号「HNS09」を用いる)の成果を用いる。この調査は未報告であるがこの調査によって遺構の軸と土地利用状況、江戸時代から明治時代の造成が明確になり当地点を評価することができるようになったため調査成果を引用する。

第1節 向ヶ岡弥生町の変遷と遺跡

農学部生命科学総合研究棟地点の調査時、文献史料の調査を行っていなかったため、遺構の評価、調査地点の土地利用状況を検討することができなかった。その後の調査で茨城県史料等に駒込邸の記述があることが判明したことから、駒込邸と明治時代以降の史料を、江戸時代の史料を「災害」「景観」「長屋」「史館・役所・施設」「殿舎(御殿)」「その他」に分類、明治時代の史料を「東京大学・第一高等学校」「向ヶ岡弥生町・浅野家」「警備編制所・上野仮射的場」「弥生町射的場・宮内省・射的会」「東京府癲狂院・脚気病院・避病院」「第一高等学校」「弥生町遺跡関連論文・調査」に分類、年代順に並べ江戸時代から明治時代、現在までの土地利用状況について検討した。明治時代は絵図、地図が多く存在していたことから土地利用状況の検討ができたが、駒込邸は絵図が存在しなかったため、文献史料によって検討した土地利用状況を検証することができなかった。しかし、2007年11月、『向陵彌生町舊水戸邸絵図面』の発見によって検証が可能になり、これまで研究してきた土地利用状況に問題がないことが確認された。IV-1表に向ヶ岡弥生町の変遷についてまとめた。大規模な造成や土地利用状況の変化など主なものを赤字で示した。

第3部 東京大学構内遺跡発掘調査報告

年月日	土地利用状況、大学の土地買収・研究棟建設
元和 6 (1616) 年閏 12 月	水戸藩江戸藩邸、江戸城内の松原小路に完成。
元和 8 (1622) 年 8 月	駒込に屋敷を拝領 本郷駒込(神田台)に下屋敷を与えられる。
寛永元 (1624) 年 11 月	浅草谷島(矢島)に蔵屋敷を与えられる。浜屋敷、浜町屋敷などと呼ばれる別邸となり、中屋敷になる。
寛永 6 (1629) 年 閏 2 月	小石川にも屋敷を与えられる。
寛永 6 (1629) 年 9 月	藩邸が竣工し初代藩主頼房が小石川に居を移す。
明暦 3 (1657) 年 1 月	江戸の大火で江戸城内の屋敷が類焼。幕府はその地を取り上げるかわりに、小石川の屋敷を拡張して与え、上屋敷(はじめ7万6699坪、のち9万9753坪)とした。
元禄 6 (1693) 年 10 月	浜屋敷を本所小梅屋敷と交換。駒込を中屋敷(5万4200坪)、小梅屋敷を下屋敷(1万8500坪)とした。
宝永 3 (1706) 年 10 月	駒込邸の東側の一部が土地となる。
天保 6 (1835) 年 9 月	北隣りの安志藩小笠原家の下屋敷を相対替により取得し、合わせてその地続きの抱屋敷を買得する。
文政 9 (1826) 年	『向陵彌生町舊水戸邸図面』
天保 6 (1835) 年	安志藩下屋敷を相対替により取得、地続きの抱屋敷を買得。
明治 2 (1869) 年	明治政府、駒込邸を公収。
明治 5 (1872) 年	「向ヶ岡弥生町」命名。
明治 2～6 (1869～1873) 年	茶桑政策による駒込邸の耕作地化、水戸藩士による茶桑栽培。
明治 6 (1873) 年	駒込邸跡の官有地化(陸軍省用地・文部省用地)。
明治 9 (1876) 年	警視局(庁)射的場建設。
明治10 (1877) 年	警視局(庁)射的場演習開始、2月西南戦争勃発。警視局(庁)避病院建設、11月廃絶。
明治12 (1879) 年	脚気病院建設。
明治13 (1780) 年	警視庁梅毒病院設置。
明治14 (1881) 年	東京府癲狂院建設。
明治15 (1882) 年	脚気病院避病院へ。
明治16 (1883) 年	陸軍参謀本部測量原因。
明治17 (1884) 年	弥生式土器の発見。
明治19 (1886) 年	東京府避病院廃止、東京府癲狂院移転。
明治20 (1887) 年	警視庁弥生神社移転。
明治21 (1888) 年	射的場移転に伴う関連施設の埋め立てと宅地化の開始。
明治22 (1889) 年	第一高等学校竣工(後に第一高等学校)。
昭和 3 (1928) 年	7月26日本郷区向ヶ岡弥生町の民有地(旧堀田家所有地)4,013坪余を農学部敷地として購入。
昭和 5 (1928) 年 2 月	農学部1号館竣工(大正15年8月着工)内田祥三による関東大震災後の本郷キャンパス復興計画に従って、農学部1号館、2号館、3号館設計。
昭和 9 (1934) 年	12月4日農学部移転にかかわる本郷拡張復旧計画定。
昭和10 (1935) 年	7月17日農学部の位置を向ヶ岡弥生町に変更、駒場から本郷に正式に移転。
	9月14日第一高等学校が駒場移転式を挙行。
	11月30日農学温室、農芸化学硝子室、植物学温室、作物実験室新築。
昭和11 (1936) 年	2月10日農学部2号館竣工(昭和7年8月着工)、1号館増築。
	9月17日本郷区向ヶ岡弥生町の民有地(石川邸)414坪を購入し農学部の敷地に加える。
昭和13 (1938) 年 8 月 1 日	農学部の旧敷地6万9813坪1合4勺9才(約23ヘクタール)と第一高等学校の旧敷地3万714坪3合1勺5才約10ヘクタールと所属交換。
昭和16 (1941) 年 5 月 31 日	農学部3号館竣工(昭和12(1937)年9月着工)。
昭和20 (1945) 年 3 月 10 日	3月の空襲により農学部木造建物の大部分(農学部分館、解剖学教室、獣医学教室、家畜病院、蹄鉄工場、森林化学教室等旧一高校舎)を焼失。図書や研究用の家畜も失う。この空襲が契機となって、農学部では学科ごとに重要な研究教育用資材の疎開が始められ、顕微鏡などの資材を各地の疎開先に移す農学部1号館、2号館、3号館は戦災を免れる。
昭和23 (1948) 年	浅野家敷地跡地、東京大学敷地となる。

IV-1表 江戸時代から明治時代、東京大学弥生地区・浅野地区

江戸時代から明治22(1889)年は東京大学埋蔵文化財調査室2009『浅野地区I』より作成。昭和3(1928)年以降は、東京大学農学部ホームページ「東大農学部の歴史」より研究棟建設、土地買収に関する部分を抜粋(<http://www.au.tokyo.ac.jp/history/>)、昭和3(1928)年、昭和11(1936)年の購入部分加筆。

第2節 SR1・SX2とSU4・SK7の年代と位置関係

遺構に廃棄された遺物の年代等から遺構の軸を検討する。IV-2表に遺構検出面と農学部生命科学総合研究棟地点の主な遺構を示した。D面・E面は「元和8(1622)年8月 水戸藩駒込邸拝領」以降。文政9(1826)年以前とこれ以降は、文政9(1826)年『向陵彌生町舊水戸邸絵図面』と出土遺物の生産年代をもとに区分した。B・C面は「明治2(1869)年 明治政府による駒込公収」以降で、「明治9(1876)年 警視局(庁)射的場の建設」、「明治21(1887)年 射的場移転に伴う関連施設の埋め立てと宅地化の開始」「明治22(1889)年 第一高等(中)学校竣工」までで、明治21(1887)年の射的場移転に伴う造成で調査地点は約2m削平されていた。A面はB・C面以降で現在、住宅地、東京大学敷地(弥生地区・浅野地区)となっている。

	検出面	軸	遺構
A面	明治時代～現在	本郷通りの軸	堀田邸関連遺構 SK17
B・C面	明治時代～明治21(1888)年頃	本郷通りの軸	台地の削平工事
D面	水戸藩駒込邸 文政9(1826)年以降	本郷通りの軸	SR1・SX2(軸は例外)
E面	水戸藩駒込邸 文政9(1826)年以前	埋没谷の軸	SU4、SK7
F面	江戸時代以前	埋没谷の軸	

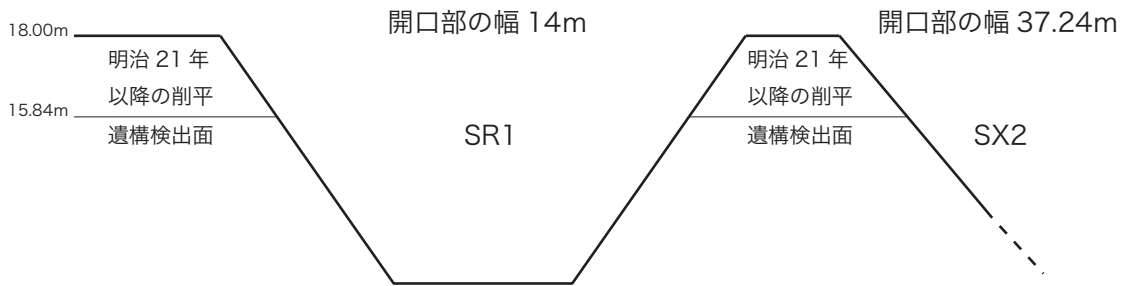
IV-2表 遺構確認面

遺構の軸は、「本郷通りの軸」と「埋没谷の軸」に分かれる。「本郷通りの軸」は本郷通りに平行もしくは直行する軸で北方向から西に約10°傾く。「埋没谷の軸」は「HNS09」で検出した埋没谷と同じ軸で北方向から約50°西に傾く。埋没谷は「HNS09」から浅野地区工学部武田先端知ビル地点まで延びており「HNS09」で検出したF面の方形周溝墓は「埋没谷の軸」である。E面のSU4、SK7も「埋没谷の軸」である。遺物の生産年代は18世紀中葉で、SK7では「享保十甲寅」(享保19(1734)年)墨書のカワラケが出土している。E面、F面の遺構は埋没谷との位置関係から旧地形の影響を受けている。

SR1、SX2はE面、F面と同じ「埋没谷の軸」である。SR1とSX2は文政9(1826)年『向陵彌生町舊水戸邸絵図面』に描かれた施設で、描かれた他の施設のほとんどが「本郷通りの軸」に対しこの施設は軸が異なる。SR1は文政9(1826)年『向陵彌生町舊水戸邸絵図面』に描かれている藩邸を東西に区画する道で、浅野地区の工学部武田先端知ビルで検出したSR1と工学部風工学実験室の道は、明治時代の掘削によって形状が変えられているがSR1に繋がる。SX2はSR1に沿って造成された深く掘削された施設で『向陵彌生町舊水戸邸絵図面』によれば、SR1に沿って造成された細長い帯状の扇形の施設である。主要部分は水色に彩色されている。水色彩色部分北側に墨書で建物が書き加えられており「三間五間 ○(朱書き)柿 拾五間」と記されている。北側にはSR1に接続する道が描かれている。南側には黄色で彩色された建物が描かれており、付箋に「九尺三間九尺九尺苔□六坪七分五□□ 瓦(○判読不可)」と記されている。こういった施設であるかは明記されていない。SR1の造成年代と埋め立てられた年代は出土遺物によって明確にできないが、造成年代は少なくとも文政9(1826)年の絵図まで、廃絶年代は「明治16年陸軍参謀本部測量原図」では埋め立てられていることから少なくとも明治16(1883)年までに埋められたと考えられる。

『向陵彌生町舊水戸邸絵図面』ではSR1とSX2の間隔はほとんどないが、検出したSR1とSX2の間隔は5.8mである。次に明治16(1883)年の標高と遺構の出土状況からSR1・SX2の範囲を復元しSU4・SK7の位置関係を検討する。SR1の壁面の傾斜角度は38°、SX2の傾斜角度は48°で、SR1

の東壁断面とSX2の西壁断面を延長すると延長線の交点は遺構検出面から2.6mの高さで、交点の標高は18.44mである。「明治16年陸軍参謀本部測量原図」の標高が江戸時代の標高と仮定すると、標高が18.00m場合SR1とSX2の間隔は半間(0.9m)、SR1の道幅は14mになる(IV-2図)。SR1とSX2の間隔から両遺構の間に位置するSU4は同時に存在することはあり得ない。SR1の西に位置するSK7はSR1西壁の断面を標高18mまで延長すると両遺構が接することからこの遺構もSR1とSX2と同時に存在することはあり得ない。以上から遺物の生産年代と『向陵彌生町舊水戸邸絵図面』から、SU4・SK7をE面、SR1・SX2をD面の遺構とした。



IV-2図 明治21年削平前のSR1・SX2断面の復元

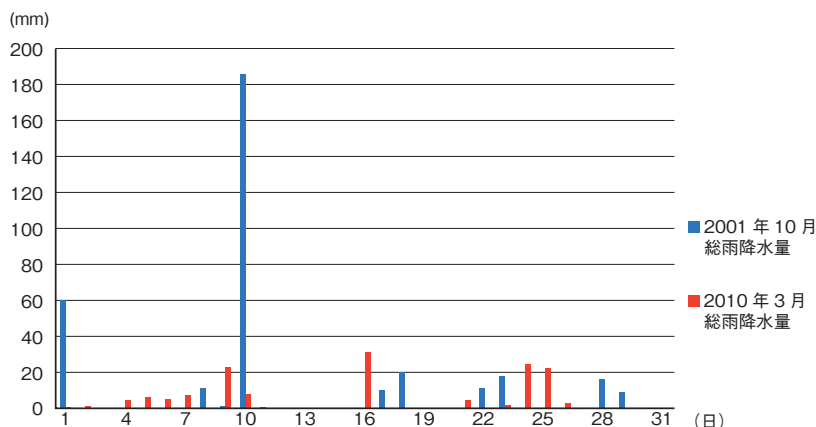
駒込邸の殿舎は徳川光圀と齊昭の殿舎(御殿)から見た忍ヶ岡、不忍池の景観に関する史料から、光圀以降、殿舎の位置は継続して「東側台地5殿舎(御殿)」(現 東京大学浅野地区)に置かれたと推定した(註1)。西側台地と東側台地の間の低地に位置している。SU4・SK7とSR1・SX2は同じ軸でありながら面が異なるのは、自然地形によって区画されたE面の地境を踏襲してSR1を造成したため、旧地形を反映した「埋没谷の軸」となったと考えられる。

第3節 調査地点周辺の立地条件とSR1の役割

次に、SU4・SK7の立地とSR1(IV-5図)の役割を検討する。調査期間中の2001年10月10日の集中豪雨でSR1が完全に水没、調査区が水浸しになった(IV-6図)。この日の豪雨は、津口裕茂、榊原均が「2001年10月10日佐原・鹿島に豪雨をもたらしたレインバンドの構造と維持機構」(津口・榊原2005)でこの日の豪雨のメカニズムが検討されている。IV-3・4図に2001年10月10日と「HNS09」調査中の2010年3月16日の1時から24時までの東京の降水量時系列グラフを示した。

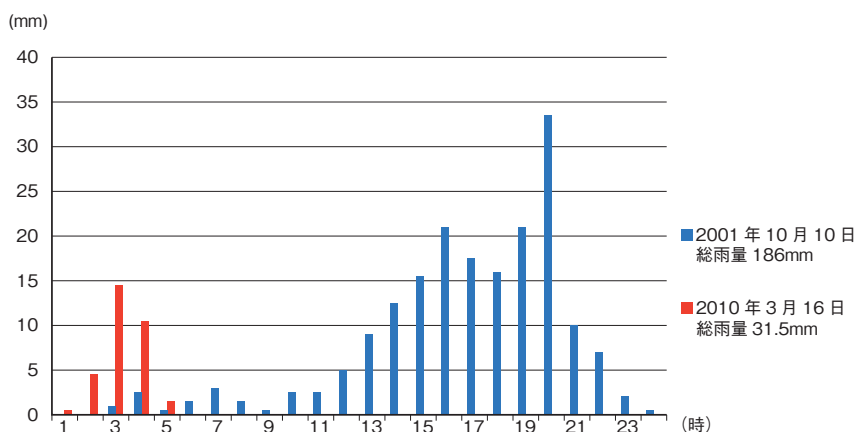
現在、大学構内は下水道が完備され雨水対策がされているにも関わらず、調査地点が水没したのは2001年10月10日の集中豪雨が下水道の許容量を超えたためと考えられる。2009年度調査を行った「HNS09」調査中の3月、一日の雨量が最も多かった3月16日雨量を参考値として示したが、この日の雨量で遺跡が水没することはなかった。雨量は下水道の許容量以内だったのだろう。農学部圃場部分の盛り土によって、東側台地の雨水は大学側に流れ込まないため圃場西側の雨水のみが集まるが、調査地点は江戸時代、西側台地と東側台地の間の低地で、西側台地と東側台地の雨水がすべて集まったと考えられることから、弥生地区と住宅地が明確に区画されていなかった場合、2001年10月10日以上の被害があったと考えられる。

SR1は藩邸を東西に分け、北側は根津神社方面に延びる谷と根津方面へ延びる道へつながり、南側は現在の浅野地区と本郷地区に挟まれた谷、七軒町、不忍池へ延びる。SRIには「大名小路通り」、片岡稲荷の参道、東側台地の道が接続しており、雨水はこれらの道によってSR1に流れ込んだと考



2001年10月、2010年3月 日ごとの東京の降水量 (mm)
(気象庁気象統計情報より作成)

IV-3 図 東京の降水量 - 日



IV-4 図 東京の降水量時系列グラフ

2001年10月10日・2010年3月16日 1時から24時まで 計測地点 (北緯 35 度 41.4 分・東経 139 度 45.6 分・標高 61 m)
(気象庁気象統計情報より作成)

えられる。調査時、SR1 に溜まった雨水は、遺構が砂層まで掘削されていたことから比較的早く地下に浸透した。この雨水の浸透から江戸時代 SR1 に集まった雨水は地下に浸透し、処理能力を超えた雨水は南側と北側へ排水されたと考えられる。以上から SR1 には藩邸を区画する道の機能の他に排水機能があったと考えられる。SR1 が造成される前の土地利用状況は絵図が存在しないため明確にできないが、SU4、SK7 の検出から長屋や役所の存在が推定できる。この時期、邸内で行われた雨水対策は不明であるが、西側台地と東側台地の雨水が低地に集まったのは間違いない。藩邸の南側の 3 区域では、駒込邸だけでなく加賀藩邸からの雨水も流れ込んだことを考えると、雨水の排水処理能力を超える集中豪雨があった場合、床下浸水や、地下水の上昇による水害の可能性があることから、この区域を殿舎（御殿）へ到る道と庭園を兼ねた場所に土地利用しているのは水害を考慮したものと考えられる。西側台地の高台に位置する教育学部総合研究棟地点、IML 地点、農学部家畜病院地点でも SU4、SK7 と同じ時期の遺構が検出されており、建物があったと考えられる。雨水の処理からみると当地点の立地条件は高台に比べ悪かったと考えられる。

以上から SR1 は地形を生かし、雨水処理と地下水対策のために造成されたと考えられる。そのため、

SR1の造成によってSU4・SK7が使用されていた文政9（1826）年以前の立地条件の悪さは解消されたと考えられる。



IV-5図 SR1



IV-6図 SR1水没状況

第4節 明治21（1888）年以降に行われた向ヶ岡弥生町の造成

『浅野地区I』では、東京共同射的会社の射的場が大森へ移転する明治21（1888）年以降、浅野地区、弥生地区で射的場埋め立て土を確保するための削平が行われたと推定した。IV-3表に弥生地区、浅野地区の遺跡遺構検出面の標高、明治16年の標高と検出面の標高差を示した。

西側台地部分、明治16（1883）年の標高は22mで2mの削平が行われている。また、標高が20～21mの地点の削平は1m前後であった。調査地点の現地表面は17.30m、SR1の東側の遺構検出標高は15.84m、「明治16年陸軍参謀本部測量原図」の地点周辺の標高は18m、遺構検出面と明治16（1883）年の標高差は2.16mで、調査地点を含む低地部分は堀田邸、それ以降は農学部圃場で明治21年の削平以降、大規模な造成は行われなかったと考えられることから、調査地点の標高差は明治21（1888）年の削平を示していると考えられる。以上から射的場埋め立てに伴う削平が調査地点まで及んでいたことが確認できた。一方、西側台地、標高22mの部分は第一高等学校、大学の研究棟建設に伴う造成の可能性もあり、削平理由を明治21（1888）年の造成に限定できない。標高20～21mの部分の削平は1m前後である。この部分も削平理由を明治21（1888）年の造成に限定できないが、弥生地区内で行われた削平によって傾斜地が壇状の地形に改変されたと考えられる。

まとめ

調査の結果、農学部生命科学総合研究棟地点では、駒込邸と堀田邸に関連する遺構を検出した。また、明治21（1888）年以降の射的場埋め立てに伴う削平が調査地点まで及んでいたことが確認できた。

藩邸を東西に区画するD面の道SR1とSX2の造成は、『向ヶ岡弥生町舊水戸邸絵図面』から文政9（1826）年までに行われ、『明治16年陸軍参謀本部測量原図』から明治16（1883）年までには埋められた。遺構軸は18世紀中葉のSU4・SK7を検出したE面（文政9（1826）年以前）・F面（江戸時代以前）の遺構軸を踏襲している。駒込邸の景観に関する史料から殿舎（御殿）の位置は、光圀の代から「5殿舎（御殿）」の区域に継続して置かれており、西側台地には「2長屋・役所」が置かれた。E面では両区域がどういった施設で区画されていたかは不明だが、西側台地と東側台地の間の低地を利

地区	調査地点	明治16年 標高 (m)	現地表面 標高 (m)	明治16年 - (マイナス) 現地表面 (m)	遺構検出面 (m)	明治16年 - (マイナス) 遺構検出面 (m)
弥生地区	62 農学部生命科学総合研究棟 (SR1 東側)	18	17.13	0.87	15.84	2.16
	9 農学部家畜病院 (SU03 検出面)	20	21.7	0.3	19.3	0.7
	9 農学部家畜病院 (SK19 検出面)	22	21.7	1.7	20	2
	12 農学部図書館 (SX6 検出面)	21	22	1	19.7	1.3
	13・16 農学部7号館 (SK3 検出面)	20	18.7	1.3	19.45	0.55
	13・16 農学部7号館 (SU20 検出面)	22	18.7	3.3	20.1	1.9
	農学部図書館北並木※1	21.00 (推定値)			21.47 (現標高)	0.47
浅野地区	7 タンDEM棟 (2 トレンチ) ※2	16.00 (推定値)	16.8	0.8	15.6	0.4
	40 工学部風工学実験室 (SR2・SR9 検出面)	16.9	14.1	2.8	14.1	2.8
	61 工学部武田先端知ビル (SR2 検出面)	18	15.92	2.08	15.5	2.5
	弥生二丁目遺跡	18	18	0		

IV-3表 明治16 (1883) 年標高と遺構検出標高の比較

明治16 (1883) 年標高は、建設省国土地理院所蔵、(財) 日本地図センター複製1984『明治16年第一測期第二測図 参謀本部陸軍部測量五十分之一ノ尺東京府武蔵国本郷區本郷本富士町近傍』『参謀本部陸軍部測量局五十分一東京図測量原図』より。

※1 農学部図書館北並木は図書館地下のドライエリアは掘削面がコンクリート等で土留めされないで関東ローム層がむき出しになっている。周辺では陶磁器片の散布を確認した。

※2 7 タンDEM棟では駒込邸の殿舎 (御殿) 庭園の造成に伴い削平が行われたと推定。削平前の推定標高は18 mと推定している。

用して区画が行われていたと考えられる。この区画を踏襲してSR1の造成が行われたためE面・F面と同じ軸になったと考えられる。

これまでの調査で弥生地区・浅野地区、周辺住宅地には外周以外に駒込邸の痕跡は開発によって無くなったと考えていたが、2001年10月10日の集中豪雨によって駒込邸の地形が残されていることに気づかされた。駒込邸の西側台地と東側台地に降った雨と加賀藩邸に降った雨は駒込邸内の低地に集まる。排水溝などの施設が雨水処理能力を超えた場合、床下浸水などの水害があったと考えられる。SR1はこの水害を防ぐために造成されたと推定した。藩邸西側のSR1に接続する道は『向陵彌生町舊水戸邸絵図面』によれば、北から「稻荷 (片岡稻荷) 参道」、「大名小路通り」と3本の道、合計5本の道がある。『明治16年陸軍参謀本部測量原図』では「稻荷 (片岡稻荷) 参道」は確認できないが、等高線を見ると、谷を示す「幅が狭く曲線が急で高いほうに弧を描く」等高線が5つある。IV-1図では等高線の重ね合わせは藩邸の東側を基準としたため、「稻荷 (片岡稻荷)」の参道と「大名小路通り」の間にある谷を示す等高線が「大名小路通り」の東側に接し、この部分には農学部7号館地A棟I・II地点 (FA792・793) で検出した上水 (SD21、SK39) が重なると推定 (註3) していることから、「大名小路通り」に「稻荷 (片岡稻荷)」の参道と「大名小路通り」の間にある谷の等高線を重ねると、概ね谷の等高線が道に重なり、南側の等高線は加賀藩邸の地境に重なる。明治16 (1883) 年の等高線は駒込邸内の区画を示し、SR1に接続した道からSR1によって排水されたと考えられる (IV-7図)。

SR1の造成によって周辺の立地条件は改善されたと考えられる。SR1は砂層まで掘削されているため雨水は地下に浸透し、雨水が地下に浸透する許容範囲を超えた場合、根津権現方面と七軒町、不忍池方面へ排水されたと考えられる。

『向陵彌生町舊水戸邸絵図面』によると「5 殿舎 (御殿)」の表側は門、塀によって明確に区画されているが、裏に回ると道には門が無くSR1に接続している。雨水は滞りなくSR1に排水されたと考えられる。また、「切手御門」のある「西側台地と東側台地の間 (3切手御門から殿舎 (御殿) へ至

る道と庭園を兼ねた区域)」の道（SR1と接続）には築山がある。築山は「切手御門」から「中門」に至る道から「2長屋・役所」の区域を目隠しする機能があると推定したが（註1）、目隠しのためであれば巨大な築山で視界を遮れば良いのに、築山の間に道が配置されている。築山の間の道は通路であるが、SR1によって「中門」まで集まった雨水の流れを考えると、築山と築山の間の道によって流れが枝分かれし、一方向に集中しないことで緩やかな流れになったと考えられる。流れが緩やかになることで雨水が自然に浸透したと考えられる。

以下に今回の成果と、『向陵彌生町舊水戸邸絵図面』と庭園の研究成果（註1）からみえてきた水戸藩駒込邸の造成をまとめると、

- ・邸内の造成は自然地形を生かして行われた。
- ・道は邸内の排水溝を兼ねており、SR1に集まった雨水は地下へ浸透し、処理能力を超えた雨水は邸外へ排水された。
- ・忍ヶ岡・不忍池の借景を優先して庭園の設計と造成が行われた。「切手御門」から「中門」に至る道が「陰」、殿舎（御殿）に立ち入ってからの忍ヶ岡・不忍池の景観が「陽」で、「陰」と「陽」の仕掛けが取り入れられている。
- ・邸内の施設配置には風水思想が取り入れられている。

「HNS09」で検出した採土坑は黒ボク土で埋められていた。遺構から初期伊万里が出土しており、初期の段階では台地に堆積した黒ボク土を削平するような大規模な造成も行われている。また、年代は不明であるが『丸山由緒記』（東京府文献叢書甲集百十六 東京府文献叢書甲十六冊 明治十七年三月輯地理 東国陣道記 細川藤 マイクロフィルム DB-122 D06-0002 東京都公文書館蔵）の「片岡八郎の墳并丸山の由緒」に「武蔵野の國豊島の郡湯島郷の中なる本郷に片岡八郎の墳あり。（中略）本郷の東北に當る向が岡と云る北の山の上水戸家屋鋪の内にあり。或る日水戸公此山の土を作事の為に掘せけるに八郎が墳の傍より石棺を掘出せり、人々驚きて此のことを公にも告て、夫々と改けるに棺の内に古骨に交へて刀或は鐵の筒の様なるものを得たり。（中略）然ればとて其臣に仰せて、墳を元の如くになし、八郎の靈を祝ひ祭りて、向ヶ岡稻荷といふ。」（書き下しは『本郷区史』 註2）とある。この史料の年代は不明であるが、造成計画は石棺の出土で中止、破壊された墳墓は修復される。この史料からも邸内で造成が行われた事が分かる。SR1の造成では大量の掘削土が発生したと考えられる。邸内の土の移動とその処理方法を考えると造成は地形を改変する規模で行われたが、自然地形を生かした設計が行われていたことが明らかになった。

第IV章 農学部生命科学総合研究棟地点の成果

時代	地形		西側台地		支谷	東側台地		
	1-1	1-2 支谷	2		3	4	5	
旧石器時代						理学部3号館前 旧石器 (東京大学 1979)		
縄文時代			9 農学部家畜病院 (VMC) 打製石斧、縄文後期中期加曾利 B3 式、縄文後期後葉安行 1 式、縄文後期末安行 2 式、縄文晩期安行 3a 式・3b 式・3c 式・3d 式 (江戸の遺構) 9 農学部家畜病院 (VMC) 陥穴 3 基		40 工学部風工学実験室 (AFL) 縄文草創期土器	表採 安行 2 式・3 式 (坪井 1889) 表採 縄文晩期前半安行 b 式土器、縄文後期後半から南紀中頃まで土製耳飾り (中山 1930) 表採 縄文後晩期安行 1～3 式土器、加曾利 b 式、ハイガイ、ハマグリ、マガキ (杉原 1940)		
弥生時代・古墳時代			貝塚 (齊藤 1963) 9 農学部家畜病院 (VMC) 弥生時代後期～古墳時代前期土器 (江戸の遺構)		30 工学部全径間風洞支障ケーブル (AFC) 方形周溝墓、弥生土器 (篠原 1999) 61 工学部武田先端知ビル (TSA・B・C) 方形周溝墓、弥生土器、ガラス小玉、管玉 農総 09 (HNS09) 1・2 号方形周溝墓	弥生二丁目遺跡 (東京大学 1979) 環濠集落、弥生土器、マガキ他 理学部 3 号館前 弥生土器 (東京大学 1979) 7 タンデム棟 (タンデム) 住居		
奈良時代・平安時代			9 農学部家畜病院 (VMC) 平安時代前期土器 (江戸の遺構)					
中世					40 工学部風工学実験室 (AFL) SK15 土器、54 工学部風環境シュミレーション風洞実験室 (AF IV) SE18 板碑 (江戸の遺構)			
文政 9 (1826) 年以前	1 安志藩下屋敷・抱屋敷		2～4 長屋・役所・孔子廟假屋・朱舜水の屋敷・朱舜水の祠				5 殿舎 (御殿)	
			2-1 高台	2-2 傾斜地	3 支谷	4 東側台地 (北側)	5 東側台地 (南側)	
			9 農学部家畜病院 (VMC) SK06、SK09 (17 後～18 初)	62 農学部総合生物研究棟 (NS01) SU04 「享保 19 (1734) 年墨書カワラケ」農総 09 (HNS09) 建物基礎 SB108・地下室 SU163 他・貯水槽 SB0155・採土坑 SK196 他	40 工学部風工学実験室 (AFL) SE3 54 工学部風環境シュミレーション風洞実験室 (AF IV) SE18			
文政 9 (1826) 年以降 『向後彌生町蓄水戸邸繪図面』	1 安志藩下屋敷・抱屋敷		2～4 長屋・役所・朱舜水の屋敷・朱舜水の祠				5 殿舎 (御殿)	
	1-1	1-2	2-1 高台	2-2 傾斜地	3 支谷	4 東側台地 (北側)	5 東側台地 (南側)	
			13・16 農学部 7 号館地 A 棟 I・II (FA792・793) 上水 SD21、SK39	藩邸を区画する道 62 農学部総合生物研究棟 (NS01)・農総 09 (HNS09) SR1、40 工学部風工学実験室 (AFL) SR2・SR9、61 武田先端知ビル (TSA・B・C) SR01		62 農学部総合研究棟 (NS01) SX02	工学部風工学実験室 (AFL) SR01 道 弥生二丁目遺跡 (東京大学 1979) 植栽痕・建築遺構 (駒込邸もしくは明治以降)	
			9 農学部家畜病院 (VMC) SK02 (江戸時代後期) 片岡稲荷移転に伴うごみ	農総 09 (HNS09) 地下室 SU180・土坑 SK3				
明治時代	陸軍省用地・文部省用地・徳川昭武・東京府用地・警視庁用地・東京共同射的公司・浅野侯爵邸・浅野侯爵別邸・住宅地							
	1-1	1-2	2-1 高台	2-2 傾斜地	3 支谷	4 東側台地 (北側)	5 東側台地 (南側)	
			13・16 農学部 7 号館地 A 棟 I・II (FA792・793) 射的場発射弾丸	農総 09 (HN09) 射的場発射弾丸	40 工学部風工学実験室 (AFL) SR2・SR9 警視庁射的場の窪地「監的場」	弥生二丁目遺跡 (東京大学 1979) の東側、弥生町遺跡 2 次 (文京区) 台地突端の削平 (明治 5 年以前)	61 工学部武田先端知ビル (TSA・B・C) 浅野侯爵別邸基礎	
	脚気病院・東京府癲狂院・避病院					射的場・梅毒検査所		
				61 工学部武田先端知ビル (TSA・B・C) SR2 警視庁射的場出入口スロープ、SR1 警視庁射的場の窪地「監的場」、弾丸				
			61 工学部武田先端知ビル (TSA・B・C)・62 農学部総合研究棟 (NS01)・農総 09 (HN09) 射的場埋立土掘削、61 武田先端知ビル (TSA・B・C) SR1・40 工学部風工学実験室 (AFL) 道・農総 09 (HN09) 射的場埋立土の搬出路 SR2・SR10 他					

IV-4 表 向ヶ丘弥生町の地形と遺跡、土地利用状況 (1)

時代	西側台地			支谷	東側台地	
	1-1	1-2 支谷	2	3	4	5
明治時代	第一高等学校		堀田邸・住宅地 62 農学部総合生物研究棟 (NS01) 堀田邸関連 SK17・SK18・SK19、農総 09 (HNS09) SB58・SB116	浅野侯爵邸・浅野侯爵別邸・住宅地 61 工学部武田先端知ビル (TSA・B・C) 浅野侯爵別邸関東大震災後の増築、29 情報基盤センター変電室 1 (ACC) 浅野侯爵別邸関東大震災の片づけ?		
大正	大正 14 (1925) 年までに支谷埋立					
昭和	第一高等学校移転、東京帝国大学農学部 (1935)		堀田家移転	浅野家移転		
現在	弥生地区 (地震研究所・グラウンド・住宅地)	弥生地区 (農学部研究棟)	弥生地区研究棟 (圃場・住宅地)	浅野地区・住宅地	住宅地	浅野地区

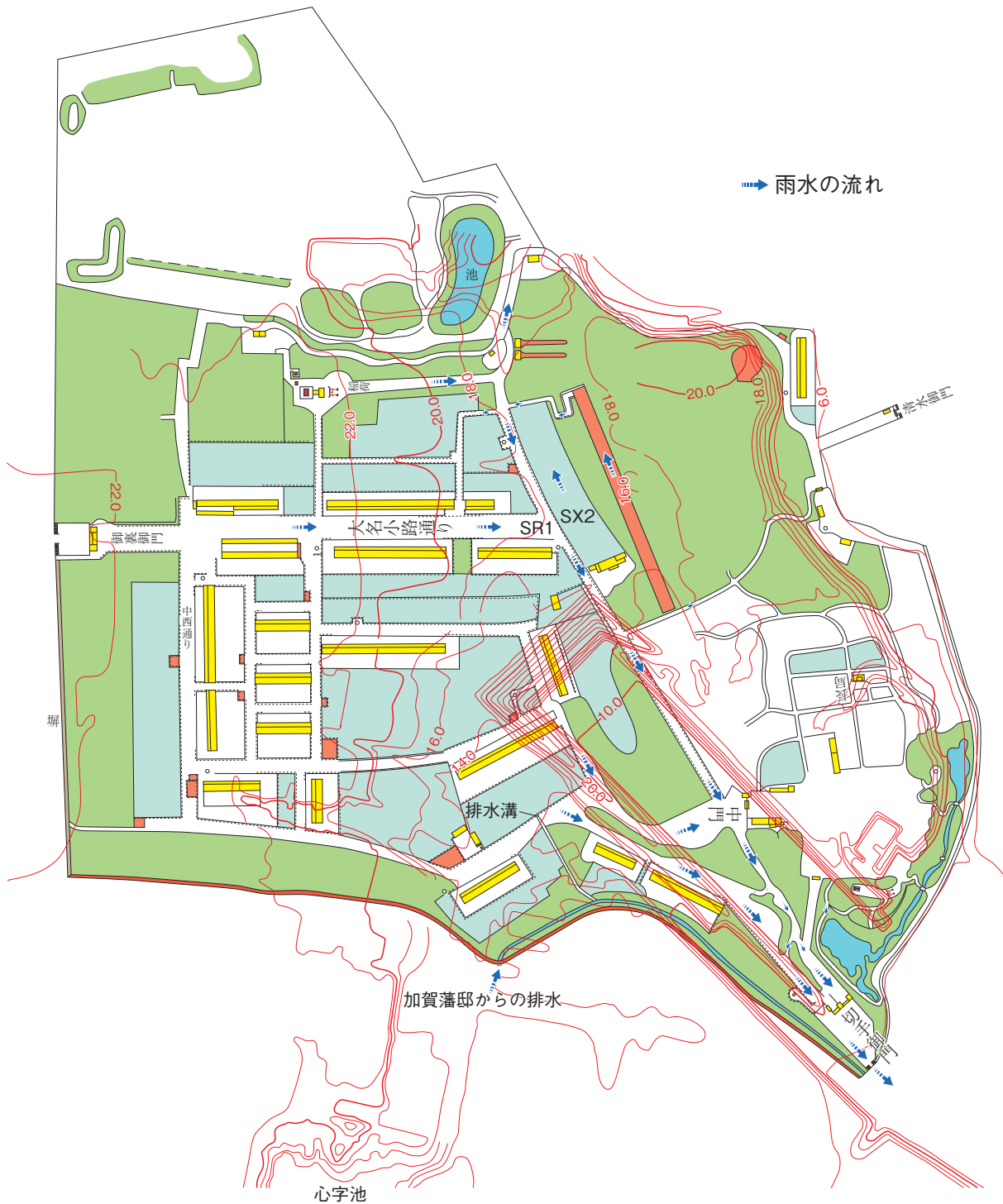
IV -4 表 向ヶ丘弥生町の地形と遺跡、土地利用状況 (2)

註

1. 原 祐一 2010 「水戸藩駒込邸の研究 藩邸内外の景観と造園の検討」『東京大学史紀要』第 28 号 pp.41 - 63
東京大学史料の保存に関する委員会編集、東京大学史料室発行
2. 文京区 1985 「第二編 本郷通史 第四章 江戸氏時代の本郷 片岡八郎の墳」『本郷区史』(1937 の復刻版) pp.44-48
3. 「北 水戸殿御屋敷境 西」「西 水戸殿表門通り 南」名著出版 1986『御府内寺社備考 第四冊古義真言宗・真義真言宗・臨濟宗』pp.216-218

【参考文献】

- 津口裕茂、榊原 均 2005 「2001 年 10 月 10 日佐原・鹿島に豪雨をもたらしたレインバンドの構造と維持機構」『天気』2005Vol.52, No.1



IV - 7 図 駒込邸内の雨水の流れ

『向陵彌生町葛水戸邸総図面』『明治 16 年陸軍参謀本部測量原図』

報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくこうないいせきちょうさげんきゅうねんぼう							
書名	東京大学構内遺跡調査研究年報							
副書名								
巻次	7							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	原 祐一、安芸毬子、阿部常樹、石井龍太、大貫浩子							
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103					
発行機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103					
発行年月日	平成23年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
とうきょうだいがく ほんごうこうない 東京大学本郷構内 いせき ほんごうだいい の遺跡（本郷台遺 せきぐん 跡群） のうがくぶ せいめいかかく 農学部生命科学 そうごうけんきゅうとうちてん 総合研究棟地点	とうきょうと 東京都 ぶんきょうく 文京区 やよいいっちょうめ 弥生1丁目 いちばんいちごう 1番1号	13105	47	35° 43' 03"	139° 45' 44"	平成13年 9月21日～ 10月19日	1800㎡	東京大学 農学部 生命科学 総合研究 棟新営に 伴う事前 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
東京大学本郷構内 の遺跡（本郷台遺 跡群） 農学部生命科学 総合研究棟地点	武家屋敷 （水戸藩 駒込邸）、 堀田邸	近世、近代	建物跡、地下室、溝、 土坑、小穴	陶磁器、土器、金属 製品、瓦、 ガラス製品、 動物遺体				

東京大学駒場構内の遺跡

駒場図書館地点発掘調査報告

例 言

1. 本報告は、東京大学駒場図書館新営に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 本地点の略称は「KL」とする。
3. 本地点は、東京都目黒区駒場3丁目8番地1号、東京大学駒場Iキャンパス内に所在している。
4. 本地点は『東京都遺跡地図』では範囲不明の縄文中期・晩期の埋蔵文化財包蔵地（目黒区No.1・東大遺跡）として登録されている。しかし1998年に刊行した大学院数理学研究棟地点同様、上記東大遺跡を包括する遺跡名として東京大学駒場構内遺跡を使用する。
5. 本地点の調査面積は1778㎡である。
6. 調査期間は下記の通りである。
試掘調査：1999年7月26日～8月3日
調 査：2000年7月27日～8月30日
7. 発掘調査は東京大学埋蔵文化財調査室が行い、試掘調査は原 祐一が、本調査は大成可乃・追川吉生が担当した。
8. 本報告の作成は第I章を大成が、第II章以下を追川が執筆し、編集は追川が行った。
9. 本報告掲載・収録の諸データは、営利を伴わない学術目的の個人論文などを除いて無断転載を禁止する。
10. 遺物の実測・浄書は主に（株）盤古堂が行い、香取祐一がデジタル化を行った。
11. 図版の作成とデジタル化は香取祐一・渡邊法彦が行った。
12. 本書に添付したCD-ROMには、遺物写真（jpeg形式）、報告書電子版（pdf形式）を収録している。
13. 発掘調査に伴う図面・写真・出土遺物は東京大学埋蔵文化財調査室が、本学駒場リサーチキャンパス（東京都目黒区駒場4-6-1）および同工学系研究科附属柿岡教育研究施設（茨城県石岡市柿岡414）内にて、保管・運用している。
14. 発掘調査および報告書作成にあたり、下記の諸氏、機関より御協力・御教示を賜った。記して謝意を表する。（敬称略）
安斎正人、今村啓爾、佐藤宏之、武田浩司、小池 聡、野口 淳、加藤建設（株）、
荻野目建設（株）、加勢造園（株）、（株）盤古堂、目黒区教育委員会、総合文化研究科・教養学部、
人文社会系研究科考古学研究室、本部施設・資産系
15. 発掘調査・整理作業参加者
青山正昭、香取祐一、小林照子、渡邊法彦（埋蔵文化財調査室）、加藤建設（株）、（株）盤古堂

凡 例

1. 遺物の実測図は原則として1/1で掲載している。その他の尺度のものは、各図版にスケールを表示している。
2. グリッドは調査区南西隅を基準とし（A1）、そこから東へアルファベットを、北へアラビア数字を8m間隔で付した。
3. 遺構の略号は以下に示す。
SB：礎石 SD：溝 SK：土坑 SP：ピット
4. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1/25,000地形図『東京西南部』である。

東京大学駒場構内の遺跡
駒場図書館地点発掘調査報告

目 次

例 言
凡 例
目 次

第 I 章 調査の概要

第 1 節 調査に至る経緯	179
第 2 節 調査の方法と経過	180

第 II 章 遺跡の立地と周辺の遺跡

第 1 節 歴史的環境	181
第 2 節 地理的環境	181
第 3 節 周辺の遺跡	182

第 III 章 調査の成果

第 1 節 北区	188
第 2 節 南区	212

第 IV 章 調査のまとめ	215
---------------	-----

参考文献	217
------	-----

報告書抄録

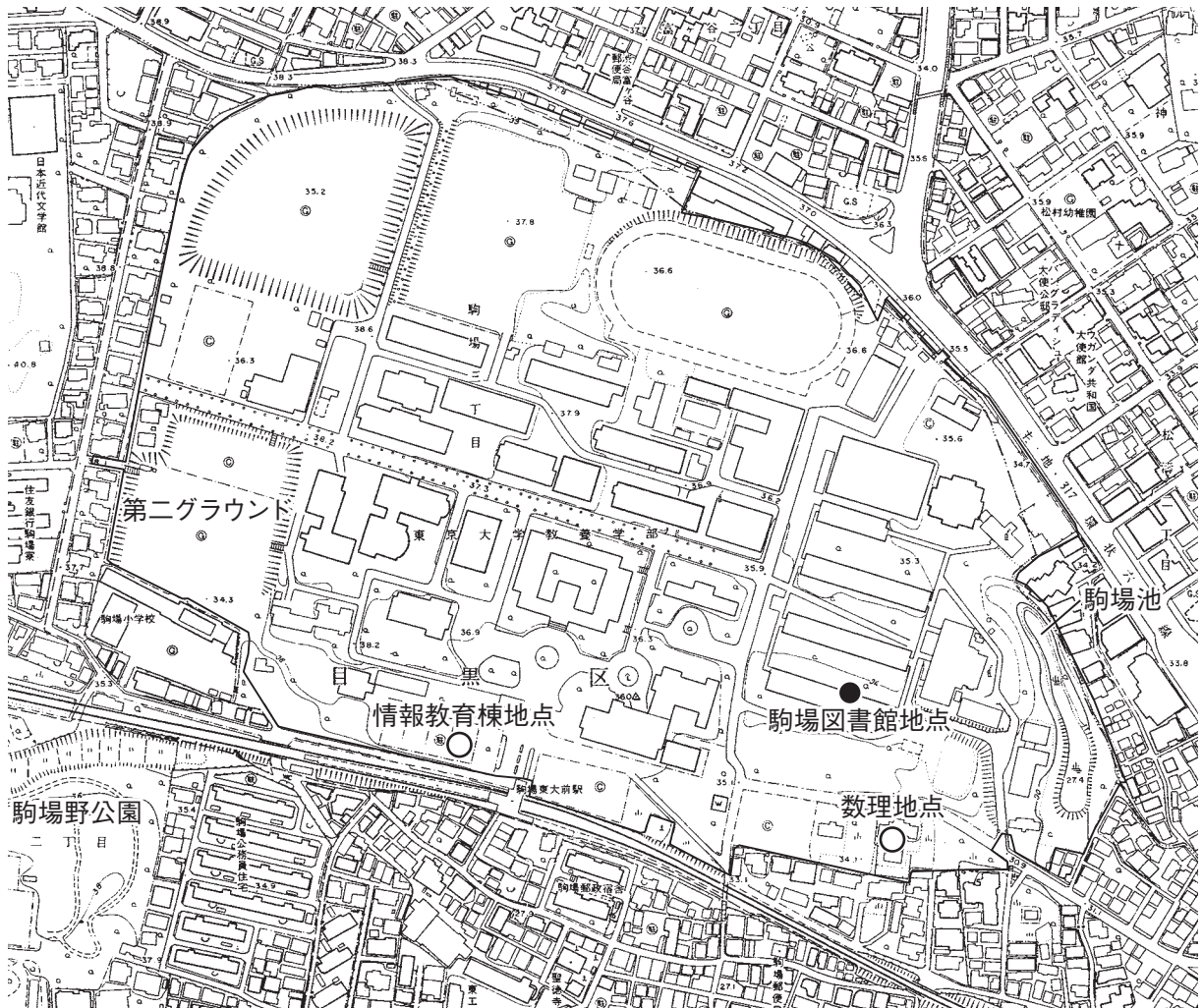
第 I 章 調査の概要

第 1 節 調査に至る経過

東京大学埋蔵文化財調査室では、1999 年に東京大学教養学部（以下、教養学部）から駒場 I キャンパス内に図書館建設（現・駒場図書館）に伴う遺跡の存否確認の照会を受けた。

教養学部内は「東京都遺跡地図（平成 8 年）」に東大遺跡として縄文時代中期、晩期の周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている（目黒区 No.1）。また当調査室において 1993 年度に発掘調査を行った教養学部情報教育棟地点（以下、情報教育棟地点）では、縄文時代草創期から後期の土器、早期の集石遺構を確認しており（東京大学埋蔵文化財調査室 1997）1996 年度に発掘調査を行った大学院数理学研究科 II 期棟地点（以下、数理地点）では旧石器時代から江戸時代までの遺構、遺物を確認している。特に数理地点では縄文時代早期擦糸文期と考えられる住居址 1 基、条痕文期と考えられる炉穴 13 基が検出されるなどの成果が報告されている（東京大学埋蔵文化財調査室 1999）。

本地点は駒場 I キャンパスの東より、数理地点の北側に位置している（I - 1 図）。調査区東側に隣接して池（駒場池、通称一二郎池・II - 3 図）があり、その池より南に開析される谷と東西に流れ



I - 1 図 駒場キャンパスと調査地点

る目黒川支流に挟まれた数埋地点と同じ台地上に立地していると考えられる地点である。

以上のようなことから当地点についても遺跡の存否を確認をするため、1999年7月26日から8月3日に試掘調査を実施し、その結果、黒色土上面において縄文土器片1点とローム面上で黒色土を覆土とする遺構を確認した。そこで目黒区教育委員会と調査室で協議し、2000年7月27日から8月30日の約1ヶ月にわたり1778㎡の本調査を実施した。

第2節 調査の方法と経過

調査区内に平面直角座標系（日本測地系）IX系を基準とした杭を8m毎に設定し、西から東へAからIのアルファベット、南から北へ0から5の数字を組み合わせたものを各杭の名称とし、南西隅の杭を基準として各グリッドを設定した。

試掘調査から調査区中央部分は近代に大きく攪乱されていることが明らかとなっていたため、その攪乱から南側を南区、北側を北区として調査を実施したが、両調査区とも近現代にローム面まで削平され遺物包含層や生活面は確認されなかったため、ローム面のみで遺構、遺物の確認を行ったが、南側東半分はすでにこの時点で湧水し、ロームには水がついている状態が確認された。そこで旧石器時代の試掘坑は比較的立川ロームⅢ層の遺存状態が良かった調査区西半分を設定した。南側の試掘坑ではⅣ層途中からロームが水がついた状態となったので以下の掘削を断念し、結果的に旧石器時代の調査は調査区北側西半分の、近代の攪乱を避けた場所で行った（Ⅲ-27図）。

第Ⅱ章 遺跡の立地と周辺の遺跡

第1節 歴史的環境

東京大学駒場Ⅰキャンパスのある目黒区駒場周辺は、江戸時代には駒場野と呼ばれた将軍家の御鷹場であった。もともと上目黒村・中目黒村・下目黒村の入会地であった駒場野は、徳川吉宗の将軍就任にともなって再開した鷹狩りの鷹場となり、御用屋敷や御菜園が設けられた。

明治時代になると、1874年に農務省農事修学場とその農場がこの地に開設された。農事修学場は現在の駒場公園にあり、農場は現在の駒場ⅠキャンパスからⅡキャンパスまでを含む広大なものだった。

農務省農事修学場は1877年に農学校と改称されるなど、数度の改称を経た後の1890年に、農科大学として帝国大学に編入された。しかし1926年に、本郷キャンパスに隣接する前田侯爵邸の敷地と大学用地の中央部とが交換されることで、広大な農地は東西に二分された。

さらに、東西に二分された農地のうち東側が1935年に、本郷にあった第一高等学校と交換された。すでに皆寄宿制をとっていた第一高等学校の駒場移転に際しては、寄宿舎も同時に移転することが強く要望されたようである（第一高等学校1939）。1949年に新制大学として東京大学教養学部が設置されると、第一高等学校はそれに組み込まれるような形で翌年に廃止され、施設は教養学部へと引き継がれ、現在の駒場Ⅰキャンパスにいたる。

本調査地点は第一高等学校が移転してきた際に建てられ、東京大学教養学部へと引き継がれた駒場寮の跡地である（Ⅱ-1図）。Ⅲ-1図にあるように、調査区の中央部が攪乱によって大きく破壊されている。この既存建物が南寮である。本調査地点ではこの攪乱を境に北側を北区、南側を南区とした。Ⅱ-1図にあるように、北区は南寮と中寮の間の空閑地、南区は中寮南側の空閑地である。

第2節 地理的環境

東京大学駒場Ⅰキャンパスが所在する目黒区は、武蔵野台地の東端に位置している。武蔵野台地の東側は、いくつかの段丘面にわけられる（貝塚1979）。そのうち目黒区は淀橋台（区の北東部）・目黒台・荏原台（区の南西部）の各段丘面からなっており、淀橋台は神田川と目黒川の谷に挟まれた台地で、駒場Ⅰキャンパスはこの淀橋台上に位置している。

キャンパス内には東西2ヶ所に谷がある（Ⅱ-2図）。西側は空川の谷頭で、現在第二グラウンドとして利用されている。この流路は駒場野公園の谷から延びる流路と合流したのち、南東方向へと向きを変える。東側は駒場池の周辺で本調査地点はこの谷の西端にあたる（Ⅱ-3図）駒場池から南へと延びる流路は、遠江橋付近（松見坂交差点付近）で先述の空川と合流したのち、目黒川と合流する。目黒川は世田谷区の北沢周辺を源流とする北沢川と、同じく北烏山を源流とする烏山川とが三宿付近で合流した河川で、この空川をはじめ、蛇崩川などいくつかの支流を合わせながら、品川区内で東京湾に注ぐ。

今回報告する駒場図書館地点は、駒場池の西方200mほどの場所に位置している。付近は駒場池へと向かう傾斜変換点にあたり、調査区内は北区は平坦だが、南区は駒場池へ続く小支谷が入りこんでいるため傾斜地をなしている。

第3節 周辺の遺跡

本遺跡周辺の遺跡を、目黒川沿いのものを中心に概観したい（Ⅱ-4図）。

旧石器時代

目黒区内で確認される旧石器時代の遺跡は多くない。駒場Ⅰキャンパスから南側に800mほどの距離にある大橋遺跡（Ⅱ-4図の5、以下同）は目黒川左岸の台地縁辺部に立地する。大橋遺跡では立川ロームⅣ層～Ⅸ層において、石器ブロックと礫群が検出されている。

中目黒遺跡（15）は谷戸前川（目黒川支流）左岸の遺跡である。B地点は台地上から谷戸前川へと向かう緩斜面で、Ⅳ層とⅤ～Ⅵ層で9箇所の遺物集中地点（礫群を含む）が確認されている。出土石器には、ナイフ形石器、尖頭器などがある。B地点の北西側に隣接するC地点では、Ⅶ～Ⅸ層で2箇所の石器集中部から石器19点、礫1点が出土している。斜面下部を調査したA地点からは、ナイフ形石器、搔器などの石器を含む石器集中部が3箇所、礫群が8箇所が検出されている。

恵比寿遺跡（18）は目黒川左岸の段丘上にあり、調査ではⅤ層からナイフ形石器と角錐状石器が出土している。また近世の畝跡遺構に伴う資料であるが、細石刃核も認められる。

縄文時代

縄文時代草創期～前期にかけての遺跡は、旧石器時代と同様に区内全体でもそれほど多くない。本調査地点に隣接する情報教育棟地点で早期の集石遺構が検出されているほか、駒場高校グラウンド（3）や鉢山町猿楽町遺跡（16）などで土器が出土している。集落遺跡には中目黒遺跡B地点がある。ここでは早期撚糸文土器を伴う住居址が3基、土坑1基が検出されている。

縄文時代の遺跡数（包蔵地を含む）は中期が最も多い。中でも大橋遺跡では、東西100m、南北120mの範囲に約100基の住居址が検出されている。環状に並ぶ住居址の内側には墓域が設けられていた。また恵比寿遺跡では3基の住居址が検出されている（そのうちの1基からは中期の深鉢が出土している）。

縄文時代後期～晩期になると遺跡数は再び少数となる。目黒川右岸の東山貝塚（7）は、明治時代に坪井正五郎らによって調査されて以降、数度の発掘調査が実施されている学史的にも重要な遺跡である。遺跡からは住居址のほか、土坑墓（後期・晩期）や集石（後期）なども検出されている。またX地点では、調査区北部の南側台地から斜面下の水脈沿いにかけての低湿地部が調査されており、赤漆が施された木製の櫛の一部や、直径約1.2mの半円形をなす木杭列などの木製品も出土している。



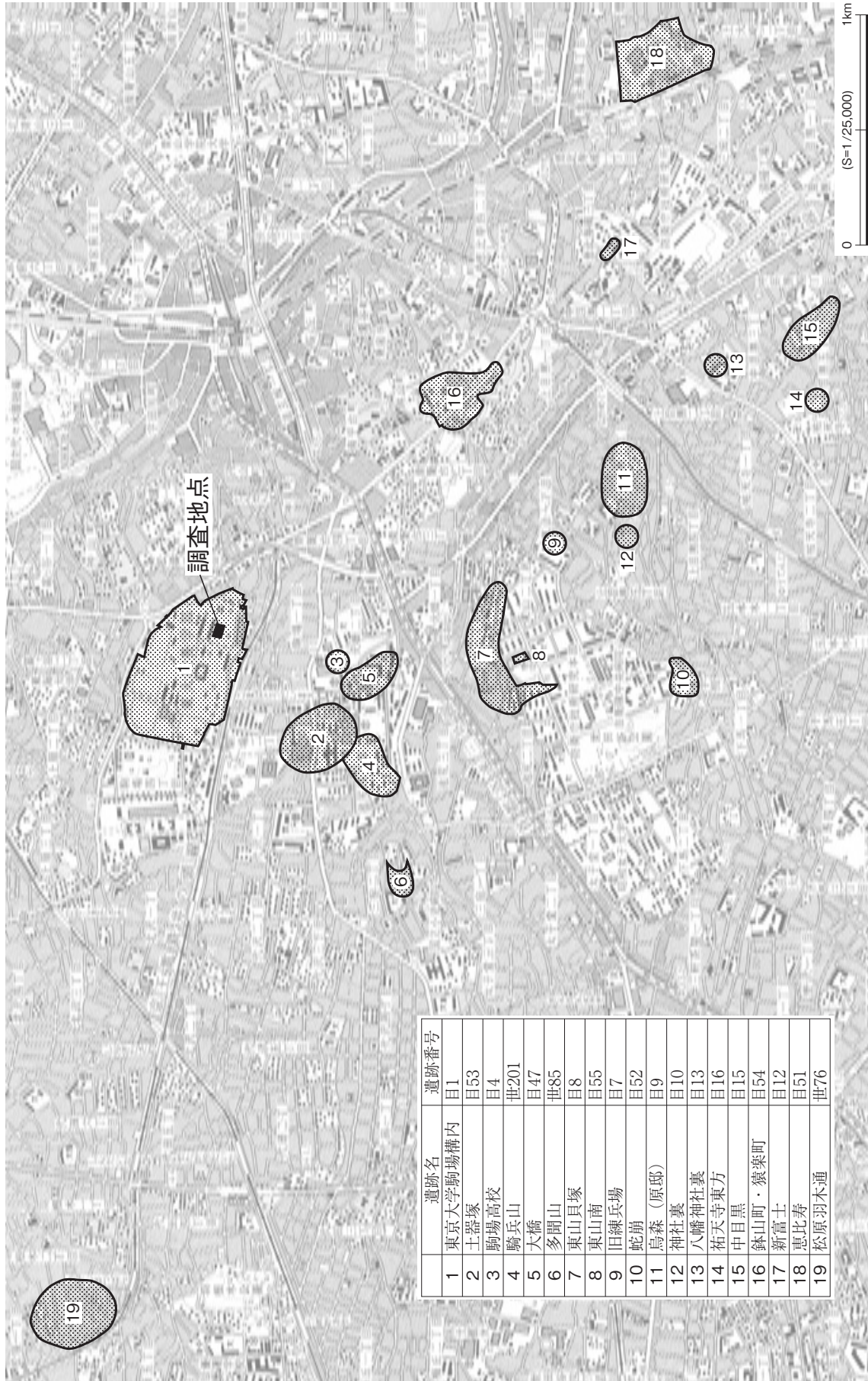
II-1 図 調査地遠景（第一高等学校当時）



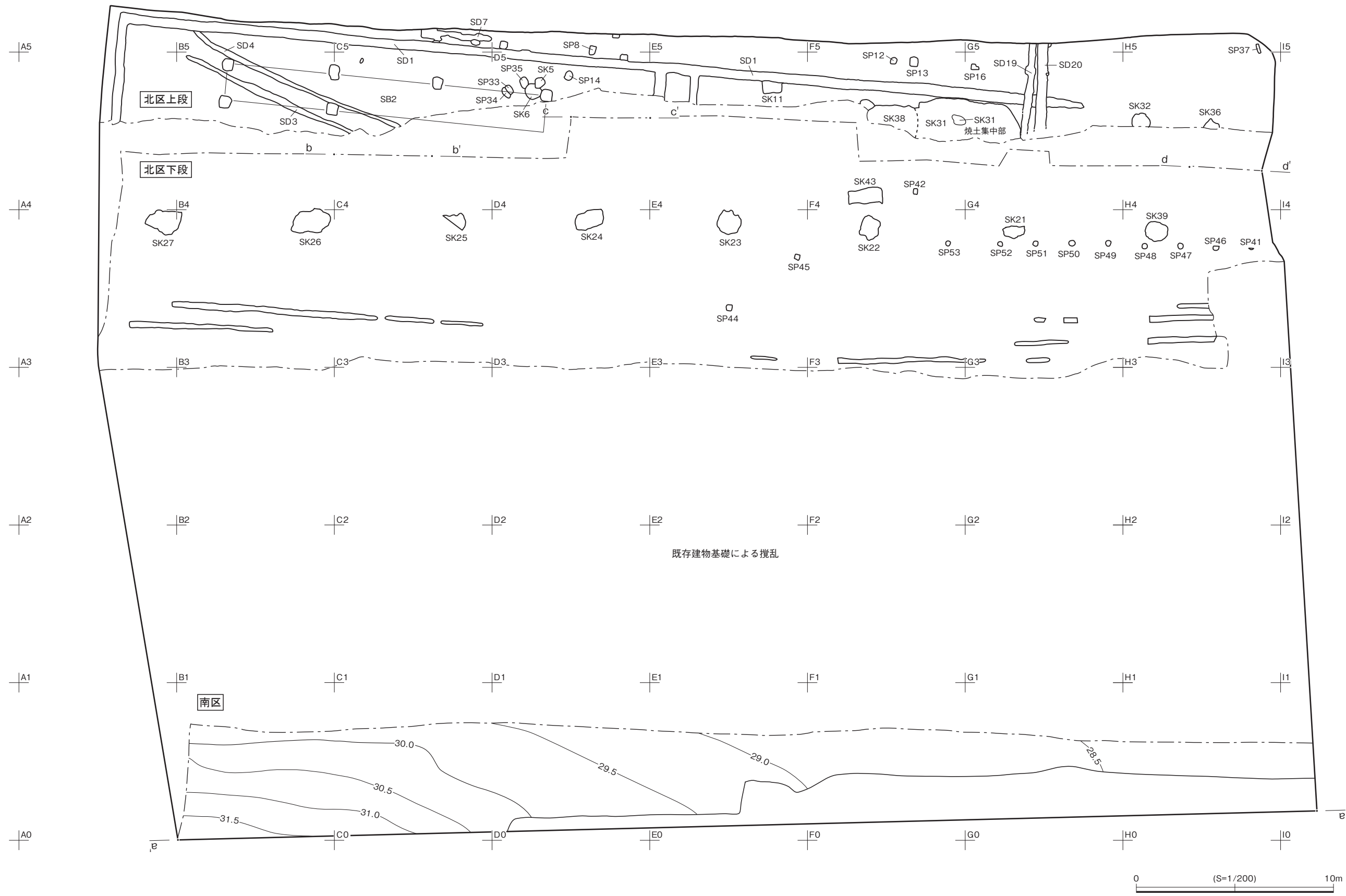
II-2 図 周辺の旧地形（陸軍迅速測図・明治13年改変）



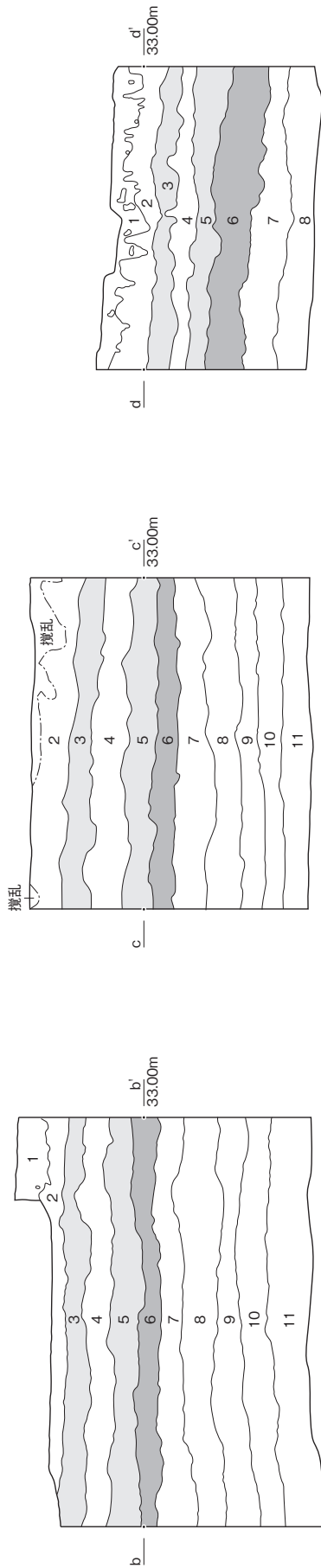
II-3 図 駒場池（一二郎池）北から



II-4 図 周辺の遺跡



Ⅲ-1 図 全体図



1. 暗黄褐色ローム層
 2. 褐色ローム層
 3. 暗黄褐色ローム層
 4. 明黄褐色ローム層
 5. 暗黄褐色～暗褐色ローム層
 6. 暗灰褐色ローム層
 7. 黄褐色ローム層
 8. 黄褐色ローム層
 9. 黄褐色ローム層
 10. 黄褐色ローム層
 11. 暗黄褐色～淡黄褐色ローム層
- いわゆるソフトローム層で立川ローム皿層に相当する。下方に黒色・赤色スコリア粒子径1～2mm少量含む。2層が遊離したもの含む。しまりやや弱、やや砂質。
 いわゆるハードローム層で立川ロームIV層に相当する。赤色スコリア粒子径1～2mm・黒色スコリア粒子・径1～2mm少量含む。しまり強、粘性強、やや砂質。
 第一黒色帯で立川ロームV層に相当する。黒色スコリア粒子径2～4mm・赤色スコリア粒子径1～2mm少量含む。しまり強、粘性やや強、やや砂質。
 いわゆるAT包含層で立川ロームVI層に相当する。赤色スコリア粒子径2～4mm・黒色スコリア粒子径1～2mm極めて多量、白色ハミ径1mm・赤色ハミ径1～2mm含む。しまり強、粘性ややあり。
 第二黒色帯上半部で立川ロームVII層に相当する。黒色スコリア粒子径2～4mm多量、赤色スコリア粒子径1～2mmやや多く含む。しまり強、粘性ややあり。
 第二黒色帯下半部で立川ロームVIII層に相当する。黒色スコリア粒子径2～4mm・赤色スコリア粒子径1～2mm少量含む。しまり強、粘性強。
 立川ロームX層に相当する。黒色スコリア粒子径1mmをやや多く含む。しまり強、粘性やや強、やや砂質。
 7層よりやや暗い。黒色スコリア粒子径2～4mmやや多量、赤色スコリア粒子径1mm微量含む。径2～5mm次の赤色ハミを含む。粘性やや強、やや砂質。
 8層よりやや明るい。黒色・赤色スコリア粒子微量含む。しまり強、粘性強。
 9層よりやや暗い。黒色・赤色スコリア粒子微量含む。しまり強、粘性強。
 10. 黄褐色ローム層
 11. 暗黄褐色～淡黄褐色ローム層

III-2 図 北区基本層序

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 北区

北区は南北約 18.5 m、東西約 60m の範囲で攪乱の状況から上下 2 段に分かれている（Ⅲ-1 図）。調査区の北側は、表土直下で立川ロームⅣ層が検出される。この範囲を北区上段とする（Ⅲ-3 図）。一方、南側は上段よりも 2m ほど深く攪乱によって掘削されている。攪乱を除去するとⅢ-2 図の 8 層、9 層が検出され、これらは武蔵野ローム層である。そこでこの範囲を北区下段とする（Ⅲ-4 図）。

上段では 19 基の遺構を、下段では 21 基の遺構を検出した（Ⅲ-1 表）。そのうち遺物を伴う遺構は 12 遺構である。出土遺物はいずれも近代に帰属する。以下に主な遺構の概要について述べる。

	上段	下段	合計
礎石 (SB)	1	0	1
溝 (SD)	6	0	6
土坑 (SK)	3	9	12
柱穴 (SP)	9	12	21
	19	21	40

Ⅲ-1 表 遺構の種類



Ⅲ-3 図 北区上段遺構 検出状況



Ⅲ-4 図 北区下段遺構 検出状況

(1) 上段

SB2 (Ⅲ - 5 図、Ⅲ - 18 図)

調査区北西隅で検出された6基の礎石からなる礎石列。礎石の間隔は 南北1.8m(1間)、東西5.4 m(3間)。東西軸に対しては南に 25° 傾いている。上段の南端に位置しているため、南側に更に礎石が並んでいたかは不明。同様に東側への拡がりについても不明である。現状では南北 1.8 m×東西 16.7mの規模。

礎石列だが、礎石自体は後代の削平によって残っておらず、根石のみが出土した。根石には直径または一辺が 20～40cm程度の石が用いられている。

磁器碗の破片が1点出土した。碗には「第」の文字の一部が認められる(Ⅳ - 2 図)。第一高等学校とプリントされていたものと考えられる。既に述べたように、北区は中寮と南寮との間の空閑地である。あるいはこの空閑地を利用した建物があったのかもしれないが詳細は不明。

SD1 (Ⅲ - 19～22 図)

調査区の北端に位置する東西 49 mの溝。幅は約 0.5m、深さ約 0.3 m。西端は南方向へ 90° 曲がりL字状をなす。溝の西端から東側へ約 27mと 29mの部分から、南方向へと溝が枝分かれする。南側の状況は攪乱のため不明。溝の東側は緩やかに立ち上がり、形態は不明。

覆土には破碎された墓石が含まれている。墓石の文字に関しては、破碎のため判読できないものがほとんどである。1点だけ「天明」の年号が認められるものがあり、これらが江戸時代の墓石であると考えられる(Ⅲ - 6 図)。しかし溝が埋められた時期や、墓石がどこから持ち込まれたかに関しては不明である。



Ⅲ - 5 図 SB2



Ⅲ - 6 図 SD1

SD3・SD4 (Ⅲ - 19 図)

北西から南東方向へ延びる溝。どちらも SD1 の長軸に対して南に約 22～25°の角度で傾いており、約 1mの間隔で平行する。SD3 は長さ 9.5m 以上、幅 0.2～0.4 m、深さ約 0.1 m。SD4 は長さ 11m 以上、幅 0.2～0.3 m、深さ約 0.1 m。SD4 は北西端を SD1 に壊されている。

SD3 からは近代の陶器碗の破片(Ⅲ - 7 図)が、SD4 からは近代の磁器皿の破片(Ⅲ - 8 図)が出土した。



Ⅲ-7図 SD3 出土陶磁碗



Ⅲ-8図 SD4 出土磁器皿

SD7 (Ⅲ-9図、Ⅲ-20図)

東西方向の溝で、西側が北側へ90°屈曲し、L字状をなす。東西の長さ3.5m、幅0.6m、深さ0.15m。北側は調査区外に続くため、規模不明。覆土に瓦片を多量に含む。



Ⅲ-9図 SD7



Ⅲ-10図 SD19

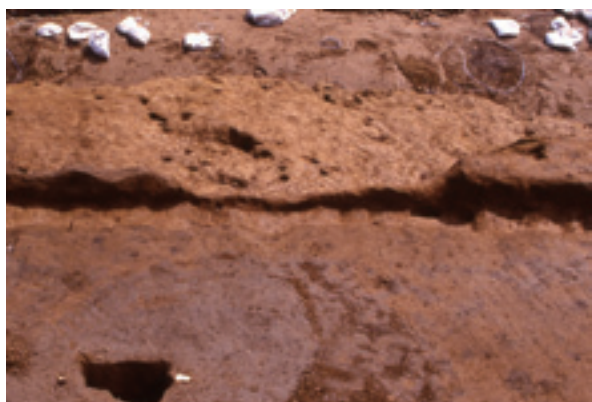
SD19 (Ⅲ-10図、Ⅲ-22図)

南北方向に延びる溝。北側は調査区外へ続き、南側は攪乱で破壊されている。現存する規模は東西5m、南北0.3m、深さ0.2m。底部に幅10cm程度の木樋の痕跡が認められる。

SK31 (Ⅲ-11図、Ⅲ-22図)

南側が削平され、西側をSK38で壊された土坑で、残存部の規模は南北約2m、東西約5m。深さ0.6m。長径0.6m、短径0.4m、深さ0.1mの範囲で焼土が集中する(Ⅲ-12図)。

陶磁器のほか、金属製品の破片(器種不明)、土器(基石状土製品)、石製品(硯)が出土した。磁



Ⅲ-11図 SK31



Ⅲ-12図 SK31 焼土堆積状況



III-13 図 SK31 出土遺物

器碗には、「学」、「校」というプリントの一部が認められる。また「農」の文字の一部がみえる皿もある。陶器の土瓶にも「農」、「学」、「校」の文字がプリントされている（Ⅲ-13図）。農学校で使用された食器類と考えられる。本土坑もその頃に廃棄されたものだろう。

（2）下段（Ⅲ-1図）

上段よりも約2m低く、土層断面図（Ⅲ-2図）の7層以上が攪乱によって壊されている。遺構は土坑9基、柱穴12基を検出した。

SK21～SK27、SK39（Ⅲ-23・24図）

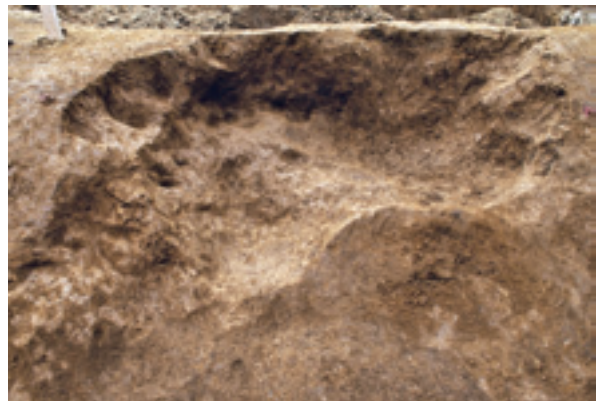
調査区の東端から西端（A4～H4グリッド）まで、およそ1.8m（一間）間隔で並ぶ土坑。SK139を除いて遺物は出土しない。

- ・ SK21（Ⅲ-23図）：平面形は南北0.6m、東西1.2mの長方形を呈する。深さ0.1mで底部は平坦。
- ・ SK22（Ⅲ-23図）：平面形は南北1.2m、東西0.9mの不整形を呈する。深さ0.6mで断面の形態は巾着状をなす。
- ・ SK23（Ⅲ-23図）：平面形は南北1.1m、東西1.1mの不整円形を呈する。深さは0.4m。
- ・ SK24（Ⅲ-24図）：平面形は南北1.0m、東西1.4mの長方形を呈する。深さ0.2m。坑底は凹凸が著しい。
- ・ SK25（Ⅲ-24図）：遺構の西側を攪乱で壊されており、遺構の形態は不明。規模は現状で南北0.9m、東西1.1m、深さは0.1m。
- ・ SK26（Ⅲ-24図）：平面形は南北1.2m、東西1.8mの不整形を呈する。深さ0.4m。坑底中央が10～15cmほど盛り上がっている（Ⅲ-14図）。
- ・ SK27（Ⅲ-24図）：平面形は南北1.2m、東西1.8mの長方形を呈する。深さ0.3m。
- ・ SK39（Ⅲ-23図）：平面形は南北1.1m、東西1.0mの円形を呈する。深さ0.4m。黒褐色の覆土中に、筒状の腐食した木材の痕跡が認められた（Ⅲ-15図）。近代の陶磁器片やガラス製品の破片が出土している（Ⅲ-16図）。

以上のように、各土坑の形態はそれぞれ異なっている。しかし東西方向に1.8m（一間）の間隔で



Ⅲ-14図 SK26

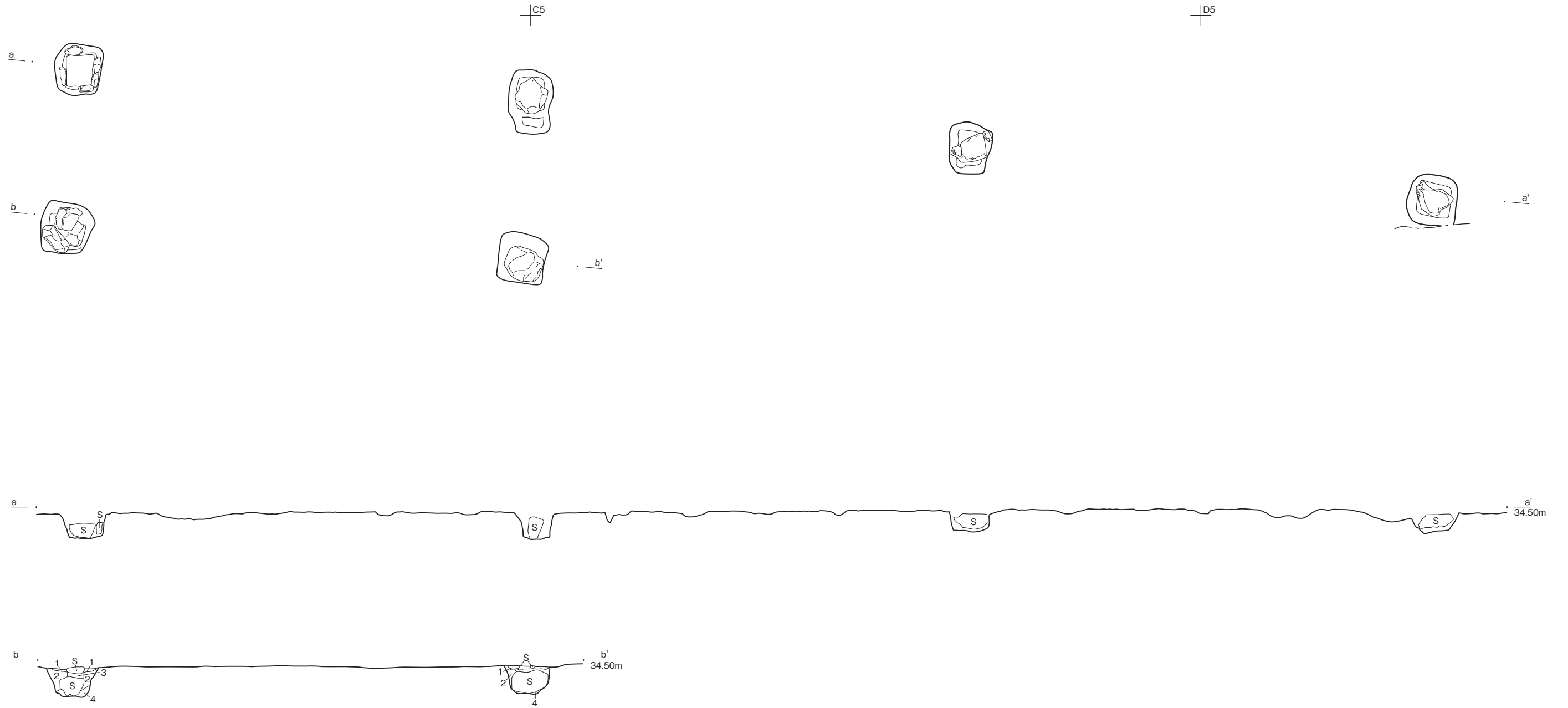


Ⅲ-15図 SK39

一列に並ぶことから、これらは一連のものであると考えられる。その性格については不明である。しかしSK26の坑底の形状は、これが植栽痕であることを想起させる。またSK39の覆土中に認められた木材の痕跡は根の跡と考えられることから、植栽列であった可能性が指摘できよう。

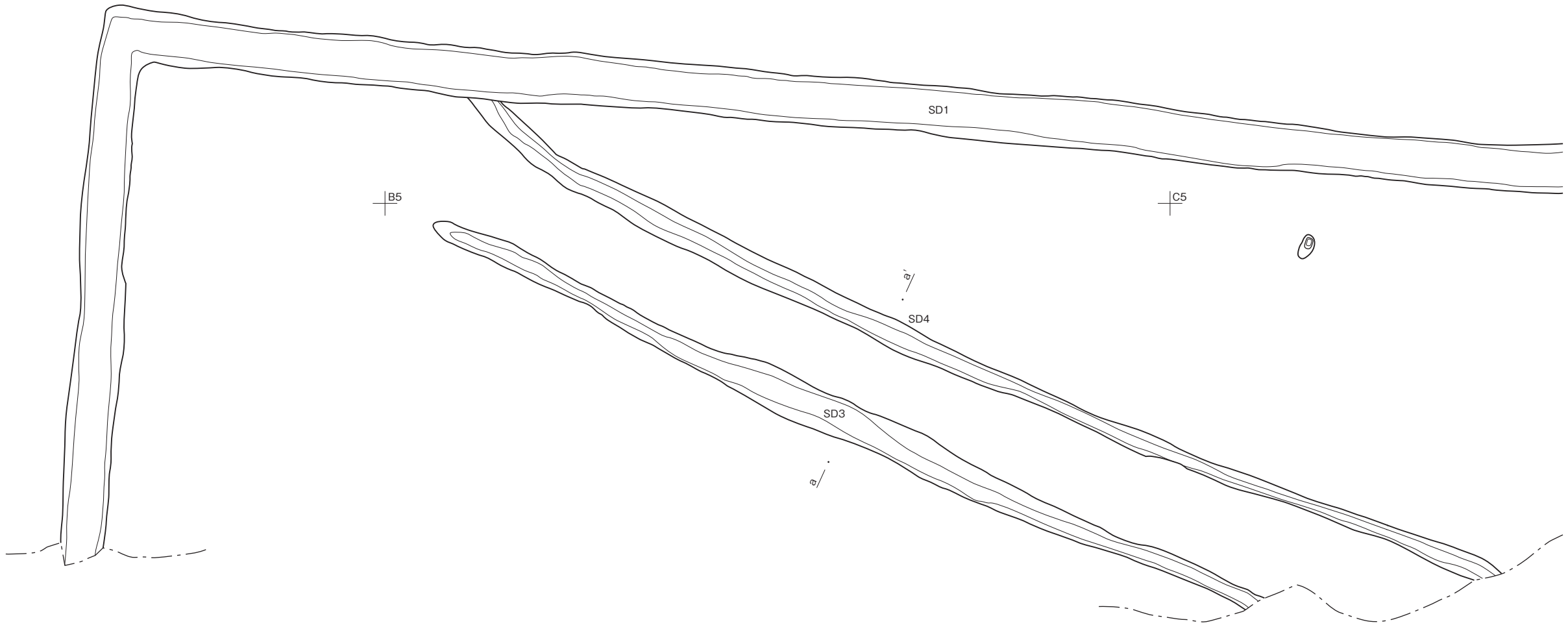
SK43（Ⅲ-25図）

南北0.7m、東西1.7m、深さ0.2mの平面が長方形を呈した土坑。南側は削平されているため、本来の規模は不明。

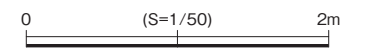


- SB2
1. 茶褐色土 砂利・漆喰などをやや多く含む。しまりやや弱い、粘性ややあり。
 2. 明茶褐色土 明黄褐色ロームブロック・粒子少量含む、しまりあり、粘性やや強。
 3. 暗褐色土 しまりあり、粘性なし。
 4. 明黄褐色土 ロームブロック主体。しまりあり、粘性ややあり。

0 S=1/50 2m



- SD3
1. 暗黄褐色土 黒色土粒子やや多、赤色スコリア極少量含む。しまりあり、粘性なし。
2. 黄褐色土 赤色スコリア・青灰色スコリア極少量含む。しまりあり、粘性なし。
- SD4
1. 暗黄褐色土 明黄褐色ローム粒子多く含む。しまりあり、粘性なし。



SP41、SP46～SP53（Ⅲ-26図）

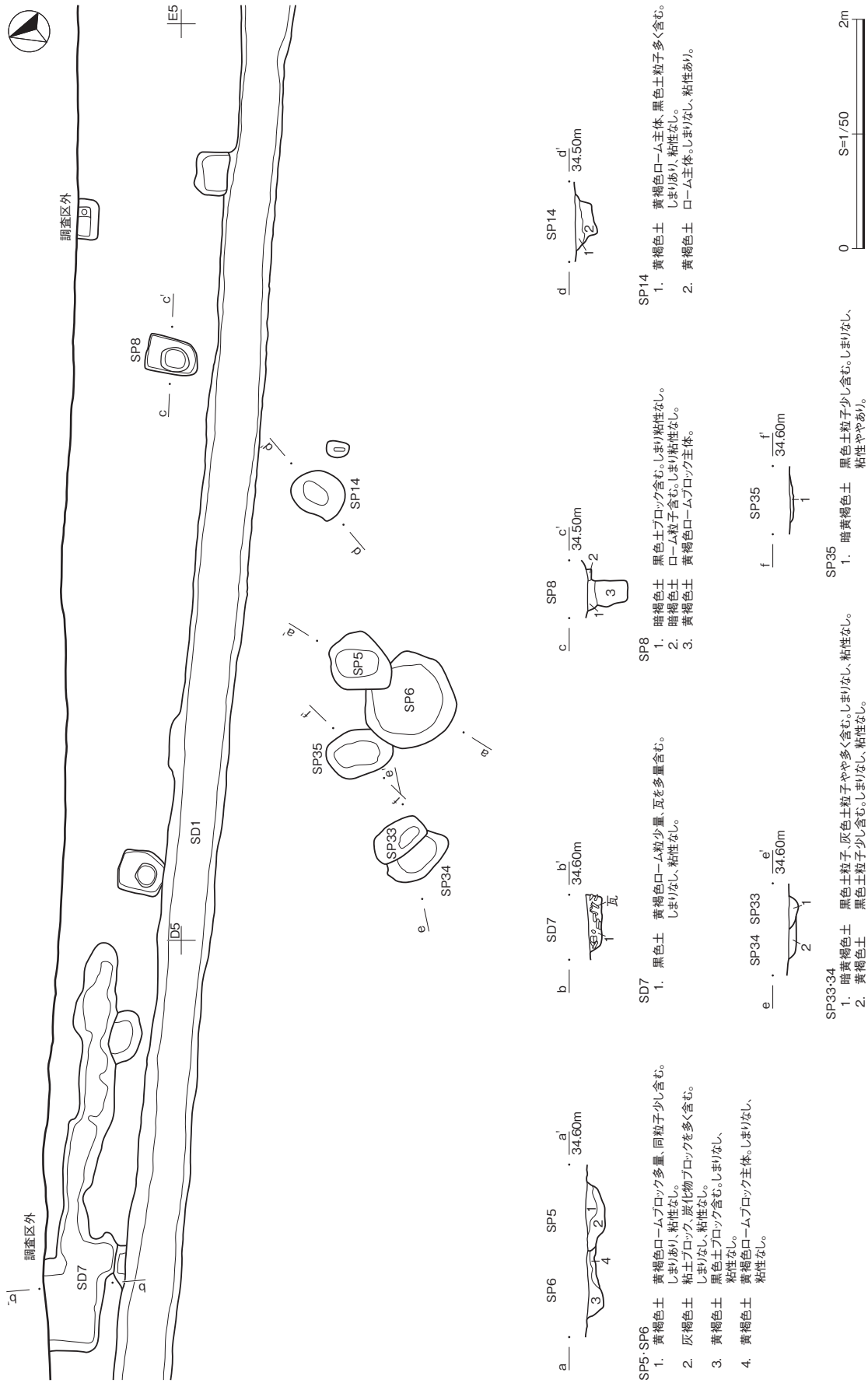
E4～H4グリッドにかけて東西に並ぶピット列で、前述のSK21～SK27、SK39の土坑列よりも南側に位置する。SP32とSP53の間が2.7m（一間半）である以外は、全て1.8m（一間）の間隔で並ぶ。SP41は大部分が攪乱によって壊されているため、遺構の形状は不明。同様に北側が攪乱によって壊されているSP46は現状で南北0.3m、東西0.2m、深さ0.4mの規模である。他のピットは概ね東西、南北が0.2m程度の円形を呈し、深さ0.3mである（Ⅲ-26図）。柵列と考えられる。SP41からMの刻印のあるガラス製のインク瓶が出土した。（Ⅲ-17図）



Ⅲ-16図 SK39出土遺物



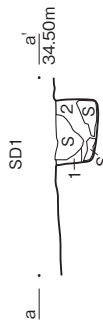
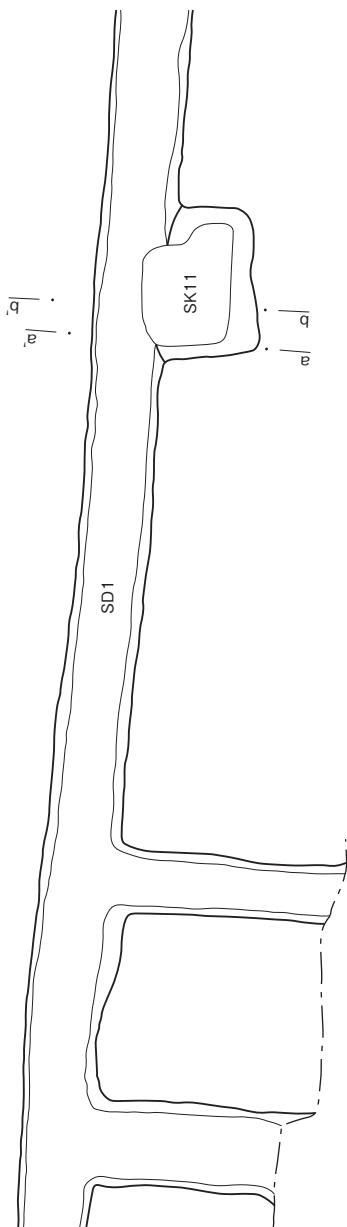
Ⅲ-17図 SP41出土遺物



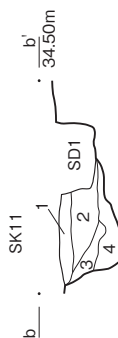
III-20 図 SD1(2)、SP5、SP6、SD7、SP8、SP14、SP33、SP34、SP35



E5



- SD1
1. 明黄褐色土 明黄褐色ローム粒子主体、暗褐色土少量含む。しまりなし、粘性なし。
 2. 暗褐色土 径5~20mmの石を多量に含む。しまり粘性なし。
- ※溝内の石は破碎した臺石を転用する。



- SK11
1. 暗黄褐色土 ローム粒子を多く含む。しまりなし、粘性あり。
 2. 黒色土 炭化物粒子を極めて多く含む。しまり粘性なし。
 3. 暗褐色土 ローム粒子極少量含む。しまり粘性なし。
 4. 黄褐色土 黄褐色ロームブロック主体。しまり粘性なし。

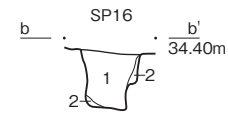


Ⅲ-21 図 SD1(3)、SK11



SP12・SP13

1. 黄褐色土 黄褐色ロームブロック主体。
2. 黒色土 しまり粘性なし。
3. 青灰色土 青灰色粘土ブロック。しまりなし、粘性あり。
4. 黄褐色土 黄褐色ロームブロック主体、黒色土粒子含む。しまりあり、粘性なし。



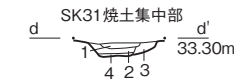
SP16

1. 暗黄褐色土 黒色土粒子多く含む。しまりなし、粘性なし。



SK31

1. 黒色土 径3~5mmの黄褐色ローム粒子と、径5mmの炭化物粒子を少し含む。しまりなし、粘性なし。
2. 暗褐色土 ロームブロックと瓦層から構成される。しまりなし、粘性なし。
3. 暗褐色土 2層よりも暗い色調。径3mmのロームブロック少量、瓦をやや多く含む。しまりなし、粘性なし。
4. 黄褐色土 明黄褐色ローム粒子、炭化物ブロック・同粒子極めて多く含む。瓦を含む。しまりなし、粘性なし。



SK31 焼土集中部

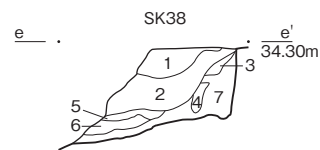
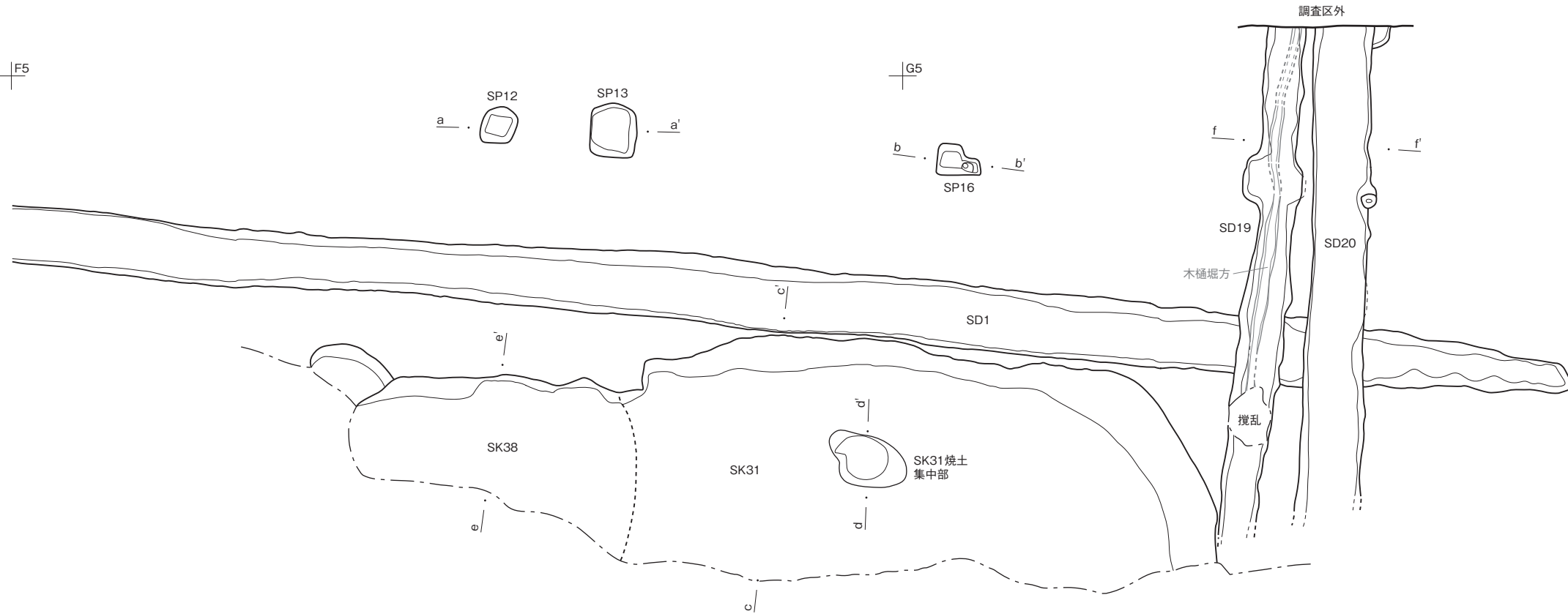
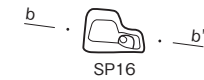
1. 赤色粘土 焼土層。しまりややあり、粘性なし。
2. 暗褐色土 赤褐色焼土粒子やや多、炭化物ブロックを含む。しまりなし、粘性なし。
3. 暗褐色土 暗黄褐色ローム粒子少し含む。しまりなし、粘性なし。
4. 黄褐色土 黄褐色ロームブロック主体。



F5

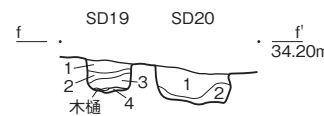


G5



SK38

1. 暗黄褐色土 径5~30mmのロームブロックとローム粒子をやや多、瓦を含む。しまりややあり、粘性なし。
2. 暗褐色土 ローム粒子少量、径10~20mmの黄灰色粘土ブロック少量。しまりあり、粘性なし。
3. 暗褐色土 ローム粒子多く含む。しまりなし、粘性なし。
4. 暗褐色土 ビット状の堆積。しまりなし、粘性なし。
5. 暗褐色土 ローム粒子やや多く含む。しまりなし、粘性なし。
6. 暗黄褐色土 黄褐色ローム粒子やや多、焼土粒子多、炭化物粒子少し含む。しまりなし、粘性なし。
7. 暗黄褐色土 径3~5mmのローム粒子わずかに含む。しまりなし、粘性なし。

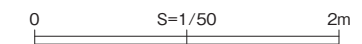


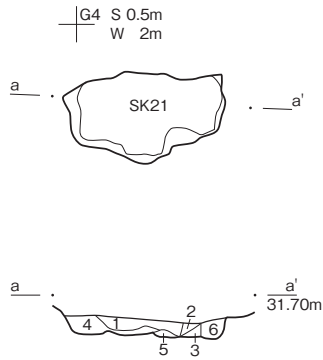
SD19

1. 黄褐色土 黒色土ブロック多く含む。しまりなし、粘性なし。
2. 黄褐色土 黄褐色土ロームブロック主体。
3. 黒色土 径3~5mmのローム粒子多く含む。しまりなし、粘性なし。
4. 暗褐色土 木植部。しまりなし、粘性なし。

SD20

1. 黒色土 径5~10mmの黄褐色ロームブロック少量含む。しまりなし、粘性なし。
2. 黄褐色土 黄褐色ロームブロック主体。しまりあり、粘性なし。

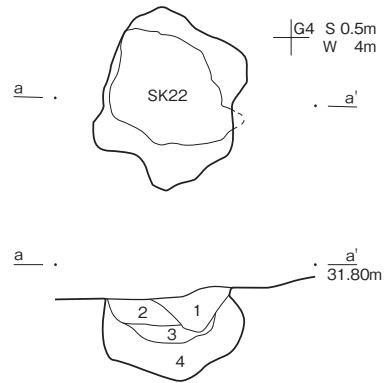




SK21

1. 黒色土 黄褐色ローム粒子やや多く含む。しまり粘性なし。
2. 黄褐色土 黄褐色土ロームブロック主体。
3. 黄褐色土 黄褐色土ロームブロック主体 2よりも青みあり。粘性強。
4. 黄褐色土 黒色土ブロック多く含む。しまりなし、粘性あり。
5. 黄褐色土 黄褐色土ロームブロック主体。
6. 黄褐色土 黄褐色土ロームブロックを主体とする。しまり、粘性なし。

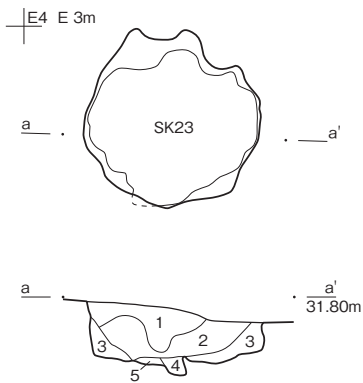
SK21



SK22

1. 暗黄褐色土 ローム粒子・ロームブロックやや多、黒色土塊多量、炭化物粒微量含む。しまりあり、粘性ややあり。
2. 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロックやや多、黒色土塊少量、炭化物粒微量含む。しまりあり、粘性ややあり。
3. 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック多、黒色土塊少量含む。しまりあり、粘性やや強。
4. 明黄褐色土 ローム主体。ロームブロック微量、黒色土塊・炭化物粒微量含む。しまりあり、粘性やや強。

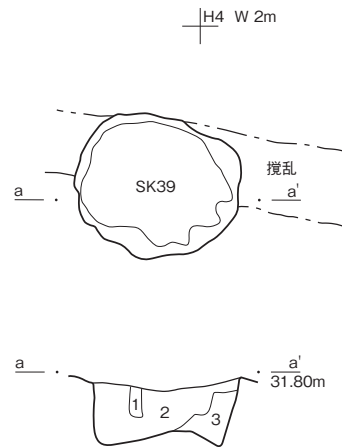
SK22



SK23

1. 黒褐色土 ローム粒子やや多く含む。しまりあり、粘性なし。
2. 暗黄褐色土 ローム粒子多く含む。しまりややあり、粘性ややあり。
3. 黄褐色土 ローム粒子多く含む。しまりなし、粘性ややあり。
4. 黄褐色土 ローム粒子多く含む。しまりなし、粘性あり。
5. 黄褐色土 ロームブロック主体。

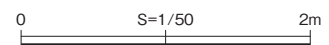
SK23



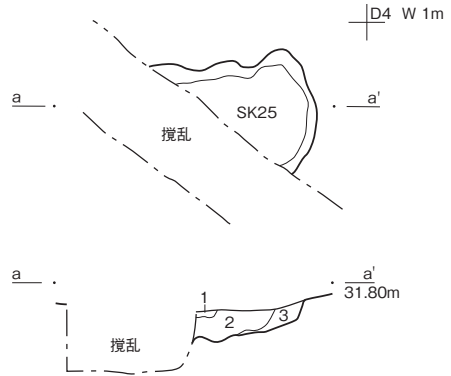
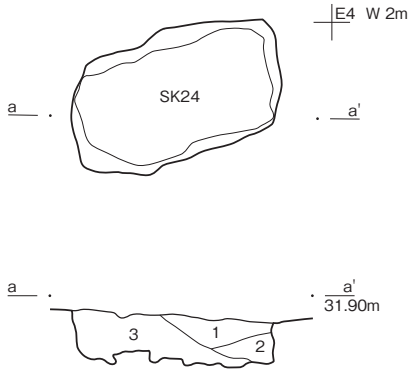
SK39

1. 暗褐色土 一部に筒状の木材残存。しまりなし、粘性なし。
2. 黒褐色土 径5mmのロームブロックやや多く含む。しまりあり、粘性なし。
3. 黄褐色土 径100mm程度のロームブロック少量、径5~10mmのロームブロック多く含む。しまりなし、粘性なし。

SK39



III-23 図 SK21、SK22、SK23、SK39



SK24

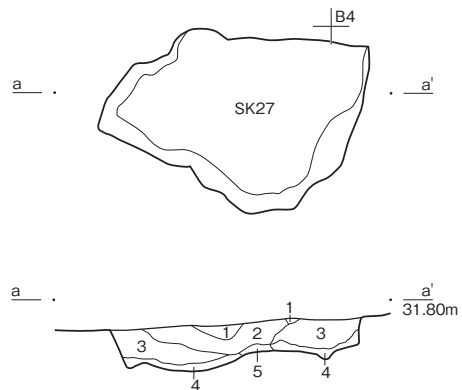
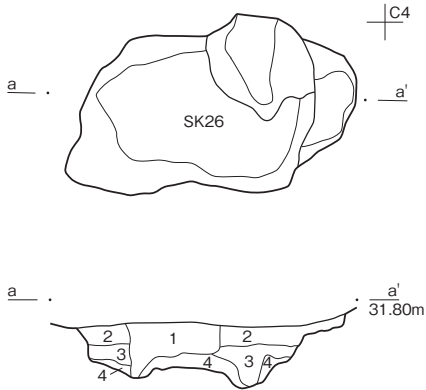
1. 暗黄褐色土 ローム粒子・ロームブロックやや多、黒色土粒少量含む。しまりあり、粘性ややあり。
2. 明黄褐色土 ロームブロック主体。しまりあり、粘性やや強。
3. 暗黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック多、黒色土粒・塊少量、炭化物粒微量含む。しまりあり、粘性やや強。

SK25

1. 暗黄褐色土 ロームブロックやや多、黒色土塊少量、炭化物粒やや多く含む。しまりあり、粘性ややあり。
2. 黄褐色土 ロームブロック・同粒子多く含む。しまりあり、粘性やや強。
3. 黄褐色土 ロームブロックを主体。炭化物粒少量含む。しまりやや弱、粘性やや強。

SK24

SK25



SK26

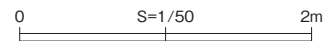
1. 暗黄褐色土 径30~50mmのロームブロック、黒色土粒子・ローム粒子を多く含む。しまりなし、粘性なし。
2. 暗黄褐色土 黄褐色土ロームブロック主体。黒色土粒子少し含む。しまりなし、粘性なし。
3. 黄褐色土 黄褐色土ロームブロック主体。黒色土粒子やや多く含む。しまりなし、粘性ややあり。
4. 黄褐色土 黄褐色土ロームブロック。

SK27

1. 黒褐色土 ローム粒子やや多く含む。しまりあり、粘性なし。
2. 暗黄褐色土 ローム粒子多く含む。しまりややあり、粘性ややあり。
3. 黄褐色土 ローム粒子多く含む。しまりなし、粘性ややあり。
4. 黄褐色土 ローム粒子多く含む。しまりなし、粘性あり。
5. 黄褐色土 ロームブロック主体。

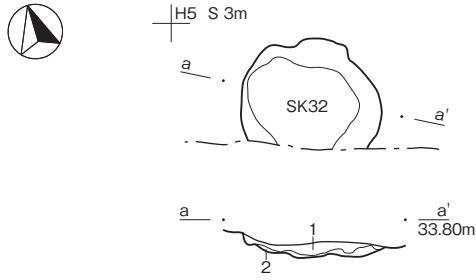
SK26

SK27



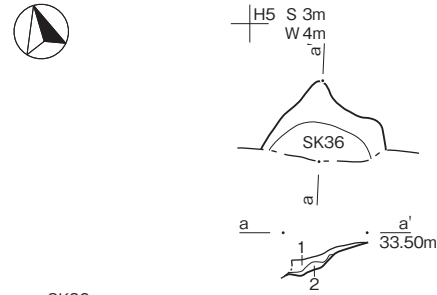
III-24 図 SK24、SK25、SK26、SK27

第三章 調査の成果



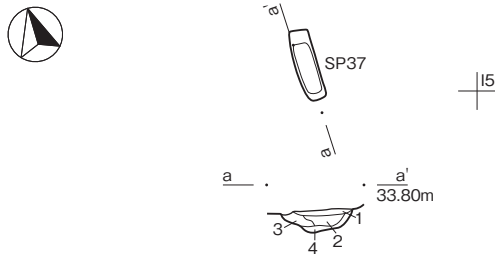
- SK32
1. 黒褐色土 黄褐色ローム粒子少し含む。しまりなし、粘性なし。
 2. 黄褐色土 ローム主体。しまりなし、粘性なし。

SK32



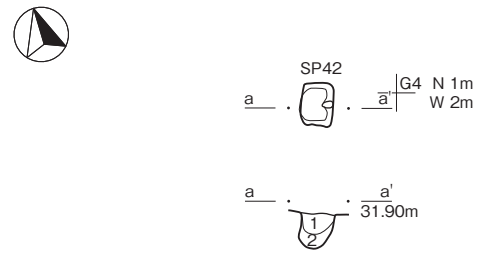
- SK36
1. 黒褐色土 径1~2mmの黄褐色ローム粒子少量含む。しまりなし、粘性なし。
 2. 暗黄褐色土 黄褐色ロームブロック主体。黒色土粒子やや多く含む。しまりなし、粘性なし。

SK36



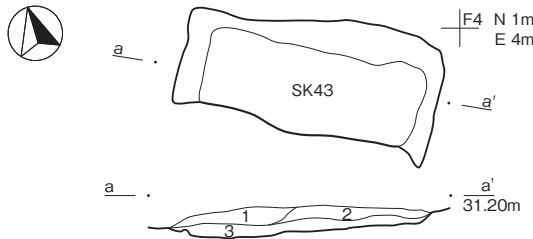
- SP37
1. 暗褐色土 径1mm程の黄褐色ローム粒子を少量含む。しまりなし、粘性なし。
 2. 暗褐色土 暗黄褐色ロームブロックやや多。径1mm程の黒褐色土粒子を少量含む。しまりなし、粘性なし。
 3. 黒褐色土 黄褐色ロームブロック少量含む。しまりなし、粘性なし。
 4. 暗黄褐色土 黄褐色ロームブロック主体、黒褐色土粒子を少量含む。しまりあり、粘性あり。

SP37



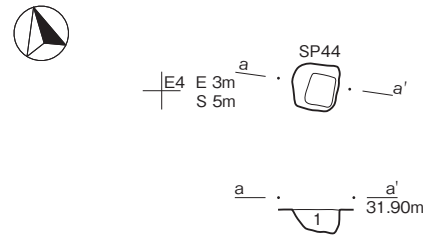
- SP42
1. 黄褐色土 しまりあり、粘性なし。
 2. 暗褐色土 しまりなし、粘性あり。

SP42



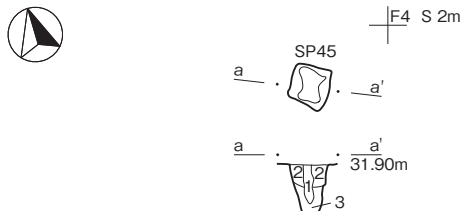
- SK43
1. 黄褐色土 ローム粒子多く含む、しまりなし、粘性なし。
 2. 暗褐色土 ローム粒子少し含む、しまりなし、粘性なし。
 3. 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック多く含む、しまりややあり、粘性なし。

SK43



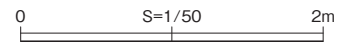
- SP44
1. 黒褐色土 径30mmのロームブロックと同程度の石をやや多く含む。しまりなし、粘性なし。

SP44



- SP45
1. 黄褐色土 ロームブロック多量、同粒子少量、しまりなし、やや砂質。
 2. 黄褐色土 ロームブロック主体、赤色スコリア粒子微量含む、しまりやや強、粘性やや強。
 3. 黄褐色土 ロームブロックやや多、同粒子やや多、炭化物粒微量、しまりやや弱。

SP45



III-25 図 SK32、SK36、SK37、SP42、SK43、SP44、SP45

(3) 旧石器時代

北区上段において2×2mのグリッドを計5箇所（第1～5グリッド・Ⅲ-27図）設定し、旧石器時代の調査を実施した。その結果、第2グリッドから剥片・碎片が出土した。そのため第2グリッド周辺で調査範囲を拡大し、計7点の遺物が出土した（Ⅲ-30図、Ⅲ-2表）。なお下段については前述のように立川ローム層が全て削平されていることから、旧石器時代の調査は実施していない。

剥片（資料番号2・Ⅲ-29図）

縦長剥片を素材とする。砂岩製。

楔形石器（資料番号3・Ⅲ-29図）

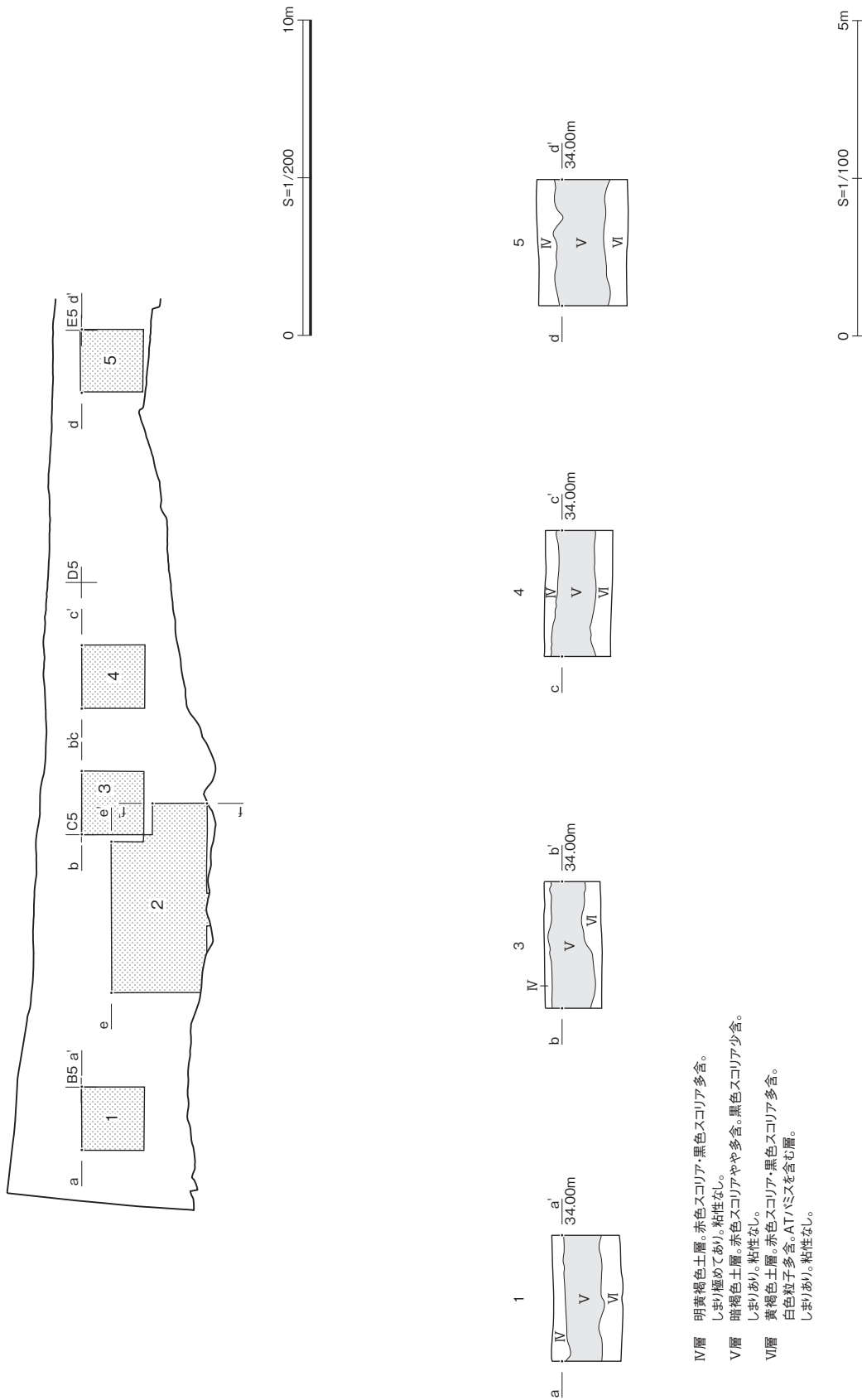
縦長の剥片を素材とする。表裏共に、上下両端に微小な剥離痕が認められる。黒耀石製。

剥片（資料番号4、6・Ⅲ-29図）

長幅比は4がやや幅広で、6はほぼ1:1。背面には多方面からの縦長剥片を剥離した痕跡が残る打面再生剥片。黒耀石製。

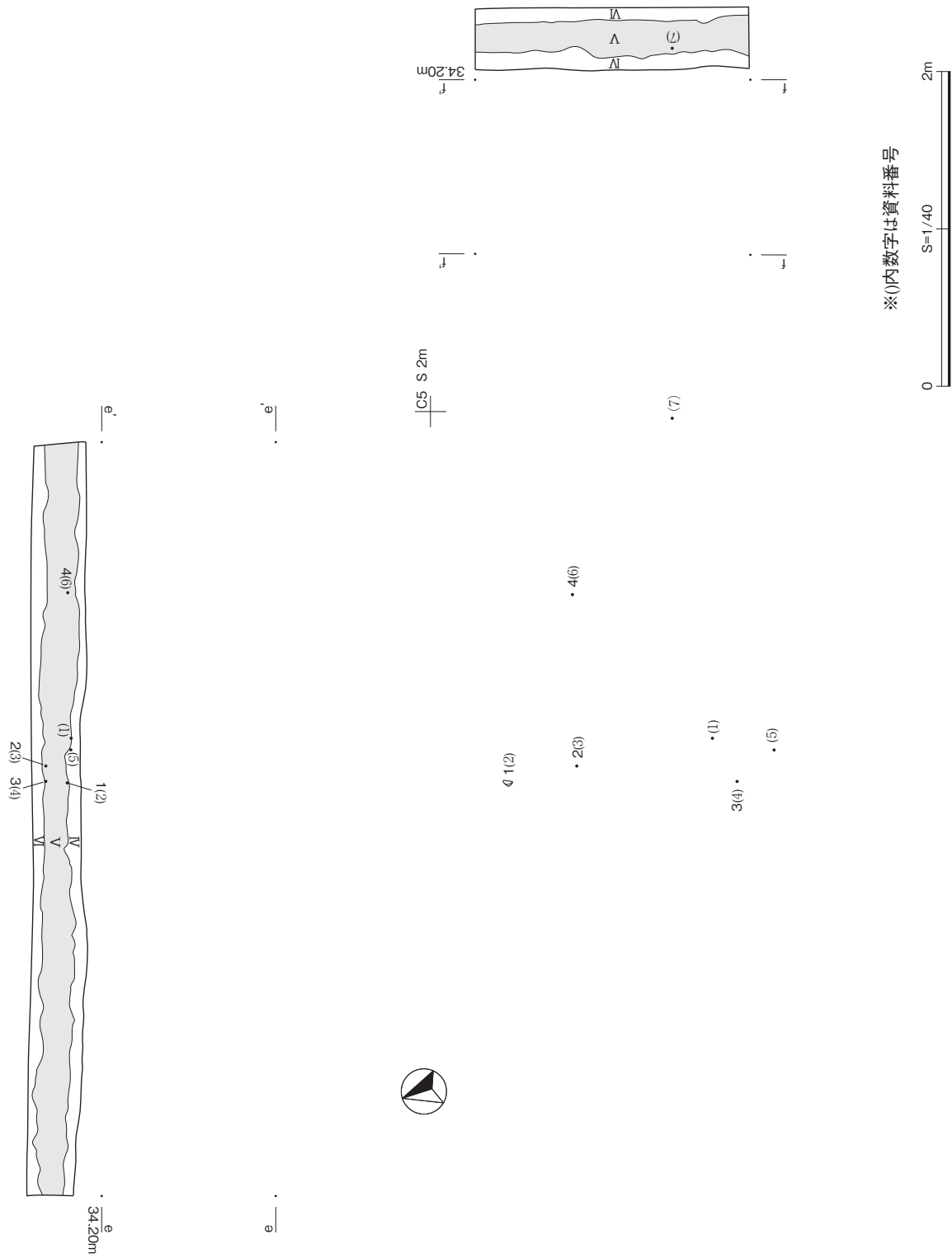
図版番号	資料番号	器種	石材	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)
	1	碎片	黒耀石	B5	1.6	0.9	0.3	
1	2	剥片	砂岩	B5	68.3	32.5	14	21.6
2	3	楔形石器	黒耀石	B5	19.1	8.9	5.8	0.9
3	4	剥片	黒耀石	B5	19.2	25.2	7.4	2.9
	5	碎片	黒耀石	B5	1.8	0.9	0.6	
4	6	剥片	黒耀石	B5	15.6	16.7	3.8	0.6
	7	碎片	黒耀石	B5	1	0.9	0.2	

Ⅲ-2表 遺物観察表

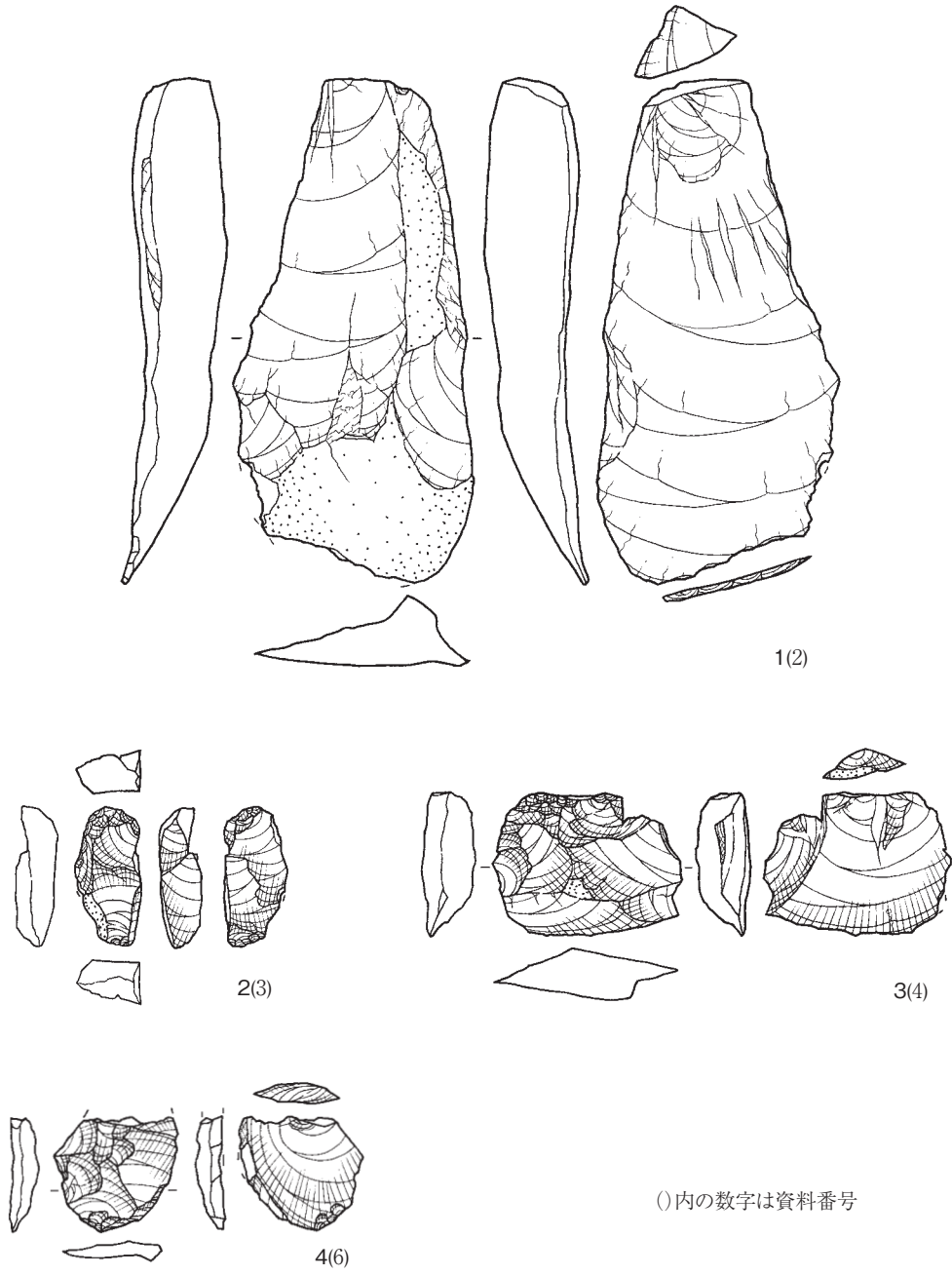


IV層 明黄褐色土層。赤色スコリア、黒色スコリア多含。
しまり極めてあり。粘性なし。
V層 暗褐色土層。赤色スコリアや多含。黒色スコリア少含。
しまりあり。粘性なし。
VI層 黄褐色土層。赤色スコリア、黒色スコリア多含。
白色粒子多含。ATPバースを含む層。
しまりあり。粘性なし。

III-27 図 先土器時代調査範囲



Ⅲ-28 Ⅱ 石器出土状況



Ⅲ-29 図 出土石器



グリッド配置状況



遺物出土状況 (第2グリッド)



第2グリッド土層断面 (北壁)



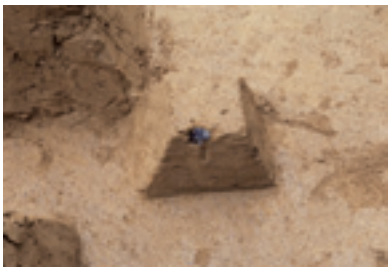
資料番号 1



資料番号 2



資料番号 3



資料番号 4



資料番号 5



資料番号 6



資料番号 7

Ⅲ-30 図 石器出土状況

第2節 南区

埋没谷

表土を約0.8m掘り下げたところで、立川ローム層を検出した。ローム層の堆積状況は、南区西端から東へおよそ4mまではほぼ水平である(Ⅲ-31図)。そこから徐々に傾斜し(Ⅲ-32図)、黄褐色～暗褐色を呈する水成堆積層からなる埋没谷を検出した(Ⅲ-33図)。

埋没谷は東側に向かって傾斜が続き、南区の東端で現地表面から4mの深さを測る(Ⅲ-35図)。土層断面図上のFラインより湧水を確認した(標高29.0m・Ⅲ-34図)。

遺物は出土しない。



Ⅲ-31図 (Bライン付近)



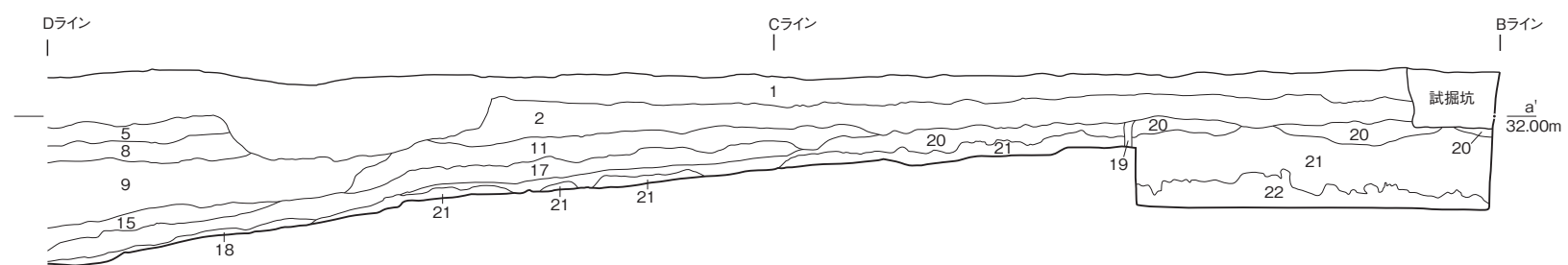
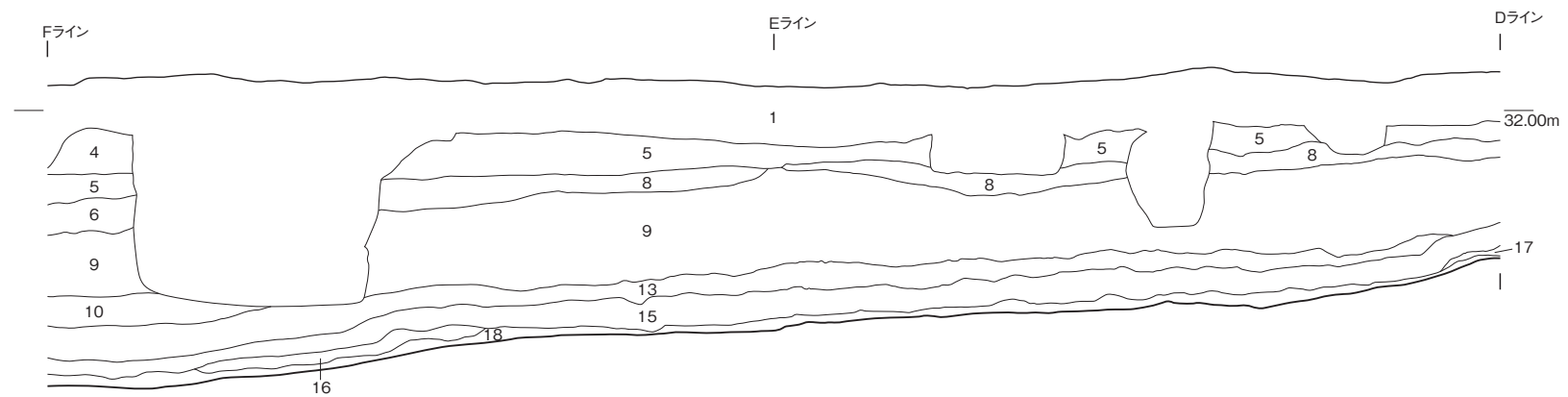
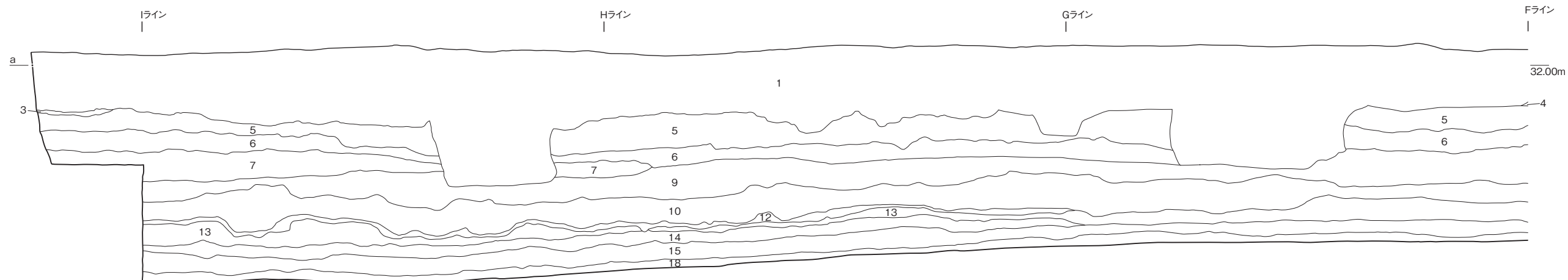
Ⅲ-32図 (Dライン付近)



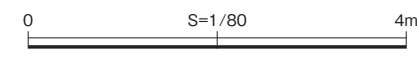
Ⅲ-33図 (埋没谷検出状況)



Ⅲ-34図 (Fライン付近)



- 1. 表土・攪乱 しまりあり、粘性なし。
- 2. 黒褐色土層 しまりあり、粘性なし。
- 3. 暗褐色土層 5層より明るい色調。しまりなし、粘性なし。
- 4. 黒色土層 しまりあり、粘性なし。
- 5. 黒色土層 しまりあり、粘性なし。
- 6. 暗褐色土層 しまりあり、粘性なし。
- 7. 黒色土層 しまりあり、粘性なし。
- 8. 黒色土層 黄褐色ローム粒子少量含む。しまりあり、粘性なし。
- 9. 黒色土層 しまりあり、粘性極めてあり。
- 10. 暗褐色土層 しまりややあり、粘性極めてあり。
- 11. 暗褐色土層 しまりあり、粘性ややあり。
- 12. 黒色粘土層 オレンジ色を呈する酸化鉄を帯状に含む。しまりなし、粘性あり。
- 13. 暗青灰色粘土層 しまりなし、粘性あり。
- 14. 暗褐色粘土層 しまりあり、粘性あり。
- 15. 暗褐色粘土層 灰色粒子を少量含む。しまりややあり、粘性極めてあり。
- 16. 灰褐色粘土層 赤色粒子をブロック状に少量含む。しまりややあり、粘性あり。
- 17. 黒褐色土層 しまりややあり、粘性なし。
- 18. 青灰色粘土層 オレンジ色を呈する酸化鉄をブロック状に含む。しまりなし、粘性極めてあり。
- 19. 柱痕
- 20. 暗黄褐色土層 漸移層、しまりあり、粘性なし。
- 21. 黄褐色ローム層 立川ロームIII層に相当する。しまりなし、粘性ややあり。赤色スコリア少量含む。
- 22. 明黄褐色ローム層 立川ロームIV層に相当する。赤色スコリア・黒色スコリア多量、青灰色スコリアをやや多く含む。しまり極めてあり、粘性なし。



III - 35 図 南区基本層序

第IV章 調査のまとめ

前章で述べたように、本地点は旧駒場寮によって大部分が破壊されており、北区上段において旧石器時代の遺物が出土したものの、縄文時代から江戸時代までの遺物と遺構はみられなかった。

北区で検出した遺構のうち、共伴遺物から時期をうかがい知ることができるものはごく少数に限られる。しかし遺構外からの出土遺物も全て近代以降に帰属するものであることから、いずれの遺構も江戸時代以前に遡るものでないと思われる。

『農科大学略図』（IV - 1 図）をみると、調査地点は圃場として使われていたことがわかる。SK31 からは農学校とプリントされた陶磁器片が出土している（Ⅲ - 13 図 1 ~ 5）。北区では溝が 6 基検出されているが、そのいくつかは、あるいは圃場に関連するものなのかもしれない。

1935 年に第一高等学校がこの地へ移転してくる。本調査地点は寄宿舍のうち南寮付近にあたるが、SB2 のように、「オ」の一部が認められる遺物を出土する遺構もある（IV - 2 図）。

遺構外から出土した遺物の中にも、三葉六実の柏葉と橄欖（第一高等学校の校章）がプリントされた食器が 4 点ある。IV - 3 図はそのうちの 1 点で、西洋皿である。この資料の高台内には、「岐 1065」の生産者別標示記号（統制番号）が付されている（IV - 4 図）。

統制番号が付された、いわゆる統制陶磁器は、近年いくつかの遺跡で報告例がある（天内 1988）。これらは生産から流通に至るまで経済統制下に入った戦時体制によって生産された陶磁器である。岐阜県陶磁器工業組合連合会は 1941 年に生産者別標示記号を各生産者に付して、製品を管理下においた。上記「岐 1065」は瑞浪陶磁器工業組合に所属した美濃窯業株式会社の製品である。

駒場 I キャンパスでも、本調査地点の南側の数理地点・SK12 において 2 点の報告例がある（堀内秀樹、東京大学埋蔵文化財調査室 1999 に所収）。いずれも磁器碗で、高台内にそれぞれ「岐 101」と「品 155」という統制番号が付されている（IV - 5 図）。IV - 4 図にあげた皿の場合、第一高等学校の校



IV - 1 図 『農科大学略図』

章がプリントされていることから、第一高等学校の注文により生産された食器であることが考えられる。寄宿舎内の食堂で使用されていたものだろうか、駒場寮跡地である本調査地点らしい遺物だといえるだろう。

本調査地点の試掘調査では、土器片（加曾利E式）1点が出土し、遺構1基の検出をみた。しかし土器片の出土場所は、埋没谷（南区）の黒色土中であることから、周辺部からの流れ込みなど二次的なものであることが考えられる。また遺構は倒木痕で、縄文時代の遺構と判断することは難しい。

数埋地点はこの埋没谷と、空川によって開削された谷に挟まれた舌状台地上に位置している。ここでは縄文時代早期～中期の住居址1基、炉穴13基、土坑9基、ピット23基、倒木痕3基が検出されている。IV-6図は数埋地点の住居址・炉穴の分布状況である。住居も含めて大部分が南側、空川をのぞむ台地縁辺に集中する。攪乱によって大きく削平されてしまったが、埋没谷を南にのぞむ北区にも、本来は縄文時代の遺構があったのかもしれない。

南区で検出した埋没谷の規模に関しては、南寮の攪乱によって明らかにすることはできなかった。ただし北区のローム層の堆積状況（Ⅲ-27図）から、谷の南北の拡がりはⅢ-1図における3ライン以南におさまるものと予想される。谷頭については、本調査地点の西側に存在したと思われる。この点に関しては、コミュニケーションプラザ地点の発掘調査（2002年実施）の成果とともに改めて検討したい。

旧石器時代の遺物は、北区上段の立川ロームV層中から出土した。出土数が7点と少数であるため詳細は不明だが、前述のコミュニケーションプラザ地点ではV層からX層にかけて、約60点の石器類が出土している（東京大学埋蔵文化財調査室2006）。埋没谷を囲むようにひろがる、旧石器時代の遺跡の存在が予想される。



IV-2図 SB2出土 碗



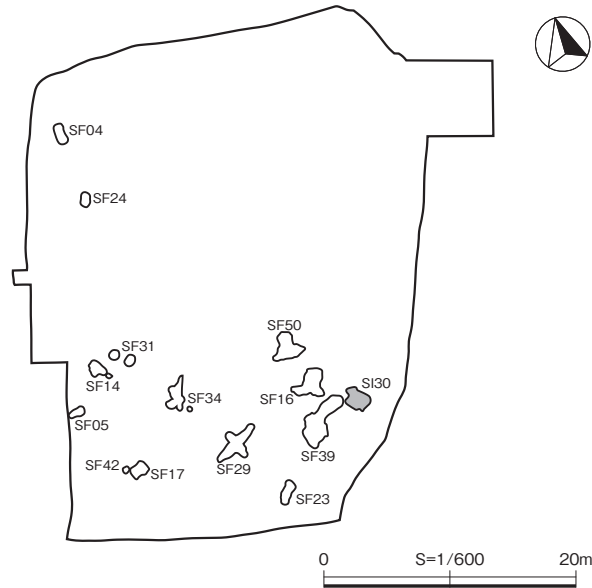
IV-3図 校章がプリントされた皿



IV-4図 高台内の統制番号



IV-5図 埋地点出土の統制陶磁器



IV-6 図 数理地点炉穴・住居分布図

【参考文献】

- 天内克史 1988 「統制経済下における陶磁器生産の一様相」『村上徹君追悼論文集』
- 恵比寿・三田埋蔵文化財調査会 1993 『恵比寿 旧サッポロビール恵比寿工場地区発掘調査報告書』
- 貝塚爽平 1979 『東京の自然史 増補第二版』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1997 「教育学部情報教育棟新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1999 「東京大学駒場構内遺跡 大学院数理研究科Ⅱ期棟地点発掘調査報告書」『東京大学構内遺跡調査研究年報』2
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2004 「教養学部図書館新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2006 「駒場コミュニケーションプラザ建設予定地点発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』5
- 土岐津町誌編纂委員会 1999 『土岐津町誌史料編』
- 目黒区中目黒4丁目遺跡調査会 1994 『中目黒遺跡B地点』
- 目黒区中目黒遺跡(C地点)調査会 1998 『中目黒遺跡C地点』
- 目黒区東山遺跡(X地点)調査会 1993 『東山遺跡X地点』
- 目黒区東光寺裏山遺跡調査会 1997 『東光寺裏山遺跡発掘調査報告書』
- 第一高等学校 1939 『第一高等学校六十年史』

報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくこうないいせき ちょうさけんきゅうねんぼう							
書名	東京大学構内遺跡調査研究年報							
副書名								
巻次	7							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	追川吉生（編）、大成可乃							
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103					
発行機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103					
発行年月日	2011年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
とうきょうだいがく こうないいせきの遺跡 こまぼとしょうかん ちてん 駒場図書館地点	とうきょうと 東京都 めぐろく 目黒区 こまぼ ちょう 駒場 3丁 めぼん ちやう 目8番 1号	13110	1	35° 39' 33"	139° 41' 13"	2000年7月 27日～ 2000年8月 30日	1778㎡	東京大学 駒場図書 館新営に 伴う事前 調査
所収遺跡名	種別・主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
東京大学駒場構内の遺跡 駒場図書館地点	旧石器時代 明治時代		礎石 1基 土坑 12基 溝状遺構 6基 ピット 21基		石器 剥片 磁器 陶器			

第4部 東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要7

東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（2） 大成可乃

東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類 (2)

—器種 (小器種) の出土状況—

大成 可乃

はじめに

東京大学本郷構内の遺跡 (以下、東大構内遺跡) 医学部附属病院地点 (以下、病院地点) の報告の中で、成瀬晃司・堀内秀樹が「消費遺跡における陶磁器の基礎的操作と分析」として、病院地点出土陶磁器類の分類、遺構単位での数量提示を行い、消費遺跡での自立的な編年、器種の流通などについて考察を行った (成瀬・堀内 1990)。その後、調査事例の増加や研究の進展に伴い、東大構内遺跡の統一時間軸として東大編年を提示した (堀内 1997)。この中で堀内は、遺構一括遺物の段階設定を以下のような手順を踏んで実施した。すなわち遺構一括遺物の (1) 分類 (2) 数量提示 (3) 様相把握 (4) 層位学的検証にもとづき様相の相対的順序を把握、各様相の段階設定 (5) 時間的分布状況の提示 (6) 段階設定に対して実年代の推定を行うというものであり、97年の段階では (3)、(4)、(6) について提示したとしている。さらに東京大学埋蔵文化財調査室において陶磁器・土器類の分類の目的、方法、胎質別の生産地での出土状況、江戸遺跡や東大構内遺跡での出土状況について『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類』(1) (以下、分類 (1)) として提示した (東京大学埋蔵文化財調査室 1999)。これは先述した (1) に相当する部分である。しかしその後 10 年以上経過した現段階まで分類 (1) で提示した器種 (小器種) が、東大編年という段階設定の中でどのような消長をみせるのかを明らかにせず、東大編年あるいは東大分類だけが一人歩きする状況を招いている。このような状況は分類 (1) に携わった 1 人として自省するところであり、今回は東大編年という時間軸の中で、分類 (1) で取り上げた器種 (小器種) がどのような出土状況を示すのかをみてみた。

なお本来ならば生産地における器種 (小器種) の出土状況にも触れなければならないが、それは別の機会に譲りたい。

出土状況の提示目的とその方法

この作業を行う目的は、器種 (小器種) の消長を提示することにより、東大構内遺跡すなわち加賀藩邸を中心とする大名藩邸における陶磁器・土器の消費や流通状況などを明らかにするためであり、ひいては江戸時代のライフサイクルの一端を考える基礎作業となりうるからである。

出土状況を提示する遺構は、堀内が東大構内遺跡の編年表で提示した遺構を指標遺構として取り上げたが、調査事例の増加に伴い一括性の高い遺物が出土した遺構も追加した^{註1}。また東大構内遺跡で未確認あるいは出土量がごく少ない遺物については、東大構内遺跡以外の江戸遺跡出土資料などを参考にし、共伴遺物についても本文中で明示した^{註2}。

東大構内遺跡における器種 (小器種) の出土状況

表の縦軸には東大編年 Ib 期から IX 期の指標遺構を各段階ごとに、横軸には磁器 (J)・陶器 (T)・土器 (D) の順に、産地ごとに分類 (1) で示した器種 (小器種) を配し、各遺構一括遺物中でそれらの有無を「○」と空欄で示し、中でも相対的に出土量が多いものは「◎」とした (表 10～17)。さらに今回の作業を通じて明らかになった陶磁器・土器の消長から、東大構内遺跡で消費、流通していたであろうと考えられる期間を、ピークや初現という形で提示した (表 1～9)。ただし、出土量、

出土遺構などが極めて少なく、出土様相の把握が困難であったものは除いた。ピークは実線と破線で示し、初現は●と細線の組み合わせで示した。破線で示したピークは、出土量あるいは出土遺構が現段階ではまだ不十分であり、不確定な要素を含む。

また本文中では出土状況に加えて、文様や器形の変化などが確認できたものは、その点も若干触れている。なお表や本文中で使用した分類、調査地点については、凡例を参照していただきたい。

分類 (1) 刊行後に数冊の東大構内遺跡の報告書が刊行されたが、その中で使用している分類項目について一部未掲載のものがある。また研究の進捗状況により、分類 (1) での器種認識が現在のそれとは異なってきているものもある。これらについては次回の東大分類改訂の際に考慮する予定であり、最新の研究成果としては各報告書を参照して頂きたい。なお今回このような形で出土状況、そのピークなどを提示したが、あくまでも現時点での様相を反映させたものであり、今後の良好な一括資料の増加に伴って、随時見直しを行っていくつもりである。

凡 例

出土地点については以下のように省略して表記した。分類 (1) 執筆時に、東大構内において良好な資料が確認できなかった遺物については、他遺跡の報告書から引用させて頂いた (以下、50音順。() は東大構内遺跡各地点の掲載書籍)。

* 東大構内遺跡

医研：医学部教育研究棟地点 (東京大学構内遺跡調査研究年報2)

外来：医学部附属病院外来診療棟地点 (医学部附属病院外来診療棟地点)

家畜：農学部家畜病院地点 (東京大学構内遺跡調査研究年報1)

看宿：医学部附属病院看護婦宿舎地点 (東京大学構内遺跡調査研究年報1)

給水：医学部附属病院給水設備棟地点 (医学部附属病院地点)

共同溝：医学部附属病院共同溝建設地点 (医学部附属病院地点)

工1：工学部1号館地点 (工学部1号館地点)

工14：工学部14号館地点 (工学部14号館地点)

御殿：御殿下記念館地点 (山上会館・御殿下記念館地点)

数理：大学院数理学研究科Ⅱ期棟地点 (東京大学構内遺跡調査研究年報2)

設備：医学部附属病院設備管理棟地点 (医学部附属病院地点)

中診：医学部附属病院中央診療棟地点 (医学部附属病院地点)

病棟：医学部附属病院病棟建設地点 (東京大学構内遺跡調査研究年報2)

福利：山上会館龍岡門別館地点 (東京大学構内遺跡調査研究年報4)

文：文学部3号館地点 (法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡)

法：法学部4号館地点 (法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡)

薬資：薬学部資料館地点 (東京大学構内遺跡調査研究年報1)

薬新：薬学部新館地点 (東京大学構内遺跡調査研究年報1)

理：理学部7号館地点 (理学部7号館地点)

小石川：理学系研究科附属植物園研究温室地点 (東京大学構内遺跡調査研究年報5)

* 他遺跡

- | | |
|-------------------|-----------------|
| 明石町：明石町遺跡 | 坂町：坂町遺跡 |
| 麻布台：郵政省飯倉分館構内遺跡 | 三栄町：三栄町遺跡 |
| 飯田町：飯田町遺跡 | 汐留Ⅰ：汐留遺跡Ⅰ |
| 市谷仲之町西Ⅱ：市谷仲之町西遺跡Ⅱ | 巢鴨Ⅰ：巢鴨Ⅰ |
| 内野山北：内野山北窯跡 | 住吉町西Ⅰ：住吉町西遺跡Ⅰ |
| 尾張Ⅰ：尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅰ | 筑土八幡町：筑土八幡町遺跡 |
| 尾張Ⅱ：尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅱ | 壺屋：壺屋古窯群Ⅰ |
| 尾張Ⅲ：尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅲ | 本郷追分：本郷追分 |
| 尾張Ⅵ：尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅵ | 内藤町：内藤町遺跡 |
| 尾張Ⅶ：尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅶ | 隼町：隼町遺跡 |
| 経塚山西：経塚山西窯跡 | 丸の内三丁目：丸の内三丁目遺跡 |
| 麴町：尾張藩麴町邸跡 | |

○胎質

J (磁器) T (陶器) D (土器)

○生産地

- | | |
|------------|------------|
| A - 輸入陶磁器 | E - 備前系 |
| A1 景德鎮窯系 | F - 志戸呂系 |
| A2 漳州窯系 | G - 常滑系 |
| A3 徳化窯系 | H - 萩系 |
| A4 龍泉窯系 | I - 萬古系 |
| A5 宜興窯系 | J - 大堀・相馬系 |
| A6 朝鮮 | K - 丹波系 |
| A7 ベトナム | L - 堺系 |
| A8 ヨーロッパ | M - 益子・笠間系 |
| B - 肥前系 | N - 九谷系 |
| C - 瀬戸・美濃系 | O - 壺屋系 |
| D - 京都・信楽系 | P - 淡路系 |
| | Z - 不明 |

○器種

- | | | | | |
|-----------|----------|---------|-----------|----------|
| 1. 碗 | 2. 皿 | 3. 大皿 | 4. 爛徳利 | 5. 鉢 |
| 6. 坏 | 7. 猪口 | 8. 仏飯器 | 9. 香炉・火入れ | 10. 瓶 |
| 11. 御神酒徳利 | 12. 油壺 | 13. 蓋物 | 14. 筆立て | 15. 壺・甕 |
| 16. 急須 | 17. 爛鍋 | 18. 合子 | 19. 水滴 | 20. 蓮華 |
| 21. 植木鉢 | 22. 花生 | 23. 片口鉢 | 24. 灰落し | 25. 鬢水入れ |
| 26. 茶入れ | 27. 水注 | 28. 漚瓶 | 29. 搦鉢 | 30. 餌入れ |
| 31. 火鉢 | 32. 柄杓 | 33. 鍋 | 34. 土瓶 | 35. 戸車 |
| 36. ちろり | 37. 薬研 | 38. 手焙り | 39. おろし皿 | 40. 油受け皿 |
| 41. 油徳利 | 42. 行平鍋 | 43. 十能 | 44. ひょうそく | 45. 瓦燈 |
| 46. カンテラ | 47. ほうろく | 48. 七輪 | 49. 涼炉 | 50. 五徳 |
| 51. 塩壺 | 52. 燭台 | 53. 蒸し器 | 54. 懐炉 | 00. 蓋 |

JA JB		景徳鎮 (1)		肥前 (1)		東大編年	
碗(1)	皿(2)	大皿(3)				鉢(5)	
		大皿(3)				大皿(3)	
碗(1)	皿(2)	大皿(3)	大皿(3)	大皿(3)	大皿(3)	大皿(3)	大皿(3)
a	初期伊万里						
b	底部無軸						
c	高台三角						
d	高台U・高台高						
e	高台U・高台低						
f	薄手半球						
g	くらわんか						
i	小広東						
j	腰張小丸碗						
k	筒形初期						
l	筒形碗						
m	広東碗						
n	端反碗						
o	湯呑碗						
p	飯碗						
q	高台ハ・腰張						
r	朝顔形						
s	幅広高台						
t	うがい茶碗						
u	Id小振り						
v	梅橋文						
w	腰張コンニャク						
x	蛇ノ目軸剥						
a	初期伊万里						
b	ダンバギリ						
c	柿右衛門B						
d	南川原						
e	高台U						
f	腰張・輪花						
g	くらわんか						
h	蛇ノ目初期						
i	蛇ノ目凹高台高						
j	蛇ノ目凹高台低						
k	蛇ノ目底無軸						
l	蛇ノ目高台小						
m	蛇ノ目高台大						
o	器高低・腰張						
p	志田						
q	高台U・輪花						
r	貼付高台						
a	初期伊万里						
b	高台三角・U						
c	高台蛇ノ目軸剥						
e	志田						
a	初期伊万里						
b	高台U						
c	高台蛇ノ目軸剥						

表1 磁器器種(小器種)の出土状況のピーク

JB		JC		
肥前		瀬戸・美濃		
鉢 (5)	d	蛇ノ目凹形		
	e	八角鉢		
	f	高台三角		
	坏 (6)	a	丸碗形	
		b	端反形	
		c	極薄	
		d	腰折・直立	
	e	紅皿		
	f	半球薄手		
	猪口 (7)	a	蛇ノ目凹高台	
		b	輪高台	
		仏飯器 (8)	a	えぐり深
b			えぐり浅	
c	えぐり浅・面取			
香炉・火入れ (9)	a	底円盤状露胎		
	b	底蛇ノ目状露胎		
	c	高台状露胎		
	d	べた底		
瓶 (10)	a	大型長頸瓶		
	e	初期伊万里		
御神酒德利 (11)	a	瓶子形		
	b	鶴首形		
油壺 (12)	a	丸碗形		
	b	筒形		
蓋物 (13)	a	丸碗形		
	b	筒形		
c	段重			
壺・甕 (15)				
急須 (16)				
合子 (18)	a	扁平な球形		
	b	筒形		
水滴 (19)				
蓮華鉢 (20)				
植木鉢 (21)				
花生鉢 (22)				
灰落し (24)				
水注 (27)	a	銚子形		
碗 (1)	a	丸碗		
	c	広東碗		
	d	端反碗		
	e	腰張湯呑		
	f	飯碗		
	皿 (2)	a	蛇ノ目凹形高台	
b		輪高台		
c		蛇ノ目高台		
d		木型打込		
e		陽刻		
爛徳利 (4)				
鉢 (5)				
坏 (6)	a	丸碗形		

東大編年

I b II III a III b IV a IV b V a V b VI a VI b VII VIII a VIII b VIII c VIII d IX

表2 磁器器種 (小器種) の出土状況のピーク

JC		瀬戸・美濃														
東大編年	環(6)	猪口(7)	仏飯器(8)	香炉・火入れ(9)	御神酒德利(11)		油壺(12)	蓋物甕(13)	壺・甕(15)	急須(16)	合子(18)	水滴(19)	蓮華鉢(20)	植木鉢(21)	土瓶(34)	
					a	b										
	b	c	d	e	f	瓶子形	樽首形									
I b																
II																
III a																
III b																
IV a																
IV b																
V a																
V b																
VI a																
VI b																
VII																
VIII a																
VIII b																
VIII c																
VIII d																
IX																

表3 磁器器種(小器種)の出土状況のピーク

TB		TC	
肥前		瀬戸・美濃	
東大編年	碗(1)	碗(1)	碗(1)
	皿(2)	鉢(5)	播鉢(29)
a	呉器手	a	a
b	京焼風外文	b	b
c	京焼風内文	c	c
d	渦巻刷毛・丸	d	d
f	陶胎染付	a	a
g	打刷毛ほか・丸	b	b
h	刷毛・端反	c	c
i	青緑丸碗	d	d
a	青緑釉輪剥	a	a
b	灰釉砂目	b	b
c	京焼風	c	c
d	透明釉砂目	d	d
a	刷毛目	a	a
b	三島手	b	b
c	京焼風	c	c
d	輪剥	d	d
a	陶胎染付	a	a
b	京焼風	b	b
壺・甕(15)			
片口鉢(23)	a	a	a
播鉢(29)	b	b	b
碗(1)	a	a	a
a	天目	a	a
b	白天目	b	b
c	灰釉薄丸碗	c	c
d	御室碗	d	d
f	腰張・有段碗	f	f
g	柳茶碗	g	g
h	太白丸碗	h	h
i	太白筒形	i	i
j	太白広東	j	j
k	凹み有・灰釉	k	k
l	せんじ	l	l
m	京焼風半球	m	m
n	京焼風平碗	n	n
o	尾呂	o	o
p	拳骨茶碗	p	p
q	錆軸斑沈線	q	q
r	鎧茶碗	r	r
s	刷毛目	s	s
u	腰錆碗	u	u
v	半筒掛分	v	v
x	緑釉丸碗	x	x
y	奈良茶碗	y	y
z	端反・折枝梅花	z	z
aa	灰釉丸	aa	aa
ab	太白小丸	ab	ab
ac	凹み・灰錆掛分	ac	ac
ad	黒錆掛分・筒形	ad	ad

表4 陶器器種(小器種)の出土状況のピーク

TC		瀬戸・美濃								
東大編年	碗(1)	皿(2)	鉢(5)	香炉・火入れ(9)	瓶(10)	壺・甕(15)	植木鉢(21)	花生(22)	片口鉢(23)	灰落し(24)
	ee	af	a	b	c	e	c	a	a	a
I b	灰釉緑釉掛分	広東折枝梅花	太白・蛇ノ目凹	輪高台型皿	御深井	石皿	緑釉龍貼付	朝顔形	丸碗形	しのぎ・掛分
II	灰釉直重	灰釉ピン	志野織部	輪高台	長石釉	馬ノ目	水薨・流水文	盤口形	筒形	ハの字形
III a	灰釉直重	灰釉ピン	総織部	太白・輪高台	灰釉直重	菊・外しのぎ	うめぼし	筒形	筒形	ハの字形
III b	灰釉直重	灰釉ピン	把手付灯明皿	太白・輪高台	灰釉直重	菊・外しのぎ無	半開甕・錢甕	筒形	筒形	ハの字形
IV a	灰釉直重	灰釉ピン	柿軸・灯明皿	太白・輪高台	灰釉直重	蘭竹文	織部	筒形	筒形	ハの字形
IV b	灰釉直重	灰釉ピン	ヒダ・灰釉	太白・輪高台	灰釉直重	波状櫛描	らつきょう形	筒形	筒形	ハの字形
V a	灰釉直重	灰釉ピン	輪髻・小振り	御深井	灰釉直重	水盤・春筍底	べこかん	筒形	筒形	ハの字形
V b	灰釉直重	灰釉ピン	菊・外しのぎ	長石釉	灰釉直重	水薨・流水文	舟徳利	筒形	筒形	ハの字形
VI a	灰釉直重	灰釉ピン	蘭竹文	灰釉直重	灰釉直重	うめぼし	一升	筒形	筒形	ハの字形
VI b	灰釉直重	灰釉ピン	輪高台型皿	灰釉直重	灰釉直重	半開甕・錢甕	五合	筒形	筒形	ハの字形
VII	灰釉直重	灰釉ピン	太白・輪高台	灰釉直重	灰釉直重	織部	二合半付掛	筒形	筒形	ハの字形
VIII a	灰釉直重	灰釉ピン	馬ノ目	灰釉直重	灰釉直重	らつきょう形	二合半付掛	筒形	筒形	ハの字形
VIII b	灰釉直重	灰釉ピン	石皿	灰釉直重	灰釉直重	べこかん	二合半付掛	筒形	筒形	ハの字形
VIII c	灰釉直重	灰釉ピン	御深井	灰釉直重	灰釉直重	舟徳利	二合半付掛	筒形	筒形	ハの字形
VIII d	灰釉直重	灰釉ピン	長石釉	灰釉直重	灰釉直重	一升	二合半付掛	筒形	筒形	ハの字形
IX	灰釉直重	灰釉ピン	灰釉直重	灰釉直重	灰釉直重	五合	二合半付掛	筒形	筒形	ハの字形

表5 陶器器種(小器種)の出土状況のピーク

TC		TD		TE		TF
瀬戸・美濃		京都・信楽		備前		志戸呂
灰落し (24)	b	長筒形		皿 (2)	a	皿 (2)
				油受け皿 (40)	a	油受け皿 (40)
鬚水入れ (25)	a	らつきよう		合子 (18)	b	油受け皿 (40)
	b	汁次		壺・甕 (15)	a	壺・甕 (15)
水注 (27)	c	御深井		壺・甕 (15)	a	壺・甕 (15)
				香炉・火入れ (9)	c	油壺 (12)
槽鉢 (29)				坏 (6)		油壺 (12)
				燗德利 (4)		皿 (2)
餌入れ (30)				皿 (2)	a	皿 (2)
				碗 (1)	b	皿 (2)
火鉢 (31)	a	瓶掛		皿 (2)	a	皿 (2)
				碗 (1)	b	皿 (2)
土瓶 (34)				皿 (2)	a	皿 (2)
				碗 (1)	b	皿 (2)
手焙り (38)				皿 (2)	a	皿 (2)
				碗 (1)	b	皿 (2)
油受け皿 (40)	c	脚無・錆釉		皿 (2)	a	皿 (2)
				碗 (1)	b	皿 (2)
油德利 (41)				皿 (2)	a	皿 (2)
				碗 (1)	b	皿 (2)
乗燗 (44)	a	脚付		皿 (2)	a	皿 (2)
				碗 (1)	b	皿 (2)
東大 編年		I b		皿 (2)	a	皿 (2)
		II		皿 (2)	b	皿 (2)
		III a		皿 (2)	a	皿 (2)
		III b		皿 (2)	b	皿 (2)
		IV a		皿 (2)	a	皿 (2)
		IV b		皿 (2)	b	皿 (2)
		V a		皿 (2)	a	皿 (2)
		V b		皿 (2)	b	皿 (2)
		VI a		皿 (2)	a	皿 (2)
		VI b		皿 (2)	b	皿 (2)
		VII		皿 (2)	a	皿 (2)
		VIII a		皿 (2)	b	皿 (2)
		VIII b		皿 (2)	a	皿 (2)
		VIII c		皿 (2)	b	皿 (2)
		VIII d		皿 (2)	a	皿 (2)
		IX		皿 (2)	b	皿 (2)

表6 陶磁器種 (小器種) の出土状況のピーク

DZ	場合(52)												
	i	j	k	m	u	v	w	x	y	z	ea	ah	b
東大編年	板・大柁 泉州麻生	板・泉州 磨生	板・サカイ 泉州磨生御塩所	板・泉州 麻玉	口・擔磨 大極上	口・大極 上壺	口・筒形 ・無印	鉢形・内湾	鉢形・直立	鉢形・碁笥 底	輪・無印	輪・袋状	薄・扁平
I b												●	
II											■		
III a													
III b								●					
IV a	■												
IV b													
V a		●								●			
V b		●				●							
VI a					●								
VI b									●				
VII						■						●	
VIII a													
VIII b													
VIII c													
VIII d													
IX													

表9 土器器種（小器種）の出土状況のピーク

JA1 (景德鎮窯系磁器)



1段目左から御殿 遺構外, 御殿 665, 2段目左から御殿 532, 右は御殿 49, 3段目左から御殿 252, 御殿 532, 工14 SK101

出土量はさほど多くないが、指標遺構では東大編年ⅡからⅥb期、ⅧaからⅧd期に確認される。ピークはⅡからⅣb期、Ⅷ期以降の2回認められ、前半のピーク時には明末の碗(1類)、皿(2類)、鉢(5類)などが、後半のピーク時には清代の碗、坏(6類)、蓮華(20類)などが中心となるようである。

JA2 (漳州窯系磁器)



左から中診 遺構外, 御殿 遺構外, 御殿 678 左下は御殿 遺構外

景德鎮窯系磁器(JA1)よりさらに出土量は少なく、指標遺構では東大編年ⅡからⅢa期、Ⅳ期に散見される程度で、色絵の皿(2類)や大皿(3類)が大半である。

JA3 (徳化窯系磁器)



左から中診 遺構外, 工14 SK293

出土量は極めて少なく、指標遺構ではⅧa期、Ⅷc期、Ⅸ期の各1遺構で確認されるのみであり、それらはいずれも小振りの色絵碗(1類)である。指標遺構以外では、分類(1)で提示した東大編年Ⅷ期に比定される工14のSK293で確認されるが、やはり小振りの色絵碗である。

JA4 (龍泉窯系磁器)



1段目右は看宿 SK299, それ以外は全て中診 L32-1

指標遺構では東大編年Ⅲb期の1遺構のみで確認され、大皿(3類)、鉢(5類)、盤などが出土している。指標遺構以外では、分類(1)で提示した天和2(1682)年の火災一括資料と報告される看宿SK299^{註1}、でまとまって確認されている。この遺構からはほかに朝鮮(A6)、ベトナム(A7)、ヨーロッパ(A8)などの12世紀から17世紀の輸入陶磁器も多数出土しているほか、肥前系磁器(JB)の底部無釉碗、高台断面の形状が三角形を呈す碗(1-b, c)、初期伊万里の皿、高台断面の形状が三角形を呈す皿(2-a, c)、輪積成形で「ミナと藤左衛門」の刻印がある塩壺(DZ-51-a)などが共伴する。

JA6 (朝鮮の磁器)



1 段目左は御殿 192, 右は看宿 SK299, 2 段目は御殿 590

出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構ではⅧ a 期に比定される工 1 の SK01 で報告されているが、器種は不明である。指標遺構以外では、分類 (1) で提示した御殿 192 号遺構や 590 号遺構、看宿 SK299^{註1} などから碗 (1) が出土している。看宿 SK299 出土資料は天和 2 (1682) 年の火災一括資料と報告されているもので、いわゆる斗々屋茶碗、蕎麦茶碗、高麗筒茶碗をはじめ、中国の建盞、青磁の天目台、香炉、硯屏などの輸入陶磁器や、肥前系磁器 (JB) の底部無釉碗、高台断面の形状が三角形を呈す碗 (1-b, c)、初期伊万里の皿、高台断面の形状が三角形を呈す皿 (2-a, c)、輪積成形で「ミナと藤左衛門」の刻印のある塩壺 (DZ-51-a) などが共伴する。

JA8 (ヨーロッパの磁器)



1 段目左および右下は給水 AL37-1, 2 段目 左下は中診 遺構外

出土量は極めて少なく、指標遺構では東大編年Ⅸ期に比定される給水 AL37-1 で皿 (2 類)、鉢 (5 類) が確認されている。指標遺構以外では工 14 の SK66, SK200 で碗 (1 類)、SK101 で皿 (2 類) と坏 (6 類) が確認されているが、これらの遺構はいずれも瀬戸・美濃系磁器 (JC) が共伴する遺構である。

JB (肥前系磁器)

JB-1-a



(御殿 532)

高台断面の形状が幅広の「U」字状を呈する、いわゆる初期伊万里の碗を本類とした。指標遺構では東大編年ⅡからⅣ b 期、Ⅵ b 期に確認されるが、ピークはⅡからⅢ a 期にある。なお 1-a は東大編年Ⅱ期の指標陶磁器の 1 つである。

JB-1-b



(御殿 532)

底部無釉の碗を本類とした。指標遺構では東大編年ⅡからⅣ a 期に確認されるが、出土量は 1-a ほど多くはない。ピークは東大編年ⅡからⅢ a 期にある。なお 1-b は東大編年Ⅱ期の指標陶磁器の 1 つである。

JB-1-c



(御殿 678)

高台断面の形状が三角形を呈す碗を本類とした。長吉谷窯の製品を指標とする。指標遺構では東大編年ⅡからⅥ a 期、Ⅷ a 期に確認されるが、そのピークはⅢ期にある。なお 1-c は東大編年Ⅲ a 期の指標陶磁器の 1 つである。

JB-1-d



(中診 F34-11)

高台断面の形状がシャープな「U」字状を呈し、高台高が高い碗を本類とした。波佐見の高尾窯物原IV～VI層の製品を指標とする。蓋を伴う例もある。指標遺構では東大編年Ⅲ b からⅥ a 期に確認されるが、ピークはⅣ期にある。1-d は東大編年Ⅳ a 期の指標陶磁器の1つであるが、Ⅳ a 期に比定される中診 F34-11 のように、1-d が出土した肥前系磁器碗 (JB-1) の8割近くをしめる例は、ほかには確認されていない。

JB-1-e



(中診 F33-3)

高台断面の形状がシャープな「U」字状を呈し、高台高が低い碗を本類とした。蓋が伴う例もある。指標遺構では東大編年Ⅳ a からⅥ b 期、Ⅷ b からⅨ期に確認される。ピークはⅣ a からⅤ a 期にある。

JB-1-f



(中診 G20-2)

高台径の小さい半球形の薄手碗を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅳ a からⅨ期に確認されるが、ピークはⅤからⅥ期にある。Ⅴ期のものは比較的器高が高く、文様も草花文などが全面に丁寧に描かれたものが多いが、Ⅵ期以降は器高が低く、1つの文様が繰り返される単純なものになる。

JB-1-g



(中診 L34-1)

絵付や作りが下手な、いわゆるくらわんか碗を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅳ a からⅧ c 期、Ⅸ期に確認されるが、東大構内遺跡の大半が大名屋敷跡であるためか、出土量はそれほど多くない。ピークはⅤ a からⅥ a 期か。なお 1-g は東大編年Ⅴ a 期の指標陶磁器の1つである。

JB-1-i



(設備 AE35-3)

高台高が高い、いわゆる小広東碗を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅵ b からⅧ c 期に確認されるが、ピークはⅥ b からⅦ期にある。なお 1-i は東大編年Ⅵ b 期の指標陶磁器の1つである。Ⅵ b 期のものは体部にやや丸みをもち、高台内に銘を有するものが認められるが、Ⅶ期には体部の丸みはなくなり、高台内の銘もあまり認められない。また主文様も肥前系磁器のいわゆる広東碗 (JB-1-m) にみられるような捻子花文、梵字文、連鎖文などが施されたものが多くみられる。

JB-1-j



(御殿 245)

高台径が小さい腰の張る碗で、いわゆる小丸碗を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅴ a からⅧ c 期とⅨ期に認められるが、ピークはⅥ b からⅧ a 期にある。なお 1-j は東大編年Ⅵ a 期の指標陶磁器の1つである。Ⅵ a 期のものは体部がほぼ垂直に立ち上がるものが大半であるが、時代が下ると体部が若干内傾し、器高も低くなる傾向がうかがえる。見込みの文様も当初は二重圏線に五弁花文というパターンが比較的多いが、次第に五弁花文以外の様々な文様が認められるようになる。なお東大構内遺跡以外では、尾張Ⅶの 135-2T-12^{註3} で肥前系磁器 (JB) の梅樹文碗 (1-v)、見込みにコンニャク印判による絵付が施された皿 (2-e)、京都・信楽系陶器半球形碗 (TD-1-b) などと共伴しており、東大構内遺跡においても本製品の初限がもう少し上がる可能性もある。

JB-1-k



(御殿 532)

いわゆる初期伊万里の、大振りの筒形碗を本類とする。出土量、出土遺構は少なく、指標遺構では東大編年ⅡからⅢ a 期、Ⅳ b 期、Ⅴ a 期、Ⅴ b 期、Ⅵ a 期に散見される。ピークはⅡからⅢ a 期か。なお 1-k は東大編年Ⅱ期の指標陶磁器の 1 つである。

JB-1-l



(中診 E22-1)

初期伊万里の筒形碗 (JB-1-k) 以外の筒形碗を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅴ b からⅧ c 期、Ⅸ期に確認されるが、ピークはⅥからⅦ期にある。なお 1-l は東大編年Ⅴ b 期の指標陶磁器の 1 つである。Ⅴ b 期のものは体部がほぼ直立し大振りであるが、時代が下ると体部が若干内傾し、器高が低くなる。見込みの文様も当初は五弁花文以外に環状松竹梅文などもみられるが、次第に五弁花文のみとなり、やがてはその五弁花文もかなりつぶれたものとなる。また底裏付近の文様もⅤ b 期以降はほぼみられないようである。

JB-1-m



(給水 AJ37-3)

いわゆる広東碗を本類とした。蓋を伴う例が多い。指標遺構では東大編年ⅦからⅧ c 期、Ⅸ期に確認されるが、ピークはⅦからⅧ a 期にある。なお 1-m は東大編年Ⅶ期の指標陶磁器の 1 つである。Ⅶ期には見込みに丁寧なワンポイントの文様が描かれたものが多いが、時代が下ると、文様が簡略化あるいは省略されるものも看取されるようになる。また高台内の銘も時代が下るとみられなくなる。

JB-1-n



(中診 H21-1)

端反形碗を本類とした。蓋を伴う例が多い。指標遺構ではⅧ a からⅨ期に確認されるが、ピークはⅧ a からⅧ b 期にある。出土量は瀬戸・美濃系磁器端反形碗 (JC-1-d) の方が圧倒的に多い。なお 1-n は東大編年Ⅷ a の指標陶磁器の 1 つである。

JB-1-o



(中診 2号組石)

腰が張り、体部が直立する小振りの碗で、いわゆる湯呑碗を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅷ a からⅨ期に確認されるが、ピークはⅧ b 期以降か。端反形碗 (1-n) と同じく、瀬戸・美濃系磁器湯呑碗 (JC-1-e) の方が出土量は多い。なお 1-o は東大編年Ⅷ b 期の指標陶磁器の 1 つである。

JB-1-p



(中診 H21-1)

高台から直線的に開く薄手の碗を本類とした。蓋を伴う例もある。1-p に施される文様は、清朝磁器の影響を受けたような細線描きのものが多い。出土量はあまり多くなく、指標遺構では東大編年Ⅷ b 期のみで確認され、それ以外ではⅧ b 期に比定される外来 SK81、工 14 の SK200 などで出土している。なお SK200 では、瀬戸・美濃系磁器 (JC) の端反形碗 (1-d)、器厚がごく薄い上絵付^{註4}が施された坏 (6-d)、クロム青磁の輪高台皿 (2-b) などと共伴する。

JB-1-q



(中診 H21-1)

高台が「ハ」の字状に開き、大振りで腰が張る碗を本類とした。蓋を伴う例が多い。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年Ⅶ b 期、Ⅷ a からⅧ b 期に確認される。指標遺構以外では、東大編年Ⅶ期に比定される工 14 の SK330 で出土している。

JB-1-r



(工14 SK307)

体部が朝顔形を呈す碗を本類とした。蓋を伴う例が多い。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅷ a 期、Ⅷ b 期の各 1 遺構のみで確認される。指標遺構以外では、東大編年Ⅶ 期に比定される工 14 の SK330、SK307 など確認される。SK307 は肥前系磁器広東碗 (JB-1-m) を含まず、京都・信楽系陶器半球形碗 (TD-1-b)、瀬戸・美濃系陶器水甕 (TC-15-c) などが出土する遺構であり、将来的に 1-r の初現はⅧ a 期より上がる可能性がある。

JB-1-s



(工 1 SK01)

畳付の幅が広い高台を有す碗を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅷ a 期、Ⅷ b 期、Ⅸ 期の各 1 遺構のみで確認される。指標遺構以外では東大編年Ⅷ b 期に比定される外来 SE271、Ⅷ c 期に比定される外来 SK166、工 14 の SU2 で確認される。

JB-1-t



(中診 F34-11)

体部が直線的に開き、内側に主文様のある大振りの碗で、いわゆるうがい茶碗を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年Ⅲ b からⅣ b 期、Ⅴ b 期、Ⅵ a 期に確認される。ピークはⅣ 期か。

JB-1-u



(家畜 SK09)

JB-1-d のやや小振りの碗を本類とした。文様はいわゆるコンニャク印判によるものが多い。指標遺構では東大編年Ⅳ a 期からⅤ b 期、Ⅵ b 期、Ⅷ b 期に確認されるが、ピークはⅣ b からⅤ a 期にある。なお 1-u は東大編年Ⅳ b 期の指標陶磁器の 1 つである。

JB-1-v



(中診 F33-3)

外面に梅樹文が描かれた粗製の碗を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅴ a からⅥ a 期、Ⅷ a 期に確認されるが、ピークはⅤ 期か。時代が下ると矮小化し、絵付も雑になる傾向がある。なお 1-v は東大編年Ⅴ a 期の指標陶磁器の 1 つである。

JB-1-w



(中診 L34-1)

高台径が大きい、腰の張る碗を本類とした。文様はいわゆるコンニャク印判のものが多い。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅴ a 期、Ⅴ b 期、Ⅵ a 期、Ⅷ a 期の各 1 遺構のみで確認される。

JB-1-x



(外来 SU143)

見込み蛇ノ目釉剥ぎされた粗製の碗を本類とした。出土量は少なく、指標遺構では東大編年Ⅴ a 期、Ⅷ a 期に散見される。指標遺構以外では設備 AE35-11、外来 SU143 で確認される。AE35-11 では肥前系磁器小丸碗 (JB-1-j)、京都・信楽系陶器小杉碗 (TD-1-d) など、外来の SU143 では瀬戸・美濃系陶器水盤 (TC-5-f)、京都・信楽系陶器筒形碗 (TD-1-j) などと共伴する。なお SU143 から出土した筒形碗には、享保 13 (1730) 年の歴注が描かれている。

JB-2-a



(御殿 532)

いわゆる初期伊万里で、高台断面の形状が幅広い「U」字状を呈す皿を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅱ期からⅤa期、Ⅵa期、Ⅶ期、Ⅷc期、Ⅸ期に確認されるが、ピークはⅡからⅢa期にある。なお2-aは東大編年Ⅱ期の指標陶磁器の1つである。

JB-2-b



(理1号井戸)

高台断面の形状が三角形を呈し、高台径が小さい皿を本類とした。ダンバギリ窯の製品を指標とする。指標遺構では東大編年ⅡからⅣa期、Ⅷa期に確認されるが、ピークはⅢa期にある。なお2-bは東大編年Ⅲa期の指標陶磁器の1つである。

JB-2-c



(御殿 678)

高台断面の形状が三角形を呈し、高台径が大きい皿を本類とした。柿右衛門B窯などの製品を指標とする。指標遺構では東大編年ⅡからⅥa期、ⅦからⅧa期、Ⅷc期、Ⅸ期に確認されるが、ピークはⅢbからⅣa期にある。なお2-cは東大編年Ⅲb期の指標陶磁器の1つである。

JB-2-d



(中診 F34-11)

高台断面の形状がシャープな「U」字状を呈す、上手の皿を本類とした。南川原窯ノ辻窯の製品を指標とする。指標遺構では東大編年ⅢbからⅥa期、Ⅷa期、Ⅷc期に確認されるが、ピークはⅢbからⅣa期か。いわゆる高級磁器とされるもので、1遺構からの出土量は多くないが、天和2(1682)年の火災一括資料と考えられる病棟C2層^{註1}、出土資料では、比較的多くの2-dが確認されている。病棟C2層では肥前系磁器(JB)の高台断面の形状が三角形を呈す碗、初期伊万里筒形碗(1-c、k)、高台断面の形状が三角形を呈す皿(2-b、c)などが共伴する。

JB-2-e



(御殿 537)

高台断面の形状がシャープな「U」字状を呈す皿を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅲb期以降、全段階で確認されるが、ピークはⅣa期からⅥa期にある。

JB-2-f



(中診 F33-3)

やや器高が深く、腰が張り、その多くは口縁部が輪花に成形される皿を本類とした。指標遺構では東大編年ⅣbからⅧb期に確認されるが、ピークはⅤ期にある。器形の変化をみると、高台高が高く、高台の断面形状がきれいなU字状を呈していたものから、Ⅵa期以降、高台高の低い、高台の断面形状がやや雑なU字状を呈すようになる。またそれに伴って口縁部の輪花も、次第に大きく緩やかなものになる傾向がある。

JB-2-g



(中診 2号組石)

絵付や作りが粗雑で下手な皿を本類とした。内面には扇面文様などが施されるものが多い。指標遺構では東大編年Ⅳ b からⅧ c 期とⅨ期に確認されるが、東大構内遺跡では出土量がそれほど多いものではなく、1遺構から複数の2-gが確認できる指標遺構は、Ⅶ期に比定される法E7-3号土坑、Ⅷ a 期に比定される工1のSK01の2遺構のみである。ピークはⅤからⅦ期か。高台内の銘はⅤ期の段階では崩れた「大明年製」、Ⅵ期以降は枠無しの「渦福」、Ⅶ期以降は枠無しの「渦福」がさらに崩れ、本来の銘がわからないようなものになる。

JB-2-h



(御殿 532)

いわゆる初期伊万里で、蛇ノ目高台を有す皿を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年ⅡからⅣ a 期に確認され、ピークはⅡからⅢ a 期にある。なお2-hは東大編年Ⅱ期の指標陶磁器の1つである。

JB-2-i



(中診 H21-2)

蛇ノ目凹形高台を有し、高台高が高い皿を本類とした。指標遺構では東大編年ⅦからⅧ c 期、Ⅸ期に確認されるが、ピークはⅧ a からⅧ b 期にある。体部は輪花に成形されたものが大半であるが、施文のパターンは大きく2つに分けられる。1つは見込みに一枚絵、もう1つは見込みに環状松竹梅文などのワンポイントと内側面に唐草などを配したパターンのものである。見込みに一枚絵を配したものは裏文様が次第になくなり、見込みにワンポイントが施されたものは、裏文様の唐草文が残る傾向がある。高台内の銘はⅦ期あたりの一部のものに認められる程度で、大半のものにはみられない。

JB-2-j



(御殿 233)

蛇ノ目凹形高台を有し、高台高が低い皿を本類とした。前述した2-iより先行し、指標遺構では東大編年Ⅴ a からⅨ期に確認されるが、ピークはⅦからⅧ a 期にある。なお2-jは東大編年Ⅴ b 期の指標陶磁器の1つである。Ⅵ b 期までは見込みに五弁花文や環状松竹梅文などを、内側面に唐草などの文様を配し、裏文様には崩れた如意唐草文が施されるもののみであるが、ⅦからⅧ a 期には大きく3タイプのもので認められる。すなわち1つは出現期の様相を引き継いだもの、2つ目は見込み中央部分にのみ一枚絵、外面に青磁釉が施釉されたもの、3つ目は内面全体に一枚絵が描かれ、裏文様には幾何学文様が数箇所配されるものである。また器形も多様化し、体部が丸みを帯びた天目形を呈すもの、体部は丸形、口縁部が外反し、玉縁状を呈すものなども認められる。

JB-2-k



(設備 Z35-5)

見込みが蛇ノ目釉剥ぎされ、底部無釉の皿を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅲ a からⅧ a 期、Ⅷ c 期に確認されるが、ピークはⅢ a からⅣ a 期にある。Ⅲ期のものは高台高が比較的高く、高台断面の形状が逆台形を呈すが、時代が下ると高台高は低くなり、高台断面の形状がU字状を呈すようになる。また管見の限り、口縁部が外反するものはⅢ期にのみ確認される。なお見込み蛇ノ目釉剥ぎされた周囲に染付が施されるタイプも、数量的には多くないがⅢ a 期に確認される。

JB-2-l



(外来 SK174)

見込みが蛇ノ目釉剥ぎされ、高台径が小さい皿を本類とした。内面には斜格子文が施されるものが多い。前述した2-kに後続して確認されるもので、指標遺構では東大編年Ⅴ a からⅥ b 期、Ⅷ a 期、Ⅷ b 期に確認されるが、ピークはⅥ期にある。Ⅴ期には2-Kと共伴する例も確認される。

JB-2-m



(外来 SK402)

見込みが蛇ノ目釉剥ぎされ、高台径が大きい皿を本類とした。内面には梅花繋ぎ文が施されるものが多い。指標遺構では東大編年V aからVIII c期、IX期に確認される。ピークはVIからVII期か。VI a期に比定される外来 SK152やVIII a期に比定される工1のSK01のように、遺物総量が多い遺構では比較的多く出土しているが、一般的に1遺構からの出土量はさほど多くない。指標遺構以外では、元禄16(1703)年の火災一括資料と報告される外来SU2でも1点確認されており、初現はV a期よりも少し上がる可能性もある。主文様をみるとV b期までは見込みに五弁花文と格子状文の組み合わせのもの、見込みに五弁花文と唐草文を組み合わせたものなど数パターン確認されるが、それ以降は五弁花文と唐草文を組み合わせただけのものになる傾向がうかがえる。また裏文様もVI a期ごろまでは松葉文や、かなり崩れた唐草文のようなものがみられるが、VII期以降はほとんどみられない。

JB-2-n



(工14 SK292)

鍋島を本類とした。いわゆる高級磁器とされるものであり、東大構内遺跡においても出土量は極めて少ない。指標遺構ではV a期とIX期の各1遺構のみで確認され、それ以外では設備AE36-4、給水AJ34-2、東大編年VIII期に比定される工14のSK292などで出土している。しかしIV期のAL37-1やSK292のものを除けばいずれも細片である。

JB-2-o



(中診 H21-2)

器高が低く、腰が張る皿を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年VIIからVIII b期に確認される。ピークはVIIからVIII a期か。口縁部が輪花にされるものと、そうでないものとある。絵付で多いのは見込みにワンポイントと内側面に帯状の文様、裏文様に簡略化された如意頭唐草文が配されたものである。

JB-2-p



(工14 SU176)

志田窯の製品を指標とする皿を本類とした。浅手で、口縁部は外反し、緩やかな輪花に成形され、縁文様に墨弾きで雲形文などが施されるものが多い。口径が20cm以上のものが大半であり、平均的なJB-2より一回り以上大きい。指標遺構では東大編年VIII b期のみで確認され、それ以外では給水AK37-1、分類(1)で提示した東大編年IV bからV期、VIII aからVIII b期に比定される工14のSU176などで確認される。ちなみにAK37-1では肥前系磁器端反形碗(JB-1-n)などと共伴する。

JB-2-q



(中診 H21-1)

高台断面の形状が「U」字状を呈し、口縁部が輪花に成形され、見込み全面に一枚絵が施される事が多い皿を本類とした。東大編年VIIからIX期に確認されるが、ピークはVIII bからVIII c期にある。裏文様はないものも多く、主文様は前述のように内面全面に山水文などの一枚絵が描かれるものや、見込みに環状松竹梅文などのワンポイントを施し、その周囲に帯状に文様を配するパターンのものである。なお文様のパターンなどをみると、肥前系磁器(JB)の蛇ノ目凹形高台で、高台高が高い皿(2-i)と共通するものが多いこと、高台の作りを除くと器形、文様が全く同じというものも多いことなどから、2-iの小型化したものと考えられる。

JB-2-r



(理 1号井戸)

糸切細工によって高台が貼り付けられた皿を本類とした。出土量はさほど多くないが、指標遺構では東大編年II期からV b期、VIII a期、IX期に確認される。ピークはIII期か。

JB-3-a



(設備 Y48-1)

いわゆる初期伊万里の大皿を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年ⅡからⅣ a 期、Ⅴ a 期、Ⅵ a 期に確認される。ピークはⅡからⅢ a 期にある。Ⅲ a 期の指標遺構である御殿 678 号遺構では大皿 (3 類) がまとまって出土しており、その中心は 3-a である。

JB-3-b



(中診 E22-1)

高台断面の形状が三角形、あるいは「U」字状の高台を有す大皿を本類とした。指標遺構では東大編年ⅡからⅥ b 期、Ⅷ a からⅧ c 期に確認されるが、ピークはⅢからⅣ期にある。なお指標遺構以外では、文政 8 (1825) 年の梅之御殿廃絶に関連する遺構と報告される御殿 1 号遺構において、3-b を中心に大皿が多数出土し、瀬戸・美濃系陶器石皿 (TC-2-f)、いわゆる貧乏徳利 (10-c、d、e)、施釉された油受け皿やひょうそく (DZ-40-a、b、44-b) などと共伴している。

JB-3-c



(理 1 号土坑)

高台内が蛇ノ目釉剥ぎされた大皿を本類とした。出土量はあまり多くなく、指標遺構では東大編年Ⅲ a からⅣ a 期に確認される。ピークはⅢ期か。3-c は大半が青磁製品で、見込みに陰刻が施されるものが多い。

JB-3-d



(中診 K30-1)

蛇ノ目凹形高台を有す大皿を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、管見の限り東大構内遺跡では東大編年Ⅲ a 期とⅣ b 期の各 1 遺構のみで確認される。3-c 同様、見込みに陰刻が施された青磁製品が多い。

JB-3-e



(工14 SU295 上)

口縁部が外反し、緩やかな輪花に成形された、浅手の大皿を本類とした。志田窯の製品を指標とする。緑文様に墨弾きで雲形文などが施されるものが多い。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅷ b 期とⅧ d 期の各 1 遺構のみで確認される。指標遺構以外では、Ⅷ b 期に比定される外来 SE271、分類 (1) で提示した工 14 の SU295 上などで確認される。なお工 14 の SU295 上では、肥前系磁器 (JB) の蛇ノ目凹型高台皿 (2-i、j) や瀬戸・美濃系磁器 (JC) の端反形碗、湯呑碗 (1-d、e) などと共伴する。

JB-4



(中診 H21-1)

燗徳利を本類とした。出土量は少なく、指標遺構では東大編年Ⅷ b からⅧ c 期、Ⅸ期に確認される。

JB-5-a



(御殿 678)

高台断面の形状が幅広の「U」字状を呈す、いわゆる初期伊万里の鉢を本類とした。出土量、出土遺構ともにあまり多くなく、指標遺構では東大編年ⅡからⅢ a 期、Ⅳ a 期に確認されるが、ピークはⅡからⅢ a 期にある。

JB-5-b



(中診 E34-1)

高台断面の形状がシャープな「U」字状を呈す鉢を本類とした。指標遺構では東大編年ⅡからⅧc期、Ⅸ期に確認されるが、ピークはⅢaからⅣa期、ⅥbからⅧb期の2回ある。この2回あるピークは成瀬・堀内が大皿がまとまって出土すると指摘する17世紀中葉、18世紀末から19世紀前半と概ね重なるもの(成瀬・堀内1998)であり、5-bの使用の場や用途を考える上で注目される。文様構成をみると、外面に主文様、内面は見込みにワンポイントと口縁部に帯文様や圏線があるもの、内面に主文様があり、外面に唐草文などが巡らされるものなどがある。

JB-5-c



(中診 J31-1)

高台内が蛇ノ目釉剥ぎされた鉢を本類とした。青磁製品が多いようである。出土量はあまり多くなく、指標遺構では東大編年ⅢaからⅤa期、Ⅷa期に確認されるが、ピークはⅢ期にある。見込みに陰刻文や浮文が施されたものが多く、蛇ノ目釉剥ぎ部分に鉄(鉄漿?)が施されるものもある。

JB-5-d



(御殿 1)

蛇ノ目凹形高台を有す鉢を本類とした。出土量は少なく、指標遺構では東大編年Ⅴb期、ⅧaからⅧd期に確認されるが、ピークはⅧb期以降か。

JB-5-e



(中診 2号組石)

いわゆる八角鉢を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年ⅧaからⅧc期に確認される。ピークはⅧ期b以降か。

JB-5-f



(御殿 678)

高台断面の形状が三角形を呈す鉢を本類とした。指標遺構では東大編年ⅢaからⅥa期、ⅦからⅧa期に確認されるが、ピークはⅢ期にある。

JB-6-a



(中診 F34-11)

体部が丸形を呈す杯を本類とした。指標遺構では東大編年ⅡからⅨ期に確認されるが、ピークはⅣからⅤ期、ⅧaからⅧb期の2回ある。Ⅳa期までは端反形杯(6-b)より出土量は少ない。

JB-6-b



(中診 F34-11)

口縁部が外反する杯を本類とした。指標遺構では東大編年ⅡからⅧb期、Ⅸ期に確認されるが、ピークはⅢからⅣ期にある。

JB-6-c



(中診 H21-1)

器厚が極めて薄い杯を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅷ a からⅨ期に確認される。ピークはⅧ a からⅧ b 期か。なお上絵付^{註4}されたものが確認されるのはⅧ c 期以降のようである。

JB-6-d



(中診 G20-2)

高台脇で腰が折れ、体部が直線的に開く杯を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年Ⅲ b からⅤ a 期、Ⅸ期に確認される。

JB-6-e



(工14 SK293)

型作りされ、外面に菊花状ののしがみられる杯を本類とした。いわゆる紅皿である。出土量はあまり多くはないが、指標遺構では東大編年Ⅴ期、Ⅵ b 期、Ⅷ a 期に確認される。ピークはⅤ期か。なお東大構内遺跡以外では、飯田町の堀跡^{註5}において肥前系磁器 (JB) の初期伊万里碗、皿 (1-a、2-a)、輪積成形で「ミなど藤左衛門」の刻印のある塩壺 (DZ-51-a)、輪積成形で、二重枠「天下一堺ミなど藤左衛門」の刻印のある塩壺 (51-c) などと 6-e が共存することが報告されている。

JB-6-f



(中診 H21-1)

高台径が小さく、体部が半球形を呈す薄手の杯を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅳ a からⅧ d 期に確認されるが、ピークはⅤ期にある。

JB-7-a



(設備 X36-1)

底部が蛇ノ目凹形高台状を呈す猪口を本類とした。後述する底部が輪高台状の猪口 (7-b) に比べて出土量、出土遺構ともに少ない。指標遺構では東大編年Ⅳ a 期、Ⅷ a からⅧ c 期、Ⅸ期に確認されるが、Ⅳ a 期に比定される F34-11 で確認されているものは、Ⅳ a 期に比定される他の遺構で出土例が確認されないこと、またそれに続く段階の遺構にも認められないことから、サンプリングエラーの可能性が高い。ただし東大構内遺跡以外では、飯田町の 735 号遺構^{註6}で肥前系磁器 (JB) の広東碗 (1-m)、高台が「ハ」の字状に開く碗 (1-q) などと共存している。735 号遺構出土資料には瀬戸・美濃系磁器 (JC) が含まれていないと報告されており、今後、東大構内遺跡においても 7-a の初現がⅧ a 期より上がる可能性もある。

JB-7-b



(中診遺構外)

底部が輪高台状の猪口を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅲ a からⅨ期に確認されるが、ピークはⅤ a からⅥ a 期にある。Ⅲ a からⅣ b 期のもは、体部が直線的に外側へ大きく開き、底径と口径の差が大きなものが多いが、Ⅴ a 期以降、体部が外側へ開き気味に立ち上がり、底径と口径の差が小さくなる。また高台内のケズリが浅くなる傾向がある。

JB-8-a



(御殿 255a)

脚部の畳付部分が深く削り込まれた仏飯器を本類とした。出土量はあまり多くなく、指標遺構では東大編年Ⅲ a からⅣ a 期に確認される。

JB-8-b



(中診 D33-1)

脚部の畳付部分が浅く削り込まれた仏飯器を本類とした。畳付部分が深く削り込まれた仏飯器(8-a)と同じく出土量はあまり多くなく、指標遺構では東大編年Ⅲ aからⅤ b期、Ⅷ a期に確認される。ピークはⅣ期か。

JB-8-c



(中診 H21-1)

脚部の畳付部分が浅く削り込まれ、その外周が面取りされている仏飯器を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅲ aからⅧ b期、Ⅸ期に確認され、肥前系磁器の仏飯器(JB-8)で最も長い期間確認されるものである。ピークはⅥ aからⅧ a期か。

JB-9-a



(理1号井戸)

底裏に円盤状の露胎部のある香炉・火入れを本類とした。出土量、出土遺構ともに多くないが、指標遺構では東大編年Ⅲ aからⅣ a期、Ⅷ b期に確認される。

JB-9-b



(中診 H32-5)

底裏に蛇ノ目状の露胎部のある香炉・火入れを本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年Ⅲ bからⅤ b期、Ⅵ b期に確認される。多くが青磁製品であり、露胎部分に鉄釉を施釉しているものもある。

JB-9-c



(中診 L34-2)

底裏に高台状の露胎部のある香炉・火入れを本類とした。出土量は少ないが、指標遺構では東大編年Ⅲ aからⅤ b期、Ⅷ a期に確認される。底裏に円盤状の露胎部のある香炉・火入れ(9-a)や底裏に蛇ノ目状の露胎部のある香炉・火入れ(9-b)とともに、東大構内遺跡ではⅤ b期以降の出土例は少なくなるようである。

JB-9-d



(工14 SU327)

底裏が平らで、無高台、無足の香炉・火入れを本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅷ a期のみで確認される。指標遺構以外では、分類(1)で提示した工14のSU327で確認されており、肥前系磁器(JB)の高台断面の形状がシャープな「U」字状を呈し、高台高が高い碗(1-d)、いわゆる八角鉢(5-e)、山水土瓶(TZ-34-c)などと共伴する。

JB-10-a



(御殿焼土溜まり)

大型の長頸瓶を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年ⅡからⅤ b期、Ⅵ b期、Ⅷ b期、Ⅸ期に確認される。ピークはⅢ bからⅣ b期か。

JB-10-e



(御殿 802)

いわゆる初期伊万里の瓶を本類とした。口縁部が朝顔形に開くタイプが多い。指標遺構では東大編年ⅡからⅣ a 期とⅨ期に確認されるが、ピークはⅡからⅢ a 期にある。

JB-11-a



(Ⅰ14 SK3)

体部が瓶子形を呈す御神酒徳利を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅷ a からⅧ b 期とⅨ期のみで確認される。指標遺構以外では、Ⅷ c 期に比定される外来SK166やⅠ14のSU2などでも確認されるが、今のところⅧ a 期以前には確認されていない。

JB-11-b



(Ⅰ14 SU396)

頸部が鶴首状を呈す御神酒徳利を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅴ b からⅨ期に確認されるが、ピークはⅧ a 期以降、近代にかけてである。Ⅶ期ごろまでは草花文などが頸部から胴部全体に施文され、絵付も比較的細く小さされるが、Ⅷ a 期以降は文様が単純化する傾向がある。例えば3本線で表現された草文、ベタ塗りの丸文5つを配しただけの梅花文、体部上半が蜻唐草で下半は縦線を帯状にめぐらせただけのものとなる。なお胴部に「御神酒」と染付されたものも確認される。

JB-11-c



(中診 K30-1)

体部が筒形を呈す御神酒徳利を本類とした。JB-11の中でも出土量、出土遺構ともに最も少なく、東大構内遺跡ではⅣ b 期とⅧ b 期の各1遺構のみで確認される。Ⅳ b 期に比定される中診K30-1出土のものは、文様も一般的にみられるような蜻唐草ではなく、胴部に圏線が数条めぐり、肩部には花卉のようなものが描かれ、頸部もやや長めのものであり、Ⅷ b 期以降に一般的にみられるものとは異なる。本小器種初現と考えるのか、あるいは別系統の瓶として扱った方がよいのかは、今後の検討課題である。

JB-12



(中診 F34-11)

油壺を本類とした。出土量は多くはないが、指標遺構では東大編年ⅡからⅧ b 期に確認され、ピークはⅣ a からⅤ a 期にある。Ⅳ b 期あたりまでは頸部が長く、胴部は算盤玉に近い形状を呈すが、それ以降は頸部が次第に短くなり、胴部も張り出しが小さく丸みを帯びた形状になる。絵付もⅣ b 期あたりまでは比較的色絵のものがみられるが、それ以降は染付されたものが多いようである。

JB-13-a



(Ⅰ14 SK200)

体部が丸形を呈す蓋物を本類とした。蓋物の中ではもっとも多くみられるタイプであり、指標遺構では東大編年Ⅲ b 期以降全段階で確認される。ピークはⅣ a からⅤ a 期、Ⅷ a からⅧ b 期の2回あるようである。

JB-13-b



(御殿 537)

体部が筒形を呈す蓋物を本類とした。丸形蓋物(13-a)ほど出土量は多くはないが、指標遺構では東大編年Ⅲ b 期以降全段階で確認される。ピークはⅣ a からⅤ a 期か。

JB-13-c



(中診 H21-2)

重箱状に重ねられた蓋物を本類とした。出土量、出土遺構はともに少ないが、指標遺構では東大編年Ⅳ a 期からⅤ b 期、Ⅵ b からⅨ期に確認される。ピークはⅧ期か。なお病棟 D2 層^{註1}では、肥前系磁器 (JB) の初期伊万里の碗、底部無釉碗 (1-a, b) などと初期色絵の 13-c が相伴しており、将来的に 13-c の初現が上がる可能性がある。

JB-15



(御殿 537)

壺・甕を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅲ a からⅦ期、Ⅷ b からⅧ c 期に確認されるが、ピークはⅢ b からⅣ b 期にある。特にⅢ b 期に比定される病棟 D 面焼土^{註1}からは様々な器形の JB-15 が出土している。Ⅳ a 期までは最大径が胴部にあるものと肩部にあるものが認められるが、以降は肩部にあるものに画一化されていくようである。なお天和 2 (1682) 年の火災一括資料とされる医研 SD246^{註1}からは白磁の JB-15 が多量に廃棄されている状況が確認されている。

JB-16



(給水 AL37-1)

急須を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では東大編年Ⅷ a 期、Ⅷ d 期、Ⅸ期の各 1 遺構のみで確認される。指標遺構以外では明治中葉に比定される工 14 の SK358 で確認されており、ピークはⅧ d 期以降、近代にあると思われる。

JB-18-a



(中診 F34-11)

体部が扁平な球形を呈す合子を本類とした。出土量は少なく、指標遺構では東大編年Ⅲ a 期、Ⅳ a 期、Ⅴ期に散見される。

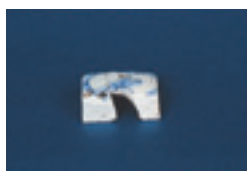
JB-18-b



(外来 SK81)

体部が筒形を呈す合子を本類とした。出土量は少なく、確認される時期も 18-a よりかなり遅く、指標遺構では東大編年ⅦからⅧ b、Ⅷ d 期に確認される。ピークはⅧ a からⅧ b 期か。ただし御殿 886 号遺構で肥前系磁器の高台断面の形状が三角形を呈す碗 (JB-1-c)、肥前系陶器の外面に山水文が描かれた、いわゆる京焼風陶器碗 (TB-1-b) などと色絵の 18-b が相伴しており、今後 18-b の初現が上がる可能性はある。

JB-19



(中診 H21-1)

水滴を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年ⅡからⅥ b 期、Ⅷ a からⅧ c 期に散見される。江戸遺跡では市谷仲之町西Ⅱ第 28 号遺構^{註7}から水滴 (19 類) が 42 個体まとめて出土しており、それらを産地別にみると、磁器では肥前系 12 個体、瀬戸・美濃系 24 個体、平戸系三河内 3 個体、陶器では京焼系 3 個体が出土していると報告されている。1 遺構からこれだけ大量の水滴が出土している例は管見の限りほかになく、遺跡の性格によるものであろう。

JB-20



(給水 AL37-1)

蓮華を本類とした。出土量は少なく、指標遺構では東大編年Ⅷ d 期とⅨ期のみで確認される。指標遺構以外では、Ⅷ c 期に比定される外来 SK166、工 14 の SU2 などで確認されることから、ピークはⅧ c 期以降、近代にかけてか。なお現状ではⅧ期以前の遺構で確認された例はない。

JB-21



(工14 SK299)

植木鉢を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅷ b 期とⅨ 期の各 1 遺構のみで確認される。指標遺構以外では、Ⅷ c 期に比定される外来 SK166、分類 (1) で提示した工 14 の SK299 などで確認される。なお SK299 では、瀬戸・美濃系磁器のいわゆる湯呑碗 (JC-1-e) や肥前系磁器のいわゆる八角鉢 (JB-5-e) と共伴する。

JB-22



(御殿 537)

花生を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年Ⅲ b からⅥ b 期、Ⅷ a からⅧ c 期とⅨ 期に確認される。ピークはⅣ からⅤ 期か。

JB-24



(給水 AJ33-1)

灰落しを本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅲ b 期、Ⅳ a 期、Ⅷ a 期に散見される。指標遺構以外では、分類 (1) で提示した給水 AJ33-1 から出土しており、瀬戸・美濃系磁器 (JC) の広東碗、端反形碗 (1-c、d) などと共伴する。

JB-27-a



(外来 SE100)

釣手を有す、銚子状の水注を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅲ b 期、Ⅳ a 期、Ⅷ c 期の各 1 遺構のみで確認される。指標遺構以外では、天和 2 (1682) 年の火災一括資料と考えられる病棟 C2 層^{註1} や、同じく天和 2 年の火災一括資料と考えられる外来 SE100、同地点の東大編年Ⅷ b 期に比定される SE271 などで確認される。病棟 C2 層では、肥前系磁器 (JB) の高台断面の形状が三角形を呈す碗や初期伊万里筒形碗 (1-c、k)、高台断面の形状が三角形を呈す皿や南川原窯ノ辻窯を指標とする皿 (2-b、c、d) などが共伴する。

JB-29



(外来 SK81)

播鉢を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、東大構内遺跡全体でも東大編年Ⅷ b 期に比定される外来 SK81 のみで確認される。

JB-35



(外来 SU1)

戸車を本類とした。出土量は少なく、指標遺構では確認できず、それ以外では外来 SU1、SK269 で白磁の JB-35 が確認されている。両遺構ともに遺物量あまり多くないが、SU1 では瀬戸・美濃系磁器端反形碗 (JC-1-d) などと、SK269 では矮小化した瀬戸・美濃系陶器腰鍔碗 (TC-1-u) や板作成形で「泉湊伊織」の刻印がある塩壺 (DZ-51-g) などと共伴する。

JC (瀬戸・美濃系磁器)

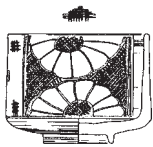
JC-1-a



(工14 SK66)

体部が丸形を呈す碗を本類とした。蓋付きの例もある。出土量はあまり多くなく、指標遺構では東大編年Ⅷ a 期からⅨ期に確認される。ピークはⅧ c 期以降か。指標遺構以外では、明治中葉に比定される工14のSK358、SK66などで、1遺構からの出土量としては比較的多く確認できる。なおSK66では瀬戸・美濃系磁器(JC)の端反形碗、飯碗(1-d、f)、木型打込皿(2-d)などと共伴する。

JC-1-b



(経塚山西)

体部が筒形を呈す碗を本類とした。出土量は少なく、指標遺構では確認できないが、それ以外では、いずれも工14の遺構である東大編年Ⅷ c 期に比定されるSU2、Ⅵ b からⅧ d 期に比定されるSK3、Ⅷ a からⅧ b 期に比定されるSK101などで確認される。

JC-1-c



(給水 AJ34-2)

いわゆる広東碗を本類とした。蓋を伴う例が多い。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年Ⅷ a 期からⅧ c 期とⅨ期に確認される。ピークはⅧ a からⅧ b 期か。

JC-1-d



(中診 H21-2)

口縁部が外反する碗を本類とした。蓋を伴う例が多い。瀬戸・美濃系磁器(JC)で最も出土量が多いのが本製品であり、東大編年Ⅷ a 期の指標陶磁器の1つである。指標遺構では東大編年Ⅷ a 期以降、Ⅸ期まで継続して確認されるが、ピークはⅧ a からⅧ b 期にある。Ⅷ a 期には口径が11cm前後、9cm前後、8cm前後の3つの法量のもの確認されるが、次第に大きなサイズものは減少し、Ⅷ d 期には小サイズのもの中心となる。口径の小型化に比例して器高も低いものに、また口縁部の外反も緩やかになる傾向がうかがえる。主文様は山水文や花文などを外面全体に配すものから、区画内に捻子花文などの同一文様を繰り返すもの多くなり、Ⅷ d 期には篆書文のような異形字を配すものも出現する。また口縁部内側の帯文様も、Ⅷ a 期には墨弾きによる文様が配されていたものが、次第に圏線のみのも多くなり、やがては帯文様自体を持たないものも目立つようになる。高台内の銘もⅧ c 期以降のものにはみられなくなる。

JC-1-e



(中診2号組石)

腰が張り、体部が直立する小振りの碗で、いわゆる湯呑碗を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年Ⅷ a 期からⅨ期に確認される。ピークはⅧ b からⅧ c 期か。東大編年Ⅷ b 期の指標陶磁器の1つである。なおⅧ a 期の指標遺構である工1のSK01でも1-eが確認されているが、ほかのⅧ a 期に比定される遺構で1-eが確認された例は現状ではなく、報告書においてもSK01の開口期間や遺構の性格によるのではないかとされている。

JC-1-f



(工14 SU392)

体部が高台から直線的に開き、器厚の薄い碗を本類とした。蓋を伴う例が多い。出土量はあまり多くなく、指標遺構では東大編年Ⅷ b 期、Ⅷ c 期、Ⅸ期の各1遺構のみで確認される。指標遺構以外では、東大編年Ⅷ c 期に比定される外来SK166、工14のSU396などで確認される。なお管見の限り、1-fの大半はコバルトによる染付がなされていること、また明治中葉に比定される工14のSK358などで出土量が多いことなどから、ピークはⅨ期以降と考えられる。

JC-2-a



(設備 AE36-3)

蛇ノ目凹形高台を有す皿を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅷ d 期とⅨ期の各 1 遺構のみで確認される。指標遺構以外では設備 AE36-1、AE36-3、AF35-1 などでも確認されるが、これらの遺構は、いずれもコバルトによる型紙刷の製品を含む遺構である。以上のような状況から 2-a のピークは近代以降にあると考えられる。

JC-2-b



(工14 SK358)

輪高台を有す皿を本類とした。出土量は少ないが、指標遺構では東大編年Ⅷ a からⅨ期に確認される。

JC-2-c



(給水 AL37-1)

やや幅広の蛇ノ目風の高台を有す皿を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅷ c 期、Ⅷ d 期、Ⅸ期の各 1 遺構のみで確認される。指標遺構以外では明治中葉に比定される工 14 の SK358 でも確認されている。ピークはⅧ d 期以降か。

JC-2-d



(給水 AL37-1)

木型打込成形され、見込みに「寿」などの文様がある皿を本類とした。出土量は少なく、指標遺構では東大編年Ⅷ d 期とⅨ期のみで確認される。指標遺構以外では工 14 の SK3、SK66、SK358 などでも確認されているが、いずれも篆書文が施文された瀬戸・美濃系磁器 (JC) の端反形碗 (1-d) や、器厚のごく薄い坏 (6-d) などと共伴する。以上のような状況から、ピークはⅧ d 期から近代以降と考えられる。なお 2-d は東大編年Ⅷ d 期の指標陶磁器の 1 つである。

JC-2-e



(工14 SK140)

見込みに陽刻が施された皿を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年Ⅷ b からⅨ期の遺構で散見され、型皿が多い。指標遺構以外では、いずれも東大編年Ⅷ c 期に比定される外来 SK166、工 14 の SU2、SU396 などでも確認される。ピークはⅧ c 期か。

JC-2-f



(巢鴨I 16)

見込みに陰刻が施された皿を本類とした。前述した 2-e より出土量はさらに少なく、指標遺構では確認されない。指標遺構以外では東大編年Ⅷ a からⅧ b 期とされる工 14 の SK101、Ⅵ b からⅧ d 期とやや年代幅のある遺物が出土する工 14 の SK3 などでも確認される。

JC-4



(御殿 7)

燗徳利を本類とした。出土量はあまり多くなく、指標遺構では東大編年Ⅷ a からⅨ期に散見される。指標遺構以外ではⅧ b 期に比定される外来 SE271、Ⅷ c 期に比定される外来 SK166、工 14 の SU2 で確認される。ピークはⅧ c 期以降か。

JC-5



(工14 SK358)

鉢を本類とした。出土量は少なく、指標遺構では東大編年ⅧaからⅧc期とⅨ期に散見される。指標遺構以外では東大編年ⅧaからⅧb期に比定される工14のSK101、明治中葉に比定される工14のSK358で確認される。

JC-6-a



(中診 H21-8)

体部が丸形を呈す坏を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年ⅧaからⅨ期に確認される。ピークはⅧb期以降か。

JC-6-b



(給水 AJ35-1)

口縁部が外反する坏を本類とした。指標遺構では東大編年ⅧaからⅨ期に確認されるが、ピークはⅧb期以降か。

JC-6-c



(御殿7)

体部が筒形を呈す坏を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅸ期のみで確認される。指標遺構以外では、明治中葉に比定される工14のSK358などでまとまって出土しており、ピークは近代以降と考えられる。

JC-6-d



(中診2号組石)

器厚が極めて薄い坏を本類とした。瀬戸・美濃系磁器坏(JC-6)の中で最も多く確認されるものである。指標遺構では東大編年ⅧaからⅨ期に確認されるが、ピークはⅧc期以降にある。見込みに上絵付^{註4}が施されるものが多い。

JC-6-e



(給水 AL37-1)

木型打込成形され、見込みに「寿」などの文様がある坏を本類とした。出土量は少なく、指標遺構では東大編年Ⅷd期とⅨ期に確認される。ピークはⅧd期以降か。

JC-6-f



(給水 AL37-1)

体部が直線的に開く坏を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅷd期とⅨ期の各1遺構のみで確認される。指標遺構以外では東大編年Ⅷc期に比定される工14のSU2、明治中葉に比定されるSK358でも確認される。絵付は染付にコバルト顔料が使用された製品が多く、胴部をやや幅広く面取りしたものが目立つ。ピークはⅨ期以降、近代にあると考えられる。

JC-6-g



(工14 SK358)

型作りされた、いわゆる紅血を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく指標遺構では確認されないが、それ以外では、分類 (1) で提示した明治中葉に比定される工 14 の SK358 で確認される。白磁で、外面に陽刻の蛸唐草文が施されたものが多い。

JC-7



(工14 SK359)

猪口を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構ではⅧ c 期の 1 遺構のみで確認される。指標遺構以外ではⅧ a 期に比定される工 14 の SK16、SK359 などで出土している。SK359 では瀬戸・美濃系磁器寿文皿 (JC-2-d)、瀬戸・美濃系陶器のいわゆる奈良茶碗 (TC-1-y)、益子・笠間系陶器播鉢 (TM-29) などと共伴する。

JC-8



(工14 SU396)

仏飯器を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構ではⅧ c 期とⅨ期のみで確認される。指標遺構以外では、分類 (1) に提示したⅧ c 期に比定される工 14 の SU396 などで確認される。

JC-9



(設備 AE36-3)

香炉・火入れを本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構ではⅧ b 期、Ⅷ c 期、Ⅸ期の各 1 遺構のみで確認される。指標遺構以外では東大編年Ⅷ a からⅧ b 期に比定される工 14 の SK101 や、分類 (1) で提示した設備 AE36-3 で確認される。AE36-3 では、型紙刷や銅版転写でコバルト顔料による絵付が施された瀬戸・美濃系磁器碗 (JC-1) などと共伴する。

JC-11-a



(工14 SU372)

体部が瓶子形を呈す御神酒徳利を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅷ b 期、Ⅷ d 期、Ⅸ期の各 1 遺構のみで確認される。指標遺構以外では、Ⅷ a からⅧ b 期に比定される工 14 の SK101、Ⅷ b からⅧ c 期に比定される SK188、Ⅷ期に比定される SK292 などで確認される。

JC-11-b



(中診 H21-2)

頸部が鶴首状を呈す御神酒徳利を本類とした。出土量はさほど多くないが、指標遺構では東大編年Ⅷ a からⅨ期に散見される。ピークはⅧ a からⅧ b 期か。

JC-12



(中診 2号組石)

油壺を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅷ b とⅧ d 期の各 1 遺構のみで確認される。指標遺構以外ではⅧ a 期に比定される工 14 の SK16 で確認されており、本製品の初現がもう少し上がる可能性もある。

JC-13



(御殿7)

蓋物を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅷ d 期に比定される工14のSU392で、体部が丸形を呈すものが確認されるのみである。指標遺構以外では、瀬戸・美濃系磁器の体部が直線的に開く碗 (JC-1-f) や白土染付土瓶 (TZ-34-b) などが出土した給水 AK38-1 で、染付が施された段重が出土している。また分類 (1) で提示した御殿7号遺構出土の筒形蓋物は、瀬戸・美濃系磁器 (JC) でコバルトにより銅版転写され、体部が直線的に開く碗 (1-f)、寿文皿 (2-b)、爛徳利 (4類) などと共伴するものである。

JC-15



(中診2号組石)

壺・甕を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅷ d 期の1遺構のみで確認され、それ以外ではⅧ c 期に比定される工14のSU2、分類 (1) で提示した中診2号組石などで確認される。2号組石では瀬戸・美濃系磁器 (JC) の端反形碗、いわゆる湯呑碗 (1-d, e)、肥前系磁器 (JB) の広東碗、小丸碗 (1-m, j)、二重角椀渦福銘があり、高台断面の形状が「U」字状を呈す皿 (JB-2-e) など、やや年代幅のある遺物と共伴する。

JC-16



(給水 AL37-1)

急須を本類とした。出土量はさほど多くないが、指標遺構では東大編年Ⅷ c 期からⅨ期に確認される。ピークはⅧ c 期以降、近代にかけてか。

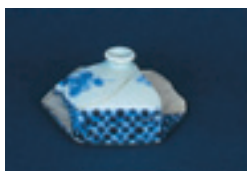
JC-18



(工14 SK292)

合子を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅷ b 期、Ⅷ d 期、Ⅸ期の各1遺構のみで確認される。指標遺構以外では分類 (1) で提示したⅧ期に比定される工14のSK292、設備 AE36-3 などで確認される。なお AE36-3 ではコバルト顔料を使用し、型紙刷や銅版転写で絵付が施された瀬戸・美濃系磁器碗 (JC-1) などと共伴する。

JC-19



(外来 SK81)

水滴を本類とした。出土量は少なく、指標遺構では東大編年Ⅷ b 期、Ⅷ c 期、Ⅸ期の各1遺構のみで確認される。指標遺構以外では、ともにⅧ c 期に比定される工14のSU2とSU396で確認されている。ピークはⅧ c 期か。なお肥前系磁器の水滴 (JB-19) の項目でも触れたが、市谷仲之町西Ⅱ第28号遺構^{註7}からは水滴が42個体まとまって出土し、うち24個体が瀬戸・美濃系磁器の水滴 (JC-19) であったと報告されている。

JC-20



(給水 AL37-1)

蓮華を本類とした。出土量は少なく、指標遺構では東大編年Ⅷ a からⅧ c 期とⅨ期に散見される。指標遺構以外では、Ⅷ c 期に比定される外来 SK166 や工14のSU396、明治中葉と報告されている工14のSK358で確認される。ピークはⅧ c 期以降か。

JC-21



(設備 AD35-1)

植木鉢を本類とした。出土量は少なく、東大編年Ⅷ b からⅧ c 期に散見される。指標遺構以外ではⅧ c 期に比定される外来 SK166 や工14のSU2などで確認される。分類 (1) で提示した設備 AD35-1 から出土したものは、瀬戸・美濃系磁器端反形碗 (JC-1-d) などと共伴するものである。

JC-22



(工14 遺構外)

花生を本類とした。指標遺構では確認されなかったが、指標遺構以外では文 S8-52 号井戸で確認され、肥前系磁器端反形碗の蓋 (JB-00-c) や植木鉢 (DZ-21) などと共伴する。

JC-27



(工14 SK260)

水注を本類とした。出土量、出土遺構ともにごく少なく、指標遺構では確認されなかった。分類 (1) で提示した工 14 の SK260 から出土したものは、瀬戸・美濃系磁器端反形碗 (JC-1-d) や京都・信楽系陶器脚付灰釉油受け皿 (TD-40-a) などと共伴するものである。なお分類 (1) で提示した JC-27 は、器形的にはいわゆる「ちろり」であり、将来的に JC-27 は細分類される可能性が高い。

JC-34



(工14 SU2)

土瓶を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年Ⅷ b 期からⅧ d 期に確認される。ピークはⅧ c 期以降か。

JN (九谷系磁器)

JN-1



左は御殿 49, 右は中診 F33-3

碗を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では東大編年Ⅴ b 期に比定される中診 F33-3 で出土した古九谷の染付碗 1 点のみである。指標遺構以外でも、分類 (1) で提示した御殿 49 号遺構で再興九谷の赤絵碗が 1 点出土しているのみである。ちなみに御殿 49 号遺構では、瀬戸・美濃系陶器の餌入れ (TC-30) が多量に出土しているほか、瀬戸・美濃系磁器 (JC) の丸碗、端反形碗 (1-a, d)、青土瓶 (TZ-34-a) などと共伴する。

JN-2



左は中診 F27-1, 右は中診 7 号組石

皿を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では確認されなかった。それ以外では、分類 (1) で提示した中診 F27-1 で古九谷の色絵皿が 1 点、同地点の 7 号組石で再興九谷の色絵皿が 1 点確認されている。ちなみに F27-1 では肥前系磁器 (JB) の高台断面の形状がシャープな「U」字状を呈し、高台高が高い碗 (1-d) や見込み蛇ノ目釉剥ぎされた底部無釉の皿 (2-k) などと、7 号組石では瀬戸・美濃系磁器端反形碗 (JC-1-d)、肥前系磁器の蛇ノ目凹型高台で高台高が高い皿 (JB-2-i) などと共伴する。

JN-6



(中診遺構外)

坏を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では確認されていない。それ以外では外来SK171で古九谷の染付坏が2点、分類(1)で提示した中診遺構外で再興九谷の色絵坏が1点確認されているのみである。SK171では「宣徳年製」銘を有す肥前系磁器坏(JB-6)や、肥前系陶器器器手碗(TB-1-a)などと共伴する。

JP (淡路系磁器)

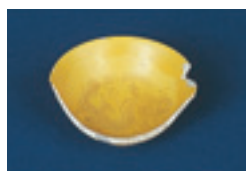
JP-2



(工14 SK3)

皿を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では確認されない。それ以外でも分類(1)で提示した工14のSK3で確認されているのみである。工14のSK3は、東大編年VIbからVIIId期と幅のある段階に比定される遺構である。

JP-6



(工14 SK358)

坏を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では確認されていない。それ以外でも、分類(1)で提示した明治中葉に比定される工14のSK358で確認されるのみである。

JP-20



(給水 AL37-1)

蓮華を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では東大編年IX期に比定される給水AL37-1のみで確認される。それ以外では御殿7号遺構で確認され、瀬戸・美濃系磁器(JC)でコバルトにより銅版転写され、体部が直線的に開く碗(1-f)、寿文皿(2-b)、爛德利(4類)などと共伴するものである。

TA5 (宜興窯系陶器)



(蓋) 中診 F34-11, (身) 工14 SK358

出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では、東大編年IVa期に比定される分類(1)で提示した中診F34-11で、急須の蓋(00)と考えられるものが1点確認されているのみである。それ以外では、明治中葉に比定される工14のSK358で、分類(1)で提示した後手の急須(16類)が出土している。なおこの急須の底部には、二重角枠内に「萬豊順記」の刻印が確認される。

TA6 (朝鮮の陶器)



2段目左は御殿 802, それ以外は看宿 SK299

出土量、出土遺構ともに極めて少なく、確認される器種の大半は碗(1類)である。総量が少ないためとりあげなかったが、指標遺構では東大編年Ⅲ a 期に比定される御殿 802 号遺構で灰釉碗が 1 点確認されているのみである。それ以外では分類 (1) で提示した天和 2 (1682) 年の火災一括資料と報告されている看宿 SK299^{註1} 出土資料で、いわゆる高麗筒茶碗、斗々屋茶碗、蕎麦茶碗などの 1 類が確認されている。それらは肥前系磁器 (JB) の底部無釉碗、高台断面の形状が三角形を呈す碗 (1-b, c)、初期伊万里の皿、高台断面の形状が三角形を呈す皿 (2-a, c)、輪積成形で「ミなと藤左衛門」の刻印がある塩壺 (DZ-51-a) などと共伴する。

TA7 (ベトナムの陶器)



2段目左は看宿 SK299, 右は法 E8-2 号

出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では分類 (1) で提示した東大編年Ⅳ b 期に比定される法 E8-2 号遺構で、鉄絵印花皿(2類)が 1 点確認されているのみである。それ以外では、分類 (1) で提示した天和 2 (1682) 年の火災一括資料と報告されている看宿 SK299^{註1} の出土資料で灰釉蓮弁文水指が 1 点確認されており、それは肥前系磁器 (JB) の底部無釉碗、高台断面の形状が三角形を呈す碗 (1-b, c)、初期伊万里の皿、高台断面の形状が三角形を呈す皿 (2-a, c)、輪積成形で「ミなと藤左衛門」の刻印がある塩壺 (DZ-51-a) などと共伴する。

TA8 (ヨーロッパの陶器)



1段目左は看宿 SK299, 右は御殿 5 2段目は工 14 SK293

出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では確認されていない。それ以外では御殿 5 号遺構で、オランダのデルフト窯などで作られたと思われる、いわゆるアルパレロの破片が 1 点、工 14 の SK293 で型作りのカップが 1 点、看宿 SK299 ではドイツのストーンウェアと思われる、水注の破片が 1 点、病棟 C2 層ではトルコのイズニック陶器皿の破片が数点確認されている。工 14 の SK293 は東大編年Ⅷ 期に比定される遺構であり、看宿 SK299 と病棟 C2 層出土資料^{註1} は、天和 2 (1682) 年の火災一括資料と報告されている。看宿 SK299 では、肥前系磁器 (JB) の底部無釉碗、高台断面の形状が三角形を呈す碗 (1-b, c)、初期伊万里の皿、高台断面の形状が三角形を呈す皿 (2-a, c)、輪積成形で「ミなと藤左衛門」の刻印がある塩壺 (DZ-51-a) などと共伴する。また病棟 C2 層では肥前系磁器 (JB) の高台断面の形状が三角形を呈す碗、初期伊万里筒形碗 (1-c, k)、高台断面の形状が三角形を呈す皿や南川原窯ノ辻窯を指標とする皿 (2-b, c, d) などと共伴する。

TB (肥前系陶器)

TB-1-a



(中診 F34-11)

大振りの、いわゆる呉器手碗を本類とした。指標遺構では東大編年ⅡからⅤa期、ⅥaからⅧc期とⅨ期に確認されるが、ピークはⅢaからⅣa期にある。Ⅲa期には、いわゆる卯手といわれる緻密な白色胎土の製品がみられる。Ⅳa期までは口径が11から12cm、器高が8から9cm前後の大振りなものと、口径が10から11cm、器高が7から8cmのもの、口径が9から10cm、器高が6から7cmの小振りなものと、概ね3つの法量のもの確認され、各法量の中で器形に多様性が認められる。しかしⅣb期以降は、口径、器高ともに次第に矮小化し、形態差もみられなくなる。

TB-1-b



(中診 F34-11)

外面に主文様の山水文が描かれた、いわゆる京焼風陶器碗を本類とした。指標遺構では東大編年ⅢaからⅥb期とⅧa期に確認されるが、ピークはⅢbからⅣa期にある。Ⅲa期には器形が天目形を呈すものや、大振りな丸碗形を呈すもの確認される。これらはともに高台内のケズリ込みが外側と比較するとかなり浅く、また高台内にみられる銘は「清水」が圧倒的に多い。Ⅲb期にはそれらに加えて、器高も口径もやや小さく、丸みを帯びた筒形を呈すものが現れる。これらは高台内のケズリがそれまでのものよりやや深く、また高台内の銘に「清水」以外の銘も確認される。Ⅳa期には器形、法量、銘のバリエーションがさらに豊富になるが、Ⅳb期以降はやや小形の丸みを帯びた筒形を呈すタイプのみになり、出土量は激減する。

TB-1-c



(法 F7-6 号土坑)

内面に主文様の山水文が描かれた、いわゆる京焼風陶器碗を本類とした。主文様が外面にある京焼風陶器碗(1-b)よりやや遅れて指標遺構では東大編年ⅢbからⅦ期、Ⅷc期に確認されるが、ピークはⅣbからⅤa期にある。Ⅳa期までのものは高台内のケズリが浅く、1-bと同様の銘があるものが多いが、Ⅳb期以降、高台内のケズリが深くなり、高台外側とほぼ同じ高さまで削り込まれ、高台内の銘を持たない製品も認められる。Ⅴb期以降は銘を持たないものが大半となり、見込みの山水文も形骸化したものとなる。なおⅢb期に比定される病棟D面焼土^{註1}で確認される1-cには、口縁部が外反し、見込みには鉄で生け花のようなものが、外面にも山水文(?)が1箇所描かれる。また高台内には1-b同様「清水」の刻印が確認されるなど、1-bと1-cの中間的特徴を有すものである。

TB-1-d



(中診 K30-1)

体部に渦巻状の刷毛目が施された丸碗を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅲa期からⅤa期、Ⅵa期に確認されるが、ピークはⅣ期にある。Ⅲ期のものは、いわゆる呉器手碗(TB-1-a)に近い器形で、器高、高台高ともに高い大振りの丸碗であるが、Ⅳ期以降、器高が低く、口径も小型化する傾向が認められる。Ⅴa期以降は、それまでみられた器形が全体的に小型化したものと、器高が低く、腰が張った丸形を呈すものが認められる。

TB-1-f



(中診 F33-3)

陶胎染付が施された碗を本類とした。指標遺構では東大編年ⅣaからⅥa期、ⅧaからⅧb期に確認されるが、ピークはⅣからⅤ期にある。Ⅳ期のものは器形にバリエーションがあり、口縁部がわずかに外反するものが比較的多いが、Ⅴa期以降、腰が張り、体部は直立するものが大半となる。染付には楼閣山水文や花唐草文などがみられるが、絵付は時代が下るほど雑になる。

TB-1-g



(中診 1号組石)

打刷毛目・波状の刷毛目・鋸歯状の刷毛目などが、内外面で異なるように施される丸碗を本類とした。指標遺構では渦巻き状の刷毛目を有す丸碗 (1-d) より遅れて東大編年Ⅳ a 期、Ⅴ a からⅥ b 期に確認され、出土量も 1-d よりは少ない。ピークはⅤ a 期からⅥ a 期か。なお東大構内遺跡ではⅣ b 期に比定される遺構から 1-g は確認されなかったが、東大編年Ⅳ b 期に比定される巣鴨Ⅰ 1号遺構で 1-d と共存することが報告されている (豊島区教育委員会 1994)。

TB-1-h



(設備 AD37-1)

刷毛目が施され、口縁部が外反する碗を本類とした。出土量は少なく、指標遺構では東大編年Ⅴ a 期、Ⅴ b 期、Ⅵ a 期の各 1 遺構のみで確認される。初現は渦巻き状の刷毛目を有す丸碗 (1-d) よりやや遅れる。

TB-1-i



(工14 SK383)

青緑釉が施された丸碗を本類とした。内野山窯製品を指標とする。同じく青緑釉が施釉された皿 (2-a) に比べて出土量は極めて少なく、指標遺構では東大編年Ⅱ からⅣ a 期に散見される程度であり、確認される期間も短い。

TB-2-a



(中診 B25-1)

主に青緑釉が施釉され、見込みが蛇ノ目状に釉剥ぎされた皿を本類とした。内野山窯製品を指標とする。肥前系陶器皿 (TB-2) の中でもっとも多く確認される小器種であり、指標遺構では東大編年Ⅲ a からⅥ b 期、Ⅷ a 期、Ⅸ 期に確認されるが、ピークはⅢ b からⅣ b 期にある。なおⅣ b 期の指標遺構すべてで確認されるが、それまでと比べて 1 遺構からの出土量は激減する。Ⅲ 期の製品は口縁部が緩やかな輪花を呈すものや、小さく外反するもの、青緑釉のかわりに灰釉が施釉され、そこに青緑釉が散らされるものもあるなど、器形、釉調ともにバラエティーに富んでいる。Ⅴ a 期以降は青緑釉が施釉された丸形皿のみとなる。

TB-2-b



(中診 J21-1)

見込みに砂目痕跡がみられる灰釉皿を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅰ b 期とⅢ a 期の各 1 遺構のみで確認される。分類 (1) で提示した中診 J21-1 から出土したものは、瀬戸・美濃系陶器鉄釉碗 (TC-1) と共存するものである。

TB-2-c



(御殿 391)

見込みに鉄で山水文などが描かれた、いわゆる京焼風陶器皿を本類とした。京焼風陶器碗 (TB-1-b、c) と比べて出土量は少ない。指標遺構では東大編年Ⅲ a からⅣ b 期、Ⅴ b からⅥ a 期に確認される。ピークはⅢ b 期か。なお高台内には京焼風陶器碗と共通する銘のあるものが比較的多い。

TB-2-d



(病棟 SK2256)

見込みに砂目痕跡がみられ、透明釉が施釉された皿を本類とした。内野山窯製品を指標とする。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では東大編年Ⅲ a からⅣ a 期、Ⅴ b 期に散見される。ピークはⅢ a 期か。Ⅲ a 期のものは見込みに鉄絵や陰刻が施されるものも確認できる。分類 (1) で提示した病棟 SK2256 から出土したものは、肥前系磁器の初期伊万里皿 (JB-2-a) や丹波系挿鉢 (TK-29) などと共存するものである。

TB-2-e



(御殿 264)

見込みに胎土目痕跡がみられる皿を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では確認されなかった。それ以外では、外来 SK36 や分類 (1) で提示した御殿 264 号遺構で確認される。外来 SK36 では瀬戸・美濃系陶器端反碗 (TC-1) や底部に右回転の糸切り痕跡のあるかわらけ (DZ-2-a) などと、御殿 264 号遺構では肥前系磁器 (JB) の高台断面の形状がシャープな「U」字状を呈す皿 (2-e) や景德鎮窯系磁器 (JA1) の皿 (2 類)、鉢 (5 類)、坏 (6 類) などと共伴する。

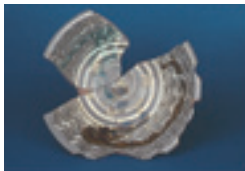
TB-2-f



(理 6 号地下式土坑)

陶胎染付が施された皿を本類とした。陶胎染付碗 (TB-1-f) と異なり、出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では確認されなかった。それ以外では、分類 (1) で提示した理 6 号地下式土坑で、肥前系磁器皿 (JB-2) の高台断面の形状が三角形を呈し、高台径が大きい皿 (2-c)、高台断面の形状がシャープな「U」字状を呈す皿 (2-e)、肥前系陶器 (TB) の青緑釉皿 (2-a)、三島手鉢 (5-b) などと共伴する。

TB-5-a



(中診 F34-11)

刷毛目が施された鉢を本類とした。指標遺構では東大編年ⅡからⅧ a 期、Ⅷ c 期、Ⅸ 期に確認されるが、ピークはⅢ 期にある。一般的に 1 遺構からの出土量はさほど多くないが、東大編年Ⅲ b 期に比定される病棟 D 面焼土^{註1}からは、後述する 5-b とともに大量の 5-a が出土している。それらを見ると鐙状の口縁部を有するものが多く、刷毛目には数種類のバリエーションが認められる。

TB-5-b



(中診 L30-1)

文様が白土で象嵌された、いわゆる三島手の鉢を本類とした。5-a よりやや遅れて指標遺構では東大編年Ⅲ a からⅧ c 期とⅨ 期に確認されるが、ピークはⅢ b からⅣ b 期にある。刷毛目鉢 (5-a) でも触れたように、東大編年Ⅲ b 期に比定される病棟 D 面焼土^{註1}からは多くの 5-b が出土しており、5-a 同様、鐙状の口縁部を有するものが多く、象嵌文様のバリエーションも豊富である。

TB-5-c



(中診 E34-2)

見込みに鉄で山水文などが描かれた、いわゆる京焼風陶器鉢を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年Ⅲ b からⅤ b 期、Ⅷ a からⅧ c 期に確認される。ピークはⅢ b からⅣ a 期にある。Ⅳ a 期までのものは山水文も非常に丁寧に描かれ、高台内に銘のあるものもあり、その銘は肥前系京焼風陶器碗・皿 (TB-1-b、c、TB-2-c) と共通したものが多く、ただし 5-c には碗や皿ではほとんどみられない角枠銘なども確認される。

TB-5-d



(中診 C28-1・2)

見込みが蛇ノ目状に釉剥ぎされた鉢を本類とした。内野山窯製品を指標とする。指標遺構では東大編年Ⅲ a からⅥ a 期、Ⅷ a 期に確認されるが、ピークはⅢ b からⅣ a 期にある。Ⅳ b 期も確認される遺構数は比較的多いが、1 遺構からの出土量はさほど多くない。Ⅳ a 期までは青緑釉が施された製品が多く、器形も多様であるが、それ以降は青緑釉皿 (TB-2-a) が大型化したようなものか、あるいは分類 (1) で提示した鐙状の口縁部を有し、胴部がくびれるタイプが多いようである。

TB-6



(Ⅱ14 SE174)

坏を本類とした。出土量は少なく、指標遺構では東大編年ⅡからⅢ a 期、Ⅳ a 期に散見される。それ以外では、分類 (1) で提示したⅡ14 の SE174 で確認される。SE174 は元禄 16 (1703) 年の火災一括資料であり、肥前系磁器の高台断面の形状がシャープな「U」字状を呈し、高台高が高い碗 (JB-1-d)、肥前系陶器 (TB) のいわゆる呉器手碗、内面に主文様がある京焼風陶器碗 (1-a、c) などと共伴する。

TB-9-a



(中診 D28-1)

陶胎染付が施された香炉・火入れを本類とした。出土量、出土遺構ともにあまり多くなく、指標遺構では東大編年Ⅳ a 期、Ⅳ b 期、Ⅴ b 期、Ⅵ a 期の各 1 遺構のみで確認される。分類 (1) で提示した中診 D28-1 から出土したものは、肥前系磁器のいわゆるくらわんか碗 (JB-1-g)、肥前系陶器の外面に主文様のある京焼風陶器碗 (TB-1-b) などと共伴するものである。

TB-9-b



(設備 X35-9)

外面に鉄で山水文などが描かれた、いわゆる京焼風陶器の香炉・火入れを本類とした。出土量はあまり多くなく、指標遺構では東大編年Ⅲ b からⅥ a 期に散見される。ピークはⅢ b からⅣ a 期か。確認されるものの多くは、体部が直線的にやや外側へ開き気味に立ち上がり、筒形を呈すものである。高台内には京焼風陶器碗 (TB-1-b、1-c) と同様に、「清水」や「小松吉」などの刻印を有すものがある。

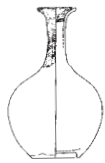
TB-9-c



(三栄町 A区第1号遺構)

刷毛目が施された香炉・火入れを本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅳ a 期に比定される病棟 SK3^{註1} のみで確認される。江戸遺跡でも 9-c は管見の限りあまり確認されない。

TB-10



(内野山北)

瓶を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅲ a、Ⅳ a 期、Ⅴ b 期、Ⅵ a 期に散見される。

TB-13-a



(中診 G20-2)

陶胎染付が施された蓋物を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では東大編年Ⅴ a 期とⅧ a 期の各 1 遺構のみで確認される。

TB-13-b



(設備 Y34-5)

刷毛目が施された蓋物を本類とした。陶胎染付が施された蓋物 (13-a) と同じく出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では東大編年Ⅴ b 期の 1 遺構のみで確認される。それ以外では分類 (1) で提示した中診 Y34-5 で出土しており、肥前系磁器の見込みが蛇ノ目釉剥ぎされ、高台径が小さい皿 (JB-2-1)、堺播鉢 (TL-29) などと共伴する。

TB-15



(御殿 532)

壺・甕を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年Ⅱ からⅥ a 期、Ⅶ 期に確認される。ピークはⅢ b からⅣ a 期にある。

TB-23-a



(工14 SK383)

器高が高く、内外面に刷毛目が施される片口鉢を本類とした。底部に鉄釉が施釉されるものもある。出土量はあまり多くなく、指標遺構では東大編年Ⅲ b 期、Ⅳ b 期、Ⅴ b 期、Ⅵ a 期の各1遺構で確認される。それ以外では東大編年Ⅴ a 期に比定される外来SU20、SK141などで確認される。

TB-23-b



(設備 Z35-4)

器高が低く、内外面に刷毛目が施され、見込みは蛇ノ目状に釉剥ぎされる片口鉢を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅳ b からⅤ a 期に確認される。分類(1)で提示した中診Z35-4から出土したものは、肥前系磁器の見込みが蛇ノ目釉剥ぎされ、高台径が大きい皿(JB-2-m)や肥前系陶器の陶胎染付碗(TB-1-f)などと共伴するものである。なお東大編年Ⅴ a 期に比定される外来SU20では、23-aと23-bが共伴する。

TB-29-a



(工14 SU18)

底部以外、鉄釉が施釉された播鉢を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅵ a 期、Ⅷ a 期、Ⅷ b 期の各1遺構のみで確認され、それ以外では東大編年ⅥからⅦ期に比定される工14のSU18、Ⅵ b からⅧ d 期に比定される工14のSK3などで確認される。以上のような状況から、現段階では東大構内遺跡で29-aが確認されるのはⅥ期以降と考える。

TB-29-b



(中診遺構外)

口縁部だけに鉄釉が施釉された播鉢を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では確認できなかった。ただし、東大編年Ⅲ a 期に比定される理1号土坑で報告されている播鉢(29類)の口縁部破片が、29-bである可能性がある。

TC (瀬戸・美濃系陶器)

TC-1-a



(御殿 618)

天目形を呈す碗を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅰ b からⅦ期に確認されるが、ピークはⅠ b からⅢ b 期にある。Ⅳ a 期の指標遺構である病棟SK3^{註1}からは多くの1-aが確認されるが、ほかのⅣ a 期に比定される遺構ではそのような傾向は認められないことから、これは本遺構の性格によるものと考えられる。1-aは時代が下ると矮小化し、口縁部の立ち上がりが短くなる傾向がある。

TC-1-b



(中診 K23-1)

長石釉が施釉された天目形を呈す碗を本類とした。東大構内遺跡では1-aよりもやや遅れて確認され、しかも出土量、出土遺構ともに1-aよりかなり少ない。指標遺構では東大編年Ⅱ期、Ⅲ a 期、Ⅵ b 期、Ⅷ a 期の各1遺構のみで確認される。分類(1)で提示した中診K23-1から出土したものは、景德鎮窯系磁器皿(JA1-2)、瀬戸・美濃系陶器(TC)の長石釉皿や輪壳皿(2-c、2-m)などと共伴するものである。

TC-1-c



(中診 Y37-3)

灰釉が薄く施釉された丸碗を本類とした。東大構内遺跡はもちろん江戸遺跡においても、最も多く出土する瀬戸・美濃系陶器碗 (TC-1) である。指標遺構では東大編年Ⅳ a からⅧ c 期とⅨ期に確認されるが、ピークはⅤからⅥ期にある。Ⅶ期以降でも御殿 233 号遺構、245 号遺構、工 1 の SK01 のように多量に出土する例もあるが、基本的にはあまり確認されなくなる。なおこれらの遺構で大量に出土している 1-a には、共通して高台内に人名や役所名と思われる墨書を有するものが多く含まれており、これはⅦ期以降、1-a を大量に使用する場所 (空間) が限られたものとなった事を示している可能性もある。器形の変化をみるとⅣ期は大振りなものが多く、体部はやや外側へ開き気味に立ち上がり、釉は畳付を除き施釉されるが、高台内まで施釉されるものもある。しかしⅤ期以降は徐々に矮小化し、法量も 3、4 種類のもものが認められるようになる。また体部は直立、あるいはわずかに内傾するものとなる。Ⅶ期以降は器高が低く、体部が内傾するものが中心となるようである。

TC-1-d



(中診 F33-3)

外面に簡略な山水の呉須絵が施される灰釉碗で、いわゆる御室碗を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅴ a からⅧ a 期、Ⅷ c 期に確認されるが、ピークはⅤ期にある。器形の変化をみると、口縁部がほぼ垂直に立ち上がるものから、わずかに内傾するものに、高台断面の形状も比較的きれいな逆台形を呈すものから、U 字状に近いものになるようである。山水文などの文様も、次第に形骸化する傾向がうかがえる。なお麴町 SK303^{註 8} では、肥前系磁器 (JB) の高台断面の形状がシャープな「U」字状を呈し、高台高が高い碗 (1-d)、コンニャク印判により染付された 1-d 小振りの碗 (1-u) などと共伴するのが確認されており、東大構内遺跡でも将来的に初現がⅤ a 期より上がる可能性もある。

TC-1-f



(設備 Y37-4)

腰が張り、段を有する灰釉碗を本類とした。高台は渦巻高台にされ、体部には鉄釉が流し掛けされるものが多い。指標遺構ではⅤ a 期からⅧ b 期に確認されるが、ピークはⅥ期にある。時代が下るほど器高が低くなり、体部の立ち上がりも、垂直であったものがわずかに内傾するものになる。また体部の段も次第に緩やかに凹凸がみられる程度のものになり、高台内の渦巻状の削り込みも浅くなるようである。

TC-1-g



(御殿遺構外)

外面に鉄で柳文が描かれた灰釉碗を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅵ a からⅧ b 期、Ⅸ期に確認されるが、ピークはⅦからⅧ a 期にある。器形をみると体部が「ハ」の字状に開くものが多いが、Ⅵ a 期に比定される外来 SK174 やⅥ b 期に比定される中診 E22-1 では、体部が「ハ」の字状のものと筒形を呈すものが共伴し、Ⅷ a 期に比定される工 1 の SK01 では、体部が「ハ」の字状のものと体部が朝顔形を呈すものが共伴する。以上のことから、この柳文は、その時期に流通 (流行?) していた様々な器形の碗に描かれた文様であったことが推察される。なお柳文自体は時代が下ると次第に崩れたものとなる。

TC-1-h



(外来 SK22)

いわゆる太白手の丸碗を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅵ a 期、Ⅷ a 期の各 1 遺構のみで確認される。いわゆる「太白手」と呼ばれる 1 群は、1-h 以外にも幾つか小器種として分類しているが、総じて出土量、出土遺構ともにごく少ない。分類 (1) で提示した外来 SK22 から出土したものは、肥前系磁器 (JB) の小広東碗 (1-i)、小丸碗 (1-j)、ロクロ成形無印の塩壺 (DZ-51-w) などと共伴するものである。

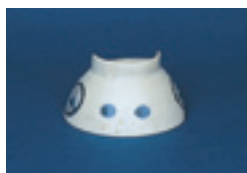
TC-1-i



(給水 AJ34-2)

いわゆる太白手の筒形を呈す碗を本類とした。1-h 同様、出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では確認できなかったが、それ以外では東大編年Ⅷ a 期に比定される工 14 の SK16、給水 AJ34-2 などで確認される。なお給水 AJ34-2 から出土したものは、瀬戸・美濃系磁器広東碗 (JC-1-c) や土器 (DZ) で施釉された油受け皿 (40-a, 40-b) などと共伴するものである。

TC-1-j



(工1 SK01)

いわゆる太白手の広東碗を本類とした。1-h 同様、出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では東大編年Ⅷ a からⅧ b 期に散見され、それ以外では、東大編年Ⅷ 期に比定される工 14 の SK292 のみで確認される。

TC-1-k



(中診 F33-3)

体部が「ハ」の字状に開き、中程に大きな凹みを有す灰釉碗を本類とした。出土量は極めて少なく、東大編年Ⅴ a 期からⅥ a 期、Ⅷ a 期に確認され、それ以外では、東大編年Ⅴ からⅥ 期に比定される工 14 の SU294 のみで確認される。

TC-1-l



(設備 X37-6)

半筒形を呈す碗で、いわゆる「せんじ」を本類とした。京都・信楽系陶器半筒形碗 (TD-1-i) と比べると出土量は少ない。指標遺構では東大編年Ⅴ a からⅦ 期に確認されるが、ピークはⅤ b 期か。時代が下るほど口縁部の立ち上がりが低く、内傾し、矮小化する傾向がある。絵付は鉄や銹絵染付などで外面にワンポイント施されるものが多い。

TC-1-m



(設備 Y34-4)

半球形を呈す京焼風の碗を本類とした。外面に笹文などが上絵付されたものが多い。京都・信楽系陶器半球形碗 (TD-1-b) と比べると出土量は少なく、指標遺構では東大編年Ⅴ b からⅧ a 期に確認される。ピークはⅥ 期か。TD-1-b より初現は遅れる。

TC-1-n



(中診 E22-1)

京焼風の平碗を本類とした。見込みに梅花文が染付されたものが多い。前述の半球形碗 (1-m) より若干早く確認され、指標遺構では東大編年Ⅴ a からⅥ b 期に確認されるが、出土量は少ない。ピークはⅥ 期か。

TC-1-o



(外来 SU286)

口縁部にうのふ釉が施された鉄釉碗で、いわゆる尾呂茶碗を本類とした。出土量は少なく、指標遺構では東大編年Ⅲ a からⅣ a 期、Ⅴ a 期、Ⅷ a 期に散見される。ピークはⅢ b からⅣ a 期か。

TC-1-p



(御殿 245)

いわゆる拳骨茶碗を本類とした。漆黒釉に長石釉を散らし、体部数箇所に凹みを有す。出土量はさほど多くないが、指標遺構では東大編年IV b^{註9}からVIII a期に確認される。ピークはVI bからVII期か。VIII a期に比定される工1のSK01では遺物総量が多いため比較的まとまって1-pが出土しており、それらの畳付に看取される刻印は数種類ある。

TC-1-q



(給水 AJ35-1)

錆釉をすり消したようにまだらに施釉された碗を本類とした。体部中程に横位や波状の沈線のあるものが多い。出土量はさほど多くないが、指標遺構では東大編年V aからVI a期、VIIからVIII a期に確認される。ピークはV期か。器高が高い「せんじ」碗のようなタイプと、拳骨茶碗のようなタイプが確認されるが、いずれも胎土は緻密な茶褐色を呈し、体部に横位や波状の沈線が施されるというのは共通している。

TC-1-r



(設備 X37-4)

いわゆる鎧茶碗を本類とした。体部にはトビガンナ状の細かな押形文が螺旋状に施され、口縁部から内面と外面の釉が掛分けされる。出土量はさほど多くないが、指標遺構では東大編年VI bからVIII b期に確認される。ピークはVIIからVIII a期か。東大構内遺跡で確認される1-rは体部が丸みを呈すものが大半であるが、いわゆる天目形碗に近いものが御殿 233号遺構や法 E8-5号土坑などで、丸みを帯びた筒形碗状のものが工1のSK01などで確認される。なお外面にトビガンナ状の押形文が施される点はこの器形にも共通する装飾であるが、釉の掛分け方や釉調などにはバリエーションが認められる。

TC-1-s



(御殿 223)

刷毛目が施された碗を本類とした。指標遺構では東大編年V b^{註10}からVIII c期に確認されるが、ピークはVI bからVII期にある。V bからVI期のものは、高台脇が平らに削り込まれ、体部との境に稜を有する。体部は高台からハの字状に開き気味に立ち上がり、口縁部付近でわずかに内湾する。VII期以降のものは、高台脇の削り込みはなくなり、体部は浅い半球形を呈すものが大半となる。刷毛目は、出現時には内外面ともに打刷毛目のものが多いが、時代が下ると、外面は渦状刷毛目で内面は打刷毛目というものもみられるようになり、次第に内外面ともに渦状刷毛目というパターンに画一化されていくようである。

TC-1-u



(御殿 233)

内面および外面上半に灰釉、外面下半に錆釉が施釉された、いわゆる腰錆碗を本類とした。指標遺構では東大編年IV bからVIII b期、VIII d期、IX期に確認されるが、ピークはV aからVI a期にある。IV b期のものは体部がやや外側へ開き、中程に緩やかにくびれを有し、器高も高い。また高台内に押印のあるものもある。時代が下ると、次第に体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部付近がわずかに内傾するようになる。また器高も全体的に低くなり、高台内の押印もみられなくなる。

TC-1-v



(外来 SK174)

半筒形を呈し、灰釉と柿釉が掛分けされる碗を本類とした。出土量は極めて少なく、指標遺構ではV a期とVI a期に散見される。東大構内遺跡以外では、尾張Ⅲの67-3S-1^{註11}から上絵付された京都・信楽系陶器の半球形碗(TD-1-b)と1-vがまとめて出土している。

TC-1-w



(工14 SU176)

杉形を呈し、外面に鉄と呉須で若松文が描かれた、いわゆる小杉茶碗を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では確認できないが、中診 G22-4 では京都・信楽系陶器半筒形碗 (TD-1-i) や型作りの香炉・火入れ (TD-9-a) と共伴する。分類 (1) で提示した 1-w は、東大編年 IV b から V 期、VIII a から VIII b 期に比定される工 14 の SU176 から出土したものである。東大構内遺跡以外では、筑土八幡町 558 号遺構^{註12}で瀬戸・美濃系磁器 (JC) の寿文皿 (2-d) や器厚のごく薄い坏 (6-d) などとともに多くの 1-w が出土したと報告されている。それらを見ると基本的な形状は杉形を呈すが、高台脇の成形方法や若松文の描き方などにバリエーションが認められる。

TC-1-x



(理 13 号地下式土坑)

緑釉が施された丸碗を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では VII 期、VIII a 期の各 1 遺構のみで確認される。指標遺構以外では分類 (1) で提示した理 13 号地下式土坑で、瀬戸・美濃系陶器の太白手筒形碗 (TC-1-i) やロクロ成形の塩壺で「大極上壺塩」の刻印のあるもの (DZ-51-v) などと共伴する。

TC-1-y



(工1 SK01)

いわゆる奈良茶碗を本類とした。口縁部が外反し、蓋を有す。白化粧された上に呉須や鉄などで絵付が施される。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では VII 期、VIII a 期の各 1 遺構のみで確認され、それ以外では工 14 の SK359 で瀬戸・美濃系磁器の木型打込皿 (JC-2-d) や益子・笠間系播鉢 (TM-29) と共伴する。

TC-1-z



(中診 H21-2)

口縁部が外反し、内面は白化粧され、外面には白土と鉄で折枝梅花文が絵付された碗を本類とした。出土量、出土遺構ともに少ないが、指標遺構では東大編年 VIII a から VIII d 期^{註13}に確認される。

TC-1-aa



(中診 K24-1)

灰釉が施された丸碗を本類とした。出土量はあまり多くないが、東大編年 I b から V a 期、VIII a 期に確認される。ピークは III b 期か。

TC-1-ab



(中診 2 号組石)

いわゆる太白手の小丸碗を本類とした。前述したほかの太白手の碗 (1-h, i, j) と同様に出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では東大編年 VII 期と VIII a 期の各 1 遺構のみで確認される。

TC-1-ac



(中診 G20-2)

内面から口縁部は灰釉、外面は錆釉が掛分けされ、外面には長石釉が散らされている碗を本類とした。体部数箇所に凹みを有す。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年Ⅲ b期、Ⅳ bからⅥ a期に確認される。ピークはⅣ bからⅤ b期か。Ⅲ bからⅣ期のものは畳付部分に押印のあるものが比較的多く、「本山」や「古山」?などの刻印が確認されるが、時代が下ると刻印はみられないようである。

TC-1-ad



(設備 Y34-4)

筒形を呈し、口縁部に漆黒釉、体部に錆釉が掛分けされる碗を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、東大構内遺跡では東大編年Ⅵ a期、Ⅵ b期の各1遺構のみで確認される。管見の限り、東大構内遺跡以外でもあまり看取されない。

TC-1-ae



(御殿 233)

口縁部に緑釉や瑠璃釉、体部に灰釉が掛分けされる碗を本類とした。出土量は少ないが、指標遺構ではⅦ期からⅧ a期に確認される。麴町 SK317^{註14}では肥前系磁器 (JB) の半球形碗、筒形碗、小丸碗 (1-f, 1, j) などと共伴しており、東大構内遺跡においても初現が上がる可能性がある。

TC-1-af



(理 11・12号土坑)

内面は白化粧され、外面には白土と鉄で折枝梅花文が絵付された、いわゆる広東碗を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構ではⅧ a期の1遺構のみで確認される。分類 (1) で提示した理 11・12号土坑から出土したものは、瀬戸・美濃系陶器 (TC) の五合徳利 (10-d) や植木鉢 (TC-21) と共伴するものである。

TC-2-a



(中診 L22-1・L23-1)

灰釉が施釉された丸皿で、見込みや高台内にピンの痕跡のあるものを本類とした。指標遺構では東大編年Ⅰ bからⅣ a期、Ⅵ b期、Ⅷ a期、Ⅷ c期に確認されるが、ピークはⅡからⅢ a期にある。ピンの痕跡は3つ確認されるものが大半であるが、Ⅲ a期に比定される病棟 D1 層^{註1}では、それに加えて5つのピン痕跡のあるものが若干含まれる。出土量は3つのものより少ないため、窯差なのか時期差なのか現時点では把握できていない。

TC-2-b



(中診 12号組石)

灰釉が施釉された丸皿で、見込みや高台内に直重ねされた痕跡のあるものを本類とした。2-aよりやや遅れて、指標遺構では東大編年ⅡからⅤ b期に確認されるが、ピークはⅢ期にある。時代が下ると高台高が低くなり、高台脇の水平な削り込みもみられなくなる。Ⅴ b期に比定される外来 SK290で確認されたものは、高台が碁笥底風に削り込まれたものとなっている。

TC-2-c



(御殿 618)

長石釉が施釉された丸皿を本類とした。東大編年Ⅰ bからⅤ a期、Ⅵ a期に確認されるが、ピークはⅡからⅢ a期にある。大窯からの製品であり、東大構内遺跡でも早い段階に確認される小器種の1つである。

TC-2-e



(中診 F33 - 3)

見込みに鉄や呉須で摺絵が施された灰釉皿を本類とした。いわゆる御深井である。指標遺構では東大編年Ⅲ b 期、V a からⅧ b 期に確認されるが、ピークはV a からⅥ a 期にある。東大編年Ⅲ b 期に比定される病棟 D 面焼土^{註1}から出土した2-e は、口縁が緩やかなヒダ状を呈し、見込みに鉄の摺絵と径2mm程度の小さな目跡が3箇所確認される。D 面焼土は天和2（1682）年の火災一括資料と推定されるものであり、本製品も被熱した痕跡が認められる。東大構内遺跡の2-eの初現となるものであろう。

TC-2-f



(外来 SK175)

いわゆる石皿を本類とした。幅広の高台を有し、見込みに鉄や呉須による絵付が施される。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年Ⅶ^{註15}からⅧ d 期に確認され、指標遺構以外ではⅧ c 期に比定される外来 SK166 で出土している。

TC-2-g



(中診 2号組石)

内側面に鉄で扁平な渦巻文が施文された、いわゆる馬ノ目皿を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年Ⅵ b からⅧ c 期とⅨ期に確認される。ピークはⅧ期か。

TC-2-h



(設備 Y37-4)

輪高台を有し、見込みに呉須による絵付が施された、いわゆる太白手の皿を本類とした。出土量は少ないが、指標遺構では東大編年ⅦからⅧ a 期、Ⅷ c 期、Ⅸ期に確認される。なお指標遺構以外では、Ⅷ b 期に比定される外来 SE271 で出土している。

TC-2-i



(設備 AD37-1)

平面形が木瓜形を呈し、輪高台を有す灰釉型皿を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年Ⅲ a^{註16}からⅣ a 期、V a からⅥ a 期、Ⅶ期に確認される。なおⅢ期には木瓜形以外で、高台も輪高台ではなく3足、あるいは変形高台のものが多く、それらにはいわゆる御深井釉が施釉されたものが多い。

TC-2-j



(中診 H20-4)

見込みに鉄絵蘭竹文が施された小振りの皿を本類とした。出土量は少ないが、指標遺構では東大編年Ⅰ b からⅣ a 期、V b 期、Ⅵ a 期、Ⅷ a 期に確認される。V b 期からⅥ a 期、Ⅷ a 期に確認されているものはいずれも細片であり、ピークはⅡからⅢ a 期か。

TC-2-k



(中診 F34-11)

菊皿で、外面にしぎを有すものを本類とした。高台以外はいわゆる黄瀬戸釉が施釉され、口縁部付近などに緑釉が施釉されるものが多い。指標遺構では東大編年ⅡからⅣ a 期、Ⅵ b 期、Ⅷ a 期に確認されるが、ピークはⅢ期にある。時代が下ると全体の釉調も灰色から透明に近い灰釉となり、緑釉もほとんど確認できなくなる。また外面に施されるしぎも雑になる。

TC-2-l



(中診 F34-11)

菊皿で、外面しのががないものを本類とした。高台以外はいわゆる黄瀬戸釉が施され、口縁部付近などに緑釉が施釉されるものが多い。出土量はごく少ないが、前述した2-kよりも遅れて東大編年Ⅲ bからⅣ a期、Ⅵ a期、Ⅵ b期に確認される。なおⅣ b期に比定される中診 F34-11と病棟 SK3^{註1}では前述した2-kと共伴することが確認されている。

TC-2-m



(御殿 270)

小振りな輪禿皿を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年ⅡからⅣ a期、Ⅵ a期、Ⅷ a期、Ⅷ b期に確認されるが、ピークはⅢ期にある。ⅡからⅢ期のは見込みに凸帯を施し、その部分が無釉にされ、見込み中央に印花文などが施されるものもある。しかし時代が下ると見込みの凸帯はなくなり、円帯状に釉が拭き取られたものになり、印花文などもみられなくなる。

TC-2-n



(設備 Z37-1)

口縁部が鐔状のヒダにされた灰釉皿を本類とした。出土量は極めて少なく、指標遺構ではⅧ aからⅧ b期の遺構で散見される。指標遺構以外では、中診 H20-4で瀬戸・美濃系陶器蘭竹文皿(TC-2-j)や、手づくねの土器皿(DZ-2-g)と共伴するのが確認されるほか、東大編年Ⅴ a期に比定される外来 SK141でも確認される。これらのような比較的早い段階で確認されるものと、Ⅷ期以降確認されるものとを同分類としてよいか否かは検討する必要がある。なお SK141で出土したものは、見込みに呉須による絵付が施されたものである。

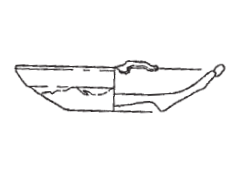
TC-2-o



(法 E8-4号)

柿釉が施された灯明皿を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅴ b^{註17}からⅧ a期、Ⅷ c期、Ⅷ d期に確認されるが、ピークはⅥ bからⅧ a期にある。内面あるいは外面に直重ね痕跡の確認されるものが多い。

TC-2-p



(中診 2号組石)

把手のある灯明皿を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では東大編年Ⅲ b期に比定される病棟 D面焼土^{註1}のみで確認される。D面焼土で確認されたものは、鉄釉が施釉され、底部は碁笥底状に小さく削り込まれ、紐状の把手が1箇所遺存するものである。指標遺構以外では文 T10-1号土坑で出土しており、瀬戸・美濃系陶器(TC)の天目碗や灰釉薄掛け碗(1-a、c)、直重ね灰釉皿(2-b)などが共伴する。

TC-2-q



(御殿 7)

灰釉が施された無高台の丸皿を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では確認されなかった。指標遺構以外では分類(1)で提示した御殿 7号遺構から出土しており、瀬戸・美濃系磁器(JC)でコバルトにより銅版転写で染付が施された、体部が直線的に開く薄手碗(1-f)、寿文皿(2-b)、爛徳利(4類)などと共伴する。

TC-2-r



(薬新 SE67)

緑釉が施された総織部の皿を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、東大構内遺跡ではⅠ b期、Ⅲ b期、Ⅷ a期の各1遺構のみで確認される。

TC-2-s



(葉新盛土)

長石釉が施釉され、内面に鉄で菊花文などが描かれた志野織部の皿を本類とした。口縁部に緑釉が流し掛けられるものもある。出土量、出土遺構ともに少なく、東大編年Ⅰb期、Ⅱ期、Ⅲa期、Ⅲb期の各1遺構のみで確認される。

TC-2-t



(中診 F23-2)

いわゆる太白手で、高台が蛇ノ目凹形高台状にされた皿を本類とした。出土量は少なく、東大編年ⅧbからⅧc期に散見される。

TC-4



(中診2号組石)

燭徳利を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では確認されなかった。分類(1)で提示した中診2号組石から出土したものは、瀬戸・美濃系磁器(JC)の端反形碗(1-d)やいわゆる湯呑碗(1-e)、肥前系磁器(JB)の広東碗や小丸碗(1-m、j)などと共伴するものである。東大構内遺跡以外では、尾張Ⅶの172-3K-1^{註18}や明石町12号遺構^{註19}で出土し、瀬戸・美濃系磁器(JC)の端反形碗、湯呑碗(1-d、e)などが共伴している。

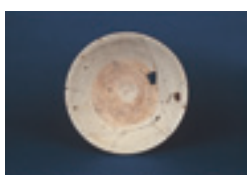
TC-5-a



(中診遺構外)

いわゆる笠原鉢を本類とした。指標遺構では東大編年ⅠbからⅣa期、ⅤaからⅥb期、Ⅷa期に確認されるが、ピークはⅢ期、ⅤbからⅥb期の2回あるようである。ただし出土量が多いのは前半である。Ⅲ期までのものは体部が高台からやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁部はわずかに外反し、内側に小さな稜を有すものが多い。見込みの鉄絵も内面全面に比較的細かく描かれ、緑釉が散らされたものが多い。時代が下ると体部は「ハ」の字状に立ち上がり、口縁部内側の稜はみられなくなる。また見込みの鉄絵も雑になり、緑釉が散らされたものはほぼなくなる。

TC-5-c



(設備 AD35-2)

灰釉が施釉された輪禿鉢を本類とした。体部は直線的に開き、口縁部は緩やかに外反し、口唇部外側は平らに削られ角張っている。指標遺構では東大編年Ⅲb期、ⅤaからⅧb期とⅨ期に確認されるが、ピークはⅤからⅥ期にある。Ⅲb期のものは体部が高台からやや丸みを帯びて立ち上がるが、時代が下ると次第により直線的に開くものとなる。また見込み蛇ノ目状の釉の拭き取りも、次第に雑になる傾向がある。なお内面に呉須などによる絵付が施されるものもあり、それらはⅤa期に比較的多い。Ⅲb期に比定される病棟D面焼土^{註1}で確認されているものも、内面に染付が施されたものである。

TC-5-f



(理 74号土坑)

口縁部に数箇所の凹みを有す灰釉鉢で、生産地で水盤と呼称される鉢を本類とした。管見の限り、東大構内遺跡では底部が碁笥底にされるタイプしか確認できなかったが、生産地では3足を有すタイプのものもある。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年ⅤaからⅧa期に確認される。ピークはⅥからⅦ期か。

TC-5-h



(中診 H20-7・9)

把手のある手鉢を本類とした。出土量は極めて少なく、指標遺構では東大編年Ⅳ b 期とⅤ b 期の各 1 遺構のみで確認される。分類 (1) で提示した中診 H20-7・9 から出土したものは、瀬戸・美濃系陶器 (TC) の天目碗 (1-a) や播鉢 (29 類) と共伴するものである。

TC-5-i



(外来 SU29)

口縁部内側付近に波状の櫛描文を有し、灰釉に緑釉が流し掛けられた鉢を本類とした。見込み中央に印花文がみられるものもある。指標遺構では東大編年ⅡからⅣ a 期、Ⅴ a からⅧ b 期に確認され、ピークはⅢ期とⅤ b からⅥ b 期の 2 回あるようだが、後半ピーク時の 1 遺構からの出土量はあまり多くない。このようなピークの有り様は、瀬戸・美濃系陶器笠原鉢 (TC-5-a) と酷似するものである。Ⅲ期のものは、体部が高台から丸みをもって立ち上がり、口縁部は外反し、端部が垂直気味に立ち上がる。見込みに菊花の押印文が施されたものもあり、口縁部内側の波状の櫛描文は、数条で 1 単位という細かいものである。また緑釉が内面全体に大きく带状に流し掛けられるものが多い。Ⅴ期以降は器高がやや低くなり、体部が高台から直線的に開いて立ち上がり、口縁部の外反は小さくなる。櫛描文も 2、3 条を 1 単位としたものとなり、緑釉も散らされる程度になる。

TC-5-k



(薬資 SK08・10)

織部を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では確認されなかった。分類 (1) で提示した薬資 SK08・10 から出土したものは、肥前系磁器底部無釉碗 (JB-1-b) や瀬戸・美濃系陶器 (TC) の天目形碗 (1-a)、長石釉皿 (2-c) などと共伴するものである。

TC-5-l



(御殿遺構外)

こね鉢を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年Ⅴ a 期、Ⅵ a 期、ⅦからⅧ c 期に確認される。早い段階で確認される 5-l は、口縁部の外反が小さい。東大構内遺跡以外では尾張Ⅲ 67-3S-1^{註11}では、肥前系磁器 (JB) の梅樹文碗、半球形碗 (1-v、f) などと共伴すると報告されている。

TC-6



(中診 D32-1)

坏を本類とした。指標遺構では東大編年ⅡからⅣ a 期、Ⅴ期、ⅦからⅧ a 期、Ⅷ c からⅨ期とほぼ全段階で確認される。出土量が多い遺構はⅢ期とⅧ a 期に確認されるが、いずれも遺物総量が多い遺構である。ⅢからⅣ期のものは体部が緩やかに外側へ開くか、わずかに口縁部が外反するものが多いが、Ⅴ a 期以降は体部が丸みを帯び、直立あるいはわずかに内傾するものが多いようである。

TC-8



(中診 L34-1)

仏飯器を本類とした。出土量は極めて少なく、指標遺構では東大編年Ⅲ b 期、Ⅳ a 期、Ⅴ a 期、Ⅴ b 期、Ⅵ a 期、Ⅷ a 期、Ⅸ期の各 1 遺構で確認される。

TC-9-a



(法 D7-4 号土抗)

灰釉が施された香炉・火入れを本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年ⅡからⅧb期、Ⅸ期に確認される。総遺物量が多い東大編年Ⅲb期に比定される病棟D面焼土^{註1}などでは比較的多く確認される。瀬戸・美濃系香炉・火入れ(TC-9)の分類は基本的に釉調による分類であるため、9-aには様々な器形、法量のものが含まれるが、全体的な傾向としてⅣ期までは口径10cmから12cm前後のものが中心で、Ⅴ期以降はそれらに加えて口径6cm前後の小振りなものもみられる。本製品の使用場所の多様化によるものか。

TC-9-b



(中診 C28-1・2)

鉄釉が施された香炉・火入れを本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年ⅡからⅧb期に確認される。9-a同様、1遺構の遺物総量が多い東大編年Ⅲb期に比定される病棟D面焼土や、Ⅳa期に比定される病棟SK3などでは比較的多く確認される^{註1}。

TC-9-c



(中診1号組石)

鉄や呉須で摺絵が施された香炉・火入れを本類とした。いわゆる御深井である。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年ⅣaからⅥa期、Ⅷa期に確認される^{註20}。ピークはⅤ期か。

TC-9-d



(中診 C28-4・5)

丸ノミ状のもので半菊文などが彫られた香炉・火入れを本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年ⅢbからⅤb期、Ⅷa期に確認される。ピークはⅣからⅤ期か。

TC-9-e



(中診 D32-1)

口縁部に灰釉、それ以下には鉄釉が掛け分けられる。鉄釉部分には櫛描状の沈線が横方向に巡らされ、さらにその上から丸ノミ状のもので縦方向に数条の彫りが入れられた香炉・火入れを本類とした。出土量は極めて少なく、指標遺構では東大編年Ⅳa期、Ⅴa期、Ⅴb期、Ⅷc期の各1遺構のみで確認される。

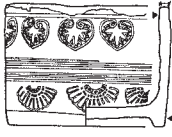
TC-9-f



(御殿 532)

袴腰で、輪高台を有す鉄釉香炉・火入れを本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年ⅡからⅤa期に確認される。ピークはⅢbからⅣa期か。

TC-9-g



(中診 2号組石)

筒形の香炉・火入れを本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅷ a 期とⅧ b 期の各 1 遺構のみで確認される。

TC-10-a



(左は中診 C28-4・5, 右は E34-1)

容量が二合半の灰釉徳利で、底部釉が拭き取られたものを本類とした。後述する灰釉が浸け掛けされた二合半徳利 (10-c) とともに、瀬戸・美濃系陶器 (TC) の中で多く出土する小器種の 1 つであり、指標遺構では東大編年Ⅳ b からⅨ 期に確認される。ピークはⅤ からⅦ 期にある。ただし 10-c のように、本製品のみで天箱数箱分出土するような例は確認されない。Ⅵ 期までのものは胴部が兩滴形を呈し、その中程に最大径を有す。頸部も長く、口縁部はやや強く外反し、鏝状を呈す。Ⅴ a 期以降多く確認される釘書きは、線彫りされているものが多い。Ⅶ 期以降のものは胴部中程に最大径を有すが、寸胴形に近い形状となる。頸部は短くなり、口縁部は折り返され、密着する。釘書きは線彫りで線が細いもの、あるいは点刻に近いものとなる。

TC-10-c



(設備 X35-4)

容量が二合半の灰釉徳利で、底部釉が浸け掛けされたものを本類とした。瀬戸・美濃系陶器 (TC) の中で多く出土する小器種の 1 つであり、指標遺構では東大編年Ⅶ からⅨ 期に確認されるが、ピークはⅧ a からⅧ c 期にある。器形は基本的に肩が張った寸胴形を呈すが、Ⅶ 期のものは最大径が胴部中程にあるものと、肩にあるものが混在し、頸部を有す。Ⅷ a 期以降は最大径が概ね肩にあるものとなり、頸部はほぼなくなる。口縁部は折り返され、胴部に密着し帯状を呈す。胴部の釘書きは、Ⅶ 期のものは細い線書きのものと、点刻されたものと確認されるが、Ⅷ a 期以降はほぼ点刻のみとなり、Ⅷ c 期以降は点刻の点がより小さく、点と点の間隔がやや大きくなる。

TC-10-d



(左から中診 F34-11, F33-3, H21-2)

容量が五合の徳利を本類とした。管見の限り、二合半徳利 (10-a, c) よりも早くから看取され、指標遺構では東大編年Ⅲ b からⅨ 期に確認される。ピークはⅤ a からⅧ a 期にある。出土量は当初、二合半徳利よりも多いが、Ⅷ a 期あたりで 10-c が多量に出土するようになるとそれが逆転する。Ⅳ 期からⅤ a 期ごろに胴部は釣鐘形から兩滴形へ、Ⅵ b からⅦ 期ごろに寸胴形へと漸次変化するようである。頸部はⅧ a 期以降短くなる。いわゆる「尾呂徳利」のような頸部から肩部にかけてうのふ釉が流し掛けられるものは、Ⅴ 期以降はほとんど確認されない。胴部の釘書きはⅤ a 期以降出土するものに確認される事が多く、Ⅵ a 期ごろまでは線彫りのものが、Ⅶ 期以降は点刻されるものが多くなる。

TC-10-e



(中診 F23-2)

容量が一升の徳利を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅳ b からⅧ d 期に確認されるが、ピークはⅥ a からⅧ b 期にある。Ⅳ b からⅤ 期のものは胴部が釣鐘形を呈し、頸部も長く、口縁部は緩やかに外反し玉縁状を呈す。いわゆる「尾呂徳利」のような、頸部から肩部にかけてうのふ釉が流し掛けされるものである。釘書きは、太めの線彫りでなされている。Ⅵ 期には胴部が寸胴形に近いものも混在し、頸部は長いまま口縁部は折り返されて断面形が三角形を呈すものとなる。なおⅥ 期以降のタイプには、尾呂徳利のようなものはない。出土量が増加するⅦ 期以降は寸胴形のもののみとなり、頸部は短くなる。釘書きも細めの線彫りから点刻へと変化する。

TC-10-f



(中診 F34-11)

舟徳利を本類とした。漆黒釉または柿釉を施釉されるものが多い。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年ⅡからⅣa期、ⅤaからⅥa期、Ⅷa期に確認されるが、ピークはⅢbからⅣa期にある。ⅤbからⅥa期にもう1つ小さなピークが認められるが、2回のピークに確認されるものは形状と容量が異なる。すなわち前半のものは肩部が張り、胴部は釣鐘形を呈し、口縁部断面形は逆「く」の字状を呈し、容量は一升以上あるものが大半である。しかし後半のものは肩の張りが弱く、胴部は寸胴形を呈し、口縁部の断面形状は三角形に近いものであり、容量は一升から五合ぐらいのものが大半である。

TC-10-g



(中診 F23-2)

柿釉が施釉された、備前写しの徳利を本類とした。指標遺構では東大編年ⅥaからⅧd期に確認されるが、ピークはⅧ期にある。胴部に条線が巡る糸目徳利と、胴部に凹みを有すいわゆる「ぺこかん」徳利の2タイプのものが確認される。容量は五合から一升ほどのものが多いが、時代が下ると容量が二合半以下のものや、逆に一升を超えるものもみられ、「ぺこかん」徳利の方が多くなるようである。また瀬戸・美濃系陶器の二合半、五合、一升徳利(10-a、c、d、e)などにみられる釘書きが施される例は管見の限りない。

TC-10-h



(中診 F34-11)

らっきょう形を呈す小瓶を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅲb期からⅣa期に散見され、それ以外では、東大編年Ⅶ期に比定される工14のSK330で出土している。

TC-10-k



(薬新 SE67)

頸部に緑釉が施釉され、胴部に鉄で草花文などが描かれた織部徳利を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では東大編年Ⅰb期、Ⅱ期、Ⅲa期の各1遺構のみで確認されるが、破片である場合が多い。

TC-12



(設備 AE36-4)

油壺を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構ではⅤa期とⅦ期^{註15}の各1遺構のみで確認される。指標遺構以外ではⅥbからⅦ期に比定される工14のSU382で確認される。また分類(1)で提示した中診AE36-4で確認されたものは、肥前系磁器(JB)の半球形碗、梅樹文碗(1-f、v)、京都・信楽系陶器半筒形碗(TD-1-i)と共伴するものである。

TC-13



(工14 SK39)

蓋物を本類とした。出土量は少なく、指標遺構ではⅤa期、ⅦからⅧa期に確認される。

TC-15-a



(御殿1)

いわゆる赤津半胴や銭甕を本類とした^{註21}。口縁部は平縁で、柿釉が施釉され、底部は露胎にされる。指標遺構では東大編年Ⅲ b 期、Ⅳ b^{註9} からⅨ期に確認されるが、ピークはⅥ a からⅧ b 期にある。Ⅴ期からⅥ期に確認されるものは器高が 15cm から 20cm 前後のものが多いが、Ⅶ期ごろには器高が 12cm 前後の小さなものもみられる。Ⅷ b 期以降は器高が 15cm を超えるものはあまりなくなり、ほぼ器高 12cm 前後のものとなる。口縁部の変化をみると、わずかに内傾し、内側に小さく張り出すものから、Ⅷ期以降、外側へ張り出すタイプへと変化する傾向がみられる。

TC-15-b



(中診 H21-1)

口縁部は外反し、柿釉に灰釉が流し掛けられる甕を本類とした。底部は露胎にされる。指標遺構では東大編年Ⅴ a 期、Ⅵ b 期、Ⅷ a からⅨ期に確認されるが、ピークはⅧ期にある。

TC-15-c



(工14 SK307)

生産地で水甕と呼称されるものを本類とした。外面に流水状の文様や、斑状に刺突文が施されるものが多い。高台周辺以外は灰釉が施釉され、鉄釉や緑釉が流し掛けられる。指標遺構では東大編年Ⅴ a からⅧ c 期とⅨ期に確認されるが、ピークはⅦからⅧ c 期にある。

TC-15-d



(中診2号組石)

高台以外に緑釉が施釉され、胴部中央付近に雲龍文などの貼付文が施された甕を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅷ a 期とⅧ b 期の各 1 遺構のみで確認される。

TC-18



(工1 SK01)

合子を本類とした。出土量は少なく、指標遺構ではⅧ a 期とⅧ b 期の各 1 遺構のみで確認される。なおⅧ a に比定される工1のSK01では、遺物総量が多いためか TC-18 がまとまって出土している。

TC-19



(設備 AD34-2)

水滴を本類とした。出土量は少なく、指標遺構ではⅢ b 期、Ⅳ a 期、Ⅴ a 期、Ⅵ a 期、Ⅵ b 期、Ⅷ a 期、Ⅷ b 期の各 1 遺構で確認される。

TC-21



(中診7号組石)

植木鉢を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅴ期、Ⅵ b からⅨ期に確認されるが、ピークはⅧ期にある。器面に様々な貼付文や押印文などの意匠が凝らされたものも散見されるが、もっとも多く確認されるのは、灰釉が施釉され、高台に 3、4 箇所アーチ状のスリットを有すものである。

TC-22-a



(中診 C28-1・2)

口縁部が盤口形を呈す花生を本類とした。出土量は少ないが、指標遺構では東大編年Ⅲ b からⅤ a 期に確認される。

TC-22-b



(中診 E22-1)

口縁部が朝顔形を呈す花生を本類とした。多くは体部上半は灰釉、下半は鉄釉が掛け分けされている。盤口形の花生(22-a)に比べて比較的多くの遺構で確認されるが、出土量はあまり多くない。指標遺構では東大編年Ⅳ a 期、Ⅴ b からⅧ a 期に確認されるが、Ⅳ a 期のものは生産地や東大構内遺跡以外の出土例をみる限り、混入である可能性が高い。ただし指標遺構以外では、東大編年Ⅴ a に比定される外来 SK141 で確認されていることから、将来的には初現がⅤ b 期より上がる可能性はある。

TC-23-a



(御殿 255a)

筒形の片口鉢を本類とした。出土量は極めて少なく、指標遺構では東大編年Ⅲ b からⅣ b 期、Ⅵ a 期に確認される。

TC-23-b



(設備 Y37-3)

丸碗形の片口鉢を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅲ b からⅨ期に確認されるが、ピークはⅣ b からⅥ a 期にある。Ⅳ a 期までのものは鉄釉が施されたものや、灰釉に青緑釉が流し掛けされたものも散見されるが、時代が下ると灰釉のみで施されたものが大半となる。

TC-23-c



(工1 SK01)

体部が「ハ」の字状に開く片口鉢を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では東大編年Ⅷ a 期、Ⅷ b 期の各1遺構のみで確認される。

TC-24-a



(外来 SK290)

口縁部に灰釉、それ以下には鉄釉が掛け分けられる。鉄釉部分には櫛描状の沈線が横方向に巡らされ、さらにその上から丸ノミ状のもので縦方向に数条の彫りが入れられた灰落しを本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では東大編年Ⅴ b 期とⅧ a 期の各1遺構のみで確認される。

TC-24-b



(工14 SK357)

長筒形の灰落しを本類とした。出土量は極めて少なく、指標遺構ではⅤ b 期からⅥ a 期に散見される。分類(1)提示した工14のSK357から出土したものは、ロクロ成形で筒形無印の塩壺(DZ-51-w)や板作成形で「堺湊塩濱長佐衛門」の刻印がある塩壺(51-af)と共伴するものである。

TC-25



(外来 SU313)

鬢水入れを本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年Ⅲ b からⅥ b 期、Ⅷ b 期、Ⅷ c 期に確認される。ピークはⅣからⅤ期か。

TC-26



(中診 F34-11)

茶入れを本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では東大編年Ⅱ期、Ⅲ a 期、Ⅳ期に散見される。

TC-27-a



(設備 X35-9)

体部がらつきょう形を呈し、橋状の把手のある水注を本類とした。底部以外、褐釉が施釉されるものが多いが、中には灰釉に緑釉が流し掛けられたものもある。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年Ⅲ a からⅥ a 期に確認される。ピークはⅢ期からⅤ期か。Ⅲ期のものは肩が張った釣鐘形を呈すが、時代が下ると、なで肩の雨滴形に近いものとなる。また法量も小さくなるようである。

TC-27-b



(給水 AJ34-2)

体部が円筒形を呈し、橋状の把手のある水注を本類とした。いわゆる汁次である。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年Ⅴ a 期、Ⅵ a 期からⅧ c 期に確認される。ピークはⅦからⅧ c 期か。

TC-27-c



(給水 AJ33-1)

鉄や呉須で摺絵が施された灰釉の水注を本類とした。出土量は少ないが、指標遺構では東大編年Ⅴ a からⅧ a 期に確認される。ピークはⅥ期か。

TC-28



(中診 D33-1)

洩瓶を本類とした。出土量は多くないが、指標遺構では東大編年Ⅱ期、Ⅳ a 期、Ⅴ a からⅧ a 期に散見される。

TC-29



(中診 C26-1)

播鉢を本類とした。瀬戸・美濃系陶器 (TC) の中では瓶 (10 類)・碗 (1 類) に次いで多く確認される器種であり、指標遺構では東大編年Ⅰ b からⅧ c 期に確認されるが、ピークはⅢからⅣ期にある。本製品は生産地の赤津村出土のものについて藤沢が口縁部の形態から分類しており (瀬戸市史編纂委員会 1998)、それを参考に概観すると東大編年Ⅱ期には藤沢分類Ⅰ類 A 類、Ⅲ期にはⅠ類 A 類に加えて B 類、C 類、Ⅱ類も少量確認される。Ⅳ期はⅠ類 C 類が多くなり、Ⅰ類 D 類も散見される。

TC-30



(御殿 49)

餌入れを本類とした。出土量は少ないが、指標遺構では東大編年V b期、VI bからVIII b期、VIII d期、IX期に確認される。指標遺構以外では東大編年V aに比定される外来SK141で確認されているほか、東大構内遺跡以外でも尾張Ⅲの67-3S-1^{註11}では、肥前系磁器（JB）の梅樹文碗（1-v）、半球形碗（1-f）、いわゆるくらわんか碗（1-g）などと共伴している。なお分類（1）で提示した御殿49号遺構からは本製品が14個体まとまって出土しており、瀬戸・美濃系磁器（JC）の丸碗、端反形碗（1-a、d）、青土瓶（TZ-34-a）などと共伴している。

TC-31-a



(工14 SK298)

生産地で瓶掛と呼称される火鉢を本類とした。出土量は極めて少なく、指標遺構ではVIII a期のみで確認され、それ以外ではVIII b期に比定される外来SE271や、VIII c期に比定される外来SK166で確認されている。なお分類（1）で提示した工14のSK298から出土したものは、瀬戸・美濃系磁器（JC）の端反形碗（1-d）や体部が直線的に開く坏（6-f）、上絵付^{註4}が施された器厚が極めて薄い坏（6-d）などと共伴するものである。

TC-31-b



(外来 SK380)

風炉を本類とした。出土遺構は極めて少なく、指標遺構では確認できなかった。指標遺構以外ではVIII c期に比定される外来SK166で確認されている。また分類（1）で提示した外来SK380から出土したものは、瀬戸・美濃系磁器（JC）の端反形碗（1-d）、上絵付^{註4}が施された器厚が極めて薄い坏（6-d）などと共伴するものである。

TC-34



(工14 SU396)

土瓶を本類とした。出土量は少なく、指標遺構ではVIII a期、VIII c期、VIII d期の各1遺構のみで確認される。指標遺構以外では、VIII d期に比定される工14のSK392で蓋裏に「タチ」の刻印があるTC-34が確認されている。また分類（1）で提示したTC-34は、VIII c期に比定される工14のSU396から出土したもので、底部に長方形枠に「タチ / 丸源」の刻印があるものである。

TC-38



(外来 SU214)

手焙りを本類とした。出土量は極めて少なく、指標遺構ではIV b期、V a期、VIII a期の各1遺構のみで確認される。分類（1）で例に挙げた外来SU214から出土したものは、肥前系磁器の高台断面の形状がシャープな「U」字状を呈す、高台高の高い碗（JB-1-d）などと共伴するものである。

TC-39



(内藤町 C-216)

おろし皿を本類とした。出土量はごく少ない。指標遺構では東大編年VII期のみで確認される^{註15}。東大構内遺跡以外では、分類（1）で提示した内藤町C-216から出土しており、肥前系磁器筒形御神酒徳利（JB-11-c）、瀬戸・美濃系磁器水滴（JC-19）、京都・信楽系陶器の長筒形ちろり（TD-36-a）などと共伴する（新宿区内藤町遺跡調査会1992）。また尾張Ⅰの50-5L-5^{註22}で出土しているものは、肥前系磁器広東碗（JB-1-m）、瀬戸・美濃系陶器柳茶碗（TC-1-g）、ロクロ成形で筒形無印の塩壺（DZ-51-w）と共伴するものである。

TC-40-b



(構内試掘)

脚付で、灰釉が施された油受け皿を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、東大構内遺跡では確認されなかった。東大構内遺跡以外では明石町12号遺構^{註19}で確認されており、それは篆書文が染付された瀬戸・美濃系磁器（JC）端反形碗（1-d）、寿文坏（6-e）などと共伴するものである。

TC-40-c



(中診 2号組石)

無脚で、錆釉が施された油受け皿を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年VI aからVIII b期に確認される。ピークはVIIからVIII a期にある。時代が下ると、受け部が皿の口縁部より低くなる傾向がある。

TC-40-d



(御殿 7)

無脚で、灰釉が施された油受け皿を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では確認されなかった。指標遺構以外では、東大編年VIII bからVIII期 cに比定される工14のSK188、VIII期に比定される工14のSK293など、VIII期以降に比定される遺構からの出土が確認される。分類(1)で提示した御殿7号遺構出土のものは、瀬戸・美濃系磁器(JC)でコバルトによる型紙刷が施された碗(1類)、坏(6類)、爛徳利(4類)などと共伴するものである。

TC-40-e



(給水 AJ34-1)

高い受けを有す油受け皿を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構ではIV a期に比定される病棟SK3^{註1}のみで確認される。分類(1)で提示した給水AJ34-1から出土したものは、瀬戸・美濃系磁器のいわゆる湯呑碗(JC-1-e)や京都・信楽系陶器油受け皿(TD-40-a、b)と共伴するものである。

TC-41



(工 14 SU389)

油徳利を本類とした。出土量は極めて少なく、指標遺構ではVII期とVIII a期の各1遺構のみで確認される。分類(1)で提示した工14のSU389から出土したものは、肥前系磁器(JB)の小広東碗、小丸碗、端反碗、広東碗(1-i、j、n、m)、瀬戸・美濃系磁器端反形碗(JC-1-d)などと共伴するものである。

TC-44-a



(外果 SK81)

脚部を有すひょうそくを本類とした。出土量は極めて少なく、指標遺構ではVI a期、VIII a期、VIII b期の各1遺構のみで確認される。東大構内遺跡以外では、尾張皿67-3S-1^{註11}で、肥前系磁器(JB)の梅樹文碗、半球形碗(1-v、f)などと共伴する事が確認される。なお今回管見した限りでは、中央芯立部分のスリットの形状が、VI a期に確認されるものとVIII期以降確認されるものと異なる。すなわちVI a期のものは芯立上端を残しスリットが入れられるのに対し、VIII期以降のものは芯立上端からスリットが入れられている。ちなみに67-3S-1で確認したものは、東大編年VI a期に確認されたものと同様の形状を呈すものである。

TD (京都・信楽系陶器)

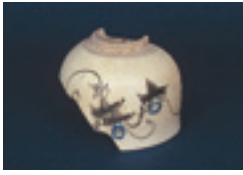
TD-1-b



(中診 C29-3)

高台径が小さい半球形碗を本類とした。器厚は薄手で、外面に錆絵染付や色絵が施されたものが比較的多い。京都・信楽系陶器碗(TD-1)で多く確認される小器種の1つであり、指標遺構では東大編年IV aからVIII b期に確認されるが、ピークはVからVI期にある。IV a期のものはやや腰張り気味の大振りなもので、錆絵染付や色絵も精緻なものも多く、高台内に刻印のあるものもある。しかし時代が下ると器高が低くなり、絵付も雑なものが多くなる。

TD-1-c



(中診 D33-1)

高台径が大きい碗を本類とした。出土量は少ないが、指標遺構では東大編年IV aからVII期に散見される。ピークはV bからVI b期か。

TD-1-d



(中診 E34-1)

杉形を呈し、外面に鉄または呉須で若松文が描かれた碗を本類とした。いわゆる小杉茶碗である。半球形碗(1-b)とともに京都・信楽系陶器碗(TD-1)の中では多く確認される小器種であり、指標遺構では東大編年V aからVIII c期、IX期に確認される。ピークはVIIからVIII a期にある。VからVI期のものは若松文の枝、葉、根と細かなところまで写実的に描かれているが、VII期以降は全体的に矮小化し、絵付も簡略化し、縦3本線が描かれただけのものも確認される。また高台断面の形状も逆台形あるいは方形を呈していたものが、三角あるいは「U」字に近いものとなる。

TD-1-e



(給水 AJ33-1)

口縁部は外反し、口縁部付近には緑釉、それ以下には灰釉が掛分けされる碗を本類とした。出土量、出土遺構は少なく、指標遺構ではVIII a期のみで確認され、それ以外でもVIII a期に比定される工14のSK16で確認されるのみである。

TD-1-g



(中診2号組石)

口縁部が外反し、器面に細かい貫入がみられる小振りの灰釉碗を本類とした。指標遺構では東大編年VI bからVIII b期、IX期に確認されるが、ピークはVIII aからVIII b期にある。

TD-1-h



(文U4-3号)

平碗を本類とした。見込みに銹絵染付や鉄絵が施されるものも多い。半球形碗(1-b)同様、京都・信楽系陶器碗(TD-1)の中で多く出土する小器種の1つであり、指標遺構では東大編年III aからVIII c期^{註23}に確認されるが、ピークはIV bからVI b期にある。時代が下ると器高が低くなり、口縁部は内傾する傾向がある。IV期のものは薄作りで胎土が乳白色を呈し、透明釉が施釉される。見込みには銹絵染付などでワンポイントの文様が施されるものが多く、高台内に刻印のあるものもある。VI b期以降、次第に器厚が厚くなり、胎土も灰色味を帯び、釉調も灰色味をおびる。また見込みの文様や高台内の刻印もほとんどみられなくなる。

TD-1-i



(設備 X36-5)

半筒形の碗を本類とした。半球形碗、平碗(1-b、1-h)同様、京都・信楽系陶器碗(TD-1)の中で多くみられる小器種の1つであり、指標遺構では東大編年V aからVII期^{註23}、VIII b期、VIII c期、IX期に確認されるが、ピークはV bからVI a期にある。時代が下ると、体部の屈曲部分から口縁部までの立ち上がりが高く、内傾する傾向がある。外面にみられる絵付も単純化されるようである。

TD-1-j



(中診 G26-1)

筒形の碗を本類とした。外面に鉄絵が施されるものが多い。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年 V a から VI b 期、VIII a 期、VIII b 期に確認される。ピークは V b から VI a 期か。

TD-1-k



(工14 SK360)

体部中位に大きな凹みを有し、灰釉が施釉される有段碗を本類とした。高台内は渦状に削り込まれるものが多い。出土量は極めて少なく、指標遺構では VII 期と VIII a 期の各 1 遺構のみで確認される。指標遺構以外では、VI から VII 期に比定される工 14 の SU18 で色絵が施された 1-k が確認されている。また分類 (1) で提示した工 14 の SK360 から出土したものは、肥前系磁器筒形碗 (JB-1-l)、京都・信楽系陶器半球形碗 (TD-1-b) などと共伴するものである。

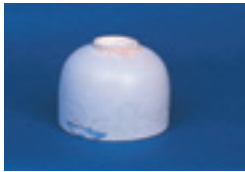
TD-1-l



(外来 SK18)

楽焼風の軟質施釉陶器碗を本類とした。出土量は極めて少なく、指標遺構では IV a 期、V a 期、VI a 期の各 1 遺構のみで確認される。指標遺構以外では外来 SU399 から出土しており、瀬戸・美濃系磁器端反形碗 (JC-1-d)、肥前系磁器小丸碗 (JB-1-j) などが共伴する。

TD-1-m



(工14 SK330)

腰が張る碗を本類とした。出土量は少ないが、指標遺構では東大編年 V b から VI a 期、VII から VIII a 期に確認される。

TD-2-a



(中診 2号組石)

見込みに櫛目を有し、多くは 3 箇所のパイン痕が認められる灰釉灯明皿を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年 VIII a から VIII b 期、IX 期に確認される。ピークは VIII a 期から VIII b 期か。

TD-2-b



(中診 2号組石)

見込みに櫛目がなく、多くは 3 箇所のパイン痕が認められる灰釉灯明皿を本類とした。櫛目があるもの (2-a) 同様、出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年 VIII a 期から IX 期の各 1 遺構のみで確認される。指標遺構以外では VIII c 期に比定される工 14 の SU2 や SU396、明治中葉頃に比定される工 14 の SK358 などと比較的によく出土しており、ピークは VIII c 期以降か。

TD-2-c



(給水 AL37-1)

輪高台を有す皿を本類とした。出土量は極めて少なく、指標遺構では東大編年 V b 期と IX 期に確認される。指標遺構以外では V から VI 期に比定される工 14 の SU294 で確認されているほか、外来 SK13 では肥前系磁器の南川原窯ノ辻窯指標の皿 (JB-2-d)、板作成形で、大枠「泉州麻生」の刻印がある塩壺 (DZ-51-i) などと共伴する。

TD-4



(中診遺構外)

燭徳利を本類とした。出土量は少ないが、指標遺構では東大編年Ⅷ a からⅨ期に確認される。ピークはⅧ c 期以降か。なお分類(1)で提示した中診遺構外から出土したものは緑釉が施釉されたものであるが、ほかに灰釉、色絵の TD-4 も確認される。

TD-5



(御殿 678)

鉢を本類とした。出土量は少ないが、指標遺構では東大編年Ⅲ a からⅤ a 期、Ⅵ a 期、Ⅷ a 期に確認される。

TD-6



(中診 G26-1)

坏を本類とした。出土量は少ないが、指標遺構では東大編年Ⅳ a 期、Ⅴ a からⅧ c 期、Ⅸ期に確認される。ピークはⅤ b 期とⅧ期以降の2回ありそうだが、ⅤからⅦ期のは京都・信楽系陶器半球形碗 (TD-1-b) が小型化したようなものが大半であるが、Ⅷ期以降はそれに加えて口縁部が外反するものや、体部が直線的に開くもの、いわゆる湯呑形を呈すものもみられるなど、器形が豊富になる傾向がある。

TD-9-a



(中診 D28-1)

型作りされた香炉・火入れを本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年Ⅳ b からⅥ b 期に確認される。ピークはⅤ b からⅥ a 期か。

TD-9-b



(中診 F34-11)

口縁部は内側に折られ、蛇ノ目状の高台を有す灰釉香炉・火入れを本類とした。体部に強いロクロ目が観察されるものが多い。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では東大編年Ⅳ a 期に比定される中診 F34-11 のみで確認される。指標遺構以外では、中診1号組石から出土し、肥前系磁器のいわゆるくらわんか碗 (JB-1-g)、肥前系陶器の刷毛目丸碗 (TB-1-g) や瀬戸・美濃系陶器 (TC) の灰釉薄掛け碗、腰鍔碗 (1-c, u) などが共伴する。

TD-9-c



(外来 SK81)

筒形を呈す香炉・火入れを本類とした。出土量は極めて少なく、指標遺構では東大編年Ⅶ^{註23}からⅧ b 期に確認される。指標遺構以外ではⅧ期に比定される工14のSK293から出土しているが、その外面には銹絵染付が施され、高台内には「錦光山」の銘が確認される。

TD-13-a



(中診 D34-2)

身が丸形を呈す蓋物を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構ではⅣ b 期、Ⅴ a 期、Ⅴ b 期の各1遺構のみで確認される。分類(1)で提示した中診 D34-2 から出土したものは、肥前系磁器 (JB) の 1-d の小振りの碗 (1-u)、京都・信楽系陶器半筒形碗 (TD-1-i) などと共伴するものである。

TD-13-b



(中診 E27-1)

重箱状に重ねられた蓋物を本類とした。出土量は極めて少なく、指標遺構ではIV a 期、V b からVIII a 期の各1 遺構のみで確認される^{註23}。分類 (1) で提示した中診 E27-1 から出土したものは、肥前系磁器 (JB) の高台断面の形状が三角形を呈す皿 (2-c)、筒形蓋物 (13-b) などと共伴するものである。

TD-13-c



(給水 AJ38-3)

体部が半筒形を呈す蓋物を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では確認されなかった。それ以外では分類 (1) で提示した給水 AJ38-3 から出土しており、瀬戸・美濃系陶器柳茶碗 (TC-1-g) などと共伴するほか、VIII c 期に比定される外来 SK166、中診 Y36-2 などでも確認される。なお中診 Y36-2 から出土したものは、肥前系磁器 (JB) の半球形碗、くらわんか碗、小丸碗 (1-f, g, j) などと共伴するものである。

TD-13-d



(工14 SU295 上)

外面上半が格子状に浅く彫られ、鉄と白土で梅花文が描かれた蓋物を本類とした。出土量は極めて少なく、指標遺構ではVIII a 期、IX 期の各1 遺構のみで確認される。それ以外ではVIII a 期に比定される工 14 のSU396 で出土している。

TD-14



(外来 SU284)

筆立てを本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構ではVII 期 1 遺構のみで確認される^{註23}。分類 (1) で提示した外来 SU284 から出土したものは、見込みにコンニャク印判の五弁花文が施された、高台断面の形状がシャープな「U」字状を呈す肥前系磁器皿 (JB-2-e) と共伴するものである。

TD-15-a



(御殿 537)

体部上半が鉄釉、下半に灰釉が掛分された、いわゆる腰白茶壺を本類とした。三耳壺が多い。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年 II からVI b 期、VIII a 期、VIII c 期に確認される。ピークはIII からIV 期か。

TD-18-a



(外来 SK290)

体部が扁平な球形を呈す合子を本類とした。出土量はあまり多くなく、指標遺構では東大編年 V a からVI a 期、VIII a 期に確認される。

TD-18-b



(中診 D32-1)

体部が筒形を呈す合子を本類とした。出土量はあまり多くなく、指標遺構では東大編年 V a 期、VI a 期、VIII a からVIII b 期に確認される。

TD-19



(御殿 7)

水滴を本類とした。出土量は少なく、指標遺構では東大編年V a期、VI期、VIII a期に確認される。東大編年VIII期以降に確認されるものは、それ以前のものが入形や犬形など器形にバリエーションがあるのに対し、分類(1)で提示したような口縁部が半月形を呈し、その部分に陽刻の菊花文と「本山」などの刻印がある定形化したタイプのもが多くなるようである。

TD-22



(設備 AE34-1)

花生を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年V aからVI a期、VIIからVIII a期、VIII c期とIX期に確認されるが、ピークはV期か。

TD-24



(設備 Y36-2)

灰落しを本類とした。出土量は少なく、指標遺構では東大編年V aからVI a期に確認される。

TD-25



(中診 D32-1)

鬢水入れを本類とした。出土量は少なく、指標遺構では東大編年V aからVI a期、VIII b期に確認されるものである。ピークはV期か。

TD-27-a



(工14 SU294)

釣手を有す銚子形の水注を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年VIII a期の1遺構のみで確認され、それ以外ではV a期に比定される外来SU20、分類(1)で提示したVからVI期に比定される工14のSU294で確認される。

TD-27-d



(中診 2号組石)

筒形の水注を本類とした。釣手を有す銚子形の水注(27-a)同様、出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構ではVIII d期の1遺構のみで確認される。指標遺構以外ではVIII c期に比定される外来SK166、工14のSK10、SK182で出土している。SK10では肥前系磁器広東碗(JB-1-m)や瀬戸・美濃系磁器端反形碗(JC-1-d)と、SK182では肥前系磁器(JB)の見込み蛇ノ目釉剥ぎされた碗(1-x)や八角鉢(5-e)と共伴する。

TD-32



(中診 D32-1)

柄杓を本類とした。出土量は少ないが、指標遺構では東大編年V aからVI b期、VIII aからVIII b期に確認される。ピークはVIII aからVIII b期か。

TD-34



(設備 AE34-3)

土瓶を本類とした。出土量は少なく、指標遺構では東大編年Ⅴb期とⅧd期の各1遺構と、分類(1)で提示したⅦ期に比定される中診AE34-3のみで確認される。指標遺構以外ではⅧaからⅧb期に比定される工14のSK101、Ⅷ期に比定されるSK292、SK293で確認されている。

TD-36-a



(工14 SK186)

横手を有し、胴部が長筒形を呈すちろりを本類とした。出土量は極めて少なく、指標遺構ではⅧa期とⅧc期の各1遺構のみで確認される。分類(1)で提示した工14のSK186から出土したものは、瀬戸・美濃系磁器端反形碗(JC-1-d)や瀬戸・美濃系陶器馬ノ目皿(TC-2-g)などと共伴するものである。なおこの製品の蓋と考えられるものには「寶山」の刻印が認められる。

TD-36-b



(中診 E23-1)

横手を有し、胴部に段をもつ筒形を呈すちろりを本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では確認されなかった。分類(1)で提示した中診E23-1で出土したものは、肥前系磁器の高台断面の形状がシャープな「U」字状を呈す碗(JB-1-d)、瀬戸・美濃系陶器(TC)の灰釉薄掛け碗、腰鏝碗(1-c, u)、堺系播鉢(TL-29)と共伴するものである。東大構内遺跡以外では坂町第4号遺構^{註24}で出土しており、肥前系磁器(JB)の小広東碗、広東碗(1-i, m)などと共伴する。

TD-40-a



(中診 H23-3)

脚付で、灰釉が施釉された油受け皿を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅷa期、Ⅷb期、Ⅸ期の各1遺構のみで確認される。それ以外では、Ⅷc期に比定される工14のSU2やⅧd期に比定されるSU396、明治中葉に比定されるSK358などで確認される。ピークはⅧ期後半か。

TD-40-b



(中診 2号組石)

無脚で、灰釉が施釉された油受け皿を本類とした。東大編年ⅧaからⅧb期、Ⅷd期、Ⅸ期に確認される。ピークはⅧ期か。

TD-46



(給水 AJ37-3)

カンテラを本類とした。出土量は極めて少なく、指標遺構では確認されなかった。それ以外では、ⅧaからⅧb期に比定される工14のSK101、Ⅷc期に比定される外来SK166で確認される。分類(1)で提示した給水AJ37-3から出土したものは、肥前系磁器(JB)の小丸碗、広東碗(1-j, m)、瀬戸・美濃系磁器端反形碗(JC-1-d)と共伴するものである。東大構内遺跡以外では、尾張Ⅶ172-3K-1^{註18}で出土しており、瀬戸・美濃系磁器(JC)の端反形碗、湯呑碗(1-d, e)などが共伴する。

TE (備前系陶器)

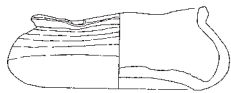
TE-2



(工14 SU396)

皿を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構ではⅢb期とⅣa期の各1遺構のみで確認される。それ以外ではⅧc期に比定される工14のSU396で確認されるほか、瀬戸・美濃系磁器(JC)が出土する遺構で確認される例が比較的多い。以上のことから、ピークはⅢbからⅣa期とⅧ期以降の2回ある可能性がある。なお前半に出土するものは丸形皿で、口縁部に灯心痕が観察されるものが大半であるが、後半に出土するものは分類(1)で提示したような型皿で、見込みに陽刻などが認められるものが多く、灯心痕などは確認されない。

TE-5



(丸の内三丁目52号)

鉢を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構ではⅣb期の1遺構のみで確認される。分類(1)で提示した東大編年Ⅰb期に比定される丸の内三丁目52号遺構から出土したものは、景德鎮窯系磁器碗(JA1-1)、瀬戸・美濃系陶器(TC)の天目形碗(1-a)、志野織部皿(2-j)、織部鉢(5-k)などと共伴するものである。

TE-10-a



(御殿 271)

薄作りで、献上手の瓶を本類とした。頸部は鶴首状を呈すものが多い。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年ⅢbからⅣb期、ⅤbからⅥa期、Ⅷb期、Ⅷd期に確認される。ピークはⅢbからⅣb期か。

TE-12



(中診 F33-3)

油壺を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅴa期の3遺構のみで確認される。指標遺構以外では設備AE36-4で底部に刻印を有すものが確認される。なおAE36-4から出土したものは肥前系磁器(JB)の半球形碗、梅樹文碗(1-f, v)や京都・信楽系陶器(TD)の半球形碗、半筒碗(1-b, i)などと共伴するものである。

TE-15



(御殿 678)

壺・甕を本類とした。出土量は少ないが、指標遺構では東大編年ⅢaからⅥa期、ⅦからⅧa期、Ⅸ期に確認される。

TE-22



(法 E8 -2 号土坑)

花生を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、東大構内遺跡でも分類(1)で提示した東大編年Ⅳb期に比定される法E8-2号土坑で確認されているのみである。

TE-29



(家畜 SK09)

播鉢を本類とした。出土量は少なく、指標遺構では東大編年Ⅱ期、ⅢbからⅣb期、Ⅵa期、Ⅷb期、Ⅸ期に散見される。ピークはⅢbからⅣb期か。なおⅣb期に比定される家畜SK09では、TE-29が11個体出土したと報告されており、1遺構出土量としては突出している。

TE-37



(右は中診 F34-11, 左は F27-1)

葉研を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では東大編年Ⅲb期とⅣa期の各1遺構のみで確認される。分類(1)で提示した中診F27-1から出土したものは、肥前系磁器(JB)のくらわんか碗(1-g)、見込み蛇ノ目釉剥ぎされた底部無釉の皿(2-k)、九谷系磁器色絵皿(JN-2)などと共伴するものである。

TE-40



(工14 SU382)

油受け皿を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年ⅢbからⅣb期に散見される。ピークはⅢbからⅣa期か。分類(1)で提示したものは、ⅥbからⅦ期に比定される工14のSU382から出土したものである。

TE-41



(外来 SU279)

油徳利を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では確認されなかった。それ以外では東大編年Ⅴa期に比定される外来SU279や、ⅣbからⅤ期、ⅧaからⅧb期に比定される工14のSU176から出土している。SU176から出土したTE-41の底裏には、「○」に「吉」の刻印が認められる。

TF (志戸呂系陶器)

TF-1



(共同溝 W46-1)

碗を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では確認されなかったが、それ以外では、分類(1)で提示した共同溝W46-1、工14のSU295上などで確認される。W46-1では漆継痕跡のある肥前系磁器(JB)で高台断面の形状が三角形を呈し、高台径が大きい皿(2-c)や、見込み蛇ノ目釉剥ぎされた底部無釉の皿(2-k)、肥前系陶器器手碗(TB-1-a)などと共伴し、工14のSU295上では瀬戸・美濃系磁器(JC)の端反形碗、湯呑碗(1-d、e)肥前系磁器の蛇ノ目凹型高台皿(JB-2-i、j)や志田の大皿(JB-3-e)などと共伴する。なおSU295上から出土したTF-1の底裏には、長方形枠に「志戸呂」の刻印が確認される。

TF-2



(中診 C26-2)

皿を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年ⅢbからⅦ期、Ⅷc期に確認される。ピークはⅤからⅥ期か。口縁部に灯心痕が確認されるものが多いことから、灯明皿として利用された可能性が高い。

TF-10



(御殿 537)

瓶を本類とした。志戸呂系陶器 (TF) の中でもっとも多く確認される器種であり、指標遺構では東大編年ⅡからⅧc期とⅨ期に確認されるが、ピークはⅣbからⅥb期にある。なお瀬戸・美濃系陶器瓶 (TC-10) のように1遺構から大量に出土する状況は、ⅤbからⅥb期の遺構で確認される例が多い。Ⅳb期までは胴部が釣鐘形を呈し、底部付近に最大径があるものが多いが、次第に胴部は寸胴形に近くなり、Ⅵb期あたりには肩部から胴部中程に最大径があるものになる。なお胴部あるいは底裏に墨書が描かれるものはⅣb期以降確認されるが、瀬戸・美濃系陶器瓶 (TC-10) のように釘書が施されるものはあまりない。

TF-13



(工14 SU18)

蓋物を本類とした。出土量は少なく、指標遺構では東大編年ⅥaからⅦ期に散見される。東大構内遺跡以外では尾張Ⅱの78-40-1^{註25}では、肥前系磁器 (JB) のいわゆるくらわんか碗、梅樹文碗 (1-g, v)、肥前系陶器 (TB) で内面に主文様のある京焼風陶器碗、打刷毛目が施された丸碗 (1-c, g) などと共伴し、尾張Ⅲの67-3S-1^{註11}では肥前系磁器 (JB) の半球形碗、くらわんか碗、梅樹文碗 (1-f, g, v)、京都・信楽系陶器 (TD) の半球形碗、半筒形碗 (1-b, i) などと共伴することが確認される。これらの遺構で報告されている陶磁器・土器類の様相をみると、東大編年Ⅴ期に比定される遺物群の様相と酷似することから、東大構内遺跡でも初現がⅥa期より上がる可能性がある。

TF-15



(中診 F34-11)

壺・甕を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅳa期、Ⅴa期、Ⅵa期の各1遺構のみで確認される。それ以外では、御殿271号遺構や設備W36-4などで確認され、271号遺構では肥前磁器 (JB) の高台断面の形状が三角形を呈す碗 (1-c) や、肥前系陶器の内面に主文様のある京焼風陶器碗 (TB-1-c) などと、W36-4では肥前磁器の高台断面の形状が三角形を呈す碗 (JB-1-c) などと共伴する。

TF-29



(御殿 532)

播鉢を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、東大構内遺跡では、分類 (1) で提示した東大編年Ⅱ期に比定される御殿532号遺構のみで確認される。

TF-40



(中診2号組石)

油受け皿を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅳ期、ⅤbからⅥa期、ⅦからⅧa期に確認される。ピークはⅣ期とⅤb期の2回あるようであるが、出土量が多いのは後半である。Ⅳb期までは受け部が内傾したものが多いが、Ⅴb期以降は内傾したものと、外側に開き気味に立ち上がるもののが確認される。なお受け部は次第に低くなる傾向がある。

TG (常滑系陶器)

TG-15



(病棟 ST3531)

壺・甕を本類とした。出土量は少なく、指標遺構では東大編年Ⅱ期、ⅢbからⅥb期、ⅧaからⅧc期、Ⅸ期に確認される。ただし東大構内遺跡でも、病棟^{註1}や医学部附属病院基幹整備共同溝第6次発掘調査地点 (東京大学埋蔵文化財調査室2004) などのように、調査地点が墓域に相当するような地点では、甕棺としてTG-15が利用され、多数出土しているのが確認される。

TH (萩系陶器)

TH-1-a



(給水 AJ35-1)

藁灰釉が施釉され、口縁部が大きく開口する碗を本類とした。多くは高台が渦巻状に削り込まれる。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅷ a 期のみで確認され、それ以外ではⅧ c 期に比定される外来 SK166、Ⅵ b からⅦ 期に比定される工 14 の SU382、同じく工 14 の SK10、SU381 など確認される。SK10 では肥前系磁器広東碗 (JB-1-m) や瀬戸・美濃系磁器端反形碗 (JC-1-d) などと、SU381 では肥前系磁器広東碗、小丸碗 (JB-1-j)、京都・信楽系陶器で器面に細かい貫入がみられる灰釉端反形碗 (TD-1-g) などと共伴する。東大構内遺跡以外では、尾張Ⅱの 89-4L-1^{註26}で瀬戸・美濃系陶器 (TC) の柳茶碗、刷毛目碗 (1-g, s) などと共伴する。以上のことから、ピークはⅧ a 期にあると考えるが、初現はもう少し上がる可能性もある。

TH-1-b

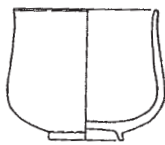


(中診 2 号組石)

ピラ掛けが施された碗を本類とした。多くは高台が渦巻状に削り込まれる。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では確認されなかった。それ以外では、東大編年Ⅷ c 期に比定される外来 SK166、Ⅷ 期に比定される工 14 の SK292 など確認されるなど、Ⅷ 期以降の遺構で確認される。

TI (萬古系陶器)

TI-1



(本郷追分 11 号地下式坑)

碗を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では確認できなかった。分類 (1) で提示した本郷追分 11 号地下式坑から出土したものは、肥前系磁器 (JB) の小広東碗、小丸碗 (1-i, j) と共伴するものであり、外面に鉄絵竹文、高台内に「萬古」の刻印があるものである (東京大学構内雨水調整池遺跡調査会 1994)。

TI-16



(御殿 7)

急須を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構ではⅧ b からⅧ c 期、Ⅸ 期に確認される。それ以外では、分類 (1) で提示した御殿 7 号遺構から出土したものには、外面に 10 数個の押印が確認される。また明治中葉に比定される工 14 の SK358 から出土したものは、型作り、練り込みで作られたものである。なお 7 号遺構では瀬戸・美濃系磁器 (JC) でコバルトにより銅版転写された、体部が直線的に開く薄手碗 (1-f)、寿文皿 (2-b)、爛徳利 (4 類) などと共伴する。よって本器種のピークはⅧ 期後半以降にある可能性が高い。

TI-34



(中診遺構外)

土瓶を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では東大編年Ⅸ 期に比定される給水 AL37-1 のみで確認される。AL37-1 から出土したものは、橋状把手の下に「萬古」、「日本有節」などの押印が確認されるものである。

TJ (大堀・相馬系陶器)

TJ-1



(工14 SK101)

碗を本類とした。東大構内遺跡で確認されるものは、内面は灰釉、外面は緑釉と流水の浮文が施されたものが多い。出土量、出土遺構はともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅷ a 期に比定される工1のSK01のみで確認されるが、SK01は東大構内遺跡の中でも多くTJ-1が確認された遺構である。指標遺構以外では、東大編年Ⅷ a からⅧ b 期に比定される工14のSK101で確認される。

TJ-6



(工14 SK101)

坏を本類とした。管見の限り、東大構内遺跡で看取されるものは、1類同様、内面は灰釉、外面は緑釉と流水の浮文が施されるものが多い。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅷ a 期に比定される工1のSK01のみで確認され、それ以外では、ともにⅧ c 期に比定される外来SK166や工14のSU2で確認される。

TK (丹波系陶器)

TK-15



(御殿 532)

壺・甕を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、東大構内遺跡では東大編年Ⅱ期に比定される御殿532号遺構のみで確認される。

TK-29



(御殿 618)

播鉢を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅰ b からⅥ a 期、Ⅷ a からⅧ c 期に確認されるが、ピークはⅡからⅣ a 期にある。口縁部の形態変化をみると、Ⅰ b からⅡ期のは体部と口縁部との境が不明瞭で、口縁部の断面形状が方形を呈す。Ⅲ a 期以降、体部との境が明瞭になり、口縁部の断面形状も小さな三角形を呈すものとなり、Ⅲ b 期にはそれに加えて口縁部がやや幅広い縁帯を呈すものも現れ、Ⅳ a 期以降、口縁部が縁帯を呈すものが一般的になっていくようである。

TL (堺系陶器)

TL-29



(中診 B25-1)

播鉢を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅳ b からⅨ期に確認されるが、ピークはⅤからⅦ期にある。口縁部の形態変化をみると、口縁部内側に小さな突帯を有し、注口部が作り出されるものが、Ⅶ期以降、口縁部内側が階段状にされ、注口部は形骸化したものとなる傾向がある。底部は当初高台状の作りのものが比較的多いが、Ⅶ期以降ベタ底のものが多くなる。なお注口部や底裏に押印のあるものは、Ⅳ b からⅤ a 期のものに多い。

TM (益子・笠間系陶器)

TM-29



(工14 SK359)

播鉢を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では確認されなかった。それ以外では工14のSK359などで出土しており、瀬戸・美濃系磁器寿文皿(JC-2-d)、クロムやコバルトなどで絵付された土瓶(TZ-34)などと共伴する。

TO (壺屋系陶器)

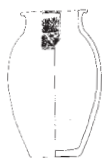
TO-10



(中診7号組石)

瓶を本類とした。出土量、出土遺構は極めて少なく、指標遺構では確認されなかった。分類(1)で提示した中診7号組石から出土したものは、「アラヤチ」といわれる無釉焼締め陶器瓶で、瀬戸・美濃系磁器(JC)の端反形碗(1-d)や器厚のごく薄い坏(6-d)などと共伴する。

TO-15



(壺屋)

壺・甕を本類とした。瓶(10類)同様、出土量、出土遺構は極めて少なく、本器種自体は東大構内遺跡では確認されていない。ただしVI a期に比定される外来SK152からはTO-15の蓋(00類)と考えられるものが出土している。この蓋も瓶同様、「アラヤチ」といわれる無釉焼締め陶器である。

TZ (産地不明陶器) 註27

TZ-16



(上は工14 SK296, 右下は工14 SK3, 左下は中診H21-1)

急須を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年VIII aからIX期に確認される。ピークはVIII c期以降か。

TZ-17



(外来SU34)

燗鍋を本類とした。出土量は少ないが、指標遺構では東大編年V bからVI a期、VIII aからVIII c期、IX期に確認される。それ以外ではV a期に比定される外来SK141から出土しており、初現が上がる可能性がある。

TZ-33-a



(工14 SK330)

紐状把手が貼り付けられ、柿釉が施釉された鍋を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅳ b からⅨ期に確認されるが、ピークはⅥ a からⅧ b 期にある。把手、足ともに年代が下ると形骸化する傾向がある。33-aは口径が10cm前後のもの、20cm前後のもの大きく2つのものが確認されるが、Ⅳ b 期に確認されるものは前者のものが多く、またⅦからⅧ期ごろは両方確認されるが、多いのは後者のものである。なお、柿釉以外が施釉される把手付鍋がⅧ d 期に比定される工14のSU392、給水 AL37-1 などをはじめⅧ期以降に数例確認されるが、それらの共通点として、概ね灰釉が施釉され、把手は装飾風のものであるという点が挙げられる。

TZ-34-a



(中診 H21-1)

青緑釉が施釉された、いわゆる青土瓶を本類とした。TZ-34の中では出土量の多いものであり、指標遺構では東大編年Ⅷ a からⅨ期に確認されるが、ピークはⅧ a からⅧ b 期にある。体部形状は算盤玉形や球形を呈するものが多く、注口部はいわゆる鉄砲口のもものが大半である。

TZ-34-b



(給水 AK38-1)

白土染付が施された土瓶を本類とした。出土量はあまり多くなく、指標遺構では東大編年Ⅷ b からⅨ期に散見され、その中には「道八」と染付されたものも数点確認される。指標遺構以外では、明治中葉に比定される工14のSK358などでは比較的多く34-bが確認されることから、ピークはⅧ b 期以降、近代にある可能性が高い。

TZ-34-c



(工14 SU327)

三彩が施された土瓶を本類とした。出土量はあまり多くなく、指標遺構では東大編年Ⅴ a 期、Ⅷ a からⅧ c 期、Ⅸ期に散見される。なおⅤ a 期に比定される外来SK18で確認されているが、ほかに類例がないことや、この後Ⅷ a 期まで確認されないことなどから混入である可能性が高い。

TZ-34-d



(工14 SU392)

糸目を有す土瓶を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年Ⅵ b 期からⅧ a 期、Ⅷ c 期、Ⅸ期に確認される。指標遺構以外では外来SK269から出土しており、器高がかなり低くなった瀬戸・美濃系陶器腰鏝碗 (TC-1-u) や瓦質の植木鉢 (DZ-21-b) などと併せている。なおSK269から出土した34-dの壺付脇に、「丸傳」という刻印が確認されるものがある。

TZ-34-e



(中診 E34-1)

鉄釉が施釉された土瓶を本類とした。TZ-34の中では出土量、出土遺構ともに多く、錆絵染付土瓶 (34-m) とともに早い段階から確認できる土瓶 (34類) である。指標遺構では東大編年Ⅵ a からⅨ期に確認されるが、ピークはⅥ b からⅧ b 期にある。注口部はⅥ b 期まではS字状を呈するものが多く、Ⅶ期以降はいわゆる鉄砲口のもものが散見されるようになり、Ⅷ b 期以降、ほぼ鉄砲口のものとなる。

TZ-34-f



(外来 SK81)

鮫釉が施釉された土瓶を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では東大編年Ⅷ a からⅧ b 期に散見される。分類 (1) で提示したものは、東大編年Ⅷ b 期に比定される外来SK81から出土したものである。

TZ-34-g



(工14 SU295 上)

灰釉が施釉された土瓶を本類とした。TZ-34 の中では鉄釉土瓶 (34-e) に次いで出土量、出土遺構ともに多く、指標遺構では東大編年ⅦからⅨ期に確認されるが、ピークはⅦからⅧ a 期にある。なお鉄釉土瓶 (34-e) には S 字状注口をもつものがⅦ期やⅧ a 期には確認されるが、34-g には確認されなかった。なお東大編年Ⅷ a 期に比定される工 1 の SK01 で出土した 34-g の底裏には、楕円に「丸い」の刻印があるものが確認される。

TZ-34-h



(設備 X36-1)

染付が施された土瓶を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では東大編年Ⅷ a 期とⅧ b 期の各 1 遺構のみで確認される。分類 (1) で提示した設備 X36-1 から出土したものは、瀬戸・美濃系磁器 (JC) で体部が直線的に開く薄手碗 (1-f) や、蛇の目凹型高台の高台高が高い皿 (2-i)、京都・信楽系陶器 (TD) の半球形碗、半筒形碗 (1-b, i) など、やや年代幅のある遺物群と共伴するものである。

TZ-34-i



(工14 SU2)

イチンが施された土瓶を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅷ b からⅧ c 期に確認され、それ以外ではⅧ c 期に比定される外来 SK166、明治中葉に比定される工 14 の SK358 などで確認される。分類 (1) で提示したものはⅧ c 期に比定される工 14 の SU2 から出土したものである。ピークはⅧ c 期以降か。

TZ-34-k



(工14 SK402)

うのふ釉が施された土瓶を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅷ a からⅧ c 期に確認され、それ以外ではⅧ a からⅧ b 期に比定される工 14 の SK101、Ⅷ b 期に比定される外来 SE271、Ⅷ c 期に比定される外来 SK166 などで確認される。ピークはⅧ b 期か。分類 (1) で提示したものは、東大編年ⅦからⅧ期に比定される工 14 の SK402 から出土したものである。

TZ-34-l



(設備 AE34-3)

ノミ状のもので草文などが彫られ、多くは鉄釉が施される土瓶を本類とした。出土量は少ないが、指標遺構では東大編年Ⅵ b からⅧ a 期に確認され、それ以外ではⅦ期に比定される工 14 の SK330 などで確認される。ピークはⅦ期か。なお灰釉土瓶 (34-g) で確認された楕円に「丸い」の刻印が、東大編年Ⅵ b 期に比定される設備 AE34-4 から出土した 34-l でも確認される。

TZ-34-m



(設備 AD35-2)

銕絵染付が施された土瓶を本類とした。多くが S 字状注口を有す。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年Ⅴ b 期からⅥ a 期、ⅦからⅧ b 期に確認され、東大構内遺跡においても早く確認される土瓶 (34 類) である。ピークはⅤ b 期か。

TZ-42-a



(中診 H21-2)

灰釉が施された行平鍋を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年Ⅷ a からⅧ d 期に確認される。ピークはⅧ a からⅧ b 期か。なおⅧ d 期に比定される外来 SU392 から出土した 42-a の把手には「宮田」の浮文が確認される。

TZ-42-b

鉄釉が施された行平鍋を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構ではV a期に比定される中診 D32-1で把手が確認されているのみである。ただし把手のみの確認であり、これもトビガンナが施された行平鍋 (TZ-42-c) の把手の可能性もある。

TZ-42-c



(給水 AJ37-3)

体部上半にトビガンナ状の細かな押形文が螺旋状に施される行平鍋を本類とした。行平鍋(42類)で一番多く確認される小器種であり、指標遺構では東大編年Ⅷ a期、Ⅷ c期、Ⅸ期に確認される。指標遺構以外ではⅧ aからⅧ b期に比定される工14のSK101、Ⅷ b期に比定される外来SE271、明治中葉に比定される工14のSK358で確認される。ピークはⅧ c期以降か。

TZ-53

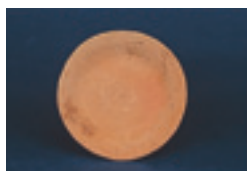


(外来 SK81)

蒸し器を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構ではⅧ b期のみで確認され、それ以外では、東大編年Ⅷ c期に比定される工14のSU2と、Ⅷ期に比定されるSK292で確認される。

DZ (土器)

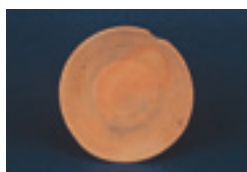
DZ-2-a



(薬新 SE67)

底部に右回転の糸切り痕跡のある皿を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅰ bからⅥ a期、Ⅶ期、Ⅷ b期に確認される。ピークはⅠ bからⅢ b期にある。

DZ-2-b



(家畜 SK09)

底部に左回転の糸切り痕跡のある皿を本類とした。土器皿 (DZ-2) の中では出土量が最も多いものであり、指標遺構では全段階を通して確認されるが、ピークはⅢ aからⅥ b期にある。

DZ-2-c



(家畜 SK09)

底部に渦巻状の沈線がみられる、いわゆる磨きかわらけを本類とした。出土量は少ないが、指標遺構では東大編年Ⅳ bからⅤ a期、Ⅵ a期、Ⅷ a期に確認される。ピークはⅣ bからⅤ a期か。

DZ-2-d



(中診 H21-1)

底部が平滑にされた、いわゆる磨きかわらけを本類とした。指標遺構では東大編年ⅡからⅧc 期に確認されるが、ピークはⅢ期とⅤbからⅥa期の2回あるようである。時代が下ると、器厚が全体的に厚みをおびる傾向がある。

DZ-2-e



(中診 H21-2)

いわゆる耳かわらけを本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年Ⅲa からⅣa期、ⅤaからⅥb期、ⅧbからⅧc期に散見される。ピークはⅢaからⅣa期か。

DZ-2-f



(中診 池)

いわゆるへそかわらけを本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、東大構内遺跡では東大編年Ⅰb期に比定される中診の池遺構のみで確認される。

DZ-2-g



(中診 池)

手づくねの皿を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年ⅠbからⅢb期、Ⅴa期、Ⅴb期に確認されるが、ピークはⅠbからⅢa期にある。なお1遺構から大量に出土するような例は、管見の限りⅠb期に比定される中診池遺構のみである。

DZ-2-h



(家畜 SK02)

透明釉が施釉された皿を本類とした。指標遺構では東大編年ⅦからⅧd期に確認されるが、ピークはⅧaからⅧb期にある。

DZ-2-i



(工14 SK86・87・88)

底部が穿孔された皿を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅱ期、Ⅲa期、Ⅷa期の各1遺構のみで確認される。分類(1)で提示した工14のSK86・87・88から出土したものは、肥前系磁器(JB)の高台断面の形状が三角形を呈す碗、高台断面の形状がシャープな「U」字状を呈す碗(1-c、d)、高台断面の形状が三角形を呈す皿(2-c)などと共伴するものである。

DZ-2-j



(家畜 SK02)

見込みに「寿」字の浮文が施された皿を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では東大編年Ⅵa期、Ⅷa期の各1遺構のみで確認される。分類(1)で提示したものは、東大編年Ⅷc期に比定される家畜SK02から出土したものである。

DZ-5-a



(設備 Y37-3)

土師質で、口縁部が外反する鉢を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年V期、VI b期、VIII b期、IX期に確認される。ピークはV b期か。ただし工14では肥前系磁器(JB)の小広東碗、広東碗(1-i, m)や瀬戸・美濃系磁器(JC)が共伴するような遺構で5-aが確認される例が比較的多く、5-aのピークがもう1つ存在する可能性もある。なお5-aには分類(1)で提示したような口縁部に穿孔があるものと、ないものがあり、現段階ではVII期以降出土するものに穿孔があるものは確認されない。

DZ-5-b



(工14 SK358)

内側に間仕切状のものがある鉢を本類とした。いわゆる箱庭道具と考えられているものである。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では東大編年VII期、VIII a期、VIII d期に散見される。それ以外では御殿49号遺構、VIII c期に比定される工14のSU2、明治中葉に比定されるSK358などで確認される。ちなみに御殿49号遺構では、瀬戸・美濃系磁器(JC)の丸形碗、端反形碗(1-a, d)、青土瓶(TZ-34-a)などと共伴する。

DZ-5-c



(左から工14 SK293, SK37, SU18)

釜形土製品を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年IV a期、V b期、VIII a期に散見される。なおVII期に比定される工14のSK330では、本製品が東大構内遺跡で最多の8個体確認されている。

DZ-5-d



(家畜 SK09)

体部1箇所が大きく「U」字状にえぐられたような鉢を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、東大構内遺跡では東大編年IV b期に比定される家畜SK09のみで確認され、東大構内遺跡以外では、麻布台南区1号土坑^{註28}や尾張II 71-4C-1^{註29}で確認される。1号土坑出土のものは肥前系磁器(JB)の半球形碗(1-f)、いわゆるくらわんか碗(1-g)、梅樹文碗(1-v)などと共伴し、71-4C-1号出土のものは、肥前系磁器(JB)のコンニャク印判で染付された1-dの小振りの碗、半球形碗(1-u, f)、京都・信楽系陶器(TD)の色絵の半球形碗(1-d)などと共伴するものである。

DZ-16



(工14 SU2)

急須を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では確認されない。分類(1)で提示したものは、東大編年VIII c期に比定される工14のSU2から出土したものである。指標遺構以外ではVIII aからVIII b期に比定される工14のSK101、VIII期に比定される工14のSK292で確認されており、管見の限り東大構内遺跡ではVIII期以降の遺構で確認される。

DZ-21-a



(工14 SU176)

土師質の植木鉢を本類とした。指標遺構では東大編年VIII aからIX期に確認されるが、ピークはVIII aからVIII b期か。

DZ-21-b



(工14 SK140)

瓦質の植木鉢を本類とした。指標遺構では東大編年VI a期、VIII a期からIX期に確認されるものであるが、ピークはVIII c期以降か。なおVI a期に比定される外来SK152で確認されているが、指標遺構以外も含めVI a期あるいはそれ以降の段階で全く21-bが確認されないことから、混入の可能性が高い。

DZ-21-c



(御殿7)

施釉された植木鉢を本類とした。出土量、出土遺構ともに土師質植木鉢、瓦質植木鉢 (21-a、b) と比べて極めて少なく、指標遺構ではVIII a期とVIII d期の各1遺構のみで確認される。分類 (1) で提示した御殿7号遺構から出土したものは、瀬戸・美濃系磁器 (JC) でコバルトにより銅版染付された直線的に開く薄手碗 (1-f)、寿文皿 (2-b)、爛徳利 (4類) などと共伴するものである。

DZ-31-a



(中診 H21-3)

土師質の丸火鉢を本類とした。火鉢 (DZ-31) の中で最も多く出土するものであり、指標遺構では東大編年I bからVIII c期に確認されるが、ピークはIIIからVII期にある。III期までのものは体部が丸みをおび、外側へ開き気味に立ち上がる。最大径が口径にあり、口縁端部は平らに成形されているものが多い。しかしIV期以降は、それに加えて体部の丸みが強く、最大径が胴部中央にあり、口縁部は内傾するものが確認される。これらの口縁部は平らに成形されているものと、丸みを帯びたものがある。なお底裏に3足を有すものが大半であるが、時代が下ると形骸化したものとなる。

DZ-31-b



(御殿475)

軟質瓦質の丸火鉢を本類とした。指標遺構では東大編年I bからVIII b期に確認されるが、ピークはIII aからIV a期にある。

DZ-31-c



(外来 SE105)

鍔付の角火鉢を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年IIからVI a期、VII期、VIII b期に確認される。ピークはIV bからV b期か。

DZ-31-d



(外来 SK98)

硬質瓦質の丸火鉢を本類とした。東大編年III b期、V b^{註17}からVIII c期、IX期に確認されるが、ピークはVIIからVIII b期にある。III b期に比定される御殿276で確認されているが、ほかに例がないこと、後続するものがないこと、またV b期以降に確認されるものと比べると若干胎土が軟質なものであり、混入、あるいは31-dとは別分類とした方がよいかもしれない。31-dの多くは、外面に回転工具状のもので押文様が施されるが、VIII a期までのものは細かい縦筋文以外に半菊文、雷文、雲文など様々なパターンの文様が確認され、また複数の文様を組み合わせたものも認められる。しかしその後は細かい縦筋文が単体で施されるものが多くなる。

DZ-31-e



(法 B7-7号土坑)

土師質の角火鉢を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年IIからVI b期とVIII a期に確認される。ピークはIV aからV a期か。

DZ-31-f



(御殿 904)

軟質瓦質の角火鉢を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年ⅡからⅣa期、Ⅴa期、Ⅵa期に確認される。ピークはⅢaからⅣa期か。

DZ-31-h



(外来 SK18)

風炉を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年ⅡからⅢb期、ⅣbからⅥa期、ⅦからⅧb期に確認される。ピークはⅦからⅧa期か。一般的な傾向としてⅥa期までは土師質のものが中心で、丸形火鉢の口縁部1箇所を大きく「U」字状にカットしたような器形のものが多い。Ⅶ期以降は、硬質瓦質筒形火鉢の口縁部1箇所を大きく「U」字状にカットしたような器形で、その内側付近に突起状の張り出しを3箇所有すタイプのものが多い。なお土師質、瓦質を問わず、外面は丁寧に磨かれ、硬質瓦質の31-hは外面に回転工具状のもので施文されたものが多い。

DZ-31-i



(設備 Z35-4)

火消壺を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年Ⅲa期、ⅣaからⅧa期に確認される。管見の限り、Ⅲb期あたりに確認されるものは軟質瓦質であるが、それ以降のものは大半が土師質のものである。

DZ-31-j



(工14 SU389)

硬質瓦質の筒形火鉢を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年Ⅴa期、Ⅵa期、ⅦからⅧb期に確認される。ピークはⅦ期か。分類(1)で提示した工14のSU389から出土したものは底部に「新兵衛」の刻印があるもので、肥前系磁器(JB)の小広東碗、小丸碗、広東碗、端反形碗(1-i, j, m, n)などと共伴するものである。なおⅤa期に比定される外来SK18でも確認されているが、ほかにこの段階での出土例がないこと、SK18の共伴遺物に一部、瀬戸・美濃系磁器(JC)を含むことから、31-jも瀬戸・美濃系磁器とともに混入した可能性が高い。

DZ-31-k



(中診 D30-1)

カマドを本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅲb期、Ⅳa期、Ⅳb期、Ⅴb期、Ⅵa期の各1遺構で確認される。

DZ-31-l



(御殿 464)

土師質の筒形火鉢を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅳa期、Ⅵa期、Ⅷb期に確認される。外面は硬質瓦質筒形火鉢(DZ-31-j)のように、丁寧に磨かれ、回転工具状のもので押印文が施されるものが多い。

DZ-33-a



(中診 H21-2)

口縁部に紐状の把手が貼り付けられ、鉛釉が施された鍋を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅷ a からⅧ b 期に散見される。指標遺構以外では、工 14 の SK66、SK338 など出土し、SK66 では肥前系磁器広東碗 (JB-1-m)、瀬戸・美濃系磁器 (JC) の篆書文が施された端反形碗 (1-d)、コバルトで染付された端反形杯 (6-b) などと共伴し、SK338 では肥前系磁器端反形碗 (JB-1-n)、瀬戸・美濃系磁器端反形碗 (JC-1-d) などと共伴する。なおⅧ a 期に比定される工 1 の SK01 で出土した 33-a の底裏には、「吉見」の押印が確認されるものもある。

DZ-34



(外来 SK81)

土瓶を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅶ期からⅧ b 期に確認され、それ以外ではⅧ c 期に比定される工 14 の SU2 で確認される。工 1 の SK01 では比較的多くの DZ-34 が出土しているが、その中には紐状把手付きの鉛釉鍋 (DZ-33-a) でも確認された「吉見」の刻印があるものや、「武蔵野」の刻印があるものなども確認される。

DZ-38



(工14 SU335)

手焙りを本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅴ a 期、Ⅶ期からⅧ b 期に確認される。分類 (1) で提示した工 14 の SU335 から出土したものは、肥前系磁器 (JB) の半球形碗、くらわんか碗 (1-f, g)、青土瓶 (TZ-34-a) と共伴するものである。東大構内遺跡以外では、麻布台南区 1 号土坑^{註28} などでも出土しており、肥前系磁器 (JB) の半球形碗 (1-f)、くらわんか碗 (1-g)、梅樹文碗 (1-v) などと共伴する。

DZ-40-a



(中診 H21-1)

透明釉が施された、脚付の油受け皿を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅵ a 期、ⅦからⅧ b 期、Ⅷ d 期に確認されるが、ピークはⅦからⅧ a 期にある。Ⅶ期までのものは受け部が口縁部より高く、口縁部の断面の形状は「U」字状を呈し、受け部の切り欠きはやや幅広の浅い「U」字状を呈す。Ⅷ a 期以降は受け部の立ち上がりは次第に低くなり、Ⅷ b 期には口縁部より低くなる。又、口縁部の断面の形状は三角形を呈したものが確認されるようになり、受け部の切り欠きも小さく浅いものになる。なお器高も次第に低くなるようである。

DZ-40-b



(中診 H21-1)

透明釉が施された、無脚の油受け皿を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅵ a からⅨ期に確認されるが、ピークはⅦからⅧ b 期にある。器形の変化は 40-a とほぼ同様である。ただし 40-a より出土する期間はわずかに長いようである。

DZ-40-c



(中診 F33-3)

無釉、脚付の油受け皿を本類とした。指標遺構では東大編年Ⅴ a からⅧ a 期に確認され、ピークはⅤ b からⅥ a 期にあるが、40-a や 40-b のように 1 遺構から大量に出土する例は確認されていない。器形の変化は 40-a と同様である。

DZ-40-d



(中診 F33-3)

無釉、無脚の油受け皿を本類とした。指標遺構では東大編年V a期からVIII a期に確認されるが、ピークはV aからVI a期にある。ただし工14のSK415や、東大構内遺跡以外では住吉町西I006号遺構や単町096号遺構^{註30}などで、肥前系磁器(JB)の半球形碗(1-f)、コンニャク印判で施文された1-dの小振り碗(1-u)などと共伴しており、東大構内遺跡でも将来的に初現がV a期より上がる可能性が高い。器形の変化は40-aとほぼ同様である。なお今回遺物総量が少なから指標遺構としてとりあげなかった、東大編年V b期に比定される理4号地下式土坑からは40-dがまとまって出土している。

DZ-40-e



(構内試掘)

透明釉が施釉された、長脚を有す油受け皿を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では確認されず、それ以外でも分類(1)で提示した構内試掘で出土したものしか確認されていない。ただし長脚という器形的特徴は、東大編年V a期に比定される中診F33-3、V b期に比定される外来SK137、VI a期に比定される外来SK174で出土している油受け皿(40類)でも確認される。しかしいずれも無釉のものである。

DZ-40-f



(工14 SK10)

ドーナツ状に中央に円孔を有す油受け皿を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では東大編年VIII a期に比定される給水AJ35-1のみで確認され、それ以外では、VIII期に比定される工14のSK292やSK293などで確認される。分類(1)で提示した工14のSK10から出土したものは、瀬戸・美濃系磁器端反形碗(JC-1-d)、肥前系磁器広東碗(JB-1-m)などと共伴するものである。なお本製品の用途については将来的に検討の余地がある。

DZ-42



(中診 H21-1)

行平鍋を本類とした。出土量、出土遺構ともにあまり多くないが、指標遺構では東大編年VIII bからVIII d期に確認される。分類(1)で提示した中診H21-1で出土したDZ-42の把手には「吉見」の刻印が確認されるが、この刻印は土器土瓶(DZ-34)や施釉鍋(DZ-33-a)で確認される刻印と共通するものである。

DZ-43



(中診 E34-5)

十能を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構ではV b期、VIII a期に散見される。

DZ-44-a



(尾張II 67-4N-1)

無釉、脚付のひょうそくを本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、東大構内遺跡では看取されなかった。分類(1)で提示した尾張II 67-4N-1から出土したものは、肥前系磁器くらわんか碗(JB-1-g)、瀬戸・美濃系陶器(TC)の腰鏝碗(1-u)や播鉢(29類)などと共伴するものである(東京都埋蔵文化財センター1997)。

DZ-44-b



(外来 SK380)

透明釉が施釉された、無脚のひょうそくを本類とした。指標遺構では東大編年VI a期、VIIからVIII c期、IX期に確認されるが、ピークはVIII aからVIII b期にある。後述する44-cと比べてやや大振りで、体部は丸碗形を呈すものが多い。またVIII a期に比定される工1のSK01やVIII b期のSK81のように、1遺構からまとまって出土する例も比較的多い。

DZ-44-c



(中診 L34-1)

無釉、無脚のひょうそくを本類とした。指標遺構では東大編年V bからIX期に確認されるが、ピークはV bからVI a期か。施釉された無脚のひょうそく(44-b)よりやや小振りで、碗形の体部が直線的に開くものが多い。また44-bのように、1遺構から大量に出土する例はあまり認められないが、VI bからVII期に比定される工14のSU382からは本製品が9個体出土している。

DZ-44-d



(工14 SK292)

ろうそく状のひょうそくを本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では、東大編年V b期に比定される外来SK290のみで確認され、それ以外ではVIからVII期に比定される工14のSU18、VIII期に比定される工14のSK292で出土しているが、いずれも1点だけ確認されている。

DZ-44-e



(中診 E24-1)

透明釉が施釉された、そろばん玉形を呈すひょうそくを本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では分類(1)で提示した東大編年V a期に比定される中診E24-1のみで確認され、それ以外では法B3-2号土坑、東大編年VI bからVII期に比定される工14のSU382などで出土している。B3-2号土坑では瀬戸・美濃系陶器(TC)の灰釉薄掛け碗(1-c)、頸部が比較的長い二合半徳利、五合徳利(10-c、d)、植木鉢(DZ-21)と共伴する。なおE24-1やB3-2号土坑から出土したものには、肩部に「吉」の刻印が認められる。

DZ-44-f



(中診 E24-1)

施釉された脚付のひょうそくを本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では東大編年V a期、VI a期、IX期の各1遺構のみで確認され、それ以外では工14のSK245や法C3-3号土坑などで出土している。SK245では肥前系磁器(JB)の半球形碗、梅樹文碗(1-f、v)などと、C3-3号土坑では肥前系陶器で内面に主文様のある京焼風陶器碗(TB-1-c)などと共伴している。なおVI a期に比定される外来SK152から出土したものには、底部中央の刺突の周囲に花卉状の押印が確認される。

DZ-45



(設備 Y37-3)

瓦燈を本類とした。1遺構からの出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年IIからVI b期、VIII a期に確認されるが、ピークはIII bからIV a期か。IIからIII a期は軟質瓦質の製品が大半であるが、III b期からIV a期は軟質瓦質と土師質の両方が確認され、それ以降は土師質の製品のみとなるようである。身の受け部に舌状の立ち上がりのあるものが多いが、時期が下るとその立ち上がりが低くなる。なお蓋の摘み部分の内側に、ヘラ書きなどを有すものも散見される。

DZ-46



(給水 AJ37-3)

カンテラを本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では東大編年VIII a期に比定される工1のSK01のみで確認され、それ以外ではVIII c期に比定される工14のSU396などで確認される。

DZ-47-a



(工14 SU335)

底部が丸形を呈すほうろくを本類とした。東大編年ⅡからⅨ期に確認されるが、ピークはⅢbからⅦ期である。ⅡからⅣ期のもは口縁部が直立し、立ち上がりが高いものが大半であるが、次第に内傾し、立ち上がりは低くなる。Ⅷ期になると立ち上がりはかなり低く、口縁部のみが被厚し、内傾するようなものが大半となるようである。またⅧ期以降のもは内耳を持たないものが多い。なお底部内面に「○」に「一」の刻印が認められるものが散見されるが、Ⅲa期に比定される病棟D1層^{註1}から出土したものには、文字は判読できないが角枠の刻印が確認される。

DZ-47-b



(家畜 SK09)

底部が平らなほうろくを本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構ではⅡ期、Ⅲa期、Ⅳb期の各1遺構のみで確認される。指標遺構以外では中診H28-2・3、外来SD45などで確認されるが、H28-2・3では土器Ⅲ(DZ-2)の底部に右回転糸切り痕跡のあるものや、手づくねのもの(a, g)などと、SD45ではJA1(景德鎮窯系磁器)の1類(碗)や2類(皿)と共伴する。なお管見の限り、看取されるのは瓦質のもののみである。ピークはⅡからⅢa期か。

DZ-48-a



(工14 SU18)

口縁が丸形を呈す七輪を本類とした。出土量、出土遺構はあまり多くなく、指標遺構では東大編年Ⅵa期1遺構のみで確認される。指標遺構以外では分類(1)で提示したⅥからⅦ期に比定される工14のSU18、ⅣbからⅦ期に比定される工14のSU63、明治中葉に比定される工14のSK358などで確認される。

DZ-48-b



(設備 AD34-1)

口縁が箱形を呈す七輪を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では確認されなかった。指標遺構以外では、分類(1)で提示した設備AD34-1で「三名名産/製造組合/生田政太郎」の刻印のあるものが、工14のSK331で「□州/製造元/新川町/中根杓太郎」の刻印のあるものが確認される。AD34-1では三彩土瓶の蓋(TZ-00-c)、植木鉢(TZ-21)が、SK331では、銅版転写と手描きを併用して染付された瀬戸・美濃系磁器(JC)の鉢(5類)、上絵付^{註4}が施された薄手坏(6-d)などと共伴する。ピークは近代以降か。

DZ-48-c



(理 5号地下式土坑)

風口を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年ⅣaからⅥa期、Ⅷa期に確認される。ピークはⅤbからⅥa期か。端部に刻印のあるものも散見される。

DZ-49



(工14 SU389)

涼炉を本類とした。出土量、出土遺構ともに少ないが、指標遺構では東大編年ⅦからⅧb期に確認される。ピークはⅧ期前半か。

DZ-50



(数理 SK13)

五徳を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構ではⅨ期のみで確認され、それ以外では分類(1)で提示した数理SK13のみで確認される。

DZ-51-a



(御殿 532)

輪積成形で、「ミなと藤左衛門」の刻印がある塩壺を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年 I b から III a 期に確認される。ピークは II から III a 期か。ちなみに東大編年 II 期に比定される御殿 532 号遺構からは本製品が 20 個体近く出土している。

DZ-51-b



(御殿 276)

輪積成形で、一重枠に「天下一塚ミなと藤左衛門」の刻印がある塩壺を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年 III a 期、III b 期、IV a 期の各 1 遺構のみで確認される。

DZ-51-c



(御殿 678)

輪積成形で、二重枠に「天下一塚ミなと藤左衛門」の刻印がある塩壺を本類とした。指標遺構では東大編年 III a から IV a 期に確認される。特に東大編年 III a 期に比定される御殿 678、遺物総量の少なから今回取り上げなかったが、同じく III a 期に比定される御殿 802 号遺構、理 1 号土坑などからは、1 遺構で 10 個体前後出土している。しかし III a 期以降、このようにまとまって出土する遺構は確認されず、ピークは III a 期というごく短期間と考えられる。

DZ-51-d



(中診 F31-1)

輪積成形で、「天下一御壺塩師塚見なと伊織」の刻印がある塩壺を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年 III b から IV b 期に確認されるが、ピークは III b から IV a 期か。ただし III b 期に比定される御殿 391 号遺構からは、51-d が 10 個体前後まとまって出土している。

DZ-51-e



(福利 SU16)

輪積成形で、「御壺塩師塚湊伊織」の刻印がある塩壺を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では東大編年 IV a 期に比定される病棟 SK3^{註1}のみで確認される。分類 (1) で提示した福利 SU16 から出土したものは、肥前系磁器 (JB) の高台断面の形状がシャープな「U」字状で、高台高が高い碗 (1-d) と共伴するものである (東京大学埋蔵文化財調査室 2004)。

DZ-51-f



(中診 F34-11)

板作成形で、「御壺塩師塚湊伊織」の刻印がある塩壺を本類とした。出土量はあまり多くないが、東大編年 IV a から V a 期に確認される。ピークは IV 期か。

DZ-51-g



(中診 D33-1)

板作成形で、「泉湊伊織」の刻印がある塩壺を本類とした。塩壺 (DZ-51) のの中では多く出土する小器種であり、指標遺構では東大編年 V a から VI b 期に確認されるが、ピークは V b から VI a 期にある。V a 期のものは口径と器高の差があり、受け部の断面形も比較的きれいな方形を呈し、肩部より上に立ち上がっている。しかし時代が下ると口径と器高の差が小さくなり、受け部は短く、その断面形状も丸みを帯びたものとなる。なお 51-g は底裏から粘土塊が押し込まれているものが多く、そこには押し込まれた際の指圧痕が確認されるものが多い。

DZ-51-h



(御殿 391)

板作成形で、小枠に「泉州麻生」の刻印がある塩壺を本類とした。出土量、出土遺構ともにあまり多くない。ただしⅢ b 期に比定される御殿 391 号遺構では多数確認されている。指標遺構では東大編年Ⅲ b からⅣ a 期、Ⅵ a 期に確認される。ピークはⅢ b からⅣ a 期か。

DZ-51-i



(中診 F34-11)

板作成形で、大枠に「泉州麻生」の刻印がある塩壺を本類とした。塩壺 (DZ-51) の中で比較的多く出土するものであり、指標遺構では東大編年Ⅳ a からⅤ a 期、Ⅵ a 期、Ⅵ b 期に確認されるが、ピークはⅣ 期にある。Ⅳ 期のものは受け部の立ち上がりが高く、断面形は長方形を呈すものが多いが、時代が下ると受け部の立ち上がりが低くなり、断面形は丸みを帯びた方形を呈すようになる。また肩部付近の器面に横位の条線が確認されるものもある。

DZ-51-j



(工14 SK415)

板作成形で、「泉州磨生」の刻印がある塩壺を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅴ a 期 1 遺構のみで確認される。それ以外では、中診 Y35-4 や工 14 の SU295、SK415 など確認される。中診 Y35-4 ではコンニャク印判で染付された肥前系磁器の 1-d の小振り碗 (JB-1-u) や、板作成形で大枠「泉州麻生」の刻印がある塩壺 (DZ-51-i) と、SK415 では肥前系磁器半球形碗、1-d の小振りの碗 (JB-1-f, u)、打刷毛目が施された肥前系陶器刷毛目碗 (TB-1-g) などと共伴する。

DZ-51-k



(外来 SK290)

板作成形で、「サカイ 泉州磨生 御塩所」の刻印がある塩壺を本類とした。出土量はあまり多くないが、指標遺構では東大編年Ⅴ b からⅥ a 期に確認される。ちなみにⅤ b 期に比定される外来 SK290 からは、東大構内遺跡で最多の 10 個体確認されている。指標遺構以外では、外来 SU58、SU115、SU146 など確認されている。SU58 では肥前系磁器半球形碗 (JB-6-f) や肥前系陶器器手碗 (TB-1-a) などと、SU115 では肥前系磁器梅樹文碗 (JB-1-v) や京都・信楽系陶器半筒形碗 (TD-1-d) などと、SU146 ではコンニャク印判で染付された JB-1-d の小振りの碗 (JB-1-u) や京都・信楽系陶器半球形碗 (TD-1-b) などと共伴する。

DZ-51-l



(中診 C28-1・2)

板作成形で、「泉州麻玉」の刻印がある塩壺を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく指標遺構では確認できず、東大構内遺跡全体でも中診 C28-1・2 のみで確認される。C28-1・2 で出土したものは、肥前系磁器筒形碗 (JB-1-l) や京都・信楽系陶器半球形碗 (TD-1-b) などと共伴するものである。なお分類 (1) で提示した工 14 の SK140 から出土したものは板作成形で、「泉州麻玉」の刻印を有するもの (51-m) であり、51-l ではない。訂正したい。

DZ-51-m



(中診 G20-2)

板作成形で、「泉州麻玉」の刻印がある塩壺を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅴ a 期に比定される中診 G20-2 で確認されるのみである。それ以外では東大編年Ⅴ a 期に比定される外来 SU20 や、SE105 など出土している。なお SE105 では肥前系陶器陶胎染付碗 (TB-1-f) や青緑釉皿 (TB-2-a) などと共伴する。

DZ-51-n



(中診 C28-4・5)

板作成形で、「御壺塩師難波淨因」の刻印がある塩壺を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、東大構内遺跡では分類 (1) で提示した中診 C28-4・5 のみで確認される。C28-4・5 で出土したものは、高台断面の形状が三角形を呈す肥前系磁器皿 (JB-2-c)、容量二合半で、底部釉が拭き取りされた瀬戸・美濃系陶器瓶 (TC-10-a) などと共伴するものである。

DZ-51-o



(尾張Ⅱ 70-4C-1)

板作成形で、「難波淨因」の刻印がある塩壺を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、東大構内遺跡では確認されない。分類 (1) で提示した尾張Ⅱ 70-4C-1 のみで確認され、肥前系磁器 (JB) の半球形碗、梅樹文碗 (JB-1-v, f)、京都・信楽系陶器半球形碗 (TD-1-b) などと共伴する (東京都埋蔵文化財センター 1997)。

DZ-51-p



(理 4 号井戸)

板作成形で、「摂州大坂」の刻印がある塩壺を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では確認できなかった。分類 (1) で提示した理 4 号井戸で出土したものは、肥前系磁器 (JB) でコンニャク印判で染付された 1-d の小振り碗 (1-u)、瀬戸・美濃系陶器御室碗 (TC-1-d)、京都・信楽系陶器半筒形碗 (TD-1-i) などと共伴するものである。

DZ-51-q



(御殿 802)

板作成形で、「イ津ミ つた 花塩屋」の刻印がある塩壺を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年Ⅲ a 期に比定される御殿 617 号遺構と、今回遺物総量の少なさから取り上げなかったが同じくⅢ a 期に比定される御殿 802 号遺構のみで確認される。

DZ-51-r



(工14 SK99)

ロクロ成形で、「御壺塩」の刻印がある塩壺を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では確認できなかった。分類 (1) で提示した工 14 の SK99 から出土したものは、肥前系磁器 (JB) の見込み蛇ノ目釉剥ぎされ、高台径が小さい皿 (2-l)、紐状把手付柿釉鍋 (TZ-33-a)、ロクロ成形筒形無印塩壺 (DZ-51-w) などと共伴するものである。東大構内遺跡以外では坂町遺跡第 4 号遺構^{註24}で確認され、肥前系磁器 (JB) の小広東碗、広東碗 (1-i, m) などと共伴する。

DZ-51-s



(外来 SK18)

板作成形で、「大上々」の刻印がある塩壺を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、東大構内遺跡では分類 (1) でも提示した、東大編年Ⅴ a 期に比定される外来 SK18 のみで確認される。

DZ-51-t



(葉新 SE67)

ロクロ成形で、「三など久左衛門」の刻印がある塩壺を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、東大構内遺跡では分類 (1) で提示した、東大編年Ⅰ b 期に比定される葉新 SE67 のみで確認される。

DZ-51-u



(中診 H21-1)

ロクロ成形で、「播磨大極上」の刻印がある塩壺を本類とした。出土量、出土遺構ともにあまり多くはないが、指標遺構では東大編年Ⅵ a 期、Ⅷ b 期、Ⅷ d 期に散見される。東大構内遺跡以外では、尾張Ⅵの 47-5M-6^{註31} や坂町第 4 号遺構^{註24}などで確認される。47-5M-6 では肥前系磁器の見込み蛇ノ目釉剥ぎされ、高台径が大きい皿 (JB-2-m)、瀬戸・美濃系陶器柳茶碗 (TC-1-g) などと、第 4 号遺構では肥前系磁器 (JB) の小広東碗、広東碗 (1-i, m) などと共伴する。

DZ-51-v



(設備 AD35-2)

ロクロ成形で、「大極上壺塩」の刻印がある塩壺を本類とした。出土量、出土遺構ともに少なく、指標遺構では東大編年V b期の1遺構のみで確認される。それ以外では理13号地下式土坑で確認され、瀬戸・美濃系陶器太白手筒形碗(TC-1-i)、硬質瓦質丸火鉢(DZ-31-d)などと共伴する。東大構内遺跡以外では坂町第4号遺構^{註24}などで確認され、肥前系磁器(JB)の小広東碗、広東碗(1-i, m)などと共伴する。

DZ-51-w



(設備 Y36-2)

ロクロ成形で筒形を呈し、無印の塩壺を本類とした。出土量、出土遺構ともにDZ-51の中で最も多く出土するものであり、指標遺構では東大編年VI aからIX期に確認されるが、ピークはVIIからVIII c期にある。VI期のは器高も高く、受け部も有すが、VII期以降、受け部は次第に形骸化する。VIII a期以降に大量に出土するものは、受け部の形骸化がさらにすすみ、口縁端部は平らに近くなる。器高も6cmから7cmのもの、一回り小さい5cmから6cmのもの、大小2種類が確認される。東大編年VII期に比定される工14のSK330では51-wが30個体以上出土しているが、それらは口径、底径、器高の比率がほぼ同程度の寸胴形を呈すものである。

DZ-51-x



(中診 遺構外)

口縁部が内湾し、鉢形を呈す塩壺を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では確認できなかった。指標遺構以外では病棟C3層^{註1}や、工14のSU176で確認されている。C3層は天和2(1682)年の火災層と考えられる焼土層で覆われた包含層であり、肥前系磁器(JB)の初期伊万里碗、高台断面の形状が三角形を呈す碗(1-a, c)、肥前系陶器(TB)の呉器手碗、京焼風陶器碗(1-a, b, c)などが共伴している。SU176は東大編年IV bからV期・VIII aからVIII b期に比定される遺構である。

DZ-51-y



(中診 E34-1)

口縁部が直立し、鉢形を呈す塩壺を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では東大編年VI b期1遺構のみで確認される。それ以外では中診E34-3などで確認され、肥前系磁器小丸碗(JB-1-j)、瀬戸・美濃系陶器有段碗(TC-1-f)などが共伴する。

DZ-51-z



(外来 SU279)

底部が碁笥底状で鉢形を呈す塩壺を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく指標遺構では確認できなかった。それ以外では、分類(1)で提示した東大編年V a期に比定される外来SU279やSK141、中診F29-1、J31-1で確認される。F29-1では肥前系磁器(JB)でやや深く、腰が張る皿(2-f)などと、J31-1では肥前系磁器の初期伊万里皿(2-a)や、高台内蛇ノ目釉剥ぎされた鉢(5-c)などと共伴する。

DZ-51-aa



(看宿 SK275)

輪積成形で、無印の塩壺を本類とした。指標遺構では東大編年IIからIII b期に確認されるが、ピークはIIからIII a期にある。

DZ-51-ab



(工14 SK10)

板作成形で、無印の塩壺を本類とした。指標遺構では東大編年 I b 期、III b 期、IV a 期、V a 期から VI a 期、VII から VIII b 期に確認される。

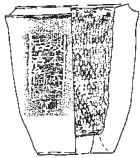
DZ-51-ad



(病棟 D2 層)

板作成形で、「いつミヤ 宗左衛門」の刻印がある塩壺を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では確認されなかった。それ以外では分類 (1) で提示した病棟 D2 層^{註1}のみで確認され、肥前系磁器 (JB) の底部無釉碗 (1-b)、高台断面の形状が三角形を呈す碗 (1-c)、初期伊万里筒形碗 (1-k)、瀬戸・美濃系陶器 (TC) の天目形碗 (1-a)、蘭竹文皿 (2-j) などと共伴する。

DZ-51-ae



(外来 SK290)

板作成形で、「堺本湊吉右衛門」の刻印がある塩壺を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、東大構内遺跡では、分類 (1) で提示した東大編年 V b 期に比定される外来 SK290 のみで確認される。

DZ-51-af



(工14 SK357)

板作成形で、「堺湊塩漬長佐衛門」の刻印がある塩壺を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では確認されなかった。それ以外では分類 (1) で提示した工 14 の SK357 のみで確認され、瀬戸・美濃系陶器瓶 (TC-10) の容量が二合半、五合のもの (10-c、d)、ロクロ成形で筒形無印の塩壺 (DZ-51-w)、丸形七輪 (DZ-48-a) などと共伴する。なお東大構内遺跡以外では、汐留 I の 6J-037 や 6K-0102 などで確認され、6J-037 では瀬戸・美濃系陶器御深井皿 (TC-2-e) や板作成形で「泉川麻玉」の刻印がある塩壺 (DZ-51-m) と共伴する。また 6K-0102 では肥前系磁器 (JB) の半球形碗、青磁染付筒形碗 (1-f、l)、肥前系陶器京焼風陶器碗 (TB-1-c)、京都・信楽系陶器半球形碗 (TD-1-b)、ロクロ成形筒形無印の塩壺 (DZ-51-w) や、底部が基筒底状で鉢形を呈す塩壺 (51-z) などと共伴する (東京都埋蔵文化財センター 1997)。

DZ-51-ag



(看宿 C 面上焼土層)

板作成形で、「泉川麻生」の刻印がある塩壺を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、指標遺構では確認されなかった。指標遺構以外では、分類 (1) で提示した看宿 C 面上焼土層^{註1}のみで確認される。看宿 C 面上焼土層出土資料は元禄 16 (1703) 年火災一括資料と報告されるもので、肥前系磁器 (JB) の高台断面の形状が三角形を呈す碗、皿 (1-c、2-c)、高台断面の形状がシャープな「U」字状を呈し、見込みにコンニャク印判の五弁花文が施された皿 (2-e)、板作成形で、大粋「泉州麻生」の刻印がある塩壺 (DZ-51-i) などと共伴する。

DZ-51-ah



(中診 池)

輪積成形で、袋状を呈す塩壺を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、東大構内遺跡では東大編年 I b 期に比定される中診池遺構のみで確認される。

DZ-52-a



(外来 SK392)

筒形を呈す燭台を本類とした。出土量、出土遺構ともに極めて少なく、東大構内遺跡では、分類(1)で提示した東大編年Ⅷc期に比定される外来SK392のみで確認される。SK392から出土したものは、外面は無釉で、内面に鉛釉が施釉されている。

DZ-52-b



(中診 H21-3)

扁平で、器厚の薄い燭台を本類とした。52-aと同様、出土量はあまり多くなく、指標遺構では東大編年Ⅷc期のみで確認される。それ以外では中診E34-3、H21-3、外来SK131、工14のSU295上、東大編年Ⅶ期に比定されるSK330などで確認されるなど、52-aより確認される遺構数は多い。ちなみに中診E34-3、外来SK131では肥前系磁器小丸碗(JB-1-j)などと、H21-3では小丸碗、広東碗(1-m)などと、工14のSU295上では瀬戸・美濃系磁器(JC)の端反形碗(1-d)、湯呑碗(1-e)などと共伴する。

DZ-54



(外来 SU58)

懐炉を本類とした。出土量、出土遺構ともにあまり多くないが、指標遺構ではⅤ期に確認される。分類(1)で提示した外来SU58から出土したものは、刻印2個と穿孔が1箇所あり、肥前系磁器半球形坏(JB-6-f)、肥前系陶器器手碗(TB-1-a)などと共伴するものである。

今後の課題

分類 (1) で提示した器種 (小器種) について、東大構内遺跡での出土状況を把握し、出土量の多いものについては、その傾向や形態変化についても触れてみた。以下では、今後の課題を整理し、まとめにかえたい。

はじめに述べたように生産地の動向の把握は、東大構内遺跡における動向と、比較、検討する上でも欠かせない作業である。東大分類項目の1つの柱として生産地があり、生産地における器種 (小器種) の出土状況を提示する必要があるだろう。その上で東大構内遺跡における陶磁器の出土状況と照合し、東大構内遺跡すなわち加賀藩邸を中心した各大名藩邸、組屋敷、町家などで出土する陶磁器や土器の消長が、何に起因しているのか判断することも可能となろう。

次に調査研究の進展に合わせて分類そのものの更新、検証をしていく必要があるだろう。1997年の分類改訂も、外来、工14、工1などの調査地点において、中診ではあまり確認されなかった段階の遺構が調査され、その段階の良好な一括資料が増加したことに伴い、分類項目、指標遺構などを更新したものである。しかし分類 (1) も提示してからすでに10年以上経過しているため、現在の研究状況と齟齬を来す部分が出てきている。例えば鉛釉が施釉された製品が、器種によって陶器に分類されたり、土器に分類されたりしている状況もその1例である。もともとの資料数の少なさに加え、いわゆる軟質施釉陶器あるいは施釉土器といわれる施釉製品の分類の曖昧さが招いた結果であり、この10年の間に深められた議論、研究を参考にしながら、東大分類も再考する必要があるだろう。また報告書刊行前の遺物が、刊行時点の調査研究の進展によって、分類 (1) で提示した分類と整合しないものがあるのも事実である。今回も病棟、看宿、医研などの報告書刊行前資料を参考資料という事で提示しており、同様のことが起きる可能性がある。報告書刊行時に分類 (1)、(2) を再検討し、改訂、更新すべき点があれば指摘し、次の分類改訂時には速やかにそれが反映されるようにしたい。なお当然のことながら更新の際には、それまでの分類内容と対照できる形で提示することがデータを蓄積していく上でも、検証をする上でも必要であろう。

東大分類は「分類のための分類」でも「編年のための分類」でもなく、あくまでも江戸時代を思考していくための1手段であり、そこから導き出される様々な情報を分析し、江戸の諸相の復元につなげたい。また中診から20年にわたり蓄積された東大分類にもとづく膨大なデータを、報告書ごとの調査地点単位の分析から、加賀藩を中心とする藩邸単位での分析にまで広げていくことも今後の課題の1つである。

本稿をまとめるにあたり成瀬晃司、堀内秀樹両氏には大変お世話になりました。末筆ながら感謝いたします。

【註】

- (1) 一括性の高い遺物を取り上げる中で病棟 D1 層、D2 層、C2 層、C3 層、D 面焼土、SK3、医研 SD246、看宿 C 面上焼土層、SK299 など、整理作業中の遺構一括遺物を提示しているが、それらの遺物についてはカウントなどの基礎作業をしておらず、詳細な組成の把握がなされていない。従ってそれらの遺物組成については、後日刊行される各報告書にて確認していただきたい。なお病棟 D 面焼土、C2 層、医研 SD246 の組成については、堀内 2005「加賀藩、大聖寺藩江戸屋敷で使用された肥前陶磁器と「古丸谷」や、成瀬 2000「加賀藩本郷邸内『黒多門邸』出土陶磁器の様相」などに詳しい。
- (2) ただしその場合、報告書に掲載されている遺物のみを対象としており、遺構出土遺物全体の様相を反映したのではない。

- (3) 尾張Ⅶ 135-2T-12は延享3(1746)年の火災一括資料で「享保十」(1725)、「享保十一」(1726)と刻書のある鬼瓦なども出土した遺構と報告されている(東京都埋蔵文化財センター2001)。
- (4) 上絵付には鉛ガラスに呉須を混ぜたもの、金彩、五彩、あるいはこれらを組み合わせたものなど、様々な手法のものが確認される。
- (5) 飯田町堀跡は明暦3(1657)年の明暦の大火で廃絶した遺構と報告されている(千代田区飯田町遺跡調査会2001)。
- (6) 飯田町735号遺構は寛政4(1792)年の大火の片付け遺構と報告されている(飯田町遺跡調査会1995)。
- (7) 市谷仲之町西Ⅱ第28号遺構からは、天保6(1835)年以降に铸造された「天保通寶」を模した瀬戸・美濃系磁器水滴(JC-19)や、「天保十三」(1842)という墨書のあるJC-19が出土したこと、コバルトによる染付製品は認められないことなどから、天保13(1842)年以降、幕末までの間に廃絶されたと考えられると報告されている(新宿区市谷仲之町西遺跡調査団1998)。
- (8) 麴町SK303は、遺跡の遺構配置や文献調査の成果から元禄11(1698)年を下限とする遺構と考えられている(紀尾井町6-18遺跡調査会1994)。
- (9) 遺物総量が少ないために今回取り上げなかったが、東大編年Ⅳb期の指標遺構である中診E35-4で確認されている。
- (10) 遺物総量が少ないために今回取り上げなかったが、東大編年Ⅴb期の指標遺構である中診E34-2で確認されている。
- (11) 尾張Ⅲ 67-3S-1は、享保11(1726)年の刻書のある硯が出土した遺構と報告されている(東京都埋蔵文化財センター1998)。
- (12) 筑土八幡町558号遺構から出土した箱庭道具(DZ-5-b)の底部に、「江戸高田在/御庭作/若林平□栗原平治/文久元壬戌年/六月上旬」と読める線刻があると報告される。ちなみに「文久元年」は西暦1861年である(新宿区筑土八幡町遺跡調査団1996)。
- (13) 遺物総量が少ないために今回取り上げなかったが、東大編年Ⅷd期の指標遺構である中診H23-3でも本製品が確認されている。
- (14) 麴町SK317は、「明和六年」(1769年)の墨書のある瀬戸・美濃系陶器鉢(TC-5)が出土した遺構と報告されている(紀尾井町6-18遺跡調査会1994)。
- (15) 遺物総量が少ないために今回取り上げなかったが、東大編年Ⅶ期の指標遺構である設備AE34-3で確認されている。
- (16) 遺物総量が少ないために今回取り上げなかったが、東大編年Ⅲa期の指標遺構である理1号土坑で確認されている。
- (17) 遺物総量が少ないために今回取り上げなかったが、東大編年Ⅴb期の指標遺構である理4号地下式土坑で確認されている。
- (18) 尾張Ⅶ 172-3K-1は「弘化四」(1847)の墨書のある磁器の爛徳利が出土したと報告されている遺構である(東京都埋蔵文化財センター2001)。
- (19) 明石町12号遺構は、文献調査や出土した暦などから慶応二(1866)年の大火により廃絶した遺構と考えられている(中央区明石町遺跡調査会2003)。
- (20) 遺物総量が少ないために今回取り上げなかったが、東大編年Ⅳb期の指標遺構である法C7-2で確認されている。
- (21) 本来、赤津半胴と銭甕は分けるべきものであるが、底部付近が出土しない限り分類する事が困難であり、分類(1)ではまとめている。ただし完形に近いものを見ると、管見の限り、東大構内遺跡では圧倒的に赤

津半胴が多いようである。なお東大編年Ⅲ b 期に比定される病棟 D 面焼土では、底部に押印を有す錢甕が出土している。

- (22) 尾張Ⅰ 50-5L-5 は「寛政十二年」(1800 年)、「寛政十三年」(1801 年) と墨書された瀬戸・美濃系陶器馬ノ目皿 (TC-2-g) が出土している遺構であり、第 1 次西御殿 (安永 7 (1778) 年完成、享和 4 (1804) から文化 4 年 (1807) 年に解体) と関連する遺構ではないかと報告されている (東京都埋蔵文化財センター 1996)。
- (23) 遺物総量が少ないために今回取り上げなかったが、東大編年Ⅶ期の指標遺構である設備 AE35-3 で確認されている。
- (24) 坂町第 4 号遺構では瀬戸・美濃系磁器 (JC) は出土しておらず、「明和四」(1767)、「明和八」(1768) の墨書が施された陶磁器が出土していると報告されている ((財) 新宿区生涯学習財団 2002)。
- (25) 尾張Ⅱ 78-40-1 の出土資料は、享保 10 (1725) 年の火災一括資料と報告されている (東京都埋蔵文化財センター 1997)。
- (26) 尾張Ⅱ 89-4L-1 は「寛政九年」(1797 年) の墨書のある瀬戸・美濃系陶器馬ノ目皿 (TC-2-g) が出土している遺構であり、第 1 次西御殿 (安永 7 (1778) 年完成、享和 4 (1804) から文化 4 年 (1807) 年に解体) と関連する遺構ではないかと報告されている (東京都埋蔵文化財センター 1997)。
- (27) 分類 (1) で成瀬が触れたように、本分類に含まれるものには、1, 生産地の特定に対する手掛かりが皆無である製品、2, 土瓶 (34 類) や行平鍋 (42 類) に代表されるような、大窯業地などからの技術的系譜が強く反映され、その系譜上にあるために特定の生産地が限定できない製品とがある。よって TZ に分類されるものは東大編年を通じて散見されるが、出土量や器種が豊富になるのはⅧ期以降であり、東大構内遺跡以外でもそれは同様のようである。なお今回は分類 (1) で提示した器種あるいは小器種についてのみ概観した。
- (28) 麻布台南区 1 号土坑では、遺構覆土の最下層に宝永 4 (1707) 年の火山灰が堆積していたことが報告されている (麻布台一丁目遺跡調査会 1986)。
- (29) 尾張Ⅱ 71-4C-1 号は、土地利用から下限は明和 5 (1768) 年としたいと報告されている (東京都埋蔵文化財センター 1997)。
- (30) 住吉町西 006 号遺構も隼町 096 号遺構も、覆土中に宝永 4 (1707) 年の火山灰が堆積していたことが報告されている (新宿区遺跡調査会 1997、千代田区隼町遺跡調査会 1996)。
- (31) 尾張Ⅵ 47-5M-6 は、土地利用から 18 世紀第 2 四半期から第 3 四半期前半に比定されると報告されている (東京都埋蔵文化財センター 2001)。

【参考文献】

- 井汲隆夫 1991 「江戸遺跡出土のやきもの分類」『四谷三丁目遺跡』 新宿区四谷三丁目遺跡調査団
- 井汲隆夫 1992 「検出遺物の概要と整理方法」『内藤町遺跡』 新宿区内藤町遺跡調査会
- 飯田町遺跡調査会 1995 『飯田町遺跡』
- 江戸陶磁土器研究グループ 1992 『江戸出土陶磁器・土器の諸問題』Ⅰ
- 江戸陶磁土器研究グループ 1996 『江戸出土陶磁器・土器の諸問題』Ⅱ
- 大川 清・大門直樹 1990 『益子の近代陶業遺跡』考古学研究室報告 乙種第 6 冊 国士舘大学文学部考古学研究室
- 大橋康二 1992 『肥前陶磁』考古学ライブラリー 55 ニュー・サイエンス社

- 小川 望 2008『焼塩壺と近世の考古学』 同成社
- 小田静夫 1996「東京都汐留遺跡出土の壺屋焼陶器について」『汐留遺跡』 汐留地区遺跡調査会
- 加藤唐九郎編 1972『原色陶器大辞典』 淡光社
- 関西近世考古学研究会 2000『近世の実年代資料』第12回関西近世考古学研究会大会資料
- 関西陶磁史研究会 2004『軟質施釉陶器の成立と展開』研究集会資料集
- 紀尾井町6-18遺跡調査会 1994『尾張藩麴町邸跡』
- (財)新宿区生涯学習財団 2002『坂町遺跡』
- 新宿区遺跡調査会 1997『住吉町西遺跡』I
- 新宿区市谷仲之町西遺跡調査団 1998『市谷仲之町西遺跡』II
- 新宿区筑土八幡町遺跡調査団 1996『筑土八幡町遺跡』
- 新宿区内藤町遺跡調査会 1992『内藤町遺跡』
- 瀬戸市教育委員会 1990『尾呂』
- 瀬戸市教育委員会・瀬戸市埋蔵文化財センター 1993『経塚山西窯跡』瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第5集
- 瀬戸市史編纂委員会 1998『瀬戸市史』陶磁史篇6
- 田口昭二 1994「美濃窯の諸様相」『瑞浪陶磁資料館研究紀要』第6号
- 多治見市教育委員会 1993『平野西窯』多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書第40号
- 中央区明石町遺跡調査会 2003『明石町遺跡』
- 千代田区飯田町遺跡調査会 2001『飯田町遺跡』
- 千代田区隼町遺跡調査会 1996『隼町遺跡』
- 東京大学構内雨水調整池遺跡調査会 1994『本郷追分』
- 東京大学理学部遺跡調査室 1989『理学部7号館地点』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書1
- 東京大学遺跡調査室 1990『法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書2
- 東京大学遺跡調査室 1990『医学部附属病院地点』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1990『山上会館・御殿下記念館地点』東京大学埋蔵文化財調査室報告書4
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1999『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類』(1)
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1997『東京大学構内遺跡調査研究年報』1
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1999『東京大学構内遺跡調査研究年報』2
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2004『東京大学構内遺跡調査研究年報』4
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2005『医学部附属病院外来診療棟地点』東京大学埋蔵文化財調査室報告書5
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2005『工学部1号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室報告書6
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2006『工学部14号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室報告書7
- 東京都埋蔵文化財センター 1996『尾張藩上屋敷跡遺跡』I 東京都埋蔵文化財センター調査報告第30集
- 東京都埋蔵文化財センター 1997『尾張藩上屋敷跡遺跡』II 東京都埋蔵文化財センター調査報告第40集
- 東京都埋蔵文化財センター 1998『尾張藩上屋敷跡遺跡』III 東京都埋蔵文化財センター調査報告第53集
- 東京都埋蔵文化財センター 2001『尾張藩上屋敷跡遺跡』VI 東京都埋蔵文化財センター調査報告第87集
- 東京都埋蔵文化財センター 2001『尾張藩上屋敷跡遺跡』VII 東京都埋蔵文化財センター調査報告第97集
- 東京都埋蔵文化財センター 1997『汐留遺跡』I 東京都埋蔵文化財センター調査報告第37集
- 東京都埋蔵文化財センター 1994『丸の内三丁目遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第17集
- 豊島区教育委員会 1994『巣鴨』I

- 長佐古真也 1990「消費遺跡における陶磁器組成の視点をその一例」『江戸の陶磁器』江戸遺跡研究会第3回大会発表要旨
- 長佐古真也 1992「陶磁器研究の現状と今回の方針」『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅰ』江戸陶磁土器研究グループ
- 成瀬晃司 2000「加賀藩本郷邸内『黒多門邸』出土陶磁器の様相」『竹石健二先生・澤田大多郎先生還暦記念論文集』
- 成瀬晃司・堀内秀樹 1990「消費遺跡における陶磁器の基礎的操作と分析」『医学部附属病院地点』東京大学遺跡調査室
- 成瀬晃司・堀内秀樹 1998「江戸遺跡出土の大皿」『大皿の時代展』出光美術館
- 那覇市教育委員会 1992『壺屋古窯群』Ⅰ 那覇市文化財調査報告書第23集
- 藤沢良祐 1987「本業焼の研究(1)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅵ
- 藤沢良祐 1988「本業焼の研究(2)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅶ
- 藤沢良祐 1989「本業焼の研究(3)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅷ
- 堀内秀樹 1991「東京都江戸遺跡出土の明末清初の陶磁器」『貿易陶磁研究』No.11 日本貿易陶磁研究会
- 堀内秀樹 1992a「『備前系焼締め播鉢』の系譜」『東京考古』10 東京考古談話会
- 堀内秀樹 1992b「東京大学本郷構内の遺跡統一編年試案」『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅰ』江戸陶磁土器研究グループ
- 堀内秀樹 1996「東京大学本郷構内の遺跡出土陶磁器の編年的考察」『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ』江戸陶磁土器研究グループ
- 堀内秀樹 1997「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1 東京大学埋蔵文化財調査室
- 堀内秀樹 2005「加賀藩、大聖寺藩江戸屋敷で使用された肥前陶磁器と「古九谷」」『医学部附属病院外来診療棟地点』東京大学埋蔵文化財調査室
- 堀内秀樹・坂野貞子 1996「江戸遺跡出土の18・19世紀の輸入陶磁器」『東京考古』14 東京考古談話会
- 港区麻布台一丁目遺跡調査会 1986『郵政省飯倉分館構内遺跡』

東大編年	TZ	産地不明				
		土瓶 (34)		行平鍋 (42)		蒸し器 (53)
		l	m	a	b	c
		しのぎ	鑄給染付	灰	鉄	トビガンナ
I b	薬新 SE67					
	中診 池					
II	御 532					
	理 2号土坑					
III a	御 270					
	御 617					
	御 678					
	理 1号井戸					
	病棟 D1層					
III b	小石川 SK57					
	御 276					
	御 255a					
	御 391					
	中診 H29-1					
	中診 H32-5					
IV a	中診 L32-1					
	病棟 D面焼土					
	中診 F34-11					
	小石川 SK27					
IV b	病棟 SK3					
	御 537					
	中診 K30-1					
	法 C7-3号土坑					
	法 E8-2号土坑					
V a	家畜 SK09					
	外来 SK139					
	中診 F33-3					
	中診 G20-2					
	中診 D32-1				○	
	中診 E24-1					
	中診 L34-2					
V b	設備 Z35-5					
	外来 SK18					
	中診 D33-1					
	中診 E31-1					
	中診 G26-1					
VI a	設備 AD35-2		○			
	外来 SK290		○			
	外来 SK137		○			
	中診 L34-1					
VI b	外来 SK152					
	外来 SK174		○			
	中診 E22-1					
VII	中診 E34-1					
	設備 Y34-4	○				
	御 233	○				
	御 245					
	中診 AE39-1					
VIII a	法 E7-3号土坑	○	○			
	法 E8-5号土坑	○				
	給水 AJ35-1		○	○		○
	工1 SK01	○	○	○		○
VIII b	中診 H21-1			○		
	中診 H21-2		○	○		○
	外来 SK81		○	○		○
VIII c	中診 C26-1			○		○
	中診 F23-2					
	中診 H21-8					○
	外来 SK392			○		
VIII d	工14 SU392			○		
IX	給水 AL37-1					○

表 15 東大構内における器種（小器種）の出土状況

東大編年	DZ	塩壺 (51)														燭台 (52)	懷炉 (54)			
		v	w	x	y	z	aa	ab	ad	ae	af	ag	ah	a	b					
		口・大極上壺塩	口筒形・無印	鉢形・内湾	鉢形・直立	鉢形・碁笥底	輪・無印	板・無印	板・いつみや宗左衛門	板・堺本湊吉衛門	板・堺湊塩濱長左衛門	板・泉川麻生	輪・袋状	筒形	薄・扁平					
I b	兼新 SE67 中診 池							○								○				
II	御 532 理 2号土坑							○												
III a	御 270							○												
	御 617							○												
	御 678							○												
	理 1号井戸 病棟 D1層 小石川 SK57							○												
III b	御 276							○												
	御 255a							○												
	御 391							○	○											
	中診 H29-1 中診 H32-5 中診 L32-1 病棟 D面焼土							○												
IV a	中診 F34-11 小石川 SK27 病棟 SK3							○												
	IV b	御 537 中診 K30-1 法 C7-3号土坑 法 E8-2号土坑 家畜 SK09 外来 SK139																		
V a		中診 F33-3 中診 G20-2 中診 D32-1 中診 E24-1 中診 L34-2 設備 Z35-5 外来 SK18																○		
		V b	中診 D33-1 中診 E31-1 中診 G26-1 設備 AD35-2 外来 SK290 外来 SK137																○	
			VI a	中診 L34-1 外来 SK152 外来 SK174																○
				VI b	中診 E22-1 中診 E34-1 設備 Y34-4															
VII	御 233 御 245 中診 AE39-1 法 E7-3号土坑 法 E8-5号土坑																			○
	VII a		給水 AJ35-1 工 1 SK01																○	
		VII b	中診 H21-1 中診 H21-2 外来 SK81																○	
	VII c		中診 C26-1 中診 F23-2 中診 H21-8 外来 SK392																○	
VIII d			工 14 SU392 給水 AL37-1																○	
		IX	給水 AL37-1																○	

表 17 東大構内における器種（小器種）の出土状況

東京大学校内遺跡調査研究年報 7
2010 年度

2011 年 3 月 31 日発行

編集・発行 東京大学埋蔵文化財調査室
東京都目黒区駒場 4-6-1
<http://www.aru.u-tokyo.ac.jp>
印 刷 能登印刷株式会社
